

インフィニット・ストラトス ～黒兔の見る世界～

フォールティア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通事故で死にかけて高校三年生の扶桑睦月が次に目を覚ましたら何と数歳若返ってインフィニット・ストラトスの世界へと転移していた。

オタク思考でガンダム好きな彼が使うは歴史に埋もれし機械の兎、名をヘイズル。

マイナー機体とロマンを内心愛する彼はインフィニット・ストラトスの世界でどう動くのか。

それは作者にも解らない!!

6 / 29 タグに男の娘を追加

8 / 26 タグに捏造設定、一夏魔改造を追加

目次

THE startline

#00	ハジマリ	1
#01	世界転移	7
#02	機械の黒兎	13
#03	モンドグロツソ	18
#04	連れ去りと突入	22
#05	救助	27
#06	銀の少女	32
#ー	閑話	37
	ファースト・シフト	
#01	IS学園	40
#02	クラス代表	45
#03	出会い	50
#04	テイク・オフ	55
#05	飛躍	60
#06	白閃	65
#07	休日	71
#08	セカンド幼馴染み	75
#09	訓練	80
#10	悪意の胎動	84
#11	乱入者	89
#12	駆ける黒兎	95
#13	マガイモノ	100
	ダブル・ライアー	

黄金週間！

# 2 4	裏話	228
# 2 3	再転入と嫁宣言!?	222
# 2 2	一難去つて	216
# 2 1	雨を晴らす者	210
# 2 0	騙るモノ	204
# 1 9	黒い雨	199
# 1 8	風に駆ける黒兎	193
# 1 7	黒兎と白兎	188
# 1 6	白騎士と黒兎・後編	182
# 1 5	白騎士と黒兎・前編	176
# 1 4	V S 鈴&箒	170
# 1 3	デユノア	165
# 1 2	無自覚な鬼畜	160
# 1 1	真相、トーナメント開幕	155
# 1 0	噂	150
# 0 9	兎の話し合い	145
# 0 8	対処	140
# 0 7	判明	134
# 0 6	打鉄式	129
# 0 5	タツグペア	124
# 0 4	お昼休みの惨劇	119
# 0 3	歩行演習	114
# 0 2	巻き添え模擬戦	109
# 0 1	二人の転入生	105

#01	ナターシャ・ファイルス	349
サマーバケーション		
#01	臨海学校編・機体紹介	344
#17	蠢く影	338
#16	夜空	333
#15	そして日は沈む	327
#14	返礼の一撃	322
#13	黒き神槍、白き絶刀	317
#12	ヒーロー	312
#11	記憶、その先	307
#10	纏われし紅	300
#09	tharn	294
#08	銀の福音	289
#07	戦いの予兆	283
#06	紅椿	278
#05	TRシリーズ	273
#04	天災君臨	268
#03	悪夢	263
#02	オン・ザ・ビーチ!	258
#01	臨海学校	253
Advanced		
#04	白兔の相談事	248
#03	恋愛相談!?	243
#02	何気ない幸せ	238
#01	ゴールデンウィーク!	233

# 0 2	学園案内	354
# 0 3	睦月、フランスへ行く	361
# 0 4	δ	366
# 0 5	テストフライト	370
# 0 6	デート?	376
# 0 7	約束	381
# 0 8	夏の終わり	389
夏休み編	機体紹介	397
最果てに至る者		
# 0 1	這い寄る悪意	400
# 0 2	依頼	405
# 0 3	協力者	411
# 0 4	違和感	416
# 0 5	敵	421
# 0 6	機械の兎	426
# 0 7	怒りの矛先	432
# 0 8	汚染	438
# 0 9	前夜	445
# 1 0	四人だけの宴	451

THE startline
#00 ハジマリ

――ああ、月が綺麗だ。

仰向けに倒れ込んだまま、僕はそう内心で呟いた。

背中に感じる硬いアスファルトの感触がいやに熱い。

全身が軋みを上げるように痛い。なにより、

――足が使えないな、これじゃ。

両足の膝から下があらぬ方向へ曲がり、所々から骨が見える。素人

目に見ても両足切断は免れない事が理解できる。

――これじゃ、夢・・・叶えられないな。

死にかけてる、否もうじき死ぬというのに僕はそんな事を考える。

人間、死の間際になると冷静になるんだなと妙に落ち着いた思考をする。

鈍い動きで、腕に絡まったスクールバッグを手繰り寄せ胸に抱く。

これには色々入ってるし、手放すワケにはいかない。

力の入らない腕でバッグを抱き締めると、不意に瞼が重くなる。

・・・もう、終わりかな。

――もし、生まれ変わってまた人として生きられたなら。その時は、もっとマシンな生き方をしよう。

視界が狭まる中、僕はもう一度夜空を見る。

――ああ、月が綺麗だ。

そうして、僕こと扶桑
世界』から消えた。

睦月は高校三年の卒業間際の三月、『この

「……ん？何、あれ」

薄紫の髪を揺らしながら夜の散歩をしていた少女は、街灯の光に照らされたナニカを見つける。

何の気なしに『外』の空気を吸おうと真夜中に散歩に出た彼女はそこにある異常に興味をもった。

基本的に彼女は己と、その親しい人達にしか興味を持たない。要するに、線引きの中と外の差がはつきりしている。

よつぼどの事象でもない限り彼女の心を惹くのは難しいだろう。

「人、なのかな？」

そう呟いて彼女は街灯の下へと歩き出す。街灯から離れた位置からなのでソレが何なのか特定は難しいが、凡そのシルエットを見て人らしいと判断を下す。

(血の匂い……)

近付いていく程強くなるそれに眉根を寄せる。それと同時に勘のようなものが告げる。

(人だったら、まあ救急車くらいは呼んだ方が良いかな)

ソレが人なら助けた方がいいと。

そして、街灯の下にある物のはつきりと視認出来る距離に入り、人だと理解した時に彼女は携帯端末を片手に走り出す。

連絡先は警察。今の自分の立ち位置からしたら危険極まりないが、仕方がないと割りきる。

このまま見捨てても何だか寝覚めが悪いような気もすると内心言い聞かせ、街灯に照らされた、血塗れで倒れた『少年』に対して応急

処置を行いはじめた――。

後に彼女はこう語る。

「この時、彼を助けていなかったら。今の私は無かった」と・・・

「・・・あ」

重い瞼を開けると、そこには真っ白な天井が見えた。

あれ、僕は死んだ筈・・・。

鼻につくような薬品の匂いで、意識が完全に覚醒する。

上手く動かない首を何とか動かし左右を見る。右にはカーテンが。

そして左には何やら大量の機器が置かれていた。機器から伸びるケーブルやら管やらは多分、僕の身体へと繋がっている。

「つく、はあ」

身体を起こそうと試みるものの、余りの重さに敢えなく諦める。

その時チラリと見えた現実に溜め息を溢す。

どうにかこうにか生きている。それは素直に嬉しい。だが、

「やっぱり、無いなあ」

無いのだ、『両足』が。あの意識が消える間際に見えたのは夢でも何でもなく、現実だった。

交通事故、一言で言えばそれだけだ。高校からの帰り道、『不幸』にも横断歩道で転んで赤信号無視のダンパーカーに足を引き潰され、吹き飛ばされた。

「ぐっ、うう・・・」

ダメだ思い出したただけで痛い。というか思い切り死にかけたからだろうか妙に冷静だ。

以前の僕なら間違いないく叫び声を上げているというのに。

いや、その前に茫然自失か？

まあ取り敢えず。現状の把握をする為にも看護士を呼ぼう。何とか自由の効く右腕を動かして頭上にあるナースコール用のリモコンに手を伸ばすが、上手く掴めない。というか何故かリモコン手前の空を掴んでしまう。

「おや、起きたみたいだねえ」

端から見れば大変シユールな動きをしている僕の耳に、そんな女の人の声が聞こえた。

腕を止め、声の出所に顔を向けると、病室の入り口に立つ一人の女性を立てていた。

薄紫の長髪に、機械的なウサギの耳。水色と白のエプロンドレス。

なんというか、チグハグというか噛み合っていない格好のその人はニコニコと笑顔を浮かべながらベッドに横たわる僕に近寄ってきた。

「ハロー、ご機嫌如何かな？扶桑睦月くん」

「・・・どう、して僕の、名前？」

妙に高いテンションで話しかけてきた女性に掠れた声でそう返す。上手く声が出ないなんて、どれだけ寝ていたんだろうか僕は。

質問を質問で返す僕の声に女性は気にした素振りも見せずに頷く。

「真夜中の街灯の下に瀕死の状態で倒れていた君を助けた時、ちよつとバッグの中身を見てね」

ああ、成る程。バッグの中には確か生徒手帳が入ってたからそれを見たのか。

それにしてもこの人が僕を助けてくれたのか。

「ありがとうございます」

「いいよ、私は倒れてる君を見て興味本意で助けただけだから」

女性はそう言うのと、にひひと笑った。興味本意で瀕死の人間を助ける。何というか、変わった人だ。

それから二言三言話した頃、女性が僕の下半身、今はない両足を指

差した。

「両足、やっぱりダメだったか」

「車椅子生活になります、ね」

僕のその言葉に女性は自分のこめかみを指で叩いて、何か閃いたのかニヤリと笑う。

何だろう、嫌な予感がする。

「ねえ、車椅子じゃなくて、ちゃんと両足で立って生活してみたくない？」

「・・・それは、勿論」

「ふふふ、じゃあさ」

そこで言葉を区切った女性は僕の間近に顔を寄せ、まるで魔女の誘いのように言葉を続けた。

「君の両足、私が作ってあげようか」

あっさりとは、何て事ないようにそう言った。

普通に考えれば、何を言っているんだと疑いの目を向けるべきなんだと思う。

でもこの人の眼は嘘を吐いているようには見えなかった。

長い間見ることの無かった、純粋な眼差しだったんだ。

「もう一度、歩けるようになれますか？」

「確約できるよ」

「走ったりも出来ますか？」

「それ位余裕だね」

「・・・お金無いです」

「要らないよ、お金なんて有り余って邪魔な位あるし」

出会ってたった数分だけど、この人なら頼ってもいいかなとそう思ってしまう。

そう思えるだけの何かを目の前の女性は持っている。だから、

「改めて、扶桑 睦月、です」

よろしくと言う意味も込めて自分から名乗る。僕の言葉を聞いた女性は数回瞬きした後、笑みを浮かべて名乗った。

「私は篠ノ之 束だよ、宜しく、扶桑くん」

これが僕と天才にして天災と世界で呼ばれる女性との出会い。
そして、全ての始まり。

#01 世界転移

「どうしてこうなった・・・」

「ごちやごちやとした機械だらけの部屋のなか、僕は天井を仰いだ。一日前まで僕は病院に居た筈なのに、気づけばありとあらゆる意味で世界から隔離した孤島に連れ去られていた。

「君の願いを叶えるためだよ、扶桑くん」

「いや、まあそれはそうなんでしょうけど、まさかこんな事になるなんて予想付きませんよ普通」

「この束さんに常識は通用しない!!」

「篠ノ之さんが天災って呼ばれる理由が少しながら解りましたよ・・・」
部屋の隅で何やら色々弄っている束さんの言葉に思わず溜息が出る。

言葉の通り、常識が一切通じない。というか通じてたら僕は今ここに居らず、ベッドの上でぐーたらしていただろう。

取り敢えず、ここに至る迄の出来事を思い返してみる。

話はきつかり一日前まで遡る。僕と篠ノ之さんがお互いに自己紹介を終えたところである。

「よし、という訳で善は急げ。早速行こうか、君に色々聞きたいしね」

「行ってくつて、何処に？」

「私の家」

「ぶっふあ!？」

相変わらず笑みを浮かべてさらりと云った篠ノ之さんの言葉に飲みかけていた水を吹き出す。いきなり何言ってるんだこの人。

「吹き出すことはないんじゃないかなあ。ああ、私の職業言ってるんだね。と言ってもほぼ趣味だけど、科学者をやってるんだよ私」
「科学者・・・？」

とてもそうは見えない。どう見たってイタイコスプレイヤーにしか見えないし。一人不思議の国のアリスとかどう思えばやろうと思えるんだ。

「ここじゃ、ダメなんですか？」

科学者だと言うなら、それこそ病院に許可なり何なり得るべきじゃないんだろ。しかも僕は幾つものケーブルに繋がれたこの状態。移送するにも色々面倒な気がする。

そんな、何かと不安要素が浮かび上がる僕の思考に止めを刺すように篠ノ之さんはあつけらかなとした様子で、

「まあ、私が世界中から追われてる身だから、あまり長居したくないのが主だった理由だね、うん」

そんな重要な事を言った。

「・・・・・・は？」

「まあ、細かいことは後で私の家で話すとしてえ。ちやちやつと行っちゃおうか！」

「いや、ちよ、待つて、待つて下さいお願いしますからあ!？」

僕の焦りなんて気にもせず、篠ノ之さんは素早く僕に貼り付けられた電極などを剥がし、点滴の針を痛みも感じない手際の良さで引き抜いていく。

当然その間も僕は説得を試みるも思い空しく。病院服のまま、どういう原理なのか、いつの間にか窓の外に浮いていた巨大なオレンジ色の機械（後にこれが人参型のものだと知る）に入れられて、篠ノ之さんの、「出発進行ー!」という言葉を最後に、僕の意識は消えた。

そして目が覚めたらこの状態である。篠ノ之さんから此処がどういった場所なのか聞き出して泣きそうになる。あらゆるレーダー、監視衛星から見つかる事が無いとか何処のスパイ映画だと言いたい。挙げ句島の周囲には特殊な電磁波を出す機械が海底にあり、船舶や飛行機ですら気付かぬ内にこの島を大きく迂回するという。なにこの要塞、ジャブローなんて目じゃないね。

「で、篠ノ之さんは何をしてるんです?」

着いて直ぐに射たれた点滴のおかげで幾分かマシになった身体をベッドの上で動かして篠ノ之さんへと向く。

「君の経歴を調べてるんだよ。ああ、義足については私の『助手』が今造ってるから問題ないよ。多分、あと二時間位じゃないかな」

助手なんて居たのかこの場所に。義足を貰ったらお礼を言わないと。それよりも、僕の経歴なんて調べてどうするんだろうか?」

そんな僕の視線を感じたのか、篠ノ之さんが端末を操作しながら話をはじめた。

「事故現場で君を見た時に違和感を感じてね。調べてみたら君が着ていた制服の高校は存在して無かったんだ。勿論、生徒手帳も確認して、君の家の連絡先にも電話を掛けてみたけど繋がる処か電話番号が存在していなかった」

「・・・え?」

ゆっくりと、僕が冷静であればるように語る篠ノ之さんの言葉に呆然とする。僕の居た高校が存在しない?家に電話をかけても番号が使用されていない?なんだ、その冗談みたいな事・・・

嫌な予感が頭を過る。ありえない、そんなオカルトじみた事。漫画

やライトノベルの中の話じゃないか。

「今、日本政府のネットワークに介入して君の名前を探したんだけどヒット数ゼロ。どこにも見当たらない。つまり君は日本人の苗字と名前を持つてるのに日本に在籍していない事になる。そして何よりー」

篠ノ之さんは徐に立ち上がり、僕の生徒手帳と手鏡を持って僕に差し出した。

手鏡を顔の前に持ってくるそこには・・・

「何、これ・・・」

生徒手帳にある僕の顔写真から数歳若返った姿の僕が鏡に写っていた。おかしい、あの事故に遭うまで僕は確かに高校三年生で、進学先の大学も決まっていた。それは生徒手帳が証明しているし、確かだ。

一体どうして。

「なんで中学生くらいまで若返ってるんだ!？」

切つてあつた筈の髪も項あたりまで伸びてるし、よく見ると腕もなんだか縮んでる。

「やっぱり、若返ってるんだ。私はオカルトの類いはあんまり信じないようにしてるんだけど、ここまで来るともう確実だね」

一人納得した顔で、混乱する僕の鼻先にピツと人差し指を指して篠ノ之さんは宣告する。

「君、この世界に転移して来たんだよ。幾つか若返つてね」

神様とやらが本当に存在するならば僕は今を生きていることに感謝しつつ思い切り殴りたい。

僕がこの世界に転移して来てかれこれ一月が経つ。

束さん（名字は呼びづらいただろうというところで、名前で呼ぶよう言われた）と僕とでお互いの知識の擦り合わせをした所、大まかな歴史は同じであるが、近年に於いて大きな違いがある。

「束さんが開発したインフィニット・ストラトスによる技術革新と世界情勢の変化……」

インフィニット・ストラトス、通称IS。元来宇宙用マルチフォームスーツとして開発されたそれは、ある事件によって軍用としての側面を見出だされ数年前から現在に至るまで本来の目的で開発されることは無かった。

このIS、既存の銃火器が一切効かず、尚且つ戦車であれ何であれ簡単に破壊することが出来るという馬鹿げたスペックを持っているが一つだけ欠点を抱えている。

「ISは基本、女性にしか起動できない」

つまりは銃のようにやり方さえ解れば誰でも使える物ではなく、限られた人にしか扱えないのだ。

これによって訪れたのは男女間のパワーバランスの変化だ。

女尊男卑の風潮が強くなり、『女は偉く、男はその奴隷』みたいな感じになってしまっているらしい。

僕が意識を覚まして知っている外界がああ、としか思えないが、僕がそんな風潮があるのかあ、としか思えないが。

「そんな風潮が蔓延してるのは嫌だなあ」

束さんが用意してくれた義足を嵌めながらぼやく。

ただでさえ嘗ての世界でイジメにあっていたのにこっちでもそんな目に遭うなんて冗談じゃない。

義足がしっかりと両足に嵌まったのを確認して立ち上がる。

この義足、見た目は銀色の脚甲だがかなりの高性能で、歩くのは当

然として、走ったり、物を蹴ったり出来る。しかもこれは膝から曲げたりも出来る。鋼○錬金術師のオートメイルと言った方が分かりやすいだろうか。

「にしても急に呼び出しながら、何があったんだろ？」

与えられた部屋を出て束さんが待つ研究室に足を向け歩き出す。

いつの間にか部屋に置いてあった昔なつかしの黒電話から束さんが「研究室に至急くるべし！」と言ってきたのがほんの数分前。火急の用、というより何か面白い事でもあったかのようなテンションだった。

「束さん、入りますよ？」

研究室の前に着き、一先ずノック。流石に何の躊躇も無しに女性が居る部屋のドアを開けようとは思わない。

「お、来たね。どうぞどうぞ」

「失礼しまーは？」

何とも緩い声が部屋の中から聞こえ、了承の意を得たのでドアを開け、そして呆然とした。

いつも通りの薄暗い研究室。無造作に積まれた機械の中に『それは立っていた。

黒と濃紺に彩られ、所々に黄色が散りばめられた機械の鎧。

何より目を惹くのが両手指先に塗られた赤、そして頭部のV字型アンテナ。

『それは僕の好きなある作品の機体にあまりにも似ていた。いや、似ている処じゃない完全再現だ。

機体各所のデカールも、肩口に飾られたエンブレムも全て僕の知っているものだ。

その機体の名は・・・

「TRー1 ハイズル・・・！」

薄闇の中、僕の言葉に応えるように緑のツインアイが強く光った。

#02 機械の黒兎

「うーん、なんかぱつとしないなあ」

カタカタと自作のパソコンを操作しながら篠ノ之東は呟く。ディスプレイには『試作第三世代型IS』と名打たれた設計図が表示されていた。

世界の各企業が漸く第二世代型ISの開発に着手しはじめたこの頃に、この天才は事も無げに第三世代の開発に着手していた。

スペックのアップグレードや武装を格納する為の量子空間の拡張、その他諸々は既に完了している。

「なんかこう、試作機って感じのが浮かばないなあ」

東が悩んでいるのは機体の外装、つまりは見た目である。今まで彼女が手掛けた機体はどれもヒロイックな外見をしており、それこそマンガの主人公が駆りそうなものだった。

しかし今回は東も初の第三世代型の開発。その試験機だ。

あまりヒロイックな外見にしてもどうにもしつくり来ない。

腕を組んでうんうん唸る。椅子の背もたれに体重を預けて上を向く。

「……あんまり考えすぎても仕方ないか」

唸ること二十分、東は溜息を吐きつつそう言って立ち上がり部屋を出た。

向かう先は東が拉致した睦月の部屋である。衝撃的すぎる出会いをしたあの日から一月経つ。

両足を失い、オカルトチックな世界転移を経験して暫く茫然自失していた睦月。今となっては東お手製の義足を使い、助手の『名前はまだない』と共に家事の殆どを行っている。

本人曰く、これくらいやれなきや社会人になったとき大変、らしい。

「むっくん、入るよー」

部屋の前にたどり着いた東はノックもせずドアを開けた。因みにむっくんというのは東が考えた睦月のあだ名だ。

「おっ、と。寝ちやってたか」

中に入ると窓から射す穏やかな日に当たりながら睦月が眠っていた。

ここに来た当初は慣れない環境もあつて少し気を張っていた彼だが、最近になって本来の自分というのを見せてくれるようになっていた。

窓辺に近寄り、睦月の頬を撫でるとじやれるようにその手を握って笑った。

「いやあ、改めて見るとホント可愛い顔立ちしてるなあ」

そんな様子の睦月を見て束は笑みを深くする。睦月は俗に言う、男の娘のような女性的な顔立ちをしている。首筋まで伸びた栗色の髪に、小動物を思わせる小柄な肢体。その筋の人が見れば直ぐ様にお持ち帰りするだろう。

「いつそ今度女装でもさせてみようかな？」

自身の親友が聞けば間違いなく拳が飛んで来るだろう危険な思考をしている束の視界にあるものが目に入った。

「なんだろう、これ。むつくんのかな？」

気になった束は窓際の隅にあつたそれを取り上げる。

「何々、advance of Z?」

そう表紙にかかれた本は、どうやら資料集のようだ。表紙絵からして何かのメカか何かだろうか。

好奇心の赴くまま束はその資料集を広げた。

「……………これは!？」

数ページ捲り、その内容に驚いた束は直ぐ様表情を変え資料集を熟読していく。

「良い、実に良い……………私好みの機体達だ……………そうだ、試験機の外装はこれにしよう。カッコよさもあるし」

睦月が眠る横で何とも邪悪な笑みを浮かべる束、という何ともシニールな光景は束が部屋を出ていくまで続いた……………。

「……ということでは試作第三世代型IS、TR-01 ハイズルが完成したんだよ！」

「人の部屋に何勝手に入ってるんだとか、僕に女装させようとか危険な思考してるんじゃないとか色々言いたい事ありますけど、まず始めに言っておくべき事があります」

「何かな？」

「……グツジョブ！」

様々な文句を呑み込んで僕は束さんに渾身のサムズアップをした。今僕の目の前にはサイズダウンこそしている物の、ガンダムと言う作品群の中でも、僕が一番好きな作品の機体が立っている。もう、感動が止まらないってこの事を言うんだな。

TR-01 ハイズル

テイターンズテストチームに配備された武装試験機、その最初の機体だ。最初こそ性能は低かったものの、様々な武装、データを装備・経験して最後は馬鹿げたハイスペックへと進化した歴史に隠された機体。

「すごい、本物だ……本物のハイズルだあ……！」

ああ、この黒と濃紺の機体色に黄色の脚部スラスタはやっぱり格好良い……。

「むふふ喜んでくれたみたいだね！作ったかいがあるってもんだよ！」

「ホントにありがとうございます！まさかここまでの大ききで見れる

なんて思ってませんでした」

模型とは違う現実感の強さ、重厚感は僕の興奮を最高潮にするには充分過ぎた。

ISなので、自分で動かすというのは無理なのが残念だが、観ているだけでも満足なので問題ない。

たつぷりとヘイズルを眺めきった僕は冷静さを取り戻しつつふと気になった事を尋ねる。

「そう言えばさつき試作第三世代型って言いました？」

「うん、言ったね。何時もだったら試作型なんて作らないんだけど、第三世代には色々組み込む予定だから流石に何のテストも無しに動かすのは怖いからねえ」

「世の中はまだ第二世代の開発をはじめたばかりだっていうのに、もう第三世代開発しちやっただんですか……」

本当にこの人の頭脳は常軌を逸している。世界の最先端を全力で突っ走ってるみたいだ。

東さん自身は「私の頭が良いんじゃない、世界の頭が悪すぎるんだ」だそうで。

そんなこと言ったら頭の良い人間なんてこの世界に居ないんじゃないか。

「ちよつと考えてることがあつてねえ、私も本来ならこの時点で開発に着手する気は無かったんだよ」

「考えてること？」

いつも大体、即断即決で決める東さんにしては珍しい事をいう。

「まあ、その事は今は置いといて」

首を傾げる僕に、荷物を横に置くような動きをした東さんは次の瞬間、とんでもない事を言い出した。

「君にこのヘイズルをプレゼントしよう！」

「……はあああ!？」

後に思う。これが全ての始まりだったのだと。

#03 モンドグロツソ

『通信状況良好、うんうんバッチリだね』

耳元というより脳内で響く声に僕、扶桑 睦月は溜息を漏らす。

ここはドイツ首都、ベルリン。日本での季節的にはもう春なのだが、この国は寒い。

四月の陽気なんてもものとは無縁なんじゃ無かろうか。

そんな事を考えながら、メインストリートを街の外へと向かい歩いて、ある場所へと向かう。

「それで、このまま行けば『第二回モンドグロツソ』の会場に着くんですかね？」

『うん、そのまま行けばすぐつくよ』

「不法入国に、不法侵入とか、一般人に何させるんですか本当……」

『今は一般人じゃなくて逸般人だから問題なし！』

「強く否定できないのが悔しい……！」

通信越しにそんな他愛ない話をしながら郊外へと足を進める。

曇天の空からは雪が今にも降りだしそうだった。

束さんからヘイズルを貰い受けてから、かれこれ一年が経つ。

今日に至るまで、僕はヘイズルを駆り様々なテストを行ってきた。

機動試験に始まり各種 I S 用の武装の性能の確認等々、なかなかに密度の濃い日々を過ごしていた。

女性にしか起動できない筈の I S を何故男である僕が動かせたのかというと、束さんが I S コアの内部システムを弄ったかららしい。他にもなんか色々言っていた気もするが専門用語が多過ぎて途中からは覚えていない。

「人が増えてきたな……」

ベルリン市街中央から北に離れて、モンドグロツソの会場へと近付いていくと段々と通りを歩く人が増えていく。その殆どが恐らくモンドグロツソの観戦が目的なのだろう。皆一様に手にパンフレット

などを持っている。

モンドグロツソ。簡単に言えばISによるオリンピックピックのようなモノだ。

世界各国から選りすぐりのIS操縦者と最新鋭ISが集い競技を行ってその性能、強さを知らしめる為の大会、それがモンドグロツソ。

今回、僕の目的はその第二回大会に出場する束さんの親友、織斑千冬さんの弟、織斑 一夏くんの周辺監視である。

束さん曰く、モンドグロツソが近くなってから何だかキナ臭い動きがあつたようで、もしもの場合に備えとして僕が此処にいるという事だ。

確かに、第一回モンドグロツソ優勝者の弟とあれば狙われるには十分過ぎる。

身内というか信のおける人にはとことん甘い束さんからしたら心配になるのも頷ける。

『何事もなければ良いんだけど、ね』

「束さん、それフラグって言うんですよ？」

『まあ戦闘になつても君とヘイズルなら大丈夫でしょ、私の無茶に一年耐え続けたんだし』

「あんな『地獄』に較べれば大体の問題が楽に思えますよ、ホント」

ISの防御力を測るために全方位から撃たれる鉛弾をひたすら防いだり、加速力を測るためにブースター限界まで加速して島の周囲を回ったり、挙げ句はシュミレーター難易度maxで仮想IS五機相手にしたりと、自分よく生きてるなど思ったよ。

というか、碌に訓練もしてない人間にいきなり直角機動しながら射撃しろとか束さん絶対Sでしょ。

「ん、束さん」

『アリーナ付近に着いたみたいだね、それじゃ何処か物陰に隠れてステルスを展開して』

「了解です」

アリーナまで後少しの所で一度ビルとビルの隙間に入り、ヘイズルに備え付けられたステルス機能を起動する。

チケットを持っていない僕がどうやってアリーナに入り、監視をするのかというと、あらゆるセンサーの類いを無効化する束さん特製ステルスを使いアリーナ内部に侵入、一般席で全体を見渡せる場所から特別席に居るであろう一夏くんとその周辺を監視する。というのが束さんの作戦である。

こんなスパイじみた事なんてやったことない僕からしてみれば不安しかない。

束さんじゃないけど何事もなく終わって欲しいと切に願う。

「・・・よし、ここからならよく見えるな」

チェックゲートを誰にもバレずに通り抜け、観客席へ。

アリーナ内部はまだ天井が閉じたままのようだ。途中でくすねたパンフレットによると開会式の後に開くらしい。

特別席から遠すぎず、有事の際即座に動ける位置に陣取る。階段上になっている観客席の最上部、ここからならISのハイパーセンサーを使用すれば大半の異常は察知できるだろう。

ハイパーセンサーというのは、ISに搭載された文字通り高性能のセンサーだ。リミッターを解除すれば宇宙空間で自分の位置を星の光から計測したり出来る優れもので、ありとあらゆる物の観測が可能、というのが束さんの談。

「束さん、取り敢えず見晴らしの良いところに着きました」

『オツケーオツケー、此方もアリーナのシステムにハッキングして観測開始したよ』

「・・・」

何かさりとらりと犯罪宣言したけど、もはや今更なので気にしない事にする。

腕時計で時間を確認するともうすぐ大会開始時間の十時になろうとしていた。

『むっくん、あんまり気を張りすぎないでね』

「え？・・・緊張してるように感じますか？」

『それくらいは声音でわかるよ。慣れないこと頼んじやった私が言う』

のも変だけれどき、無理はしないでね。いざとなれば私が動くから』
普段の無邪気な声ではなく、落ち着いた、安心させるような口調の
束さんの言葉にふと肩の力が抜ける。

「どうやら自分でも気付かない内にかかなり緊張していたようだ。」

「・・・ありがとうございます。程よく肩の力が抜けました」

『そっか、よしよし』

「お言葉に甘えて有事の際は丸投げしますね」

『ちよ!?!』

「冗談ですよ」

束さんの優しさに思わず頬が緩む。ホント、身内にはとことん甘い
人だなあ。

開会式開始のアナウンスが流れるのと同時、数人の護衛らしき人で
周りを固めた少年が特別席へと座った。

事前に見せてもらった写真と見た目が合致するので彼が件の織斑
一夏くんだろう。

さて、心を入れ換えよう。何が起こるか解らないのだからせめて心
構え位はしておくべきだ。

『時間だね』

「はい。・・・作戦開始です」

周囲がにわか騒がしくなる中、僕は静かにアリーナを見渡す。

平穏無事に終われば良いけど・・・。

#04 連れ去りと突入

開会式からお昼を跨いで午後の二時、ここに至るまでは特に何も起こらず、恙無く競技が行われていた。

「動きはない、か・・・」

周辺にこれと言った動きはなく、ハイズルのハイパーセンサーにも異常は見当たらない。

定期的に来る束さんからのアリーナ内部の情報にも特に問題は無かった。

売り子の人から買ったジュースを一口飲んで、喉の乾きを癒す。

「動くとしたら決勝戦、かな？」

『かもねえ、決勝戦は準備にも時間掛かるし狙うならそこになるかな』
僕の呟きに通信越しに束さんが答える。

今僕の目の前で行われているのは準決勝第二試合。

イタリアのファイル・ユナイター選手の駆る『テンペスタ』と中国、劉練選手の『大虎』が空中で激突していた。

どちらも第二世代型の機体で、テンペスタは流線形の機体外装が特徴的な、機動力に重きを置いた高速戦機体。

対して大虎は無骨な左右三つの爪のような非固定武装が目を引く。
テンペスタが機動力で攪乱しつつも手堅く近接ブレードでダメージを与えていく。

・・・勝負あり。

試合終了のブザーが鳴る。勝者はイタリア。

まあさっきの第一試合よりは長かったかな。日本の国家代表、織斑千冬さん。女性にこういうのはいけないんだろうけど、敢えて言う。化け物だ。ドイツの国家代表を文字通り一瞬で倒したのだから。試合時間三秒ってなんだそれと言いたい。

「次が、決勝戦か」

『・・・ん？これは・・・』

「どうしました？」

試合終了後のフィールドの簡単な整地が始まった時、束さんが声を

上げた。

『今、会場外に妙なのが・・・まさか!?むつくん気をつけて!』

「つつ・・・!?」

束さんの叫びが聞こえるのタイミング同じくして、会場の外から巨大な爆発音が響いた。

・・・まるで、ビルか何かを爆破したような。

観客席に座っていた人々が何事かと慌ただしく動き出す。

特別席に座っていた国賓、そしてそのSPたちも一瞬とは言え『そちらに興味を持ってしまった』。

「くそっ・・・!」

目の前で起きたまるでマジックのような出来事に悪態をつきながらアリーナ外へと向かって駆け出す。

幾らなんでもその手はないだろう・・・!

『むつくん!?!』

「束さんごめん!」

――一夏くんが拐われた・・・!!

「こちらヴェス、対象の回収に成功した」

『こちらスコール、了解した。では、手筈通りに』

「了解」

高速道路を走る黒いワゴン車の中、簡単な通信を終えて自らをヴェスと呼んだ男は薄汚れたシートに深く沈む。

隣では無愛想な男がハンドルを握り、後ろにはこの寒い時期だとい
うのにタンクトップ一枚という笑みを張り付けた男。そして、

「オリムラ イチカ、か・・・」

先ほど第二回モンドグロツソの会場から連れ去った織斑一夏が気
を失ったまま座席に縛りつけられていた。

タイミングは準決勝が終わり、決勝戦の準備が始まった頃。アリー
ナ付近の廃ビルを丸々一つ爆破し、その音にアリーナの人間の注意を
引き付け、その隙に目標を速やかに、気付かれずに気を失なわせ回収
するという荒業も良いところの作戦である。

「カリス、会場付近の様子は？」

「ビルの爆破を聞き付けた消防と警察、それと軍が動いてる。アリー
ナはてんやわんやだな。ドイツ（ここ）の連中と『コレ』の姉貴はか
なり慌ててるぜ」

後部座席に座るタンクトップのカリスが端末を弄りながらニヤニ
ヤと笑みを浮かべてヴェスの問いに応える。

今回、彼らに課せられた任務は織斑一夏をモンドグロツソ会場から
誘拐し、先の通信相手であるスコールに引き渡すということ。

このまま行けばすぐにでもこの任務は終わるだろう。

何せあとはこの高速道路を降りた先にある町で引き渡しを終えれ
ば良いのだから。

「最初はめんどくせえと思ったが中々楽勝じゃねえか？」

カリスが窓の外を見ながら肩を竦める。普段から人拐いや暗殺な
ど、闇の仕事に携わっている彼らだ。今回の事ですら少々面倒くさい
というだけだったのだ。それくらいの自信と余裕があるのだ、彼らに
は。

——それ故に。彼らは気付かなかった。自らの背後に暗く黒い
悪魔が迫っていることに。

「目標距離、残り三千。東さん、連中の行き先は？」

『高速道路を降りたから、その先にある町だろうね』

「了解、連中が一夏くんを降ろすのと同時に仕掛ける」

一夏くんが連れ拐われた直後、僕は直ぐ様動き、ヘイズルをステルスモードで展開して上空から一夏くんを乗せた黒いワゴン車を追っている。

今すぐにも助けたいが走っている車から人一人を無傷で助け出すなんてことは僕には無理だ。

なので、連中が一夏くんを車から降ろしたタイミングで救助する。

『進行方向から考えて、そこから数キロ先の工場に向かってるね』

「そこが勝負の決め所か・・・」

『ドイツ軍のIS部隊が向かってるから、ある程度時間さえ稼げばこっちの勝ちだよ』

「ヘイズルの存在バレますよ?」

『そんな事はいっくんとむっくんの無事の為なら何て事ないよ。それにバレたってどうせ再現できるのは外装くらいだからね』

この人はこうやって良いタイミングで格好良い科白をいうんだから全く・・・。

「それじゃ、無理しない程度に頑張ります」

『うん。何度も言うけど、気を付けて』

通信が切れるのと同じくして、黒いワゴン車が工場へと入っていくのをハイパーセンサーが捉えた。

さて、今になって身体が震えるけど、なんとかやってみようかな。

「よし、降ろせ」

「あいよつと」

目的の場所である工場についたヴェス達は直ぐ様車を降り、一夏を担いで工場内へと向かった。予定よりも幾ばくか早く着いたが中には既に数人の黒い服を着た者達がそれぞれの手にライフルをもつて待っていた。

「スクールは？」

「今席を外している。どうやら連絡が入ったみたいだな」

一夏を無造作に床に置いてカリスが訊ねると一人の男が振り向きもせずにそう答えた。

「出来ればさっさと帰りたいんだがねえ」

カリスがそう呟いて上を仰いだその瞬間――

漆黒の鎧が天井を突き破り、工場の機械を踏み潰しながら降り立った。

「な．．．．．」

その存在にその場に居た全ての人間が絶句した。ありえない、馬鹿げている。

そう内心彼らが思っても『ソレ』は現実として存在していた。

「「I Sだと．．．っ!」」

緑の双眸が彼らを睨む。

『カエシテ．．．モラウゾ』

そう言った黒き死神の言葉を皮切りに工場内は銃声に包まれた。

#05 救助

〔敵戦力確認 総数12 ライフル所持六人 ハンドガン所持四人

マシンガン所持二人〕

〔敵性体能力 危険度F 〕

〔要救助者の救助成功率 99%〕

『返して・・・貰うぞ』

工場内に侵入した僕は直ぐ様ISのスラスターを吹かせて一夏くんを回収する。

直後に四方八方から弾丸が飛んでくるが細かくブースターを動かして回避を行う。

第一目標である一夏くんの回収は完了、あとはこの連中をどうにかするだけだ。

「くそが、なんでISがここに居るんだよ!？」

『・・・・・・・・』

突入前に外の警備に当たっていた奴等は腹パンで黙らせたし、このまま逃げるのも手だろう。

ISが展開するシールドエネルギーはアサルトライフルやマシンガン程度で削れるほど強力じゃないし、仮にシールドエネルギーを破ったとしてもヘイズルは全身装甲（フルスキン）。油断はしないが負ける気もしない。

「束さん」

『むっくん、出来るの?』

コア・ネットワークを使い束さんにコール。

出来るの?とは恐らく戦闘が、だろう。そんな事は決まっている。

ヘイズルを貰ってから束さんから格闘術を習い、ISの試験運用で無茶苦茶な機動をしてきたんだ。

はつきり言おう。

「余裕です」

一夏くんを抱えたまま脚部スラスターを使い一気に加速して、直近にいた誘拐の主犯格の男を殴り飛ばす。

派手に吹き飛んだ男は三人巻き込んで沈黙した。

残り八人。

敵が動揺した隙について跳躍、急降下して床を踏み叩く。その衝撃と飛び散る破片に四人が倒れた。

残り四人。

続けて加速を行いながらゴム弾を装填したサブマシンガンを拡張領域（バススロット）から展開。乱射した事で三人沈んだ。

残り一人。

壁に背を預け立つタンクトップの男に銃口を向ける。

『お前が、最後だ』

「ば、化け物っ・・・！」

『さてよなら』

銃口が、火を吹いた。

睦月が誘拐犯達を文字通り蹂躪し終えた頃、ドイツ軍のIS部隊が工場へと到着した。

「何が起きてる・・・」

愛機である漆黒のISを展開した部隊員であるクラリツサ・ハルフオーフは驚愕に目を開く。

工場外に気絶した数人の男達が山のように積み重ねられ、その横にはまるで飴細工のように曲げられたライフルが放り投げられていた。

何者かが先に突入したのは解る。だが目の前にある惨状はどう見

ても只の人間には出来ない。

だとすれば、今工場内に居るのは・・・

「ISだとも言うのか？」

その眩きと同時に、真正面にある工場のゲートが軋みを上げながら開いた。

警戒の為に歩兵隊が銃を構えるなか、悠然とソレはクラリツサ達が連れ戻そうとした少年を抱えて現れた。

「黒い、IS・・・」

『・・・・・・・・』

沈黙を保つISは見た目からして第一世代型だと判別する。光を吸い込むような漆黒の全身装甲（フルスキン）、頭部はさながら兜のような装甲で包まれ

、その指先はマニキュアでも塗ったかのように赤い。何より目を惹くのが、左肩に付けられた、機体の黒とは正反対の白い兎のエンブレムだ。

緑のカメラアイがクラリツサを捉える。

『貴女が指揮官か？』

ボイスチェンジャーを使用しているのか、男か女か判別しにくい声で黒いISがクラリツサに問う。

「・・・ああ、そうだ。ドイツ軍IS部隊所属のクラリツサ・ハルフォーフだ」

『訳あって、名は明かせない。すまない』

「い、いや、気にするな？」

名前を明かせない事を頭を下げて謝る黒いISに思わず疑問系で返してしまう。さっきまでの威圧感はどこに消えた。

『織斑一夏はこの通り無事だ』

妙な空気感になったドイツ軍など露知らずといった声で黒いISがクラリツサに一夏を渡す。

クラリツサがISのハイパーセンサーを使って簡易的ではあるがメンタルチェックを行ったが、確かに傷一つ無い。

チェックを終えた所でクラリツサに担がれた一夏が身じろぎをし

た。

「っ……う」

『意識が戻るようだな。……あとは任せるよ。ああ、手柄は貴女達が立てた事にしてくれて構わない』

「あ、おいー」

一夏の様子を確認したISは言うだけ言って、正に風のような速さで上昇し、彼方へと飛び去った。

「……追いますか？」

「いや……下手に追うべきじゃない。あれは恐らく」

部下の言葉に冷や汗を流しながら返答する。去り際に感じたあの重圧感、追えば確実に『此方が』潰されていただろう。

雪の降り始めた空を暫く睨んで、クラリツサは指示を下した。

『結果は上々、モンドグロツソも後日決勝戦をやるみたい。ちーちゃんもいっくんもむっくんも無事でよかったあ』

「ホント、上手く行ってよかった」

太平洋を南下しながら束さんと通信すると、ほっとした声が聞こえた。

現在僕はステルスと試作品のシールドブラスター三基を使い、音速で家があるあの孤島へと帰還している最中である。

シールドブラスターをコンセプトがハッキリしてるから楽に作れるっただけで、たった一週間で三基フルセットで用意する束さんの技術についてはもはや何も言うまい。

何はともあれ無事に終わってよかった。

これで暫くはのんびり出来そうだ。

『あ、そっだむっくん』

「何です？」

『ちよつと気になるモノ見付けたから、もしかしたらまた近い内にド
イツに行くかも shouldn't』

「.....」

おい、数秒前の僕、なにフラグ立ててるんだ.....。

どうやら後少しの間は僕に安穩の二文字は訪れないらしい。

深く吐いた溜息が、虚しく太平洋の海に消えた。

#06 銀の少女

「到着、っと」

「黒の森（シユヴァルツ・ヴァルド）、ですか」

薄暗い明け方の森の前、僕と束さんは鬱蒼と茂る木々を見ながら互いに呟く。

吐いた息が朝もやど同化して大気に消える。

「そ。こここの地下にキナ臭いのがあってね。場合によっては『消す』よ」

「・・・」

普段の茶化した態度ではなく、触れば切れる程の空気を纏った束さんに思わず声が出なくなる。

これほどまでに束さんを怒らせる要因が、この森に存在するのだろう。

一夏くんの救助から丁度一週間、僕達は再びドイツの地を訪れていた。

事の発端は一夏くんの奪還作戦の完了後に遡る。

太平洋を横断して帰還する途中、束さんが気になるモノをドイツにて感知したらしく、詳細を調べあげ、一週間の休息の後、再びこの極寒の地に足を着けた。

ここに来る前に軽く詳細を聞いたけど、かなり反吐が出る内容だった。

人体実験。擬似的なISのハイパーセンサーを体に埋め込み、戦闘力を上げるといふ実験。被験体は試験管ベイビー、要は人造人間だ。

その被験体の内の一人がこの黒の森の地下にいるのを束さんが掴

んだのだ。

「今回の目的は施設の破壊。私が施設のネットワークにハッキングして外部への通信を欺瞞する」

「その間に僕が内部に侵入、施設機能を停止させ研究員らを閉じ込め、鎮圧するですね」

「うん。それでなんだけど・・・一つ、頼んでも良いかな？」

「可能な事であれば」

「被験体の子を出来れば助けたいんだ。・・・私が生み出した原因、みたいだからね」

神妙な様子で語る束さんを見て僕は思う。この人も色々背負っているんだと。それも僕には想像もつかない重いものを。

僕の答えを待っているのか、束さんがじつと此方を見ている。

そんな様子 of 束さんに笑みを浮かべて応える。初めから回答は決まってる。

「勿論、助けますよ」

こんな僕でもその重い荷物の端っこ位は支えてあげたいから。

「うん・・・ありがとう」

「よし、それじゃ行きましようか」

何故か顔の赤い束さんに疑問を持ちながらも僕達は森の中へと入っていった。

「騒がしい、ですね・・・」

強化ガラスに覆われた檻の中、一人の少女が小さく呟く。延びきった銀系の如き髪を引き摺りながら横になっていた体を起こす。

彼女の耳が、普通の人間には捉えることが出来ない音を拾う。

「ハッキング、それもかなりの速さで・・・いったい何が」

あまり開きたくはない両の目を開き、『瞳』を起動する。その眼球は黒く、瞳は金に染まっていた。

『越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）』、ISのハイパーセンサーを模したものを文字通り目に移植したモノ。

その適合が成功しなかった故に彼女の瞳は黒金になっているのである。

（外部ネットワークの遮断、それに研究員達が部屋に閉じ込められる・・・？）

ハイパーセンサーから送られる情報を処理しながら、少女は内心で疑問を浮かべる。

（侵入者・・・だとしたら一体誰が？）

正直、ここには『失敗作』でしかない自分と、自衛の手段を何一つ持たない研究員しか居ない。襲った所で得られるのは徒労感だけだろう。

侵入者の心情をはかり損ねる少女がハイパーセンサーからの反応を感じた瞬間、檻の外にある出入口のドアが桃色の光とともに『熔断』された。

「え・・・？」

「目的の部屋はここですか？」

「うん、当たり。よかったあ、ここ以外だったら手遅れの危険もあったからねえ」

抉じ開けられたドアの向こうから、漆黒のISと一人の女性が現れた。ISの手にはドアを切り裂くのに使われたであろう桃色の光を放つレーザーソードが握られていた。

一人と一機は少女の姿を確認すると、檻の前まで進んだ。

「やあ、ごきげんよう！私は自称他称『天災』科学者、篠ノ之東だよ！」

「僕は扶桑睦月、よろしくね」

「え、あはい・・・」

余りに急な自己紹介に思わずたじろぐ。というか今この女性はな

んて名乗った？

篠ノ之束、ISの生みの親。

「な、なんでこんな処に貴女のような人が・・・!?」

何て事ない様に名乗った束に驚愕の声を上げる。自分のような存在にも知れるような有名人が何故、ここに居るのだろうか。

少女の心は疑問と驚愕で一杯になった。

銀の少女の問いに束はあっさりとは答える。

「君を助けに来ただよ」

まるで買い物物にでも行くような気軽さで言われた返事に、少女は目を丸くする。

「何を、言って・・・」

自分を助けて何になるというのか。何もない、失敗作の自分なんて足手まとい処か邪魔でしかない筈だ。

「自己満足だよ。私は君が『必要』なんだ」

必要、その言葉を聞いた瞬間、少女は無意識の内に涙を流す。

度重なる実験で消えかかっていた『外』に出たいという希望が目の前にあるのだ。

意図せず伸ばした手を鉄の手が優しく握る。

視線をずらすと、いつの間にか開いていた檻の入口から漆黒のISが腕を伸ばしていた。

「改めて、自己紹介。僕は扶桑睦月。君は？」

「私は・・・クロエ、クロエ・クロニクルです・・・。私を、連れていてくれますか？」

「勿論、君に『外』を見せて上げるよ」

数時間後、研究所は『匿名の一般市民』の通報によって発見され、国
によって歴史の闇に葬られる事となる。
行方不明者の銀の少女を残して。

#ー 閑話

ドイツでの一件からおよそ半年が経った。

相変わらず僕はISでの試験の日々で、東さんは毎日ニヤニヤしながら僕の持つてるA・O・Zの本、全六巻を読み漁っては色々作り出してる。

そして、新しくこの孤島の仲間になったクロエはというと、洗濯や掃除などの手伝いをしている。

今回は、そんなのんびりしたお話。

その一、料理

「さて、今日はカレーでも作ろうかな」

「あの、睦月様・・・」

「クロエ? どうしたの」

「私もお手伝いします」

「ふふ、ありがと。じゃあじやがいもの皮剥きを頼んでもいいかな」

「が、がんばります」

「うん、ちよつと待って。そのサスペンスの殺人犯みたいな両手持ちは明らかに違うから、なんか手が震えてるし!？」

「あ」(包丁落下)

「・・・OK、ピーラーを使って人参の皮剥きをしてもらおう」

「すみません・・・」

その二、開発

「うんうん、中々良い感じに仕上がってきたねえ」

「東さん、入りますよ」

「どうぞどうぞ〜」

「・・・東さん」

「何かな？」

「これは？」(指差し)

「ロゼットだよ！」(胸張り)

「ヘイズルで満足したんじゃないのか!？」

「まだまだ、開発待ちは一杯あるよ! フライルにキハールとか!」

(ムツク本、渡さなきや良かった・・・)

その三、呼び方

「♪」(裁縫中)

「あの、睦月様」

「ん、クロエ？」

「・・・えと、その」

「？」

「あう・・・お、お兄ちゃん」

「ぐはあつ・・・! き、急にどうしたんだい?」

「こう呼ぶと、殿方は喜ぶと、束様が」

(束さん、何て事教えてるんだ! グツジョブ!)

その四、費用の出所

「訓練終了、今日のところはこれで御仕舞い。お疲れ様、むつくん」

「今日も今日とてハードでした・・・」

「明後日にはヘイズルのフルアーマー装備出来るから今度はそのテストだねえ」

「毎度思うんですけど、その武装の開発費用や僕達の生活費用ってどこから出してるんです?」

「ちよつと色々和小細工を、ね」

「小細工?」

「聞きたい？」（暗黒微笑）

「イエ、エンリヨシテオキマス・・・」

その五、迫る危機

「Zzzz・・・」

「眠ってますね」

「あく、やっぱりこの寝顔見てる時が癒しだねえ」

「可愛い寝顔ですものね」

「だよねえ。・・・うん、今度隙についてむつくんに女装して貰おう。
絶対今より可愛くなれるし!!」

「Zzzz・・・」（震え）

その六、団欒

「束さん、夕飯出来ましたよ」

「おお、待ちかねたよ♪」

「今日は私もちやんと手伝えました!」

「ああくーちゃん健康だなあ!」（抱きしめ）

「はいはい、はしゃぐのは後にして下さい。冷めちゃいますよ?」

「はい」

「・・・さて、それじゃあ」

「いただきます」

ファースト・シフト #01 IS学園

世の中には理不尽というか、不条理で溢れてると思う。

幾ら元の世界のぶんの年齢と合わせて既に二十歳を越えている僕でもこの状況は精神的にキツイ。

いや、教卓の真正面という最悪の場所に座っている『彼』のほうが辛いんだろうけど。

机の天板を必死に見つめながら僕は小さく溜息を吐いた。

扶桑睦月十五歳、IS学園に『二人目の男性IS操縦者』として入学しました・・・

この発端は数ヶ月前。束さんの突拍子もない一言から始まった。

「むっくんむっくん」

「急にどうしたんです、束さん?」

「いつくんをIS学園に入れることにした!」

「いつくんって・・・織斑一夏くん、ですよね?」

僕がかれこれ一年前に助けた同年代の少年だ。彼をIS学園に入学させるって・・・

「何企んでるんです?」

絶対なんか裏あるよこの天災(ひと)は。寧ろ碌なことを考え付く方が少ない位だ。

現に視線を逸らしてるし、冷や汗かいてるし。

「い、いやだなあむっくん、只の善意だよ、善意」

「善意で男一人を女の園にぶちこむ何て聞いたことないですよ」
あつたらあつたで怖いが。

ISの起動については僕という前例があるので大丈夫だろう。そ

れに入学方法だって束さんなら手練手管で何とかしちゃうだろうし。ただ何でIS学園にわざわざ入れるのだろう。

IS学園とは、文字通りインフィニット・ストラトスについて学ぶ女学校だ。

全寮制で、広大な敷地内にはIS競技用のアリーナや整備施設などがあり、恐らくは国内処か、全世界トップの巨大さを誇っているだろう。

世界各地から国家代表候補生やら企業令嬢まで様々な人がそこに集まる。

そんな所について最近まで普通の生活をしていた一夏くんが入ったら確実に色々と巻き込まれるのは確実だ。

「まあ、あれだよ色々あるんだよ！」

「・・・まあ、僕が文句いったところで既に決定事項でしょうし、何も言えませんけど。でも何でそれを僕に？」

そう訊ねると、待ってましたと言わんばかりに束さんがニンマリと笑った。

あ、これすつごいヤバいパターンだ。経験則でわかる。

「男の子一人じゃ寂しいだろうから、むつくんにもIS学園に行ってもらいます！って痛い!?さすがにヘイズルの手でヘッドロックは痛い！」

「何してくれちゃってんですか、この兎さんは・・・」

程よい力加減で束さんを締め上げながら嘆息する。この人の事だもう既に色々と手回しをしちゃってるんだろう。つまり、もはや僕にはどうしようもない。

ヘイズルの部分展開を解除して束さんを下ろすと、頭を押さえながら涙目で僕を睨んできた。あんまり怖くないな。

「むう、最近むつくんが暴力的だよ」

「そうさせるだけの事をやらかしてるって自覚して下さいよ・・・それで、目的はそれだけじゃないでしょ？」

高々一つの理由で束さんは僕を『動かさない』だろう。ヘイズルも色々やり過ぎてちよつとばかり『目立って』しまったし。

僕の問いに暫く唸った後に、東さんは小さい声で答えた。

「ほ、篝ちゃんがIS学園に入学するみたいだから、その・・・ね」

「妹さんが心配、と・・・」

東さんの妹、篠ノ之篝さん。東さんのIS開発によって要人保護プログラムを行われ家族と離散してしまったある意味被害者。

東さん自身負い目に感じているみたいで何かと篝さんの周辺を調べたり、不安因子を影ながら潰しているみたいだ。

そんな自身の妹がIS学園に入学するということで、様子見を頼みたいんだろう。

「はあ・・・分かりました」

こうも不安げな顔をされるとそれを晴らしてあげたいと思ってしまうのが僕という人間だ。

それから、僕があくまで世界で二人目の男性IS操縦者として学園に入ること、定期的に篝さんの様子を伝えることなど色々決めて入学への準備を進めた。

(安請け合いするんじゃないかな・・・)

一夏くんが居るとはいえ、やはりこの状況はくる。

「・・・くん、扶桑睦月くん！」

「はっっっ」

急な呼びび声に顔を上げると、教卓の上から緑髪の女性が僕を困り顔で見ている。

「えっと、男性操縦者である織斑君と扶桑君に自己紹介をして貰おうと思うんだけど、いいかな？」

「え、あはっ」

物思いに耽り過ぎてHRが始まっているのに気付かなかっただらしい。

初日から何てへマしてるんだ僕は……。

椅子から立ち上がると、一夏くんも同時に立った。心なしか肩が下がってるように見える。

仕方ない、ここは僕からいこう。

「ええと、扶桑睦月です。趣味は読書と昼寝です。男と言うことで何かと迷惑をかけるかも知れませんが、皆さんと仲良くできればと思います。……えと、よろしくお願いします」

軽く一礼して自己紹介を終えて周囲を見回すと何か小動物を見るような目で見られた。何故に？

一夏くんを見ると僕が自己紹介してる間に落ち着いたのか、口元に笑みを浮かべていた。

「次は俺だな。俺は織斑一夏、趣味は剣道。……あー、扶桑に全部言われちまって言うこと思い浮かばねえ。とにかく宜しく！」

「ちよ、僕のせい!？」

咄嗟に突っ込みを入れたら、クスクスと笑いが聞こえた。

どうやら無難に自己紹介できたようだ。

安堵の息を吐いた所で、教室の扉が開かれた。

「まったく、マトモに自己紹介できんのかお前は」

「げえっ、呂布!?!あだっ」

「誰が人中の呂布だ、誰が」

一夏くんの頭を軽く小突いて現れたのは、黒いスーツに身を包んだ女性。

IS 競技にて最強を誇るその人の名は、

「キヤアアアア!! 本物の千冬様よ!!」

「カツコイイイ!!」

「叩いて罵ってください!!」

何か若干名変なのがいるけどスルーして。黒いスーツの女性は織斑千冬さん。束さんの親友にして一夏くんの姉。そして、モンドグロツソ『二連覇』の最強（ブリュンヒルデ）。

一夏くんの誘拐事件の後、色々あつてドイツ軍に居たって聞いてたけど、まさか此処に居るとは。

「まったく、このクラスには馬鹿しか集まっていないのか？」

「ち、千冬姉、何故ここに？痛っ」

「ここでは織斑先生と呼ば、馬鹿者」

「・・・はい」

再度一夏くんが小突かれ頭を押さえると、ちふ・・・織斑先生が話始めた。

「改めて、私がこのクラスの担任の織斑千冬だ。

このクラスの生徒になった以上、私の言葉にははいかイエスで答えろ、いいな」

「二「はい!!」三」

「よろしい。では山田先生、続きを頼む」

「は、はい！え、ええとですね、それじゃあー」

織斑先生カリスマ凄いな・・・あれだ、アナベル・ガトーみたいな人だ。

ブリュンヒルデが担任、か。面白い一年間になりそうだ。

入学生に渡されるパンフレットを開きながら山田先生の話聞く。

窓の外、四月の空は快晴で、まるで新入生である僕達を祝っているようだった・・・

#02 クラス代表

拝啓皆様如何お過ごしでしょうか。四月という事で皆様は心持ちをリフレッシュして日々楽しくお過ごしかと思えます。

しかしながら、不肖、この扶桑睦月、

じーーーーー

「……織斑くん、早く帰ってきてえ」

早くも心がへし折れそうです……。

只今一時限目の休み時間、一夏くんはポニーテールの美少女、束さんの妹の篠ノ之箒さんに連れられ何処かに行ってしまった。

一夏くんが出ていってからクラス中、挙げ句に廊下からも女子が押し寄せ僕に視線を浴びせてくる。

そう、気分的には上○動物園のパンダである。

笹でも喰えというのか。

「仕方ない……」

後五分程度だ。授業の予習でもしつつ我慢しよう。

そうと決まれば、と机から広辞苑もかくやと言わんばかりの厚さの参考書をとりだし、僕は予習を始めた。

それから約一時間後、二限目の休み時間。

僕は一夏と雑談していた。

「改めて、扶桑睦月です。よろしくね」

「織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。よろしくな、睦月」

「わかったよ、一夏。ところでさっきの休み時間はどうしたの？篠ノ之さんと何処か行ってたみたいけど」

「ああ、別に大したことじゃないよ。久しぶりって挨拶しただけだ」

「彼女さんじゃないんだ？」

「ぶっはっ!!」

僕のからかい混じりの眩きに一夏が思いきり吹き出して咳き込む。

「ゲホッ・・・い、いきなり何言い出すんだよ睦月!？」

「いや、思ったことを口にしただけだよ?」

「意外と腹黒いだろお前・・・箒とは、幼馴染みってだけだよ。まさか箒もここに居るとは思ってたなくてさ」

「そうなんだあ。でも不思議だね。一夏の事だから彼女の一人や二人居るのかと思っただけだよ」

「いや二人も居たらヤバイだろ!?!俺どんな浮気性だよ!?!」

「冗談だよ冗談」

小さな声で叫ぶという器用な事をする一夏にからからと笑ってしまふ。

あー、普段束さんにからかわれてばかりだから新鮮だなあ・・・。そんな事をしながら過ごしていると、金髪の女子が僕らの前で立ち止まった。

「ちよつとよろしくて?」

「はい?」

あれ、確かこの人・・・

「イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさん、ですよね?」

「あら、私(わたくし)をご存知で?」

「第三世代の専用機持ちって事で結構有名だろ、オルコットさんは」
「どうやら一夏も知っているみたいだ。」

セシリア・オルコットさん。イギリスの代表候補生で第三世代I S、ブルー・ティアーズという専用機を持っている。というのが専門誌で載っていた情報だ。

「男性のわりに良く知ってますわね」

「まあ、俺の場合ほら、千冬姉が関係してるから一通り調べるようにしてんだ」

「僕も似た感じかな」

僕の場合、I Sの創造主の下に居たからその手の情報には事欠かないだけなんだけどね。

僕達が知っているのを意外そうな表情でみた後オルコットさんは機嫌良く話始めた。

「不躰な態度であったなら文句の一つでも言っただけで差し上げようかと思いましたが、残念ですわ」

「不躰な態度で……つか残念がるのかよ」

ああ、この人多分女尊男卑の風潮に強く感化されちゃってるタイプだ。

一夏が苦笑いで返すとオルコットさんはふふん、と鼻を鳴らした。

「男なんて大体は不躰で野蠻ですから」

「あー、それを男である俺らに言われても、なあ？」

「そこで僕に振る？あいたっ！」

「何時まで突っ立っているつもりだ、さっさと席につかんか」

無茶ぶりに答えようとしたところで頭に衝撃が来たので思わず振り向くと、そこには出席簿を片手に織斑先生が立っていた。

「ちふ……織斑先生」

「早く座れ、欠席扱いにするぞ」

その言葉に立っていた僕達と他の生徒らは一瞬で席に座った。

遅れて入ってきた山田先生を確認して織斑先生は口を開いた。

「さて、授業を始める前にこのクラスの代表を決めようと思う。代表と言っても各行事でISに乗る以外は小中のクラス委員と変わららん。自薦他薦は問わん、誰か決めるぞ」

クラス代表か、生徒手帳に書いてあったけどクラス代表対抗戦とかISに乗る機会が何かとあるみたいだ。

少しの沈黙の後、クラスメイトの一人が手を挙げた。

「私は織斑君を推薦します！」

その言葉を皮切りにクラス内から次々と声上がる。

「私も織斑君を推薦します」

「私は、扶桑君を推薦します！」

ん？

気のせいかな、僕の名前が聞こえたような……イヤイヤ、マサカマサカ……

「同じく、扶桑君を推薦！」

「右に同じく」

うん、聞き間違えじゃないね。确实聞こえたね。

「ちよつと待てい!!」

「急に立つな馬鹿者」

「いや、でも千冬ね、っ!」

反論しようと立ち上がった僕と一夏だが、即座に一夏が織斑先生に撃沈された。

コークスクリューパンチって・・・痛そー。

「自薦他薦は問わん、と言ったはずだが？」

「あー、いや僕ら二人ともあんまりISに慣れてないと言うか、知識不足な感じが否めないの・・・」

織斑先生の圧力にしどろもどろになりながらも何とか反論する。

僕に関しては、ISの知識もそれなりにはあるし機体運用も慣れるけど。単に目立ちたくないだけだ。

「お待ち下さい、織斑先生」

どうにか僕らが代表にならないよう話をしていると、オルコットさんが勢い良く立ち上がった。

僕から視線を逸らした織斑先生がオルコットさんを見る。

「どうした、オルコット」

「男がクラス代表なんて到底認められませんわ。そも、其なりの理由があればまだしも、物珍しさだけでクラス代表を任せてしまって、直近のクラス代表対抗戦で直ぐに負けてしまっただけはいい恥です！」

「ふむ、成る程な」

要するに、実力的な面で見て僕らにクラス代表が適していないと言いたいんだろう。

いい恥とかは言い過ぎだと思っただけ。

「・・・オルコット、ようはこの二人にそれなりの実力があれば良いんだな？」

「ええ、そうですわね。イギリス代表候補生であるこの私に追い続ける程でなければ認められません」

「だ、そうだぞ織斑」

織斑先生の言葉を聞いて今まで机に沈んでいた一夏が体を起こし、オルコットさんを見た。

「クラス代表はできれば辞退したいんだが、弱いつて断定されんのは癪だな」

「でしたら、実力を見せてもらえますか？」

「ああ、構わないぜ。今の自分がどの程度なのか知る良い機会だ」

一夏とオルコットさんが静かに睨み合う。よし、この流れ、僕は自然にクラス代表の推薦から辞退でき・・・

「扶桑さん、貴方もですわ」

「デスヨネー・・・こうなったら諦めるしかないか」

「分かりました、現時点での僕の実力。試させてもらいます」

「・・・話は決まったようだな。そうだな、織斑の専用機が確か一週間後に届く手筈だ。では、一週間後の放課後にクラス代表を決める模擬戦を行う！詳細は追って伝える事とする」

織斑先生の宣言によって、僕達の模擬戦の開催が決定した。準備期間は一週間、無駄に過ぎすことは出来ないだろう。

（何だか、大変なことになったなあ・・・）

僕が平穏を望む度、何でこうもドタバタが起きるのだろうか。

虚しい溜息を吐きながら席に着いて、僕は授業を聞くために耳を澄ませた・・・

#03 出会い

「整備棟、整備棟はつと・・・ここか」

クラス代表をかけた模擬戦が行われるのが決定したその日の放課後、僕は一人ISの整備棟へと訪れていた。

「武装のチェック位はしておかないと」

僕の専用IS、ヘイズルは様々な改修が施され、入学前日の夜中になつて束さんから渡された。

早速動かしてみたけれど、アーリーナの使用許可はそう簡単には降りないだろうから、先に現状使用できる武装や詳細なスペックを調べようという魂胆だ。

「束さんの事だからまた色々突っ込んだんだろうなあ」

面白半分でロゼットに18連装ミサイル二基持たせたり、ファイバーに、全長と同じ位の実体剣を搭載しちゃったりする人だからな・・・いや、流石に汎用型のヘイズルにそこまでぶっ飛んだ装備は入れないでしょ、多分。

不安を抱えつつ右腕に着けたTの字が3つ重なったような飾りを持つシルバーブレスレットを弄る。

このブレスレットがヘイズルの待機形態である。

「よし、とりあえず変なのが入ってたらクロエに連絡して制裁を加えるように言っておこう」

そうすれば少しは堪えるだろう。束さん、クロエには弱いからなあ。

対処法を思い付いたことで軽くなった心持ちで整備棟の一室へと足を踏み入れる。

「え?」

「・・・あれ、部屋間違えた?」

そこには、水色の髪の眼鏡をかけた生徒が先に居た。

水色の髪の少女、日本の代表候補生・更識 簪（さらしき かんざし）は放課後の整備棟の一室で一人、大型ディスプレイと対面していた。

その指先はキーボードを絶えず叩き、ディスプレイに表示されたデータに情報を打ち込んでいく。

「格闘対応の為にFCSがミサイルに対応しきれなくなる・・・かといつて遠距離対応に書き換えても今度は近距離での戦闘で対応できない・・・あつちを立てればこつちが立たない、か」

カタカタと鳴っていたキーボードの音が止み、整備室が簪の眩きを最後に静寂に包まれる。

彼女が現在行っているのは自身の専用機のプログラミングだ。

元来、そういった事は専用機を与える企業側がやるべき事であり、代表候補生自らがその行為をするのは本来あり得ない事だ。

しかし、ある理由と自身の意地もあって彼女は今、入学初日であるにも関わらずこの整備室で作業している。

「・・・なるべく早く、完成させないと」

その眩きは、ドアが開く音に掻き消された。

「え？」

「・・・あれ、部屋間違えた？」

簪は振り向いた先、ドアを開けた人間を見て呆けた声をだした。

そこに立っていたのは世界で『二人目』の男性IS操縦者、扶桑睦月その人であった。

「・・・扶桑、睦月？」

「えと、そうですね・・・」

整備室に入ってみたら中に水色の髪的美少女が居た件。

良く見れば、身に付けている制服のリボンが赤色だ。三学年の内、赤色のリボンは一年生のものだったはず・・・

「ん？」

「・・・何ですか」

水色の髪の一年生・・・確か、何処かで見たような・・・
そこでピンと記憶が甦り、声を上げる。

「日本の代表候補生、更識 簪さん・・・ですか？」

「そうですね・・・」

ISの専門誌にその名が載っていたのを思いだし、訪ねてみるとどうやら正解だったようだ。

でも僕が言うのも何だけど、どうして入学早々こんな所に居るのだろうか？

とそこで、更識さんの後ろにあるディスプレイに目が行く。

データの内容から見るに、

「OS、ですか。それもISの」

「・・・わかるの？」

「まあ、それなりに」

驚きの目線にそう答えながらディスプレイの前まで歩く。

伊達に三年間ISの産みの親の下で過ごしてはいない。

地獄のような武装試験と同時進行で、ISの内部システムやメカニズム等、一通りは教わって来たのだ。

「見た感じ、FCS・・・照準系の演算処理ですか」

「・・・そう、ですが」

ディスプレイのデータを見てそのプログラミングの内容を把握す

る。

まさかとは思うけど、これを一人でやっているのだろうか、この人は。

「もしかして、一人で？」

「………」

訊いた途端、更識さんは無表情から一転、睨み付けるような表情でディスプレイを見た。

「色々、あつて……」

「……そうですか」

深入りするべきでは無い、雰囲気からそう判断して視線をディスプレイに戻す。

一人でこれだけのプログラミングが出来るとは……表示されるデータだけ見てもかなりのものだと思う、けど。

「このプログラミングだとミサイル系のロックオンシステムは負荷が掛かりませんか？」

幾多の数列の横にあるISの武装データを見る限り、ミサイル系武装も積んでいる。だと言うのにこのプログラムだとFCSに負荷が掛かり、ロックオンに時間が長くなったり、最悪ロックオンが出来ない状態になるだろう。

その事を言うと更識さんは大きく溜息を吐いた。

「近接戦闘にソースを割くところなる……逆も然り」

「機体コンセプトは、汎用型ですか」

「そう、だけど」

「ふむ……」

ようはバランスが上手く取れないんだろう。機体イメージを見る限り、元となる機体は第二世代の日本製量産IS『打鉄』か。

防御と近接戦闘に重きを置いた機体だ。そも打鉄の数あるパッケージ装備にもミサイル関連の物は確か無かったはずだ。であれば対応できるミサイル用のプログラムなんて積む必要なんて無い。

「プログラムの内容から見て、マルチロックを組み込むつもりでしたか……」

「えっ!？」

数字の羅列を見ながら言った言葉に、更識さんが初めて大きな声を上げた。

「そこまで解るの!？」

「勉強してますので」

ふっふっふっ、これでも東さんの手伝いでダンディライアンのプログラミングをやったことがあるのだよ!知恵熱で三日寝込んだけど。

「じ、じゃあ、ここのプログラムのところ、解る?」

「反動制御のところか・・・これはー」

それからと言うもの、僕は武装確認なんて忘れて簪さんとプログラミングについて話し合い続けた・・・。

で。

「・・・扶桑、君?」

「あれ?部屋間違えた?」

何で寮の部屋に更識さんが居るんでしょうか・・・?

#04 テイク・オフ

「ーつまり、空き部屋が今無いから臨時で別クラスである私の部屋に入ることになる、と・・・?」

『そうなるな。早めに何とかするから、それまでは辛抱してくれ』

寮の部屋に備え付けられた電話から寮長である織斑先生の申し訳なきような声を最後に受話器を置いて、私、更識簪は溜息を吐いてしまう。溜息は幸せを逃がすと言うけど、今の私は幸せ処か不幸すら逃げ出していること請け合いだ。

「あー・・・、織斑先生は何て?」

「・・・暫くは、この部屋で過ごせ、と」

未だに部屋の入口で立つ、扶桑睦月君の問いにそう返すと、彼は苦笑いをしながら参ったねこれと言った。

「・・・とりあえず、部屋入れば」

「いいの?」

「・・・寧ろ外とかで寝られると、私が織斑先生に怒られる」

「あー・・・」

納得顔になった扶桑君が、部屋に入って私の隣のベッドに荷物を置いた。

彼はまだあって少ししかしないけど、不思議な男性だ。身長は私と同じ位で、栗色の髪は項辺りまで伸ばしてあって、顔立ちも相まって男性と言うより女の子と言われた方が納得出来る容姿だ。

「?僕の顔に何か付いてます?」

「・・・なんでも、ない」

そして何より彼の纏う雰囲気不思議なのだ。

幼い頃から人付き合いが苦手な私がこんなつらつらと話せる、話せてしまう柔らかい雰囲気は扶桑君は持っている。

先程、放課後の整備室で会った時からそうだ。男ということ警戒していたのに、気付けば門限ギリギリまで話し込んでしまっていたのだ。

「ふう・・・更識さん」

「何？」

「とりあえず、これから宜しくね」

「……」

「あれ？無視？」

ニコニコした笑顔から一転、不安げな表情になった扶桑君を見てやはり私は思う。

「……変な人だなんて、思っただけ」

「えっ」

「……宜しく」

「うんっ」

また笑顔に戻った扶桑君、やっぱり不思議な人だ。

(……ね、眠れない)

クラスの違う、更識さんの部屋に暫く相部屋となって最初の夜、僕は全く寝付けなかった。

時刻は既に深夜二時、色々部屋での取り決めを決めてから消灯したのが十時だったのでかれこれ四時間ずっとこうしているワケだ。

と、言うか。この状況下で直ぐに眠れるわけがない。

孤島に居たときはちゃんと束さんやクロエとは別部屋だったから良かった。けど今は仕切り一枚隔てた先に居るのだ。

(羊を数えるのも無駄に終わったし……ああ、どうしよう)

もういつそのこと朝まで起きてようか。いや、それだと確実に授業中寝る。そんな事したら確実に織斑先生の鉄拳が飛んで来る。別の

意味で寝ることになりそうだ。

(というか更識さんすぐ寝ちゃったけど警戒心とかないのだろうか)
お休みと言いついて消灯してからはや数秒で眠りについた更識さんは緊張だとか無いのだろうか？

出会った最初の時の警戒心剥き出しな雰囲気は何処に消えた。

(あ、武装チェックしてないなそう言えば)

つつい話し込み過ぎてしまつて時間を忘れちゃつてたんだよなあ。

他愛の無い考え事をしていると不意に瞼が重くなる。

ああ、漸く眠れる。

明日からどうしようかと考えつつ僕は眠りの世界へ沈んでいった。

「で、ふそつちは私のしんゆくの部屋で一晩過ごしてどうだった？」

「はい・・・？」

入学して二日目の休み時間、クラスメイトの布仏本音(のほとけほんね)さんに唐突に話しかけられた。

「というか『ふそつち』って僕のアダ名か。」

「ん？親友？」

「そそ、かんちゃん・・・簪ちゃんは私のだいしんゆーなのだー」

「そう言つてえへんと胸を張る布仏さん。たぼついた改造制服の袖がゆらゆら揺れる。」

にしても更識さんと布仏さんが親友、か。

性格的に真反対だと思うけど、だからこそ波長が合うのかも。

「大親友ですか」

「うん。だからふそつちと相部屋つて聞いて心配だったんだ」

「僕は何もしませんよ。出来るような胆力なんて無いですし」

代表候補生に手を出すとかそんな勇氣があるわけ無い。僕はこれ

でも小心者なんだ。

「そかそか、その言葉を信じよ〜」

「ありがとうございます・・・」

「クラス代表決定戦、ガンバってね〜」

言うだけ言っただけで、布仏さんは自分の席に戻っていった。何とか、マイペースな人だ。

「つと、更識さんに呼ばれてるんだった」

多分、ISのプログラミングについてだろうけど。まあ、更識さんと話すのは楽しいから良いんだけどね。

「ん？睦月、どこ行くんだ？」

「ちよつと用事を済ませてくるよ〜」

一夏に手を振りながらそう返して教室を出る。
さて、今日はどんな事話そうかな。

「・・・それで？二人揃って結局事ここに至るまで一度も練習すらして
いないと？」

「ええと、はい」

アリーナのピットでISスーツに着替えた僕と一夏に、織斑先生が
盛大に溜息を吐いた。

入学式から丁度一週間、放課後の第三アリーナにて一年一組のクラ
ス代表決定戦が始まろうとしていた。

これまで僕と言えば、

「更識さんと一緒にISのプログラミングばかりしてました、はい」

「織斑は？」

「俺は箒とずっと剣道してました」

「ド阿呆が」

「すいません！」

辛辣な織斑先生の言葉に二人揃って頭を下げる。

ええ、完璧に今日の事すっぱ抜けてました。

「はあ・・・仕方ない、織斑の機体はまだフォーマットとフィッティン
グが終わっていない。ぶっつけ本番だが、扶桑、やれるな」

「了解です」

織斑先生に頷き返して僕は待機形態のハイズルを見る。

東さん曰く、新世代のテスト機体だそうな。

軽くスペック見たけど、これ、オーバースペックでしょ。

「睦月、頑張れよ」

「うん。僕の勇姿を特にご覧あれってね」

専用機の調整の為に別のピットに向かう一夏と織斑先生を見送つ
てから、僕はハイズルを『起こす』。

身に纏うのは以前と変わらない黒と濃紺の全身装甲（フルスキン）。
両手には少し大きめのハンドガンの様に見えるビームライフルを。

「システム戦闘モード起動。展開可能武装ロック解除。全駆動系
オールグリーン。シールドエネルギー展開・・・戦闘状況開始可能」
「よし、それじゃ行こうか」

システムチェックを終え、発進準備に入る。

「さあ、跳ぼうか。」

「RX-121-1 ハイズル「改」、行きます！」

オルコットさんが待つアリーナに向けて、僕とハイズルは高く飛翔
した。

#05 飛躍

「逃げずに来たようですね」

「そりゃあね、流石に逃げるわけにはいかないでしょ」

空中で静止するオルコットさんに高度を合わせて睨み合う。といっても僕はヘイズルのツインアイ越しだけど。

「専用機と言っても、見たところ第一世代の全身装甲タイプではありませんか」

試合開始のカウントダウンが始まるなか、ヘイズルを見てオルコットさんがニヤリと笑う。

成る程、見くびってくれる。

残り三秒になったところで返答する。

「オルコットさん」

「なんですの?」

残り一。

「見かけで判断するなよ」

「ーっ!?!」

試合開始のブザーが鳴ると同時にスラスターを起動して加速する。

直後にオルコットさんの持つライフルからレーザーが放たれる。

「武装解析完了。六十七口径特殊レーザーライフル スターライトmkⅢ」

「スナイパーライフル・・・連射性能はそこまで高くないか」

展開される武装情報を見ながら次々と撃たれるライフルを回避し続ける。

問題は、あの機体の切り札をいつ使うのかな。

「さて、今度はこっちの番!」

シールドブラスターを三基全てを起動し、二挺のビームライフルを撃ちながら下から搦り上げるように迫撃する。

元々の設定ではヘイズルにこんな事は出来ないが、東さんがそこま

で再現する筈もなく。本来不可能なシールドブースターを起動しながらの攻撃が可能となっている。

「つく、速い!？」

寸でのところでオルコットさんに回避されるが少しはシールドエネルギーを削れたかな。

ブースターの向きと脚部スラスターを使つてクイックターン。

オルコットさんからライフルが放たれるが悉くを回避する。

「軌道が素直すぎる。そんなんじや当たらないよ」

「馬鹿にしてっ」

三発のエネルギー弾をバレルロールで避けながら攻撃を続ける。

〔左腕、残弾三十%〕

「ならー!」

ISからの警告に即座に判断を下し、方向転換。

シールドブースターを駆使して再度追撃を行う。

「その手には乗りませんわ!」

「乗らなくて結構!」

当然ながらスターライトが火を噴くがスラスターとブースターを使い、かする程度に抑える。

オルコットさんが急加速を行うがもう遅い。

「てえい!」

オルコットさんから数メートル程離れた位置で急制動をかけながら左手のライフルからエネルギーパックを放り投げる。

そして、

「ショット!」

右手のライフルでエネルギーが『三割残った』パックを撃ち抜いた。

ドゴンツォー!!

たかが三割といえど、圧縮されたエネルギーだ。その爆発の威力はISを纏っていないかつたら確実に死ぬレベルだ。

だが、流石に『この程度』じゃ終わってくれないみたいだ。

爆煙の中から幾つもの閃光が放たれ、煙を晴らす。

「やってくれましたわね・・・」

「……………」

晴れた煙。その先には四基のビットを従えたオルコットさんが怒り心頭な顔で此方を睨んでいた。

「良いでしょう・・・ならば踊りなさい、私とブルーティアーズが奏でるワルツで！」

「っー」

宣言と同時に四基のビットがバラバラの軌道を描きながらレーザーを放ってきた。

バックブースター展開、脚部スラスター下方修正。エアインテークを一時閉口・・・！

高度を下げながら後退し、レーザーをやり過ぎす。ビット・・・囲まれないようにしないとね。

前後左右上下、あらゆる角度から襲いくるビットを全身のスラスターを使い避ける。

成る程、『こつち』も素直か。

「だったら・・・！」

地面に対して仰向けになるように機体の向きを変えてライフルを撃つ。

「なっ!？」

オルコットさんの驚愕の声上がるのと共に僕の背後を取ろうとしていたビットが爆発四散する。

機体を更に動かし上昇しながら頭上と左側面のビットを撃ち抜く。

「わざわざ撃ちやすい死角にビットを配置してくれてありがとう」

「あ、あ、貴方本当に初心者ですよ!？」

「さて、ね」

目を点にしたオルコットさんの叫びを受け流す。

あの程度、処理しきれなければISの武装試験（あの地獄）はこなせない。

……………バイザックとキハールとファイバーの挟み撃ちは辛かったなあ…………。

死んだ方がマシな気がする武装試験を思い出しながら右下の最後のビットをライフルで破壊する。

〔右腕、左腕 残弾ゼロ エネルギーパックリロード〕
「さて、と」

空になったエネルギーパックが外れて落下する中、拡張領域から新たなパックを装填。

オルコットさんを見下ろしながら銃口を向ける。

「貴方・・・一体何なんですよ」

「ただのIS操縦者だよ」

ヘイズルのヘッドパーツの下、僕は笑いながらそう答えた。

空のパックが地面に落ちる。

「終わらせようかー！」

「カッコいい・・・」

「かんちゃん？」

目の前で展開される高速戦闘に目を奪われた私は、親友の言葉をすらすら思わず無視してしまった。

第三代型ISブルーティアーズ対見た目『だけ』は第一世代型の、扶桑君の駆るヘイズル。

特に私の目を釘付けにするのは当然ヘイズルだ。黒と濃紺のツートンカラーの全身装甲の外装は俗に言うリアル系ロボットのそれだ。機体の動きに合わせて線を引く緑のツインアイが最高に痺れる。

何より、そう、何よりも目を惹くのは背中と両腕に装備されたシールドとブースターを合体させたような盾だ。

「あの機体の設計士はロマンをわかってる・・・」

「あの盾カッコいいよね、お？決着つくみたいだよ」

隣に座る本音の声の通りあれだけ激しく動いていた二機のISが空中で試合開始前の様に静止している。

だがその姿は対照的だ。ブルーティアーズは四基のビット全てを破壊され、度重なるダメージが目に見えている。

対してヘイズルはレーザーの掠り傷以外一切のダメージが見当たらない。

「・・・動く」

「え？」

私の眩ぎの後、一瞬の沈黙を破り、爆発がアリーナで起きた。

そして、

【battle end】

空間投影された文字が試合終了を告げる。

【winner】

煙が晴れ、漆黒の鎧が高らかに右手を上げた。

【HAZEL CUSTOM】

その文字が出た瞬間、アリーナ内は歓声に包まれた。

#06 白閃

「よっ、お疲れさん。完全勝利だったな」

「頑張りましたっ！」

試合を終え、ピットに帰還した僕を待っていたのは一夏だった。返事をしながらISを解除した僕は、投げられたスポーツドリンクをキャッチする。

「ありがとう、一夏」

「スゲエ動きだったな、みんな驚いてたぞ」

「じゃあ一夏は更にみんなを驚かせないとね？」

「ハードル上げないでくれ・・・」

備え付けの椅子に座って暫く他愛ない話を楽しむ。

いやあ、疲れた・・・。

十分位たった頃になって放送が入り、一夏の名が呼ばれた。

「つと、そろそろか。じゃあ俺は戻るな」

「うん、頑張ってたね」

「おうよ！やるからには全力だ」

そう言って一夏は立ち上がり、ピットの出口に向かい、不意に立ち止まった。どうしたんだろうか？

「・・・なあ、睦月」

「何？」

「お前、二年前のモンドグロツソの時・・・ヘイズルに乗ってなかったか？」

「ーーーー」

不意打ち気味に放たれた言葉に一瞬、身体が硬直するけど、即座に苦笑いを張り付けて返事をする。

「まさか、無いよ。その時点でヘイズルに乗ってたら僕が『一人目』になっちゃうよ？」

「だよなあ。ワリイ、変なこと聞いた」

「ううん、気にしないで」

謝罪の言葉を残して一夏はピットを去った。足音が遠ざかったの

を確認してから僕は大きく息を吐いた。

ああ、緊張したあ・・・まさか助けた時に姿を見られちゃってたかな。

東さん曰く、今はまだ一夏が『一人目』であるべきだと言っていた。だからこそ、ああ返したんだけど・・・

「少し、警戒した方がいいかなあ」

嘆息混じりの言葉は、疲労感と共に宙に消えた。

「よう、待たせたな」

「・・・もう油断はしませんわよ」

隙の無い構えをするセシリアに一夏はこうもハードルを上げてくれた睦月に内心苦笑いを浮かべた。

ただ、一夏は負けるつもりも無かった。己の身に纏う専用IS『白式』はフォーマットとフィッティングを終え、その名の通りの純白の装甲を見せていた。

その手に握るはかつて世界を二度に渡り制覇した実体刀、『雪片式型』。

試合開始のカウントダウンが始まると、一夏は気持ちを切り換える。只の学生から、戦える者へと。

油断も慢心も無く、眼前の敵を倒すために。

【battle start】

「落ちなさい！」

「断る！」

開始の合図と同時に撃たれるスターライトの閃光を半身を逸らすことで回避し、セシリアへと突撃する。

当然、そう易々と近づけさせるセシリアではない。

四基のビット『ブルーティアーズ』を展開し、一夏の動きを阻む。「ちっ……」

寸でのところでビットの攻撃を避けるが、距離を離されてしまう。一夏の持つ切り札の特性上、短期決戦が望ましいが、ビットによる多重攻撃を掻い潜るのは難しい。

多角的に襲ってくるレーザーを危なげなく避けながら一夏は思索する。

(何か、何か手は……！)

そこで一夏はあることに気づく。それは先程の睦月の試合を見ていた時にも感じていた違和感だ。

ビットによって一夏の動きを制限しているのに何故かブルーティアーズ本体、セシリアからの追撃が無いのだ。このタイミングでスターライトによる精密射撃が放たれば間違いなく白式は墜ちると言うのに、だ。

(ビット制御に集中しているのか、或いはビット使用中は射撃が使えないのか……なら、狙い目はそこだな)

「つつ、避けますわね……」

「望んで当たりたくは無いんだよ」

白式の持つ機動力の高さをもって、少し被弾しながらも致命的なモノは回避していく。

アリーナ内を大きく旋回しながらどうにか攻撃を避け続けていると、不意にビットの動きが止まる。

恐らくはビットの内蔵エネルギーが少なくなったのだろう。ビットがブルーティアーズの元に戻りだす。

(狙うなら……ここだっ！)

彼我の距離は凡そ六百メートル。白式の機動力をもってすれば無いに等しい距離だ。

瞬時に判断を下し、一夏は空を『蹴った』。

「なっ・・・!?」

何の予備動作も見せず、それこそ瞬間移動でもしたかのように接近した一夏にセシリアは混乱する。見る人が見れば理解するだろう、その歩法は『縮地』と呼ばれるものだ。

そして腰だめに構えられた雪片が真の力を顕す。

〔単一仕様能力 零落白夜〕

「ーっ！」

銀の刀身が割れ、その間から蒼いエネルギーが刃を造り出す。

その能力は『あらゆるエネルギーを切り裂く』という、正に最強と呼べる力。

「刻めー！」

我流で習得した抜刀術とISのアシストにより神速となった刃が振り抜かれる。

しかし、セシリアとて只で斬られるつもりはない。

「爆ぜなさいー！」

ブルーティアーズのスカートアーマーが動き、その砲身を白式へと向ける。

「しまっー!?」

まさに隠し技とも言うべくして放たれたブルーティアーズ唯一の実弾兵装、『ミサイルビット』が炸裂する。

轟音と爆煙が二人を包む。セシリアは油断無くスターライトmkⅢを構えながら後退しー

「逃がすかよー！」

「此方の科白ですわー！」

左から現れた白式に向かってスターライトを撃つ。

同時に、零落白夜の刃が振り下ろされ・・・そして。

〔battle end〕

試合終了のブザーが鳴り響いた。

「と、言うわけで」

「二」織斑君クラス代表決定おめでとー!!」

「は、はは・・・どうしてこうなった」

時刻は夜の七時、無事クラス代表決定戦を終えた僕たちはこうして『織斑君クラス代表決定おめでとー会』というのを食堂を貸し切っておこなっている。一夏対オルコツトさんの戦いはギリギリで一夏が勝利を掴んだ。試合の後、オルコツトさんは何か熱っぽい目で一夏を見てたけどどうしたんだろう?今も一夏の隣に座ってニコニコしてるし。

「つーか、あんだだけ模擬戦やったのに最後が俺と睦月のジャンケンってどうなんだよ?」

「仕方ないじゃない、アリーナの使用時間ギリギリだったんだし」

第二試合の後、アリーナの閉館時間が迫っているとの事で、僕と一夏が何故かアリーナのだ真ん中でジャンケンをして、勝った方が代表ということで一夏が晴れてクラス代表になったのだ。

いやあ、十回連続あいこ何て中々無い事が出来たよ。

クツキーをサクサク食べて疲れを癒していると皆から写真を撮られた。何故に。

「お、いたいたあ」

暫く皆からお菓子を貰って食べていると、そんな声が僕の耳に届いた。

声の方向に向くと、一年一組ではない人がカメラ片手に立っていた。

「新聞部所属、二年の黛 薫子(まゆずみ かおるこ)です!早速だけドインタビューお願いしていい?」

「だつてさ一夏」

「いやお前もだよ」

さっと逃げようとしたところを襟を掴まれて阻止される。おのれ一夏……。

「二人は仲良いね?」

「まあ、男子が俺と睦月だけだからなあ……」

「寧ろ仲悪くてどうするんでしょう?」

ただでさえ居心地悪いのに更に悪くするとか下策でしかないと思う。

「ああ、そうだった。扶桑君、男なんだっけ」

「そうだったって、今まで僕を何だと思つてたんですか!」

「二「女」」

「クラス全員!」

まさか食堂中から異口同音に返ってくるとは思わなかった……というか、僕はそこまで女っぽいだろうか?

「ねえ、一夏」

「何だ?」

「僕つてそんなに女っぽい?」

「あー……まあ、端から見たら、な」

「くそう、僕に味方は居ないのか!」

僕の慟哭をよそに、皆の楽しい声は更に盛り上がっていった……あ、インタビューはちゃんとやったよ?

最後に必要なのは勇気だつて言っておきました。

#07 休日

「……にしても、良いの?」

「ん、何が?」

「折角の休日なのに……私とこんなところに居て」

「良いんだよ。『簪』とこうしてるの、楽しいから」

「そ、そう……」

IS学園に入って最初の日曜日、僕は朝から簪と一緒に整備棟に籠ってISの開発に勤しんでいた。

あのクラス代表決定戦の後、ヘイズルの造形をカッコいいと言ってくれた簪とロボット談義をして完璧に意気投合。以来、名前で呼び合うようになった。

「ラブコメしてるところに、空気を読まずに登場」

ディスプレイとにらめっこしながらキーボードを叩いていると部屋の入り口からそんな間延びした声が聞こえた。

もう、発音の時点でその人物が誰なのか解る。

作業の手を止めて後ろを向くと、案の定、布仏さんが立っていた。長い袖に隠された手にはビニール袋が握られていた。

「というか、ラブコメ?」

「ら、ラブコメなんてしてない……」

そう言うと、顔を赤くした簪は俯いてしまった。どうしたんだろう?」

「あく、ふつくん『も』鈍ちんか」

「に、鈍ちん?」

言うほど僕は鈍いだろうか?これでも結構心の機敏には敏感だと思っただけ……。

部屋にあるテーブルにビニール袋を置いて、布仏さんがディスプレイに映し出された情報を見る。

「おお、スペック高いね」

「どうやら、布仏さんのお眼鏡にかなったようだ。布仏さんは意外や意外、ISの整備技術を持っているのだ。それも専門学科の二、三年

生に匹敵するほどに。

クラス代表決定戦の前日に、放課後ばったりここであつてから話を
してかなりの技術力があることが分かったのだ。

「非固定武装(アンロックユニット)にマルチロックオン式の八連装ミ
サイルポッド『山嵐』、荷電粒子砲『春雷』。近接武装に完成してる高
振動薙刀『夢現』……ってこれは?」

「ああそれ?」

武装一覧を見ていた布仏さんが最後の行を見て疑問の声を上げる。

隠し玉として僕が設計した特殊武装、その名も

「掌部ビーム砲、『パルマファイオキーナ』だよ」

ええ、皆さんご存じのアレです。

懐に入られた際、対応できる武装が無かったから僕が設計、開発し
たものだ。

半分はロマンだけどね!

「頑張れば白刃取りも出来る優れもの」

「あつたほうがカッコいいじゃん?」

揃って言いはなつた僕と簪に布仏さんが珍しく苦笑いを浮かべた。

「ほんと、二人は仲良しだね」

「ロマンを解る人に悪人はいない」

もはやこれは摂理だね。

閑話休題。

「そういえば、来週二組に転入生くるみたいだよ」

三人でテーブルに座りながらお菓子を食べていると布仏さんがそ
んな事を言った。

この時期に転入生なんて珍しい。

「何でも中国からの転入なんだって」

「中国って確か最近になって第三世代のISをロールアウトしたよね」

「そのテストも兼ねてるのかもね」

だとすればこんな中途半端な時期に転入してくるのも頷ける。

各国の代表候補生とその専用ISが集まる学園は機体の運用テストには最適だ。

「来週にはクラス代表対抗戦あるし、もしかしたら参加するのかもね」

「初戦で一夏とぶつかったりして」

「いやいや、それは難しいでしょ」

そう都合よくぶつかる確率は低いだろう。寧ろそうなたら何か作爲的なモノを感じる。

マシユマロを食べながらそんな風に考えていると、二人から妙な視線を感じた。

「・・・何？」

「いやあくやっぱりふつくんは」

「可愛い・・・」

「か、かわーっ!？」

なななな何をいきなり言うのかな二人は!？」

「い、いや僕なんて別に可愛くないし、というかカッコいいって言われた方が僕としては嬉しいんだけど!？」

「ヘイズル展開するときにはカッコいい」

「それは全身装甲だからだよねえ!？」

「どうかくふつくんにカッコいいはあんまり似合わない言葉かも」

「ぐはあ・・・!」

にべもなく放たれる布仏さんの言葉に轟沈する。酷い、酷すぎる・・・これが人のする事かあ!!

「まあ何にせよ、来週も忙しい」

「だね」

「むう・・・」

お茶を濁されて僕はご立腹ですよ、ええ。
銘菓老舗『皐月屋』の饅頭？仕方ない今回は許してあげよう。

#08 セカンド幼馴染み

「ふぁ・・・あふう」

「扶桑、どうした？寝不足か？」

「うみゆ・・・ちよつと夜中に電話がきてね・・・」

週明けの一年一組、自分の座席に座るなり大あくびをする僕に箒さんが声をかけてくれた。

日曜日の真夜中、いや日を跨いで今日の二時くらいに束さんから電話が来たのだ。

そこから色々話して気付けば朝の四時。普段起きるのが五時なので、ほぼ寝てないのと同義である。

その事を周囲に聞こえないよう小さく言うと、箒さんは額を押さえ溜息を吐いた。

「馬鹿姉が迷惑をかけるな・・・」

「もう慣れっこだよ・・・」

あの人に常識が通じないのは出会って三日で理解した事だし。

世間に伝わっている僕の境遇は、一夏と似たようなものだ。まあ、束さんが身元保証人というのが一夏とは違うところか。

束さんの関係者というのもあつてか、先週、箒さんから話し掛けてきてくれたので、そのまま束さんに近況報告が出来るのは嬉しい誤算だ。

「おはようさん、箒、睦月。なに話してるんだ？」

「おはよう、一夏。睦月が寝不足らしくてな」

「メ○シャキを所望するく・・・うぐう」

自分の机に鞆を置いた一夏が僕の席に来るけど、当の僕は机に腕を伸ばして突っ伏してしまふ。

仕方ないじゃない、眠いんだもの。

「おいおい、大丈夫か？」

「授業中に寝たら織斑先生が怖いぞ？」

うん、分かってる。分かってるんだけど・・・

「ごめん、もう無理・・・」

「寝てしまったな」

「仕方ねえ、時間になつたら起こしてやるか・・・」

箒さんと一夏のそんな言葉を最後に、僕の意識は落ちた。

「で?どうしてこうなつた?」

「それは俺が聞きてえよ・・・」

現在三時限目のIS実習の時間です。えー只今一夏と僕は何故かISを展開したオルコットさんと山田先生に追いかけています。オルコットさんは正に修羅の形相で山田先生は苦笑いを浮かべながらこちらに照準を合わせてくる。

当然ながら白式とハイズルを展開した僕らはそれから上手く逃げてるんだけど・・・

「ねえ一夏」

「なんだ睦月!今あんまり余裕がねえ!」

「これ、僕が追われる理由ってある?」

僕としては山田先生だけ相手にしたいんだけど。射撃特化二人を相手取るとか鬼畜かと。しかも山田先生に至っては元国家代表候補だし。

授業内容は機動訓練だったはずだし。

「・・・いや、あれだ、同性のよしみでここは一つ」

「もう・・・後で食堂の白玉あんみつ奢ってね?」

「任せろ!」

仕方なくクイックターンを使って後ろを向くと、うん。何だろう、鬼神がいた。その背後から見える山田先生が天使に見える。銃口

こつち向けてるけど。

「扶桑さん、そこを退いてくださいまし！一夏さんに質問出来ませんわ！」

「いや、今の貴女を見てただ質問するようには思えないんですけど!」
容赦なく飛んでくるスターライトの閃光をシールドで受け流しながらツツコミを入れる。

山田先生は一夏の方に行っちゃったけど・・・まあ何とかなるでしよ。

「あの二組の転入生との関係について尋問（きく）だけですわ！」
「明らかに文字が違うよね、それ!」

ああ、もう寝不足とこれまでの授業で織斑先生の注意（チョーク投擲、かなりの威力）を受けた頭が痛い。

あれだ、もうサツクリ終わらせよう。

「オルコットさん」

「何ですか?」

名前を呼びながら右腕のシールドブースターを起動。脚部ブースターを逆噴射。

「この言葉を送ります。ー！ー！っ！こい女は嫌われるよ！」

そう叫びながらシールドブースターを殴り付けるように『発射』した。

「え、ええ!」

超高速で迫る鉄塊がブルーティアーズの非固定武装にめり込み、その機能を停止させる。

非固定武装は基本、バランスの機能も持っている。その機能が高機動中に突然失われたらどうなるか。

「嘘おおお!」

あらぬ方向に飛んでいくオルコットさんを捕まえ、抱え込む。はい確保！。

「全くもう、気になるのは良いけど、そう強気に出たら一夏だって答えにくいでしょ?」

「うう、私としたことが、冷静さを欠いていましたわ・・・」

どうやら少しは落ち着いたようだ。よかったよかった。と思った次の瞬間、また修羅に戻ってしまった。

「あ、あの・・・織斑君？手が・・・」

「へ？あ・・・すいません！」

一夏が俗に言うラツキースケベを発動してしまったのだ。

何をどうすればそうなるのか、山田先生と変に絡みながら地面に倒れる一夏が先生の胸を触っていた。

「扶桑さん・・・離して頂けますか？」

「一応聞こうか。理由は？」

「粛正ですわ」

「・・・却下」

ヘイズルのマニピュレーター（指先）に隠された、スタンガンを起動して即座にオルコットさんを気絶させる。いやあ、あつてよかった対IS用スタンガン。

粛正ですわとか言ってるけど殺気凄まじかったし。あのまま離してたら確実に一夏が死ぬ。

「はあ・・・昼休みにでも聞いてみようか」

溜息を吐きつつ僕はオルコットさんを抱えて降下を始めた。

「ええと、つまり。鳳さんとの関係について知りたくてああなつた、と。箒さん含め」

「だからセカンド幼馴染みだつて言っただがなあ・・・」

昼休みの食堂にて、僕は一夏、箒さん、オルコットさんと共に昼食を食べていた。勿論、僕は白玉あんみつを一夏の奢りで貰っている。

どうやらオルコットさんの暴走の原因は今日二組に転入してきた、
鳳 鈴音（ふあん りんいん）さんと一夏が妙に親しげに会話してい

た事が始まりらしい。朝礼が始まる前だったから、丁度僕が寝落ちしてしまった後の事だ。

んーというか、そんなに激しく一夏の女性関係に反応するということは……

「二人は一夏の事がす……むぐっ!？」

「余計な事を言うな（ないで下さいまし）!？」

「あ、こんなところに居たんだ一夏」

二人係りで取り押さえられたところで、小柄なツインテールの少女が一夏に話しかけた。いやツインテールでもウル○ラマンの方じゃないからね。

「よう、鈴。お前も今から飯か?」

「私は食べ終わったところよ」

成る程、彼女が鳳 鈴音さんか。身長は……よし、僕の方が少し勝ってる。

「ん?もしかしてアンタが二人目?」

「もが……そう、ですけど?」

「ふうん……」

そう言うと鈴音さんは二人の拘束から逃れた僕をまじまじとみ始めた。う、なんか恥ずかしいな、これ。

「何か兎みたいね、アンタ」

「う、兎……ですか?」

唐突に何を言い出すのだろうか、この人は。

「ちっちゃいし、何か雰囲気だね」

「ああ、それは俺も思った」

「え、一夏も?」

確かに僕は兎が好きだけど、まさか自分が兎に例えられるとは思ってなかった。

「まあ良いわ。私は鳳鈴音、よろしくね」

「扶桑睦月です。よろしく」

お互い自己紹介をしながらも、僕は鳳さんをなんだが猫みたいな人だなと思った。

#09 訓練

鳳さんと会ったその日の放課後、僕はアリーナに来ていた。

「一夏、そこでクイックターン!」

「つつ!」

目的はご覧の通り、一夏の特訓である。

ここに来る前からISに触れてきた僕と違い、一夏は全くの素人だ。なのでこうして、入学当初から放課後は訓練に当てているらしい。

まあ今回、僕は初めて参加したんだけど。

「っ、どうだった?」

「飲み込み早すぎ・・・強いて問題点を上げるとするなら、ターンの時はもう少し力を抜いて、スラスタで回るんじゃなく、体で回る感じにしたほうが良いかな」

一通りの機動を終えた一夏にアドバイスをしながらタオルを投げる。

一夏の成長ははつきり言って早すぎる。たった数回の反復でクイックターンを物にし始めているし、箒さんとオルコットさん曰く、乱数機動や高度な技術を要求される機動をほんの数日で覚えてしまったという。

「睦月がよく使ってるから、やってみようとおもったけど、結構難しいなコレ」

「インメルマンターンを直ぐにマスターした人の台詞とは思えませんわね」

「ISでの縮地も直ぐに応用してしまったしな」

オルコットさんと箒さんの言葉に僕は目を見開く。いや本当に何者なんだ一夏は。連邦の白い悪魔か何かか。

その内、フィンファンネル!とか叫び出すんじゃ無かろうか。うん、あり得る。

「ふう、取り敢えず今日はここまでか?」

「そうだな。時間もそろそろ危うい」

「では、今日はここまでですわね」

備え付けの時計を見ると、もう17時前だった。もうすぐアリーナの閉館時間だ。

あ、そういえばこの後やることあるんだった。

「ごめん、一夏先に戻るね?」

「おう、今日はありがとな」

片付けを始めた一夏に一言謝り、僕は更衣室へと急いだ。

「ふう、ただいまー」

「おかえり、睦月」

「おお、ふつくんおかえり〜」

用事を済ませ、部屋に戻ると簪と布仏さんが迎えてくれた。

何というか、慣れとは恐ろしいものでもう男女同室に違和感を感じることが無くなってしまった。いや、流石に無関心とかでは無いよ?」

「ん?何観てるの?」

荷物を置いて、ベッドに座る二人を見ると小型のテレビに何か流れていた。

この位置からだとな二人に隠れて画面が見えない。あれ、でもこの声どこかで・・・

「ああ、これ〜?かんちゃんが良い観るアニメだよ〜」

振り返って答えてくれた布仏さんの後ろから少し映像が見える。

こ、これは・・・!

「が、ガオガイガー・・・!」

間違いない、この合体シークエンス、長官の濃い顔付き・・・ガオガイガーだ。しかもファイナルの方。

「睦月、知ってるの?」

「ゴルディオンクラッシャーはロマンの塊」

「分かってくれると思ってた・・・！」

喜色満面の笑みを浮かべた簪と固く握手。ダンクーガとかあつたからまさかと思っただけどホントに有るとは。

ヘルアンドヘヴンってカッコいいよね。

「二人はホントにロボット好きだね〜」

「ロボットは好きだ、大好きだ！」

だってカッコいいじゃない？ボロボロのメカとかもうヤバイよね！

「シャワー浴びたら僕も観ていい？」

「当然・・・ってシャワー!？」

「おお、かんちゃんどうしたの〜？」

突然叫んだ簪が布仏さんの耳元で何かを話す。僕がシャワーを浴びることに何か問題でも有るんだろうか？

アリーナでそれなりに動いたから汗を流したいんだけど。

「あゝ、成る程ね〜」

「布仏さん？」

「ふつくんはシャワー浴びちゃっていいよ〜」

「ちよ・・・っ」

「かんちゃんは私が何とかしとくから〜」

「?わ、わかった。じゃあシャワー浴びてきちゃうね」

「はいはい、ごゆっくり〜」

妙に焦った様子の簪と、落ち着いた布仏さんに疑問を覚えながらも僕は着替えを持って、部屋にあるシャワー室へと入った。

ホントにどうしたんだろ？

「いやあ、かんちゃんがそう言うことを言うようになるわ、私もびつくりだよ〜」

「うう・・・」

睦月がシャワーを浴びている間、覗いていたガオガイガーを一時停止した後、私は本音にからかわれていた。

ついさつき、睦月がシャワーを浴びようとした理由を話した結果がこれである。

「シャワー終わった後のふつくんが『えっちい』から止めたいとわく、かんちゃん意外とムツツリ」

「実際に覗けないからそう言える・・・」

あれは本当に男性かと思えるほど色気があるのだ。女性としてなんか負けた気がしてしまう程に。

「そう聞いちやうと余計に覗たくなるよね」

「後悔しても知らないから・・・」

もうあれだ、どうにでもなつてしまえば良い。

諦めがついたところで、シャワー室の扉が開く。

「ふい、さっぱりした」

声変わったのか疑わしい高めの声が聞こえたので、本音と一緒に振り向いた瞬間、

「oh ジーザス」

「え、」

変な言葉を残して本音が倒れた。鼻から血を流して。

慌てて看病をしている間、「時の流れが見える・・・」とか「あれは彗星かな？」とか良くわからないうわ言を言っていたけど、目が覚めた本人は覚えていなかった。

#10 悪意の胎動

「疾っ……！」

強い踏み込みの後に放たれる一閃。刹那の狭間に軌跡が走る。構えを解いて、呼吸を整える。

誰もいない夜の剣道場の中、胴着を着た『織斑一夏』は木刀を置いて一人無造作に畳の上にその身を投げ出した。

「ふう……」

月明かりで辛うじて見える天井に手を伸ばす。その瞳には、かつて自分を救った『漆黒の鎧』、その背中が映っていた。

「まだ……届かない、か」

数年前、ドイツのモンドグロッソの会場から拐われた自分を助けた謎のIS。

朦朧とする意識の中に見えた、何人もの銃を持った人間を一人残らず鎮圧せしめた力。

その誰かを『守る』力に憧れ、あの日以来、今日に至るまで自己鍛練を欠いた事は無かった。

自分に出来ることを最大限にやろうと、剣道をやり、自分なりの戦いかたも身につけた。

白式を得ても慢心なんて無く、寧ろ更に鍛練に励むようになった。全ては、名も知らぬあのISに追い付く為に。

「……よしっ」

一頻りの休憩を終えた一夏は再び木刀をその手に構え、素振りを始めた。

『ヴラド、進捗はどよう？』

「問題ない、当日には確実に間に合う」

薄暗闇の中、モニター越しに二人の男女が話し合う。

『そう、それは良かった。『彼女』から盗んだデータは上手く使えたよ
うね』

「何、確かに機械だけでは俺には作ることは出来なかっただろうさ」

モニターの向こうにいる女性に向かって男は歪に顔を歪ませ、背後を指さす。

そこには、異様に腕の長いISが沈黙していた。

「だが、『生け贄』が居れば話しは別だ」

『あまり、やり過ぎないで頂戴。あくまで今回は様子見、『素材』だつて無限じゃないのだから』

「わかっているさ、ー『スコール』」

スコールと呼ばれた女性は静かに息を吐いて自らの髪を掻き上げる。万人を魅了するであろうその仕草も、この『狂った男』には通用しない。

『わかっているのなら構わないわ。・・・では、決行日を楽しみにしているわ、『三人目』』

通信を終えたモニターから光が消え、完璧な暗闇が訪れる。

その中で、ヴラドと呼ばれた男は鋭い犬歯を覗かせながら喉を震わせる。

「ククク・・・ああ、様子見なのだろう・・・？なら、それで死んだらそこまでのヤツだったって事だ・・・」

ー歪んだ男の笑いは止まらず、涌き出でる悪意は誰にも止められない。ー

「ギリギリセーフっ！」

「アウトだ馬鹿者」

オペレーションルームに入った僕に出席簿の鋭い一撃が直撃する。

うぐう．．．痛い。

「まあまあ、織斑先生、まだ試合は始まってませんし．．．」

頭を押さええる僕を見て、山田先生が苦笑いを浮かべながら織斑先生を諫める。

今日はクラス代表対抗戦の開催日だ。会場であるアリーナは既に満員御礼状態で、座れるところなんてもう見当たらない。

まあ、それもその筈。第一試合は我が一年一組のクラス代表である一夏対、二組のクラス代表をもぎ取った鳳鈴音さんなのである。

．．．いつぞやの予想が当たるとは思わなかったよホント。

「はあ．．．それで、どうして遅れたんだ。ちゃんとした理由が有るんだろうな？」

「あー．．．アニメを観てたら寝れなくなっつ．．．!」

途中まで言いかけたところで再び出席簿アタック。ふおお．．．頭蓋骨があ．．．

あ、涙出てきた。

いやだって仕方ないじゃない、グレンラガンなんだよ？簪が劇場版含めて全部持ってたからついつい観ちゃったんだよ．．．

「後で反省文を書いてもらうぞ．．．そろそろ始まる。適当に座っておけ」

「はあい．．．」

頭を押さえながら先に来ていたオルコットさんと箒さんの隣に座る。

二人とも僕の頭頂部を見て苦笑いを浮かべる。うん、鏡見なくてもわかるよ。大きなたんこぶできちやってるのがね!

「扶桑さん、大丈夫．．．ではなさそうですわね」

「原因は確かに扶桑だが．．．痛ましいな」

「氷嚢をようきゅーするー」

暫くすると痛みも引いたので、アリーナの様子を見る。あと数分で第一試合という事で、観客席の騒がしきは最高潮に達している。

そんな中、ピットから二機のISが飛翔してきた。一夏の白式と、

鳳さんの専用機『甲龍（しえんろん）』だ。決して願いを叶える方アレではない。

白式の白に対して、甲龍は赤銅色のカラーリングだ。

非固定武装はトゲのついた球体だ。ボルトガンダムよろしく投げののだろうか。ガイアクラッシュヤーしそう。

「何か言い合っているようだな」

「気になりますけど、それは後ですわ」

オルコットさんの言葉と同じくして試合開始のカウントダウンが始まる。

さて、一夏の実力、見せてもらおうか。

【battle start】

純白の騎士と赤銅の龍が、激突した。

IS学園から遙かに離れた港に、一台の大型トラックが停車していた。

その運転席で、血のような色合いの赤髪の男が笑みを浮かべていた。

「よう、スコール。こっちは準備万端、何時でもやれるぜ」

『何機行かせる気かしら？ヴラド』

「取り敢えず四機だな。所詮、ブリキの玩具だ。一機じゃテストにもなんねえだろうさ」

秘匿回線に対応した、改造された携帯電話を片手にヴラドは端末を操作する。

『了解したわ。タイミングは此方で指示する』

「了解（ヤー）。さっさとしてくれよ？早く試したいんだ」

『・・・善処するわ』

そう言葉を残して切られた通信に一層笑みを深くしてヴラドは携

帯電話を懐にしまおう。

目の前の曇り空の海を見つめてヴラドは眩く。

「さて、天才様の『模造品』、どこまで通用するかねえ……ククク」

#11 乱入者

ギインツォー!

鋭い音を鳴らしながら、白式の刀と甲龍の持つ青龍刀が激しく火花を散らす。

やはり、純粋な近接戦闘に関しては代表候補生に匹敵するレベルまで一夏は至っているみたいだ。

「オルコットさんはどうみる?」

「距離を離さない、これが肝になるでしょう。鳳さんはまだ余力を残していますでしょう!」

白式の弱点は遠距離に対応する武装が無い、ということだ。無いというよりも装備が出来ない。

それは白式の持つ単一仕様能力、「零落白夜」による。

零落白夜の能力はエネルギーシールドを無視して敵IS本体に攻撃を加える破格の能力だ。

当然ながらデメリットもあり、発動中は常時シールドゲージを消費するということと、もう一つ。

能力の演算処理に拡張領域の殆どを使ってしまうという事。

これが原因で、白式には今持っている刀、雪片式型しか装備出来ないのだ。

「あとは、どれだけ早く決められるかだね」

「燃費が最悪だからな、白式は・・・」

故に一夏の基本的な戦いかたは超短期決戦。白式の速度と一夏の技術を持ってして相手を倒す他ないのだ。

幾度かの打ち合いの後、鳳さんが距離を取り始める。

当然、一夏は距離を詰めようとするが・・・

「何だ、アレは!?!」

「見えない砲撃・・・第三世代兵器かな」

「第三世代型 空間圧作用兵器・・・衝撃砲ですわね」

甲龍の非固定武装から放たれる不可視の砲弾にやむなく白式が距離を離して回避運動を取る。

接近しながらアレを避けるのは至難の技だろう。

「回避方法は・・・空間圧で生じる音かな」

「そうですね。視覚に頼っていたら確実に直撃しますわ」

何とも厄介な武装だ。目で相手の動きを観察しつつ耳で衝撃砲の音を捉え回避しなければならぬ。

一夏のポテンシャルでどこまで行けるか・・・

そう思ったところで変化が起こった。

というか一夏がやってのけた。

「「・・・は？」」

「避けにくいのであれば切り払えばいい、か。なかなかどうして、やるものだな」

連射された五発の衝撃弾を一夏はあろうことか切り払ったのだ。それも連続で。

鳳さんが驚きながらも更に衝撃砲を放つが、そのことごとくを雪片式型で切り裂いた。

「ねえ、箒さん」

「・・・なんだ、睦月」

「一夏って、ホントに織斑先生の弟なんだね・・・」

「ああ、そうだな。弟だな・・・」

いやあ、やることが人外じみてきてるよ一夏。

勝負をかけるのか白式の動きが変わる。何と、衝撃砲の雨の中を突っ切るように直進し始めたのだ。

しかも自分に当たりそうな弾は全部切り払って。

「これは、どうなるかな」

「零落白夜を回避されないスピードで当てるしか無いだろうな。相手は代表候補生だ、当然アレには触れたくないだろう」

「まあ、スピードに関しては切り札がありますから、心配はないでしょう」

「切り札？」

オルコットさんの言葉に疑問を持った僕の目の前で、白式が爆発的な加速で甲龍との距離を詰めた。

あれは、まさか・・・

「瞬時加速（イグニッションブースト）!？」

機体のブースターの向きを一方方向に集中させて加速する瞬時加速はそれなり以上の技量が必要となる技だ。ブースターの点火のタイミング、停止の際のエネルギーコントロール等、とてもじゃないけど、ISに触れて数週間の人間が出来る芸当ではない。

「あれこそが切り札ですわ。燃費に問題があるのであまり多用は出来ないのが難点ですが」

「確かに、切り札だね」

鳳さんもまさか使えるとは思っていなかったのだろう、零落白夜を展開した雪片を辛うじて二振りの青龍刀で何とか防いでいる状態だ。

「これは、勝負ありかな？」

青龍刀を弾き、がら空きになった胴に零落白夜が振られる。

その時だった。

「上空より熱源!？」

「何!？」

山田先生の悲鳴にも似た叫びが聞こえるのと同時に、ガラスが割れるような音がした。

直後、爆発音が響き、アリーナ内を土煙が覆った。

「山田先生!？」

「っ、システムハッキングを受けてます! シェルターロック、レベル4! 此方からのアクセスを一切受け付けません!」

「ちっ・・・通信は?」

「何とか生きてます!」

「なら外部と連絡、シェルターの解除を優先!」

「了解!」

織斑先生と山田先生の会話を聞きながら僕は椅子から立ち上がる。土煙が晴れたその先にいる存在に目を奪われる。

黒い外装の全身装甲。ケーブルが露出した異様に長い腕、そして六つの複眼を持つ頭部。

「何・・・あれ・・・」

ISと呼ぶにはあまりにも歪なそれは、複眼を赤く光らせ、一夏達へとその腕を構えた。

「くそっ、一体なんだ!？」

突如、アリーナのバリアを破って現れた異形のISに一夏と鈴音は対峙していた。

所属と目的を聴いても沈黙で返したそのISはおもむろに両腕を一夏達へと向けた。

「散開っ!」

嫌な予感がした鈴音の言葉に弾けるように白式を動かした一瞬後、巨大なエネルギー弾が元居た場所を高熱を残して過ぎ去る。

「一夏、大丈夫!？」

「問題ない。．．．あれは喰らったらひとたまりも無いな」

「下手に直撃したら一発で絶対防御発動までいきそうね．．．」

苦虫を噛み潰したような顔で鈴音が敵ISを睨み付ける。

交渉の余地もなく攻撃してきたのだ。もはやつべこべ言うてはいられないだろう。

「一夏、アンタはピットに下がらなさい!」

「冗談言うなよ鈴」

鈴音にそう返して一夏は通常の刀に戻した雪片式型を構える。

「お前を置いて逃げるほど、俺は落ちちやいない。それに!」

再度飛来するエネルギー弾を回避して、鈴音を見る。

「逃げようにも、簡単にはいかねえだろ。だったら、二人で倒した方が早いだろ」

言うが早いか、一夏は敵ISへと向かい加速する。

応戦するように両腕を振り回しながら敵ISはエネルギー弾を乱射しはじめる。

「ああ、もう馬鹿!突っ込むなあ!」

『!二人とも、聞こえるか?』

鈴音が一夏の援護に回り始めた時、白式と甲龍が通信を拾った。

「千冬姉か！そっちは大丈夫なのか」

『何とかな：：現在、アリーナのシエルターが何者かによって全てロックされ生徒が避難できない状態だ』

「なっ……！」

「全てロックされている……って事は」

『ああ、そちらに向かっている教師達もアリーナの外から入れない。……二、三年の精鋭達で今解除を試みている』

弾幕の嵐を避けながら千冬から伝えられる情報を整理する。

現状、このアリーナは陸の孤島と化している。

シエルターのロックも恐らくは目の前のISの仕業だろう。

「つまりは、足止めをしろって事だな千冬姉」

『……そうなる。出来るか？織斑、鳳』

「……だってよ、鈴」

一夏のニヤケた顔をハイパーセンサー越しに捉えた鈴音は呆れ混じりの溜め息を吐いて青龍刀を構える。

「こちら凰鈴音、了解しました！足止めでも何でもやりますよ！」

「織斑先生」

「……何だ扶桑、それにオルコット」

「私達も出撃させて下さい。ここからなら何とかピットを経由してアリーナ内に向かえます」

眉根を寄せて一夏達の戦いを見る織斑先生に僕とオルコットさんで出撃を進言する。

どうにも、嫌な予感が拭えないのだ。

「扶桑、理由を言ってみろ」

「勘です」

「勘だと・・・？」

即答した僕に厳しい眼差しのまま織斑先生がこちらを向く。

まあ確かにふざけた事を言ってるように思えるだろう。言った本人が一番そう感じてる。

でも無視できないのだ。こういうときの悪い予感というのは良く当たる。

「・・・はあ、良いだろう。この緊急時だ、戦力は多いに越したことはない」

「ありがとうございます、織斑先生」

しばしの沈黙の後、織斑先生の許可が降りたので感謝の意を述べてから僕はオルコットさんと一緒にオペレーションルームを出て駆け出した。

ー行事の邪魔をしてくれたんだ、新武装のテストの被検体にでもなつてもらおうか・・・

「扶桑さん、何か怖いですわ・・・」

「ソナコトナイヨー、コワクナイヨー」

#12 駆ける黒兎

「ちいっ！」

エネルギー弾が機体を掠めてシールドエネルギーを削る。

足止めをするとは言ったものの、敵の貯蔵エネルギーは無尽蔵なのかと疑いたくなるほど弾幕の嵐は止まない。

一夏の駆る白式のシールドゲージも、鈴音との戦闘からの連戦により消耗が激しく、零落白夜が使えてもあと一度が限界だろう。

「鈴！そっちの残りエネルギーは！」

「そっちよりちよっとマシな位しか無いわ！」

弾幕を回避しながら返ってくる鈴音の答えに一夏は焦る心を何とか沈める。

ここで焦って突撃したところで、あの密度の弾幕に押し潰されて御仕舞いだ。ともすれば死ぬ可能性だってある。

「どこかに隙はある筈だ……！」

エネルギー弾の雨を掻い潜りながら一夏は白式のハイパーセンサーを使って異形のISの挙動の隙を探す。

腕を振る速度、弾速、スラスタの吹かし方、回避の際の挙動の長さ……。

相手の全てを見通さんと、白式から送られる情報を全力で処理する。

「……あった」

「何がよ」

「ヤツの隙を見つけた！」

そして止まぬエネルギー弾の雨の中、一夏は敵の見せた僅かな隙を見いだす。

ほんの一瞬、回転機動を行うその時、敵はエネルギー弾を放たなかった。

その事を鈴音に伝えると、今までの焦りを含んだ表情から一転、獰猛な笑みへと変わった。

「でかしたわ一夏！」

「褒めるんならコイツをぶっ倒してからしてくれ！行くぞ！」
「了解よ！」

白式の背後から放たれる衝撃砲『龍砲』の苛烈とも言える砲撃と共に、弾幕を再展開せんと駆体を動かしたISの僅かな隙へと一夏は瞬時加速による爆発音な速度で迫る。

(捉えたっ・・・ブレードレンジ！)

懐に入った瞬間、雪片式型の刀身が展開。零落白夜の蒼い刃がその姿を顕す。

敵ISが回避しようとするが時既に遅し。もはや逃れる術は無い。

「これで・・・終わりだ！」

防御無視の必殺の一撃が異形のISの身体を逆袈裟に切り裂く。

一度ビクンと大きく痙攣して、敵ISは機能を停止。地面へと落下し大きなクレーターを作り上げた。

「勝った・・・のか？」

「っ、一夏、直上！」

眩きに被さるように放たれた鈴音の言葉に一夏は上を見上げる。

そこには先程倒したばかりのISと同型の機体が三体、此方を睥睨していた。

「おいおい、マジかよ・・・」

「かなりキツイわよ、これ」

並び立った一夏と鈴音は揃って苦笑いを浮かべる。

白式も甲龍も、先の戦闘でシールドエネルギーは枯渇寸前だ。

白式に至っては零落白夜を使ったこともあり、最早まともな機動が出来るかさえ怪しい。

「千冬姉、ちよつとこれはヤバそうだ」

『・・・ああ、こちらでも確認した。何、安心しろ』

「え？」

千冬からの妙な返しに疑問符を浮かべた二人の目の前で、突然三機の敵ISの内の一機が、桃色の閃光に飲み込まれた。

続けざまにもう一機が青い光弾に背中を撃たれ、ブースターがイカれたのか、墜落する。

『ー救援が間に合ったからな』

「いやあ、ドンピシャだよ。狙えば当たるもんだねえ」

「一夏さん、ご無事ですか!？」

「睦月、セシリアー!」

一夏が放たれた射撃の元を向くと、そこには長大な銃剣と白いシールドを携えたヘイズル改と、スターライトmkⅢを構えたブルーティアーズが立っていた。

「初手で二体落としたのは重畳だね」

白煙を吐く「ロング・ブレード・ライフル」を持ち上げ隣に立つオルコットさんに話しかける。

「いやあ、試しにフルチャージで撃つたらあの威力。普通のライフルとはパワーがダンチだね。」

ピットに僕らが到着すると、三機の『無人』ISが現れたのはほぼ同時だった。

即座に僕とオルコットさんはISを展開、狙撃を行って見事に戦力を削ることに成功した。

「扶桑さんのその新武装、威力過剰ではありませんの?」

「あれはフルチャージだからね。通常の射撃だったらスターライトに少し劣るよ」

「十分、ハイスペックですわ・・・」

東さんが作ったんだ、マトモな性能な筈がない。

さて、お喋りはここまでにしよう。もう一つ、試したい武装があるしね。

「オルコットさんは、一夏と凰さんをピットまで護衛して。僕はアレを片付ける」

「了解ですわ。ご無理はなさらぬよう、お願いしますわ」

「はは、善処するよ」

黒いISのターゲットが此方になったのを確認して、僕とオルコツトさんは飛翔した。

「つと、高威力のエネルギー弾か・・・」

異様に長い腕から放たれた攻撃を避けながら接近する。

成程、確かに当たればひとたまりも無いね。でも、

「当たらなければどうと言うことは無い!」

肩と脚部のスラスタを細かく動かし、連射されるエネルギー弾を回避する。

さて、早速コレを使おうか!

「牽制程度には使えるかなっ!」

左腕のシールドブースターを構える。距離も十分、下手なビーム数撃ちや当たる!

白いシールドの上部に配置された無数の穴からビームが雨のように発射される。

「改良型シールドブースターの拡散ビーム砲、如何かな」

攻撃を止め、黒いISを見ると装甲の所々が焼け焦げていた。

やっぱり、威力は低いか。まあ言った通り、牽制には使えそうだ。

なら、お次は・・・

「ロング・ブレード・ライフル、発射口ロック。ヒートブレード加熱開始」

右手に持ったロング・ブレード・ライフル下部にある刃が加熱によって赤く光り始める。

エネルギー弾を回避しながら左手のライフルと襟元のグレネードでダメージを与えつつ加熱状況を確認。やっぱり試作品だからか、使用可能になるまで少し時間がかかるか。

「・・・加熱完了。ロング・ヒート・ブレード、使用可能」

「この瞬間を待ってたんだ!」

ヘイズルから告げらる合図を聞いてメインブースターをフルス

ロツトルで起動、黒いISへと向かって最高速度で突っ込む。

当然、迎撃のエネルギー弾が乱射されるけど、左腕のシールドから拡散ビームを発射し打ち消す。

「ブレードレンジまで残り六メートル・・・四、三、二、一」

「墮ちろ、カトンボ!!」

黒いISの真正面、ヘイズルのカウントダウンに合わせてタイミング良く刃を横薙ぎに振るう。

灼熱の刃は黒いISの防御体勢をとったその腕ごと溶断する。

「はあああああつ!!」

斬り、抜けるー！ー！

ロング・ヒート・ブレードを振り切った勢いのままに突き抜け、数メートル地面を抉りながらも着地する。

「任務、完了」

背後の爆発を最後に、アリーナに沈黙が落ちる。

ー！こうして、クラス代表対抗戦の謎の乱入事件は一先ずの終結を迎えた。

#13 マガイモノ

「やつほく、一夏く」

「おお、睦月か」

クラス代表対抗戦での謎のISの乱入があったその日の夕方、僕は保健室で休む一夏のもとを訪れた。

馴れない連戦に疲労が限界だったのだろう、僕が最後のISを倒したのを見て直ぐに気を失っちゃったらしい。

「身体の方は大丈夫？」

「ああ、ただの疲労だからな。取り敢えず今日はここで寝ることになりそうだ」

「そかそか、箒さんやオルコットさんが心配してたから、良かったよ」

僕がそう言うと、一夏はばつが悪そうに頭を掻いた。

「やっぱ、心配かけちゃまったか・・・」

「でも格好よかったよ一夏。戦闘記録見たけれど、かなり動いてたじゃない」

一通りの処理が終わった後、オペレーションルームにある記録映像を見たけど、ホントにIS初心者なのかと疑いたくなるほどの高機動だった。

今後の成長によつてはそれこそ、織斑先生に匹敵する強さになると思えた。

「いや、でも後から来た三機を相手に出来なかつたしな・・・」

「相手に出来たら最早一夏人間やめてるよね・・・」

あんなギリギリの状態で三機相手にして生還するとかどこのスペシャルで二千回な模擬戦さんなのかと。

「あ、そういえばさ聞きたいことがあつたんだ」

「ん？何をだ？」

「うちのクラスの弓槻さんが言ってたけど、凰さんと喧嘩してるって」先週からある噂話らしいけど、ちよつと気になって聞いてみた。

何か告白がどうか言つてたような気がする。

僕の問いに一夏はああ、と一拍置いて答えてくれた。

「喧嘩ってか、俺も原因良くわかってないんだよなあ。昔の約束でさ、大きくなったら毎日酢豚を奢ってくれるって話があつてな」

「・・・それって」

もしかしくなくても奢るじゃなくて作るって話じゃないだろうか。

毎日酢豚を作る・・・日本らしく例えれば、毎日味噌汁を作る、という感じに捉えれば。

明らかに告白ですね、本当にありがとうございます。

「一夏、それ多分盛大に勘違いしてる・・・」

「えっ、そうなのか？」

いやまあ昔の話らしいからうろ覚えなのは仕方ないだろうけど。

盛大な勘違いについて唸る一夏にさてどうフォロワーしたものと考える。

これ、僕が答え言っちゃマズイしなあ・・・。

「あー、一夏」

「睦月、俺はいったい何を勘違いしてるんだ？」

「ええとだね、その鳳さんの言葉を日本風に捉えたらどうかな？」

「日本風に？・・・ううむ」

悩み始めた一夏に思わず苦笑いしてしまう。これは時間かかるかなあ？

IS学園地下。

ごく限られた者しか入ることが許されない場所に、山田真耶と織斑千冬は居た。

「ーそれで、何か分かったか？ 『真耶』」

「オルコットさんが撃ち落とした機体がコアが無事でしたので、解析

さえ済めば・・・」

強化ガラス越しに横たわる異様に腕の長いＩＳを見詰めながらの千冬の問いに、真耶はキーボードを叩く指を休めずに答える。

まともに調査に使えるのはセシリアが撃墜したこの一機のみで、残りの三機は零落白夜による一撃と、ロング・ブレード・ライフルの過剰火力によってコアが破損してしまっていたのだ。

「結果が出ました・・・嘘、何ですかこれ」

「どうした？」

真耶が上げた驚愕と、恐怖が混ざった声に千冬が訊ねる。

仮にも国家代表候補にまで登り詰めた彼女が恐怖を抱く程のＩＳなのかと、疑問に思った千冬だが、モニターに映し出された結果を見て目を見開く。

「ー何だこれは」

「織斑先生・・・」

「何なんだ、この『マガイモノ』は!!」

白くなるほど手を握り締めたまま、千冬は冷酷に結果を示すモニターを睨み付ける。

そこには、元来あり得てはならない文字が羅列していた。

【調査結果報告】

ＩＳ名 登録無し

所属 不明

コアナンバー error

人体反応 頭部に脳のみを感知、肉体の存在を確認できず。

コアに異常あり。通常ＩＳコアより逸脱。自己進化機能、及び拡張領域が存在しません。」

「馬鹿げている・・・ＩＳの紛い物、それに人間の脳のみだと・・・？ふざけているのか・・・!」

壁だろうと何だろうと殴り付けたくなる衝動を僅かな理性で押さえつける。

真耶が不安げな顔で見てくるが、その真耶でさえあまりの事実には顔色が悪くなっている。

「・・・至急、この事を学園長に知らせよう。これは、あまりにも大きすぎる問題だ」

「了解しました・・・」

幾分か冷静になった千冬からの指示に真耶もどうにか落ち着きを取り戻しキーボードを慌ただしく叩き始める。

物言わぬ軀（むくろ）のISを見つめ、千冬はこれから先起こるであろう難事を想像して嘆息した。

（ともすれば、また世界が変わるか・・・それも悪い方に）

「結果は上々だな。満足頂けたかい？ 『お偉いさん』にはよ」

『一機鹵獲されたけれど、上はそれなり以上の性能はあると認めたわ』

「そうかい、それは良かった」

薄暗い闇の中、ヴラドはくつくつと喉を鳴らす。自分の造り上げた『Imitation Stratos』、その力が確かなものと認められたのだ。

画面の向こうにいるスコールが歪んだ男の笑みを見て溜め息を吐く。

『私達はこれから別の任務に行くわ。貴方はどうする？』

『そうだな・・・素材を集めるいい機会だ。同行しよう』

『分かったわ。詳細は追って伝える、それじゃ』

「ああ、またな」

通信が切れ、静かになった部屋から出ようと、ヴラドは歩き出す。

「さて、久々に身体を動かすとするか・・・」

重くのし掛かるような殺意を纏いながらも、軽快な、これから散歩にでも向かうような気軽さで部屋のドアを開ける。

「カカツ、面白くなってきたな・・・」
　　獰猛な笑みを張り付け、歪んだ男は進み出す。

――時代を変える音は、着実に近付いて来ている。

ダブル・ライアー

#01 二人の転入生

「せえあー！」

「甘いっ！」

空中でヘイズルのロング・ブレード・ライフルと白式の雪片がぶつかり合い、激しい火花を散らす。

片や武骨な全身装甲、片や騎士を彷彿とさせる部分装甲。

野次馬感覚で見に来ていた生徒たちはその様子に目を奪われていた。

夕方の夕方のアリーナで繰り広げられる『訓練』は正に正式試合と言われても納得してしまうような激しさを持っていた。

「一夏、動きが直線的過ぎるよ！もつと力を抜いて！」

「こう、かつ！」

言いながら放たれる白式の斬撃をシールドブースターでいなし、ロング・ヒート・ブレードで逆に一撃を与えるヘイズル。

「その調子、絡め手も使わないと勝てる試合も勝てないからねっ」

「了解だ！」

何度も火花を散らしながら、訓練と称した実戦は激しさを増し、アリーナの閉館時間ギリギリまでその音が止むことは無かった……。

「転入生？」

「そうそう、それも二人もだよー！」

僕と一夏がその話を聞いたのはクラス代表対抗戦で起きた事件の後、週明けの月曜日だった。

転入生か……また何処かの代表候補生なのだろうか。

「そういえば一夏は昨日部屋移動したんだよね？」

「ああ、そうだな。急に言うからびっくりしたぜ。まあ、荷物少ないか

「良かったんだけど」

「それと関係あるんじゃない?」

昨日の特訓の後、更衣室から出た僕と一夏に山田先生が「織斑君、申し訳ないのですが、お部屋を移動する事になりました」とホントに申し訳なさそうに言つて一夏が了承、昨日の内に部屋を移動したのだ。

・・・あれ、何故僕にその話が来なかったんだらう?

「んーでも、入ってくるのは女子だろ? だったら俺移動する必要ないと思うんだけど」

「なるほど、箒さんと一緒の部屋が良いと」

ガタガタガタツ!

おお、まさかクラス中の皆が立ち上がるとは思わなかった・・・つて、オルコツトさんまで立ってるし。

皆一夏の事気にしてるんだなあ。

「え、あ、いや睦月、そういうことじゃなくてな!」

「はは、そんな慌てなくてもいいじゃない?」

あたふたする一夏を見ながらにやけ顔で返す。

一夏つて意外とからかいがいがあつて楽しいんだよねえ。

「おはよう一夏、睦月。・・・何だこの空気?」

妙に沈黙するクラスに話題の当人である箒さんが現れ、首をかしげる。

「あー、いや、何でもないよーな、あるよーな・・・?」

「煮え切らない答えだな? どうかしたのか」

いふがしげに詰め寄る箒さんに一夏が苦笑しながらごまかす。

視線で助けを求められたけど取り敢えず爽やかな笑顔を返して援護しない旨を伝えると、一夏はがつくりと肩を落とした。

たじろぐ一夏と箒さんの問答は、織斑先生が教室に入るまで続いた。

「ーーさて、今日はこのクラスに転入生が新たに加わる。入れ」

朝のホームルームも終わりという頃、織斑先生の言葉に教室のドアが開く。

入ってきたのは金髪の『男子制服』を着た人と・・・

「クロエ・・・？」

銀髪の、小柄な子だった。

いや、クロエは眼帯なんてしてないし、つり目じゃないし、何か軍人めいた雰囲気なんて醸し出さない。

むしろ真逆で優しい穏やかな空気感をもった子だ。でも、似てるなあ。

・・・ん？今更ながらに『男子制服』？

「二人とも、自己紹介しろ」

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。至らない所が多いと思いますが、仲良くしていきたいと思います。よろしくお願いします」

一歩出てそう自己紹介して微笑んだ金髪の『男子』に教室がまるでさっきの出来事の焼き増しのように静かになる。

あ、これヤバイな。振り向いた一夏とアイコンタクト。即座に耳を塞ぐ。

さあ来い！

「！！！！」

「っっ！！」

直後に上がった女子生徒たちの歓声が頭に響く。ふおお・・・耳を塞いだ意味がまるで無かった・・・。

見ると一夏も身体を震わせていた。

「三人目、三人目の男性IS操縦者！」

「睦月と同じ守ってあげたくなる系の！」

「ふ、ふふ・・・掛け算が捗る・・・」

果たして僕は守ってあげたくなる系男子なのだろうか？後、最後の人が何か不吉なんですけど・・・。

「静かにしろ」

中々収まらない声に業を煮やした織斑先生の一声に一瞬で教室が静まり返る。

恐るべし、織斑先生のカリスマ性。

「ボーデヴィツヒ、挨拶しろ」

「はい、教官」

「ここでは教官ではなく先生と呼べ」

「はい、教官先生」

「いやどつちなのだ!!・・・あ」

余りに素っ頓狂な会話に思わず突っ込みを入れてしまった・・・っ！

ボーデヴィツヒと呼ばれた少女と視線が合うこと数秒、何故か無表情でサムズアップされた。

「ドイツより来た、ラウラ・ボーデヴィツヒだ・・・よろしく頼む」

それだけ言う少女、ボーデヴィツヒさんは押し黙ったかと思いきや、一夏をじっと見詰め始めた。

しかも良く見ると一夏もボーデヴィツヒさんを見て固まっている。

「まさか・・・本当に居るとはな、『一夏』」

「本当に、『ラウラ』なのか？」

名前で呼び合う二人の空気に、二名程妙な雰囲気を出し始めた。

・・・やれやれ、一夏はホントにモテるなあ。

詳細について後で聞くこととして、僕は阿修羅の如きオーラを出し始めた二人へのフォローを考え始めた。

#02 巻き添え模擬戦

「ー伝達事項は以上だ。これでホームルームを終わる。一時限目は二組と合同のIS実習だ、遅れるなよ」

何ともインパクトの強い二人の転入生の自己紹介の後、二、三点話した織斑先生の言葉に僕はげんなりする。

アリーナの更衣室って遠いんだよねえ・・・

織斑先生と山田先生が教室から出ていくのと同時に僕と一夏は立ち上がる。

「一夏、急ごう」

「ああ、一時限目まであと十分もない。朝からあの出席簿はくらいたくないぜ」

「だよねえ、つとデユノア君」

「僕？」

教室を出掛かったところでデユノア君を呼ぶ。彼は更衣室が何処にあるとかまだ解らないだろう。

「更衣室の場所、解らないでしょ？案内するよ」

「歩いて行ってる暇はなさそうだ。走るぞ」

「そう言うわけだから。さ、行くよっ」

走り出した一夏を追うようにデユノア君の手を掴み廊下を駆け出す。

・・・男子にしては手、柔らかすぎない？

いや、人の事言えないけどさ。

「え、ええっ？」

驚くデユノア君の声を聞きながら廊下を突き当たりまで猛ダッシュ。

マズイ、人が出てきた！前はアリーナに行こうとしたら取り囲まれて結局遅刻したから、上手く抜けないと・・・！！

「一夏ー！」

「デユノアとラウラの情報はもう回ってる筈だ、取り囲まれる前に突破するぞ！」

「了解っ！」

こちらを視認した女子生徒が声を掛けてくるが、急いでいる事を走りながら伝えて切り抜ける。

っと、階段か。

一夏は先に階段を『飛び降りて』いる。

普段なら僕も一夏同様、飛び降りてるんだけど、デユノア君に無理させるワケにもいかないし。

かといって手を繋ぎながらだと駆け降りづらい。

なら、

「ちよつとごめんよ〜」

「え？うわあっ!？」

一度立ち止まり、デユノア君を抱える。俗に言うお姫様抱っこだ。いや、男同士だから王子様抱っこなのかな？

そしてそのまま階段を一階まで駆け降りる。

「喋ると舌噛むから気を付けてね」

「降りきってから言わないで欲しかったかな・・・」

一階に着き、デユノア君を降ろすと困り顔でそう言われた。顔赤いけど、やっぱり急にやりすぎたかな？

再度デユノア君の手を掴み廊下に出ると、一夏が待っていてくれた。

「さ、後は道なりに真っ直ぐだ。行こうぜ」

「だね、着替えなきゃいけないし」

一夏の言葉に頷いてもう一度僕達は駆け出した。

何とか余裕を持ってアリーナの更衣室に辿り着いた僕達はそそくさと着替え始める。

余裕があると言っても数分だからね、急ぐに越したことはない。

「睦月、あとのくらいだ？」

「三分は余裕あるよ」

上着に手をかけ、パパッと脱いでハンガーに掛ける。

僕は下にIS用のスーツ（はつきりいって水着に近い）を着てるから直ぐに着替え終わる。

「デュノア君も早く着替えた方が・・・はやっ」

「先に着ちやつてたからね・・・あはは」

「さつきから顔赤いけど、大丈夫？」

「だ、大丈夫！何でもないよ！」

「そう？」

あたふたと胸の前で手を振って返すデュノア君の様子にちよつとした違和感を感じつつも、服を掛けたハンガーをロッカーへと入れ、三人揃ってアリーナ内へと進んだ。

「今からISを使った実習を行う。まずはISがどういった物か、今一度目で見てもらおう」

整列した僕ら生徒全員に聞こえるような声を張り上げた織斑先生の言葉に皆一様にざわつく。

クラス代表対抗戦や普段の一夏の特訓で見慣れているとはいえ、これから実際に動かすのだ、再確認の意味も含めてやるのだろう。

「そうだな・・・オルコット、嵐。前に出ろ」

呼ばれた二人が皆の前に立つ。代表候補生同士の模擬戦でもするのか？

そう思っていたら、ヘイズルのセンサーが上空に反応を掴んだ。

咄嗟に上を見ると、山田先生がISを纏って『落ちてきていた』。

「どいてくださいああい!!」

うわお、明らかにバランス失ってるよ・・・やっぱ職業柄、あんまりIS使う機会無いんだろうか。

そんなのんきな事を考えつつ、ヘイズルを即時展開。シールドブースター等は外してある。

よし、皆離れてるね。

ブースターを起動し、直上の山田先生の元へ飛ぶ。

「よいしょっ！」

「ふええ!?」

伸ばされた山田先生の腕を掴んで抱き寄せ、そのままスラスターを逆噴射して落下のスピードを和らげて空中で停止する。

危ない危ない、あと少し遅かったらアリーナにクレーターが出来たよ。

「大丈夫ですか？山田先生」

「あ、ありがとうございます、扶桑君・・・バランスを崩してしまつて」

「ドンマイですよ、先生」

気落ちする山田先生を励ましながら、地面に降り立つと拍手が巻き起こつた。いや、何故に？

山田先生を下ろしてヘイズルを待機形態にする。いやあ、我ながらナイスな動きしたよ。

「よくやった、扶桑。・・・さて、アクシデントがあつが、今からオルコットと凰には山田先生と模擬戦をしてもらう」

そこまで言つて織斑先生は僕を見た。・・・まさか。

僕の視線の意味に気付いた織斑先生は悪戯っ子のような笑みを一瞬だけ浮かべて口を開いた。

「ついでだ、扶桑。お前も山田先生とやってみろ」

「拒否権を行使しますっ！」

「却下だ」

にべもなく却下され、僕は二人の後に山田先生と戦うことになった。

・・・一夏、同情じみた視線は止めて。余計悲しくなるから。

ーで。

「運命からは逃れられなかったよ……」

ヘイズルを完全武装状態で展開して空中で静止する。

オルコットさんと凰さんは開幕三分程で沈みました。いや、途中で口喧嘩始めちゃうんだもん、そうなりますよね。というかそれで良いのか代表候補生。

というか、

「二人がかりでどうしようも無かった人を単機でどうしろと!？」

「山田先生、本気でやって構いません」

「織斑先生の鬼!!」

スパルタか、巨人○星ですか!?二人相手にして余裕の表情だった人を本気で相手とか親指一つでコンクリートの壁に穴開けろって言うてるようなものだよ!

……ああ、もう。やるからには切り替えないと。

「全力で行きます」

「えと、よろしくお願いしますね?」

両手にビームライフルとブルパップマシンガンをそれぞれ構える。

対して山田先生の第二世代型IS、ラファール・リヴァイヴはマシンガンとグレネードを。

相手は元国家代表候補、油断なんて出きるはずがない。

「それでは、始めっ!」

「二ーっ!」

織斑先生の合図とともに僕と山田先生は動き出した。

さて、どこまでやれるか……。

#03 歩行演習

【左腕、残弾 四十パーセント。シールドエネルギー残数 三百】
「やっぱり、キツいってこれ・・・っ！」

模擬戦開始から四分が経過した。やはりブランクがあっても元代表候補、当ててくる。

七百あったシールドエネルギーもあっさりここまで削られた。

実戦経験があつたとしても、そこには経験の長さの差がある。

経験の大半を無人機を相手にしている僕にとって、対人経験豊富な山田先生の動きは読みにくい。

「ここに来て自分の癖が分かるとはねっ！」

マシンガンの弾をシールドブースターで防ぎながら右手のビームライフルで反撃する。

相手がフライルやバイザック等の無人機なら動きの解析は容易だった。束さん特製のAIと言つても隙は見付けやすかった。

寧ろ慣れすぎてしまったんだろう。

だからこそ、

「やり辛い・・・」

柔軟性の高い山田先生の戦闘方に合わせにくい。

決めるなら一気呵成に、山田先生が此方に合わせる前に終わらせるー！

「これはどうですかね！」

「っ！スモーク!?!」

多目的ランチャーからスモークグレネードを発射し、空中で炸裂させる。

ISのハイパーセンサーをある程度誤魔化す事が出来る代物だ。

即座にロング・ブレード・ユニットを右手のビームライフルに装着、砲身を展開して煙幕の中にいるラファール・リヴァイヴに向かって照準を合わせる。

【ロックオン】

「当たれ!!」

ロング・ブレード・ライフルの砲身から桜色のビームが放たれ、煙幕を突き抜けて地面に穴を穿つ。

ハイパーセンサーはまだ反応を拾ってる。さあ、どう来る・・・っ！

「こつちですー！」

「なんとおおっ!!」

右側から煙幕を突き抜けてきた山田先生が何時の間にか持ち替えていたアサルトライフルを射ってくるが、身体を捻りながらスラストアーを動かして回避する。

この距離・・・なら！

「突っ込む・・・！」

ロング・ブレード・ライフルを投げ捨てて、背中にあるビームサーベルを抜き放つ。

背中のシールドブースターを起動し桜色の刀身を持つそれを構えて山田先生へと突撃するー！！

「っ、させませんー！」

ラファール・リヴァイヴの右手に持たれたショットガンが近付けさせまいと撃たれるが、ハイズルの機動性を抑える事は出来ない。

「これでー！」

「くっー！」

横風ぎに振るったビームサーベルをライフルの銃身で持ち手ごと弾かれる。

その反動を生かしてその場で回転し、左手のライフルを向けると、山田先生がショットガンの銃口を此方に合わせたのは同時だった。

「・・・」

「二人とも、そこまでだ」

メガホンを携えた織斑先生の言葉にお互いに武器を下げる。

見ると、一夏や皆がポカンとした表情で僕を見ていた。一体どうしたんだろう？

「扶桑君、すごいですね！私、ちよつと熱くなっちゃいました！」

「え、あれでちよつと・・・?」

元国家代表候補恐るべし・・・あれでまだ本気じゃないのか・・・。
山田先生の全力を想像して戦慄を覚えつつ、ゆっくりと地面に立つ。

織斑先生が呆れ顔で近付いてきた。

「二人揃ってこれが授業なのを忘れていたな? 全く・・・見ろ、皆呆然自失しているぞ」

「あ」

途中から戦いに集中しすぎて、授業の一環というのを忘れてた。どおりで皆ポカンとしているわけだ。

山田先生もやっちゃいました・・・と呟きながら申し訳なさそうにしている。

「煽つたのは私だが、まさか山田先生までヒートアップするとはな・・・まあ、生徒たちにも良い刺激になったろう」

そう言い残して皆の所に戻って指示を出し始める織斑先生を見て、僕と山田先生は顔を見合わせて苦笑いした。

今度から、ヒートアップし過ぎないようにしないとね。

「・・・で、なんでこうなるの?」

今僕の目の前には二十人程の女子が妙にキラキラした目で立っている。

先ほど織斑先生が実際にIS（打鉄、ラファール・リヴァイヴ）を使つての歩行演習をするとの事で、専用機持ち・・・一夏、オルコツトさん、凰さん、デユノア君、ボーデヴィツヒさん、そして僕の所に行くようにと言つた途端この状況である。

回りを見ると、一夏とデユノア君も似たような感じだった。

もう一度目の前の女子達を見る。・・・って、

「何でボーデヴィツヒさんが此方に居るのさ!?!」

「むっ」

グレーの専用ISスーツに身を包んだボーデヴィツヒさんが何故か僕の前に立っていた。

いやホントに何故。

ボーデヴィツヒさんの所に行つてた人達もキョロキョロしてるし。

「先程の戦闘が見事だったので、ついな」

「ついてて・・・ダメでしょ？織斑先生に怒られるよ？」

「それは困るな。戻るとしよ・・・ふみゅっ!？」

「残念ながらもう遅い」

何時の間にやらボーデヴィツヒさんの背後に立っていた織斑先生の出席簿が炸裂して、ボーデヴィツヒさんは頭を抑えた。

そんな彼女をよそに、織斑先生は溜め息一つして回りを睨む。

「何時までもぐずぐずするな。各クラス、出席番号順に専用機持ちの所に行け・・・次は無いぞ」

一瞬で綺麗にそれぞれの場所に皆向かった。ボーデヴィツヒさんもである。

うん、滅茶苦茶怖いです先生。

身体が震える程ですよ、マジで・・・。

「全く、最初からそうしろ。扶桑、手間を掛けたな」

「あ、いえ。ありがとうございます」

立ち去る織斑先生にお礼を言つてから、六人程に滅つた女子生徒達に向き直る。

当然だけど、さっきまでのキラキラした目はなりを潜めている。

うん、これなら落ち着いてやれそう。

「えと、それじゃあ歩行演習、始めましようか？」

「うん、そう。その感じ。ISの手足を自分の身体の延長だと思って」
「身体の延長・・・」

たまにアドバイスを言いながら両手足だけを部分展開したヘイズルで打鉄の歩行をサポートする。

皆飲み込みが早くて助かるよ。これでもう最後の六人目だ。

「うん、これだけ出来るなんてすごいよ、葛木さん」

「あ、ありがとう！」

「それじゃあ、降りよっか」

葛木さんが打鉄の片膝を着いて停止させ、降りる。よし、これで全員かな。

他のところを見るとまだ終わってないみたいだ。さて、どうしようか。

「扶桑の班は全員終わったみたいだな、なら他の班のところを見て回ってこい。それと扶桑はボーデヴィツヒの班を手伝ってやれ・・・」
織斑先生の言葉に、ボーデヴィツヒさんの班を見るとまだ最初の人目だった。どうやら、ボーデヴィツヒさんの説明が上手く伝わっていないみたいだ。

「・・・アイツは根っからの軍人氣質だな。昔よりはあれでもマシなんだ」

僕だけに聞こえる音量で織斑先生はそう言った。あれ以上にガチガチだったらもはやお通夜みたいな雰囲気になってたろうね・・・。

僕の肩をぽんと叩いて「頼んだ」と一言残して織斑先生は他の班を見に行ってしまった。

仕方ない、頼まれたからにはやらなきゃね。

「ボーデヴィツヒさん、手伝うよ〜」

手を振って呼び掛けながら僕は小走りでボーデヴィツヒさんの班へと合流した。

#04 お昼休みの惨劇

あつという間に時間は過ぎ、お昼休み。

僕達専用機持ちは屋上に来ていた。何でも一夏曰く、「たまには全員揃って食べようぜ」との事。

屋上には人が居らず、ちよつとした穴場のようだ。

「んー、空気が気持ちいい」

学食から買ってきた焼きそばパンを片手に空を仰ぐ。一夏は箒さんや嵐さんが作ってきたお弁当を食べている。いや、食べさせて貰ってる。二人同時『あーん』なんてハーレム系ラノベの主人公か。デユノア君も苦笑いしてるし。

不意に視線を感じて隣を見るとボーデヴィツヒさんが僕を見て心なしかそわそわしていた。

「どうしたの？ボーデヴィツヒさん」

「その、実習の時は助かった。感謝する」

「ああ、どういたしまして」

ちよつと照れ臭そうに言うボーデヴィツヒさんに何と言うか、ほっこりする。クロエも会って最初の頃はこんな感じだったなあ。

「何をにやけている？」

「なんでもないよ」

そう返して視線を一夏に向けると、

「……世界の理が見える……」

何か悟っていた。

良く見ると手にはサンドイッチがあつて、かじった跡がある。

オルコットさんが作ったサンドイッチかな。

作った本人ニコニコ笑ってるし。

……あのサンドイッチに何があるのだろうか。

「扶桑」

「どうしたの、ボーデヴィツヒさん」

「……あのサンドイッチ、危険な感じがする」

「え」

ぼそりと呟かれたその一言に一気に警戒心が強まる。デユノア君も僕の隣まで来て冷や汗を流してる。

「僕も同意見・・・何だろう、あのバスケットからまるでクレイモア地雷みたいなのを感ずるよ」

「それってものは兵器じゃないですかやだー」

何、あのサンドイッチは大量殺戮兵器なの？見た目は普通何だけど・・・

「一夏さん、お味はいかがですか？」

「あ、ああ・・・美味しいよ・・・」

一夏、顔が土気色になっちゃってるよ・・・。

満足げに頷くオルコットさんの横で一夏が僕に目線で訴えかけてくる。

(逃げろ、睦月！これはヤバイ・・・！)

「睦月さんも一ついかがですか？」

オルコットさんがタマゴサンドを此方に差し出してそう言った。期待の眼差しで。

ごめん一夏、僕にはこれを断れない・・・

タマゴサンドを受け取り、唾を飲み込む。

「いざ・・・南無三ー」

覚悟を決めて一口。

ー一口のなかでグリップス戦役が起こった。

ごくりと嚥下する。

ー胃の中で第二次ネオジオン戦争が勃発した。

「どうですか？扶桑さん」

「味見って、した？」

「してませんわ」

その一言に一同啞然とする。成程・・・通りで、こうなるワケだ。

「一口、自分で食べてみて」

バスケットを指差すと、首をかしげながらも一つ取ってオルコット

さんは一口かじる。

直ぐに顔面蒼白になった。

うん、ぶっちゃけシュールストレミングス(世界で一番臭い食べ物)に匹敵するレベルだよな。

「・・・今度から、味見して、余計な調味料入れないようにね・・・食べた人こうなるから」

「・・・ごめんなさい」

一夏を見るともはや死人もかくやな顔色になって箒さんに介抱されていた。

多分僕も同じ顔色になっていることだろう。

オルコットさんには暫く料理練習指令が下された。箒さんと凰さんが先生役になるから、大丈夫だろう。

・・・被害者は、少ない方がいいからね。

「睦月、今日はどうする?できれば特訓付き合ってほしいんだけどさ」「ん〜ごめん、今日は整備棟行くよ」

一日の授業が終わり、放課後。

一夏の誘いにそう答えながら席を立って鞆を持つ。

そろそろ打鉄式も完成しそうだから、調整手伝わないと。

プログラム面は全てクリアしたし、残るは機体テストだけだ。

「そか・・・模擬戦やりたかったけど、仕方ないか。わかった、また後でな」

「うん、またね〜」

「あ、扶桑君」

一夏に手を振って教室を出たところで、デュノア君とバツタリ会っ

た。

「デュノア君、どうしたの？」

「シャルルでいいよ、これから一夏と特訓？」

「じゃあシャルルって呼ぶね。特訓は参加しないよ。整備棟に人待たせてるし」

「整備棟？もしよければ僕も行つて良いかな？」

デュノアく……シャルルの提案に少し考える。流石に勝手に連れていくわけにもいかないしなあ……簪も驚くだろうし。

「待たせてる人に電話してみるよ」

制服のポケットからスマホを取り出してコール。

『もしもし、睦月？』

驚いた……まさかワンコールで出るとは思わなかったよ。

電話越しにカタカタと音がするから、もう整備棟で作業を始めているんだろう。

「うん、僕だよ」

『どうしたの？何かあった？』

「今からそっち向かうんだけど、一人僕のクラスの人連れていきたいんだ。大丈夫かな？」

『……出来れば遠慮したいけど、睦月から見てその人は信用出来る？』

簪の言葉にシャルルをチラツと見る。

フランス代表候補生、それに『デュノア』……。

「……うん、大丈夫だよ。いざとなったらどうにか出来る」

『そう……わかった。睦月が信用するなら私も信用する』

「ありがと……それじゃ、今から行くね」

『うん。待ってる……』

通話を切つてシャルルにサムズアップする。

「許可が出たよ、大丈夫だつてさ」

「良かったあ。直ぐ行くんでしよう？荷物取つてくるね！」

教室に駆けていくシャルルを見送って廊下の壁に寄りかかる。

簪に何かジューズでも買つていこう。あ、布仏さんも居るかも知れないから、二本買つとこう。

「私も行っていいか、扶桑」

「うーん、まあ口外しないって言えるなら大丈夫だと思うよボーデヴィッツヒさん」

「そうか」

「・・・ってはいいい!？」

何時の間にかボーデヴィッツヒさんが隣に立っていた。

いや、何時からそこに？

「電話が終わったところだな」

「さらりと心を読んだ!？」

「織斑教か・・・織斑先生に教わったら出来るようになってな。それより、本当に私も行って大丈夫か？」

こつちを見上げつつ首を傾げるボーデヴィッツヒさんを見て思う。

・・・こういう仕草、クロエにそっくりなんだよなあ・・・

「ああ、うん大丈夫だよ。きつと」

「そうか、良かった・・・って、頭を撫でるな!」

簪には今度ちゃんとした差し入れ買っていこう、そうしよう。

何とはなしにボーデヴィッツヒさんの頭を撫でつつ、僕はそんな事を考えるのだった・・・。

#05 タツグペア

「すごおい・・・ホントにこのISたった三人で作り上げたの!」

「少人数で、これほどの機体・・・とんでもない技術力だな」

整備棟にあるISのハンガールームで打鉄式式を見て驚くシャルルとボーデヴィツヒさんを眺めつつ、僕は簪に来る途中で買ってきたジュースを手渡す。布仏さんは来てないみたいだ。

「はい、簪。お詫びのジュース」

「ん、ありがと・・・まさか、ドイツとフランスの代表候補生が来るとは思ってたなかった」

缶のプルタブを開けてちびちびとジュースを飲む簪と会話しながら、カフェオレを一口飲む。ブラックは苦手だ。

「後は運用テストだけかな?」

「そうなる・・・それをクリアすれば、完成・・・こんな早くここまで来れたのは、睦月のおかげ」

「布仏さんも忘れちゃダメだよ?」

「・・・わ、ワスレテナイヨ?」

ほんの少し見つめあって、二人揃ってクスクス笑ってしまう。

「・・・ありがとう、睦月」

「どういたしまして、簪」

二人して笑い合いながら握手。

勢いでやっちゃったけど、少し恥ずかしいかな?

「睦月、お邪魔なようなら僕ら出ようか?」

「へ?」

間近で聞こえた声に振り向くと、シャルルが気まずそうに笑っていた。

「・・・お邪魔?って、

「・・・へうあ!」

慌ててばつとお互いに手を離す。

いやいや、確かに若干ちよつと僅かばかりドキドキしたよ?・

でもお邪魔かな?って言われるような事ではないようなあるよう

な・・・

「わ、わわ私と睦月はそんな関係じゃない！・・・まだ」

簪が必死に弁明するも、シャルルの笑みは深まるばかりだ。最後の方はなんて眩いたのかよく聞こえなかったけど。

というより、早くこの空気を払拭しないと。簪が茹で蛸みたいに真っ赤になっちゃってるし。

どうしようかと悩んでいると、今まで黙っていたボーデヴィツヒさんが一言。

「なるほど、これが噂に聞く『らぶごめ』、というヤツだな！」

特大級のICBMを爆発させた。

簪は気絶しちゃうし、シャルルは慌てるし、ボーデヴィツヒさんは何だかよく分かってなさそうにしてるしで、何とも力オスな空間が出来上がってしまった。

数分後に布仏さんが来てくれなかったらどうなった事やら・・・。

「明日からはアリーナを借りて最終テストだね」

「専用機としての申請書とか諸々は倉持技研に丸投げ・・・」

打鉄式式の調整を終えて、六時頃。布仏を加えた僕らは寮に帰る為に廊下を歩いていた。

ちなみに倉持技研とは、元々打鉄式式の開発をしていたIS関連企業の一つで、一夏の白式、その素体を開発していた企業でもある。

現在は白式のデータ集めに必死で、その為に打鉄式式の開発が中断されたのである。

簪の丸投げ云々はちよつとした憂さ晴らしなのだろう。

作り上げたぞコラアみたいな。

「何て言うか、睦月って凄いな」

「え？」

簪と布仏さんを見て歩いていると、隣を歩くシャルルがそんな事を言った。

はて、僕は凄いとされるような事はしてないと思うんだけど。

「それは私も思っていた。元国家代表候補に匹敵する実力を持つているながら、ISのプログラミング等が出来るヤツなど、そうは居ない」「やっぱり、篠ノ之東博士と一緒に居たからって感じなのかな?」「んー、まあそうだね」

日夜問わずほぼ毎日無人ISと模擬戦をし、東さんの突拍子の無い開発を手伝いやら何やらしてたからねえ・・・ダンディライアン、バイザック、フライルーにバイアラン同時に相手してパーフェクト勝利とか、メガバズーカランチャーの出力調整とか素人にやらせるモノじゃないよね・・・。

「睦月、大丈夫?何か急に目から光が消えたけど・・・」

「ああ、うん。ちよつと昔を思い出してね・・・」

また帰った時には色々手伝わされるんだろうなあ・・・。

少し先の未来を予想して若干憂鬱になっていると、布仏さんが思い出したように人指し指を立てた。

「そういえば、来週の学年別トーナメントって、タッグマッチになるみたいなんだよ」

「タッグマッチ?」

ペアを組んでやるのか・・・多分、この前の襲撃事件も関係してるんだろうな・・・ん?何か地響きが聞こえる。

「何この音・・・」

「足音だな。数は・・・二十人程か。こちらにきているな」

「二十人!?!」

ボーデヴィツヒさんの言葉に驚愕する。あの布仏さんですら目を見開いている。

そんな人数がどうしてこっちに・・・シャルルと目が合った。

もしかして・・・

まさかの可能性に考えが至った時、廊下の突き当たりから雪崩のように女子生徒達が集まり、揃っ

て声を上げた。

「扶桑（デュノア）君!!私とペアを組んで下さい!おねがいします!!」

異口同音に発せられたその言葉に思わず息を飲むも、流石にあまり知らない処か名も知らない人と組むのはちよつと怖い。今でも若干鬼気迫った感じするし。

「えー、と……」

ちらと周囲を見ると、簪と目線が合う。

簪が小さく笑って頷いてくれた。天使か。

「せっかく誘いに来てくれたのに申し訳ないのですが、僕は簪とペアを組むので……すいません」

「そっかぁ……デュノア君は?」

「僕は、ボーデヴィツヒさんと組むことになったので……お誘いはとてもうれしいのですが」

僕らがそう答えると、誘いに来た女子生徒達は一様に肩を落としたがら帰っていった。

去り際に、

『かわいい扶桑君があ……』

『デュノX扶桑では無い……だと』

『今年の夏は、ネタに困らないね!』

とか色々聞こえたような気がしたけど、聞き間違えだろう。そうに違いない。絶対に聞き間違えだ。

「睦月」

「簪、なんだか勢いで言っちゃったけど……」

「大丈夫、さつき本音がペアの話をしたときに言おうって思ってたから」

「どうやら元から誘ってくれるつもりだったらしい。僕としても気の知れた人と組んだ方がやり易い。」

「そっか……ありがとう。トーナメントのペア、宜しくね?」

「こちらこそ、宜しく」

お互いに握手。

トーナメントまで一週間、頑張らないとね。

「なんだまた『らぶこめ』か」

「っ!?!」

さっきの焼き増しのようにはっと離れる。

「ちよつと皆なんでニヤニヤしてるの! いや恥ずかしいから!」

何だかのっけから大変な気がしてきたよ・・・

#06 打鉄式式

『二人ともく、準備はいい?』

「打鉄式式、問題ない。何時でも始められる」

「ヘイズルも大丈夫だよ」

簪とペアを組むことになった翌日の放課後。打鉄式式を展開した簪とヘイズルを展開した僕は第二アリーナの空中で相対していた。

今日は完成した打鉄式式の運用テストを兼ねた模擬戦を行う。

アリーナのオペレータールームから、場内のスピーカーを伝って布仏さんの声が響く。

『りよーかーい。それじゃ、カウントダウンいつくよ〜』

その言葉の後、空中にカウントダウンを示す数字が現れる。

残り十秒。

「睦月」

「何?」

「出せる全力で行くからね」

そう言って笑う簪を見て僕も思わず笑みを浮かべる。

残り五秒。

「じゃあ、その全力をちゃんと受け止めないとね」

三

「・・・行くよっ」

零。

直後、打鉄式式の非固定武装が稼働し、蒼白の閃光を二つ放つ。

速射荷電粒子砲《春雷》、成程確かに。

「速い・・・!」

肩のスラスターを起動し射線から離れる。春雷の特性はその名の通り、弾速と発射に擁する時間だ。

通常の荷電粒子砲ならチャージが必要なところを、威力をある程度犠牲にすることでチャージ時間を短縮、排熱効率を上げることで連射をも可能にした。

「流石に当たらないか・・・」

「そう簡単には当たれないよっ！」

空中を自在に飛び回りながら互いに撃ち合う。ヘイズルのビームライフルはカートリッジ式なので、あまり長時間の撃ち合いには向かない。

なので、

「こうするっ！」

ビームライフルを量子化、かわりに拡張領域から束さんがネタで送ってきた『ジャイアントガトリングガン』を展開。

サイドスカートに懸架された弾倉が唸りを上げ、銃身が回転を始める。

「フルファイア!!」

「くっ!?!」

秒間数千発という正に雨と称すべき弾丸の群れに、簪が春雷の連射を止め、回避行動に移る。

打鉄式式の行動先を予測して銃身を傾ける。

まあでもガトリングガンなので集弾率はかなり悪く、弾丸の隙間を抜けられてしまう。

そこで、左手の改良型シールドブースターの出番である。

僕の動きに気付いたのか簪が警戒心の籠った目で此方を見る。

「発破をかけるー！」

ガトリングの雨に、拡散粒子砲のシャワーを追加する。

雨は密度を増し、もはや壁となって簪へと襲いかかる。

「そんなモノ・・・」

しかし簪は一切物怖じせず、夢現を構えて突撃してきた。『左手を開いて』。

・・・まさか!?

「突き抜けてみせる!!」

ビームと実弾で形成された壁を、掌部ビーム砲《バルマファイオキーナ》による高威力の一撃を撃ち放って無理矢理に穴を開けて突破してきた。

まさか、自分の攻撃を、自分で開発した武装に破られるとは・・・

「何て皮肉か!!」

バチイツ!!

ジャイアントガトリングを即座にパージして、突破した勢いのまま振るわれる夢現の刃をビームサーベルで受け止める。

普通なら、実体刃である夢現がビームによって溶断されるが、対ビームコーティングが施された震動刃によって短時間だが罅迫り合いが可能となっている。

「日本の代表候補生の名は、伊達じゃない・・・」

「そうみたいだね・・・っ!!」

夢現を切り払って距離を取りつつ左手に展開したビームライフルで牽制弾を放つ。

サーベルを背中に戻し、右手にロングブレードライフルを展開、チャージを開始する。

「っ・させない!!」

ビームの圧縮を感じしたのか、チャージを完了させまいと打鉄式式の春雷が再び連射される。

こつちだつてただやられるワケじゃ無いけどね・・・!

「ジャベリンは、こう使う!!」

左手のライフルを量子化、長大な実体槍を展開してそのまま投げつける。

「何がジャベリンよ!・・・なっ!?!」

簪が避けようとした瞬間、槍の穂先が炸裂。無数の刃となって打鉄式式のシールドエネルギーと装甲を削り爆煙を生み出す。

《クラスタージャベリン》、東さんが開発した中規模面制圧実体槍だ。

「フルチャージ完了。発射後、限界熱量到達と同時にユニットパージ」
いいタイミングでチャージが終了した。煙の中へと砲身を向ける。

あの程度で墜ちるような簪では無いことは理解している。

であるならこの間隙、次に来る一手は・・・

「《山嵐》、マルチロック・フルバースト!!」

「そう来るよねえ!!」

高誘導マルチロックミサイル《山嵐》、全弾頭計四十八発が多角的軌

道を描いて襲い来る。

当然素直に全弾当たる気は無い。
躊躇いなくロングブレードライフルの引き金を引いた。

「いっけえええっ!!」

放たれる柱の如き桃色の閃光がミサイルを撃ち落とすが、逃れた数発が直撃する。

流星に全弾撃墜とは行かないか……。

【限界熱量到達。ユニットパージ】

ミサイルによって出来た煙を突き抜けながらライフルごと拡張領域にしまう。

僕より少し高い位置に静止した簪と視線を交わす。

お互い、肩で息をするほどあの短時間で体力を消耗し、持てる手も出し尽くした。

後は……

「近接戦で決める……!」

簪は夢現を、僕はビームサーベルを構えて一気に加速する。

風ぎ払われる薙刀の刃をサーベルで軽く受け止めつつ流す。返しの手で振り降ろすが柄で柔らかく逸らされる。

「っあああ!!」

袈裟、逆袈裟、右薙ぎ、左薙ぎ、逆風……あらゆる方向から刃を振るうがお互いに掠りはするも直撃にはならない。

機体の向きを様々に変えながら空中で何度も火花を散らす。

【シールドエネルギー残り五十パーセント。打鉄式、シールドエネルギー残り五十パーセント】

刃を払い、距離を取る。

……もう後がないか。

簪も解っているのか、夢現を構えて静かに息を整えている。
次の一撃で終わらせよう。

ビームサーベルを逆手に構え、ブースターにエネルギーを込める。

「ふう……」

この瞬間に全てを込めて。

「ローっ!!」

同時に爆発的な加速をもって接近。

斬!!

交差。

ビームサーベルを振り切った体勢のまま、眩く。

「ナイスバトル」

【battle end draw】

空中に投影された文字を見てゆっくり構えを解き、肩の力を抜く。

いやあ・・・いい試合だったよ。

『二人とも、本気でやり過ぎだよ。運用テストのレベルじゃ無かったよ』

スピーカー越しの布仏さんの言葉に簪と顔を見合わせる。

・・・、

「忘れてた・・・」

『もー、熱中し過ぎ〜!』

布仏さんの怖くも何ともないお怒りの言葉に二人揃って苦笑いを浮かべる。

まあでも。

「簪」

「うん、やっぱり」

「楽しかったね」

夕暮れのアリーナで、布仏さんが来るまで僕達は笑いあっていたー。

#07 判明

「・・・よし、今日はここまでにしようか」

「時間も丁度良い感じ」

「二人ともおちかれー」

夕陽が照らす第二アリーナでISを解除した僕と簪に布仏さんが合流する。

打鉄式式の初の実戦テストを終えたその翌日。

早速僕達は来週末の学年別タッグトーナメントに向けて特訓をしていた。

と言つても、ドローンを相手に連携の練習をするだけなんだけどね。明日辺りにでも一夏達の特訓にお邪魔してみようかな。

「にしても二人とも息ぴったりだねー」

「まあ、お互い機体の万能性高いから連携も組みやすいんだよね」

布仏さんから渡されたスポーツドリンクを一口飲んで答える。

と言つても今日やったのは基本的なセオリー通りの連携だ。僕ら独自の連携も考えてはいるけど、トーナメントに間に合うか。

「おりむー達も頑張ってるみたいだよー」

「そういえば、一夏つて誰と組んだの？」

昨日今日と何かと休み時間忙しかったから話していないから、ちよつと気になる。

一夏の機体と相性が良いとなると、オルコットさんになると思うけど。

「盛大なジャンケン大会の末、せっしー（セシリア）がペアになったよー。しののん（箒）は二組のリンちゃん（鈴音）と組んだみたいだよー」

盛大なジャンケン大会つて、何してるんだ・・・。

オルコットさんのブルーティーズに一夏の白式、中々強力なペアだな・・・。

にしても鈴音さんと箒さんペアか。機体の特徴的に防御力高いだろうなあ。

それにシャルルとボーデヴィツヒさんの転入生ペア、ここが一番注意かな。手の内が見えないし。

「波乱の予感……」

「二人とも応援してるからね」

「やるからには、優勝目指さないとね！」

トーナメントへの決意新たに、僕達は閉館時間も近かったので着替えてアリーナを去った。

その日の夜。

寝間着に着替えた僕と簪は寮の部屋で二人揃ってアニメを見ていた。

『レイ、V-MAXだ！』

『ready』

「やっぱりいつ見てもレイズナーはカッコいい」

「V-MAXはホントにロマンあるよねえ」

ただの突進で敵が破壊されるっていうのはなかなか良いよねえ。使った後の代償があるのもまた良い。

テレビを見つつ語り合っていると、携帯の着信音が鳴り響いた。

この音は僕の携帯か。

「ごめん、電話みたい」

「一時停止してるから問題ない」

「ありがとう」

ベッドに置いてある携帯をとって画面を見ると、『織斑 一夏』の名前が。

……一夏から電話なんて珍しいな。何かあったのかな。

「もしもし、いち……」

『むむむ睦月、大変だ！男が女で女が男で！シャルルが！』

「オーケー、よく分からない」

推測するにシャルルの事なんだろうけど……

電話越しに慌ただしくがざざとする音を出しながら一夏の焦った声が聞こえる。

『今、寮に居るよな？俺達の部屋に来てくれないか！頼む！』

「何かヤバそうなのは分かったよ・・・了解、今から向かうよ」

『ああ、わかった』

通話を切って溜め息を吐く。入学直後といい、クラス代表対抗戦といい、一夏は何かとトラブルに巻き込まれるなあ。そういう星の下に生まれてしまったとしか思えないよ。

「どうかしたの？」

「一夏から部屋に来てくれってさ」

「そう・・・長くなりそう？」

「多分ね。晩御飯、先に食べてて。後で向かうから」

「わかった、待ってる」

布仏さんからプレゼントされたと言うちよつとだぼついたパジャマの袖を小さく掴んで頷く簪に一瞬ドキリとするけど、何とか表情に出さずに部屋を出る。

「・・・さっきのは反則でしょうよ」

部屋のドアを閉めて呟く。・・・なるほど、あれが『萌え』か。

つと、一夏が待ってるんだった。急がないと。

フロアが違うからちよつと遠いんだよね。

で、一夏の部屋に着いて入ったのは良いんだけど。

「一夏、シャルルは何時の間に性転換したの？」

「俺が見た限りついさっきだ」

「現代医療って凄いな・・・」

「いや元から女だから！そんなハイスピードに性転換出来ないから
!!」

シャルルが女性だったという衝撃の事実が判明しました。
何よりの証左として胸がある。ちらっとしか見てないけど確かにある。

「シャワー室の替えのシャンプー渡そうとしたらばったり会ってな・・・本物だった」

「成程」

「ちよつとさらりと言わないでよ!? 恥ずかしいから!」

あー・・・ダメだ、僕自身ちよつとパニックってる・・・一度落ち着こう。

「取り敢えず、落ち着いて詳しい話を聞こう。まずはそれからだよ」

「・・・そうだな、お茶を淹れるからちよつと待っていてくれ」

僕の提案に一夏が頷いて椅子から立ち上がる。

にしてもシャルルが女性だった、か・・・。どうにも一筋縄じゃ行かなそうな感じがするなあ。

一夏が使っているベッドに腰掛け、シャルルと対面する。

一夏も大雑把な事しかまだ聞いてないみたいだし、まずは詳細を聞いてみないと始まらない。

「・・・これが僕が男装してこの学園に来た理由だよ」

一通り話終えたシャルル・・・いや『シャルロット』が締観にも似た表情を浮かべて口を閉じた。

・・・要するに、会社からの命令らしい。

シャルロットは現デユノア社社長の、云わば愛人の娘であるということ。

母親が他界してから暫く経って連絡があり、IS適正検査を受けたところ、高い適正值を出した。

その時・・・今もだが、デユノア社は第三世代ISの開発に難航しており、このまま行けば欧州のIS業界から消えることになりかねなかった。

そこでシャルロットをIS学園に転入させ、第三世代ISの情報を

集めさせる事で開発の糧にしようと考え、結果今に至る。

「待つてくれ、情報を集めるだけならそもそも男装なんてする必要なんて無いだろ。そもそもシャルロットじゃなきゃいけない理由もない」

「予想でしかないけど」

一夏の疑問にそう前置きして僕は自分の考えを言う。

「一夏と僕のIS、その情報が最優先に集めるべき事なのだとしたら男装して入る事で僕らに容易に近づけるからじゃないかな。現にこうして親しくしてるワケだし。そして何よりシャルロットじゃなきゃいけない理由は簡単だよ。専用機があるってことさ。それだけでかなりのネームバリューを持つからね」

「凄いな睦月・・・正解だよ」

「そんな諦めきつた顔で言われても嬉しくない」

シャルロットの褒めあげをそう断じてお茶を一口飲む。

今の彼女の目はどこも見えていない。恐らく僕も一夏もまわりの家具でさえも。

・・・全く、なんてトラブルだ。

「シャルロットはこれからどうなっちゃうんだ・・・？」

「多分、本国送還と事務所行きは確定だろうね・・・デユノア社は間違いなく世界から消え失せて、僕もきつと・・・」

「なっ・・・何だよそれ・・・！」

憤る一夏に対して僕は冷静にそうだろうな、と内心納得していた。

身元詐称、それも天下のIS学園でだ。ただ事で済む筈がない。嘘えそれが自分の意思でなくてもだ。

理不尽。確かにそうだ。

でもそんな理不尽なんて世の中にはそれこそ腐るほどある。

まあでも、

「シャルロット。君はどうしたい」

「え・・・？」

そんな理不尽に苛まれている友達がいたら、手を差し伸べるべきだろう。

「睦月、お前・・・」

「はつきり言つて物凄くめんどくさい問題だよこれ。学園の規則程度じゃ足りないくらいにね」

IS学園の特記事項の一つに、学生は在学中あらゆる国家による縛りを受けない、なんてものがあるがそんなんじや意味がない。

在学中ではなく根本からシャルロットを自由にしなければならぬ。

というか僕らだけで背負えるような軽い問題じゃない。

「取り敢えず、諸々の確認をしないとね」

お茶をぐいと飲み干し、何故か呆然とするシャルロットと一夏を見てニヤリと笑う。

僕らで背負えなければ背負えそうな人達に協力（巻き込まれて）もらえばいいんだ。

ポケットから携帯を取りだし、素早く電話番号をコールする。

・・・通話先は、世界最強。

さて、どうなるかな・・・

#08 対処

『ーああ、その事なら私達も把握している』

「そうですか・・・何か対応策は」

『講じてはいるがな。事が事だ。下手に動けば国際問題に発展しかねん』

「ふむ・・・」

まず最初に電話をかけたのは織斑先生だ。流石に教師陣はシャルロットの事については調べていると思ったからだ。

結果は予想通り。でも学園側も手を出しかねている様子。

織斑先生の言葉通り、下手をすれば国際問題に発展、学園の存続にも影響を及ぼすだろう。

『・・・まあ何とかするさ。お前達は事が収まるまで大人しくー』

「一人、どうにか出来そうな人が居ます」

僕の言葉に電話越しに息を飲む音が聞こえる。思い当たる節があるのか一夏も目を見開いて固まってしまった。

ホントはあんまり迷惑かけたくないんだけどね・・・

『扶桑・・・お前まさか』

「出会って数日ですが、大事な仲間です。あらゆる手段を使いますよ」

『あの天災（バカ）がそう簡単に動くと思えんがな・・・』

「ははは、大丈夫です交渉材料はありますから・・・では、夜分遅くにすいませんでした。失礼します」

『おい待て学園外の人間を巻き込むのはー』

何か言われる前に通話を終了。

取り敢えず確認は出来た。案の定ややこしい問題だ。

「睦月、何とか出来る人ってまさか・・・」

「一夏の予想通りの人だよ」

硬直から抜け出した一夏に淹れ直したお茶を飲みつつ答える。

天災にして天才、あらゆる法に縛られない規格外の存在。

「もしかして・・・篠ノ之束博士？」

「ご名答、シャルロット」

あつさりとそう返すとシャルロットは口元を手で押さえて言葉を失ってしまった。

僕の唯一にして最強のコネクションだ。

「で、でも僕なんかの為に睦月がそこまでしなくても・・・」

「シャルロット、次そんなこと言ったらヘイズルでデコピンするからね」

戸惑った様子のシャルロットに指を突き付け言葉を遮る。

僕なんかとは何だ。

「シャルロットは俺たちの仲間なんだ。『なんか』じゃない。そうだろう、睦月」

「そういうこと。さて・・・改めて聞くよシャルロット。君はどうしたい?」

そう、僕はどうにか出来る手段を持っているが、そこにシャルロットの意志がなければ意味がない。

これは彼女自身が決めるべきだ。

「僕は・・・」

瞼を閉じ思索するシャルロットを見ながら一夏と共に静かに答えを待つ。

「睦月、一夏」

そして何時間とも思える沈黙を破り、シャルロットが目を開く。

その目には先程までの諦めきった暗さは無かった。

「僕は、ここに居たい。皆と一緒に居たいんだ」

「だってよ、睦月」

「オーケー、なら一つやりますか」

にんまりと一夏と笑いあって、僕は再び携帯を弄る。電話の相手は篠ノ之束。

「シャルロット、一つ注意というか覚悟しておいて」

「穏便に済むかわからないでしょう?大丈夫、覚悟なら出来てる」

「なら安心だね」

シャルロットの強い頷きを確認して、通話ボタンを押す。

『いつもニコニコ、むつくんの頭上に、忍び寄る天才篠ノ之束っです

!!

「ごめん、シャルロット別の方法を考えよう」

「ちよつと待って!!」

いや、まさかワンコールで出るとは思わないし、久々の会話の始めが某這い寄る混沌のパクリってどうなのさ。

さつきまでの真面目な空気が消えてなくなっちゃったよ。

『にしてもむつくんから掛けてくるなんて珍しいねえ、それも私が付けた『秘匿回線』を使ってなんてさ』

「僕の手には負えない問題がありまして……」

『ふうん……ああ成程ね、おk把握』

少しキーボードを叩く音が響いたと思うと納得した声がスピーカーから聞こえた。

『ヘイズルのコアネットワークから情報は貰ったよ。成程確かにむつくんの手じゃ処理できないね。規模が大きすぎる』

「ええ……それで東さんに電話したんです」

『ほむほむ……でもむつくんの為ならまだしも、そこらの有象無象じやなあ……東さんやる気起きないよ』

電話越しにぶーたれる顔が簡単に想像できる声音で東さんが気だるそうに言う。

そういうと思つてたさ。だから、ここで切り札（ジョーカー）を切る！

「筈さんのエプロン姿の写真約二十枚」

『はっはっはあー！この天才に万事お任せあれえ!!』

オツケー、言質確保。黛先輩に頼んでおいて良かったよ。代償は大きかったけどね……僕が女装した写真なんて需要無いでしょうに。

シャルロットと一夏にサムズアップすると二人とも安堵の息を漏らした。

「それで、頼みたいことがあるんですけど……」

『何でもバッチコイ！物理的に消すならファイバーにダンディライアんとバイザック載つけて突っ込ませられるよ!』

「魅力的な提案ですけど、出来れば穏便に済ませたいんです。それで

ですわー」

丁寧に断りながら、僕は束さんと話を続けた。

「ーはい、ありがとうございます。クロエにも宜しく伝えておいてください。・・・それじゃあ、お休みなさい」

何点か頼み事をして通話を終える。これで後は待つだけだ。

携帯をポケットに入れて一息つくつと、一夏とシャルロットが顔をひくつかせていた。

「睦月・・・お前意外とえげつないな」

「まさか、お父さんじゃなくて社長婦人の方を狙うなんて・・・」

「ああ、その事？」

シャルロットの言葉に軽く返して僕は自分の考えを言う。

「最初にシャルロットから話を聞いた時点で疑問だったんだよ。なんでもわざわざ愛人の娘なんて使おうと思ったのかってね。幾らIS適正が高くても、デュノア社長からすれば隠蔽しておきたい、いわば弱点じゃない？バレればスキャンダルって事で間違いないと報じられる。一大企業の社長がそこまで考えないわけ無いと思ったんだ」

「それで社長婦人か」

「そ、簡単に束さんに調べてもらったけど、社長婦人の方はどうにも『使えない』らしいからね。それでいて婦人の方が社内を牛耳っているみたい」

女尊男卑の風潮・・・それ故にデュノア社長も上手く動けないのだとしたら。そこを突けばどうにか出来るかもしれない。

「まあこれで社長婦人が白で、デュノア社長自身が黒だったとしても内容は変わらないけどね」

シャルロットの立場を考えれば、デュノア社はこのまま存続した方が良いのだ。何かと理由をつけて学園に在籍させる事が出来るし。

他国亡命も考えたけど、それは最後の手段だ。

「何か・・・スゲエ大事だな」

「当然。ともすれば欧州IS業界のバランスを崩しかねないんだから。最初に言ったでしょ？僕らだけで背負える問題じゃないって」

僕らだけでどうにかしようとしたところで所詮は学生。出来ることは限られてるし、やったところで揉み消される。

「兎に角、現状やれることはやった。後は束さんの結果次第だね」

「その間、俺に出来ることってあるか？」

「そうだね・・・いや、何時も通りで大丈夫だよ。寧ろ下手に隠そうとすればバレやすいからね」

「了解だ。まあ幾分か肩の力を抜いてやってみるさ」

そう言つて一夏がぐいとお茶を飲み干すと、シャルロットが小さく手をあげた。

「あの・・・」

「何か質問？シャルロット」

「ラウラには伝えた方が良くないかな・・・？」

「あ」

しまった、あの天然軍人を忘れていた・・・っ!!

変な所で勘が良いからシャルロットの変化にも気付きそうだし・・・

「あー・・・どうしよう」

僕は頭を抱え、ボーデヴィツヒさんへの対処に頭を悩ませるのだった・・・

#09 兎の話し合い

「ん？扶桑か」

「ボーデヴィッツヒさんも飲み物買いに？」

「うむ、のどが喉が乾いてしまつてな」

シャルロットの今後について話し合った、その翌日。

昼休みの中庭の自販機前でボーデヴィッツヒさんとぼったり会った。

買ったマウ○テ○デューを取り出し口から取つてボーデヴィッツヒさんに場所を空ける。

「すまないな」

「気にしないで。なに飲むの？」

「これだ」

小銭を入れてボタンを押した指先には、『夏期限定！コーンポタージュソーダ』があった。

「・・・いや、コーンポタージュソーダって何だ。冬の定番飲み物を何故ソーダにした？」

絶対不味いよねそれ・・・

「これが中々に旨くてな」

「飲んだことあるんかい!!」

「一口どうだ？イケるぞ」

「いや、止めておくよ・・・」

丁重にお断りしてから、近くにあるベンチに二人で座る。

ボーデヴィッツヒさんと二人きりというのは今回が初めてになるのかな？

缶のプルタブを開け、一口飲む。

「扶桑、聞きたいことがある」

「ん、何？」

「お前のヘイズル。あれは数年前ドイツで確認された機体に類似・・・いや、同一に見えるが、何か知っているか」

「やっぱり聞いてきたか・・・」

ドイツ軍関係者だから、どこかで聞いてくるとはおもつてたけど

ね。

さて、どう誤魔化したものか。

「束さんが作ったヘイズルの試作機だよ、僕が束さんに会う前に別の人を呼んでテストしてみた」

「・・・その人物について何か知っているか」

「全く。前任者がいたとしか教わってないからね」

嘘は吐いてない。実際、あの時のヘイズルは（第三世代型）試作機だし。

前任者は完璧に嘘だけどね。

「・・・そうか。つまらないことを聞いたな。すまない」

しゅんとするボーデヴィツヒさんを見て頭を撫でたくなる衝動に駆られるが何とか抑え、別の話題を出す。

「謝らなくていいよ。・・・それより、『シャルル』の事、お願いね」

「ああ、その事か・・・問題ない。秘密は守るさ」

コンポタソーダを飲んでそう答えるボーデヴィツヒさんを見て僕は安堵の息を吐く。

昨日の夜の内に部屋にボーデヴィツヒさん呼び出し、事情を説明したのだ。

シャルロットとはトーナメントでペアになっているから、何処かで気付かれてしまうより、先に話して秘密にしてもらった方が都合がいい。

「そう言ってもらうと助かるよ」

「男であれ女であれ、『シャル』はシャルだ。そこに変わりはない」

腕を組んで自信満々にそう言い切ったボーデヴィツヒさんに僕は笑みを浮かべてしまう。

「・・・扶桑、何を笑ってる？」

「いや、何時の間にやら愛称で呼ぶほど仲良くなったんだなあって」「んなっ!? シ、シャルがそう呼べと言ったからだ！ な、仲良くないど・・・って頭を撫でるな！」

「ボーデヴィツヒさんは可愛いねえ」

なんとというか庇護欲が沸いてしまうのだ。

うゝ、と唸りながら睨み付けてくるけど全然怖くない。

と、我慢が効かなくなつたのか、手を払ってボーデヴィツヒさんが立ち上がった。

「わ、私は可愛くなどない！あまりからかうな・・・」

「うゝん、本当なんだけどなあ、つと」

言いつつ飲み干した空き缶を専用のゴミ箱に投げ入れる。

むすつとした顔のボーデヴィツヒさんがそれを見ながら口を開いた。

「トーナメントの時は覚えている・・・」

「もしも当たったらお手柔らかにね」

「断る。元代表候補と渡り合える奴に手加減など出来るものか。全力で戦う」

そう言つてコンポタソーダの空き缶を僕と同じようにゴミ箱に投げ入れたボーデヴィツヒさんは背中を向けて歩きだした。

「一回戦落ちなど認めないからな・・・勝ち抜いて私と戦ってもらうぞ」
そう言い残してボーデヴィツヒさんは校舎の中へと入っていつてしまった。

やれやれ、当日は不様な戦いは出来ないな・・・。

「ドイツの冷水が、大分丸くなつたな」

「きょうか・・・織斑先生、驚かさないで下さい」

中庭と校舎を結ぶ廊下の角でラウラは千冬に話しかけられ、息を吐く。

壁に寄りかかった千冬はラウラのそんな様子を見てふと笑う。

「それに私は丸くなつた覚えはありません」

「そういうのは、得てして自覚が難しいものだ」

難しい顔をするラウラにかつて『冷水』と呼ばれたほどの無感情さ

はない。

あの三年前の事件の後、千冬がドイツ軍に一応の恩を返すために特別教官として入り、訓練を施した最初の頃のラウラは機械的だった。人工生命として産まれた彼女は幼年期にはトップクラスの實力を持つていたが、その後に行われた『実験』によって力が激減、一気に落ちこぼれのレッテルを張られてしまった。

締観と焦りがない交ぜになり、機械的になっていたラウラを何とか感情を表に出せるようにしたのが、千冬と、本人に自覚は無いだろうが一夏なのである。

「ボーデヴィツヒ」

「何でしょう？」

「お前から見て、扶桑はどう思う」

千冬の言葉にラウラは顎に手を当て考える。

感情表現が上手く出来るようになったラウラがこの学園に来て一段と明るくなった。

その要因の一つとして千冬が考えたのが、睦月の存在だった。

若干男性恐怖症を起こしていた簪と何時の間にか仲良くなっていたり、口下手なクラスメイトと賑やかに話したりと、千冬ですら不思議なヤツだと思ってしまう人間なのだ。

故に、ラウラについても彼が関わっていると思い、訊ねたのだ。

「何と言ったら良いのでしょうか・・・妙な安心感を持った人間、そう思えます」

「安心感、か」

「油断すれば何でも話してしまいそうになる。それほど自然体な奴です。とても同年代とは思えない位に」

そう答えてラウラは口を閉じる。

同年代とは思えない・・・その言葉に成程なと千冬は内心頷いた。年頃の男子らしい一面があるかと思えば、昨日のように妙に落ち着いた雰囲気を出す。

見た目は幼く、しかし内面は大人びている。

どこの名探偵だと思わず千冬は鼻で笑ってしまう。

「織斑先生？」

「いや、何でもない」

かぶりを振って返し、千冬は寄りかかっていた壁から背を離す。

「さて、そろそろ昼休みも終わる。教室に戻るぞ」

「はい、教官先生」

「・・・前から思っていたがその呼び方はどうかと思うぞ」

「クラリツサがやっていたゲームではそう呼んでいたので真似てみたのですが・・・」

「アイツは・・・今度会ったら説教だな」

溜め息混じりに千冬が放ったその言葉に、遠いドイツの地で一人の女性が身震いした。

#10 噂

トーナメントまであと三日を残した日の放課後。

僕、簪、一夏、オルコツトさんは第三アリーナでそれぞれISを展開して模擬戦を行っていた。

簪は最初こそ渋っていたものの、いざ模擬戦が始まると容赦なく一夏を攻めに行った。

「ちよつ、更識！さつきから俺しか狙ってないよな!？」

「気のせい」

「ぬおおおおお!？」

山嵐によるミサイルカーニバルに絶叫を上げながら一夏が回避していく。

白式の研究が無ければ打鉄式は倉持技研がちゃんと作っていたから、まあその鬱憤もあるんだろう。

・・・やり過ぎそうになったら止めよう。

「考え事している暇がありました?」

「つと、危ない危ない」

放たれたスターライトの青い閃光を半身をずらして回避する。

狙いがかつての代表候補決定戦より格段に正確になってる・・・成長早いなあ。

「あの時の私とは違うこと、トーナメントの前に少し教えてさしあげましょう」

「お手柔らかに、踊りは得意じゃないんだ」

「ご冗談をつ!」

言うが早いか展開されたビット四基が複雑な軌道を描きながらレーザーを撃ってくる。

それらを避けながら簪との位置をハイパーセンサーで確認。

簪も気づいたのか小さく頷いてくれた。

「虚実が入り交じってる・・・やりにくいね、これは」

「悉く避けているのに、言いますわね」

「いや、本当だよ。以前のように撃ち落とせそうにない」

会話しつつ左右のライフルで牽制弾を撃つ。

簪との距離を確認。よし、そろそろかな。

三、二、一！

「バトンタッチ！」

「お任せ」

「なっ!？」

流れるような動作で立ち位置を入れ換える。簪がオルコットさんに、僕が一夏へと向かって加速する。

苦手な相手はパートナーに任せられるのがタツグの良い点だよね。

簪が驚愕するオルコットさんに夢現で斬りかかるのを確認して、僕は一夏へとビームライフルのトリガーを引いた。

「つて今度は睦月かよ」

「既にボロボロみたいだね・・・」

「ミサイルとあの荷電粒子砲だったか？アレの弾幕は流石に捌ききれねえって・・・」

ビームを雪片で弾くような人がよく言う。

さつきから撃ち続けているけど殆ど切り払われてるし。

「一夏の成長速度には驚かされるよ」

「目標は千冬姉だからな、チンタラしてられないの、さ！」

「っ！」

圧倒的なスピードで彼我の距離を零にされ、雪片が降り下ろされるが、咄嗟にシールドブースターで受け止める。

以前より増して一撃が重い・・・！

「相変わらずその縮地は恐ろしいね！」

「俺の十八番だからな！」

ビームライフルを腰にマウントしてビームサーベルを背中から引き抜く。

三步の距離を一步で詰めるという縮地。元は歩法だったのを一夏は空中で可能とってしまった。

そのスピードは瞬時加速ほどでは無いとしても、不意を突くには十分な加速力を持っている。

「そういう睦月も、あっさり切り返してくるじゃねえかよ」

「伊達に束さん（あの人）の所には居なかつたんでね！」

雪片とビームサーベルがぶつかり合い、火花を散らす。

やはり剣道経験者、接近戦の読み合いじゃこつちが不利か・・・機体ダメージが着実に増してる。でも、

「やられるだけっていうのは避けたいね」

「っ!」

襟元の多目的グレネードを起動と同時に発射。至近距離でフラッシュグレネードが炸裂する。

強烈な光はISの防御機能によって搭乗者の安全なレベルまで一瞬で対応されるが、その一瞬があれば充分だ。

「つう・・・眩し過ぎるだろ今・・・の・・・」

「油断大敵、不意打ちには注意しないとね」

振り向いた一夏の目の前にロングブレードライフルの銃口を突き付けてニヤリと笑う。

「・・・参った。零距离でソイツは撃たれたくない」

ひきつった笑顔でそう言う一夏に、ライフルを降ろす事で答える。

まあコレの威力は代表対抗戦の時に見せてるから、零距离で撃たれたらどうなるか解ってるんだろう。

「まさか、流石にこの距離で撃つ気はないよ」

「どうだか。っと、向こうも終わったみたいだな」

身体を振り向かせ、後ろを見ると、

「しゃきーん」

何かドヤ顔してポーズと目が合った。その後ろでは機体の所々が損傷したオルコットさんが意気消沈気味に溜め息を吐いていた。

「・・・簪、何してるのさ」

「決めポーズ」

うん見事なサンライズバースだ。ちゃんと刃先に光が反射するよ
うな位置にいるし。

備え付けの時計を見ると、アリーナ閉館の時間が迫っていた。

「そろそろ良い時間だね。終わりにしようか」

「だな。セシリア、更識、今日はもう終わりだつてよ〜!」

「わかりましたわ」

「わかった」

片付けをして軽く身体を解した後、僕達は観戦していた他の専用機持ちの皆と連れだつてアリーナを後にした。

その日の夜。寮の部屋にて。

「・・・睦月!」

「あ、おかえり〜。つてどうしたの?」

ヘイズルの各種データを整理していると、飲み物を買に行っていた簪が何やら慌てた様子で戻ってきた。

何か大事でも起こったのだろうか?

「妙な噂が流れてる」

「噂?」

神妙な顔つきの簪に首を傾げて返す。

ここは僕と一夏というイレギュラーが居るけど、女子校だ。噂話には事欠かないだろう。

でも簪が慌てる程の噂ってなんだろうか?

「明後日のトーナメントで優勝したら・・・」

「したら?」

「睦月と織斑君、どちらかと付き合えるって」

「・・・」。(思考停止)

「ふえ!? な、なな、何それえ!」

何がどうしてどうやってそんな噂が流れたの!?

というか僕らの知らない所で僕らが賞品扱いされてるし!?

「他の女子は皆本気になっちゃってるみたい」

「hahaha! Nice joke.」

思わず英語で喋っちゃったよ。

うわあ、敗北は許されないなこれ・・・負けたらそこでおしまいだ。頭を抑えて混乱を沈めようとしていると、部屋にノックの音が響いた。

簀がドアを開けると、そこには箒さんが立っていた。

「篠ノ之さん？」

「すまない、扶桑は居るか」

「どうしたの箒さん？」

呼ばれたようなのでベッドから立ち上がり、向かうと、

「扶桑、すまない！」

物凄い勢いで謝られた。うん、何故に。

今日は何かと混乱させらる日だなあ・・・。

「今流れている噂があるだろう」

「あー、トーナメント優勝者は僕と一夏のどちらかと付き合えるってヤツかな」

僕が答えると、箒さんは気まずそうに頷いた。

そして今にも土下座してしまいそうなオーラを纏ってこう言った。

「その噂の原因は・・・私だ」

「・・・はい？」

「どうやら明後日のトーナメント。ただ事ではすみそうに無いみたいです。」

#11 真相、トーナメント開幕

「あー、つまり箒さんがトーナメントで優勝したら付き合っただけでいいって一夏に言ったのが誰かに聞かれてしまった、と」

「ああ・・・」

ベッドに座った箒さんが申し訳なさそうに頭を垂れる。

簪と視線を合わせてアイコンタクト。

(いやはや、中々に凄い噂の真相だね・・・)

(篠ノ之さんの宣言した場所も悪かったかも)

(昼休みの食堂じゃあ、ねえ)

秘密にするどころか寧ろ噂として拡散してくださいと言っているようなモノだ。

にしてもシャルロットが抜けてるのは何でだろう？

「デュノアはまだ入って日が浅いから、この手のイベントはもう少ししてから・・・だそうだ」

雰囲気で僕の言いたいことを悟ったのか、箒さんがそう答えてくれた。

まあ、シャルロットが女性だってバレる可能性が低くなるならそれで良いけどね。

「よし、噂の真相については分かったよ。対処も簡単だし」

「簡単・・・？」

「私達が優勝すれば良い、そう言うこと？睦月」

「うん、正解」

噂話を無効とするにはそれしかない。一夏ペアが勝った場合、相手であるオルコットさんが理由を付けて一夏に交際を申し込むだろう。

箒さんペアの場合、鳳さんと箒さんで一夏の取り合いが発生する。確実に。

シャルロットペアはまあ問題は無いとしても、注目度が増すからあまり好ましくない。

となると僕らが優勝するしか穏便に済ませる手段が無い。

「やはりそうなるか・・・」

「鳳さんとか全力で掛かってくるだろうから、どうなるか分からないけどね。これしか方法がない」

「すまない、世話をかける」

「まあでも、誰かが優勝して一夏を狙ってもどうにかかなりそうだけだね・・・」

鈍感を極めたような彼だ。今回の付き合ってもらって言葉も、買い物か何かかと勘違いしてそんな気がする。

その事を箒さんに言うと思いい当たる節があるのか、肩を落とした。

「ありえない、とは言えないな・・・昔から変な所で勘違いを起こす奴だったし」

「もういつそストレートに告白」

「うぐつ・・・その、それはだな、更識」

簪のあつさりとした物言いに箒さんがたじろぐ。

それが出来たらこんなことにはなっていないだろうね・・・。

「そこら辺は追々やろう、相談なら幾らでも聞くからさ」

「何から何まで、苦勞をかける」

「これくらい、どうってことないよ・・・さ、箒さんはそろそろ戻った方がよいよ、消灯時間が近い」

「もうそんな時間か・・・相談を聞いてもらってありがとう。明後日は宜しく頼む！」

時計を見て慌てた様子で箒さんが出ていった扉を見て思う。

「何時もあんな風に素直にお礼が言えれば少しは違うのに」

「・・・さらつと人の心を読むのは止めてよ簪」

そして、トーナメント当日。

何時もの第三アリーナの男子更衣室で僕達は組み合わせの発表を待っていた。

「・・・シャルロット、今日デユノア社からは誰が来てる？」

「婦人だよ。父さんは『別件』でいない」

「それは重畳、これで心置き無くやれる」

昨日の夕方に束さんから情報を貰って、出せる手を尽くした。

結果として婦人は黒、社長は白だったのではや容赦はない。束さんも何かウキウキしながらやってたし色々。

「じゃあ後はこのトーナメントを楽しむだけだなー」

「一夏、僕ら負けた場合、下手したら誰かと付き合うことになるんだよ？」

「買い物に付き合うって事だろ？特に問題ないだろ」

「はあ・・・」

斜め上をいくその言葉にシャルロットと揃って溜め息を吐く。

一夏は一度、女心について教わった方が良いかもしれない。この調子だと近い将来絶対苦労するし。

「お、組み合わせ出たぞ」

一夏の声に顔を上げると、投影ディスプレイにトーナメントの組み合わせが表示された。

トーナメントは学年別に行われ、それぞれAからFのブロックに別れて試合をしていく形式だ。

一日目の今日は第五試合までやるらしい。

「えー、っと僕は・・・あった」

「第一試合か、がんばれよ睦月」

Aブロック第一試合・・・相手は三組の女子二人か。
時間もない、簪と合流しよう。

「それじゃ、行ってくるよ」

「おう、勝ってこいー！」

「頑張ってるね、睦月」

二人の応援に片手を振ることで応え、僕は急ぎ足でピットへと向かった。

「初戦で専用機ペアかぁ・・・」

「や、優しくしてね？」

アリーナの空中、対峙した僕と簪に対戦相手の古津（ふるつ）さんと櫛木（くしき）さんがそう言ってきた。

古津さんはラファール・リヴァイヴ、櫛木さんは打鉄を使用している。ふむ、バランスの取れた機体チョイスだね。

「安心して、流星に苛烈な攻撃は控えるから」

まだISを扱いはじめて少ししか経ってない二人にロングブレードライフルとかは流星に撃てない。この前訓練でオルコットさんにちよつとチャージしたの撃ったら、「初心者には絶対に撃たないで下さいまし、ともすればトラウマになりかねませんわ」と言われちゃったからね。

「簪」

「機体に問題なし。何時でもやれる」

「声震えてるよ？」

「・・・き、キノセイジヤナイ？」

緊張からか、何だが動きがぎこちない簪。大丈夫・・・じゃないか。

「そうだ簪」

「ナニカナ？」

「トーナメント終わったら買い物付き合っただけ・・・良いかな？」

「・・・」

プライベートチャンネルで簪にそう提案する。

日常的な話題を出すと緊張解れやすいつてどこかの本に書いてあったし、これでどうだろうか？

実際、買いたいものあるしね。

「睦月」

「うん？」

「絶対だからね。嘘ついたらパルマ接射十連発だからね」

それ絶対に死ぬじゃないですかヤダー！

対戦相手の二人が「パルマ？」って言いながら首を傾げる。

まあ、二人がこの試合で知ることは無いだろう。

【カウントダウン開始】

アナウンスが聞こえた途端、会場全体の空気が変わる。

来賓の方々に特と見せよう、僕らの戦いを。

「簪っ、駆け抜けるよ！」

「当然！」

【試合開始】

始まりのサイレンが鳴り響き、僕達は空を舞った。

#12 無自覚な鬼畜

「苛烈な攻撃はしないんじゃないやなかったの、睦月？」

「え、序の口でしょ？」

「いやあああああ!!」

ガンⅡカタの真似事をしながら二人同時にビームライフルで攻撃する。

連射速度を絞ってるし、リロードも隙を見せてる。それに両腕のシールドブースター装備してないからかなりハンデだけど。近接攻撃してないし。

試合開始からはや三分。こちらはノーダメージだ。

相手ペアは残りシールドエネルギー二桁つてところかな。

「私動かなくても十分なんじゃない？」

「まさか。山嵐の牽制がなかったらこうはならなかったよ」

開始直後に打鉄式式の山嵐によるミサイルでの牽制。そこからヘイズルのビームライフルで削っていく。

作戦も何もなく、自然とこの形になってしまった。

「チエックメイト」

「くうっ！」

「何も出来なかった・・・」

左右同時にトリガーを引き、打鉄とラファールのシールドエネルギーを零にする。

【第一試合終了 勝者 扶桑・更識ペア】

終わりを告げるサイレンとアナウンスが流れ、僕達はお互に一礼して。ピットへと下がった。

「睦月、絶対お前腹黒だろ」

「相手に手を出させずにノーダメージ勝利・・・凄いや言うよりえげつないね」

「そんなバカな」

ピットに戻った僕と簪を迎えてくれたのは一夏とシャルロットだった。

いやいや手加減したよちゃんと。普段の訓練よりも手抜きだったよ。

「睦月は時折すごく鬼畜になる」

「ならないよっ!?!」

鬼畜って・・・そこまで酷いことした覚えはないんだけど。

「シールドブラスターで壁に固定して零距离でビームライフル連射したのにな?」

「わざわざセシリアさんの武装全部潰してから相手の苦手な接近戦しかけたのにな?」

「スタングレネードで麻痺した所にありつただけの武装叩き込んだことあるのにな?」

「うん、僕が悪かったです」

上から一夏、シャルロット、簪とそれぞれ言われる。

どれも訓練、というか模擬戦中にやった事だ。

あれ、僕って結構ヤバイ?

「何にせよ、勝った・・・次は、織斑君試合?」

「だな。相手が量産機でも油断はできねえ、全力でやるさ」

拳をぐっと握りしめ、一夏がそう意気込む。

ほぼ毎日放課後に訓練してたんだ、早々遅れは取らないだろう。オルコットさんのブルーティアーズも居るから白式もかなり動きやすい筈だ。

「一夏、勝ってきてね」

「応!」

拳と拳をコツンとぶつけ合う。

何て言うか、青春っぽくていいなこれ。

「睦月、先に観客席に行ってるね」

「了解、少ししたら僕も行くよ」

別のピットへと向かった一夏に次いで、携帯片手に簪が出ていった。布仏さんに呼ばれたみたいだね。

二人を見送ってから、待機用のベンチに置いたタオルを手に取り顔を拭く。短い試合だったとは言え、汗の量は凄いことになっている。ベンチに腰かけたシャルロットの隣に座る。

「ねえ、睦月」

「うん？」

「その・・・ありがとう」

不意にシャルロットがじつと僕を見ながらそう言った。

突然の事に思わず腕を拭いていた手が止まる。

「僕の事、助けようとしてくれて。ありがとうって・・・変なタイミングだけど、言っておきたくて」

「ああ・・・」

言葉の意味に納得して僕は頷いた。

何と言うか、その律儀さに笑みを浮かべてしまう。

「どういたしましたして、かな。僕自身は大したことやってないけど」

「篠ノ之博士を動かしただけでも凄いやと思うんだけど・・・」

そうだろうか？僕としては家族にちよつとしたお願いをした感じなんだけど・・・お願いの規模がデカイのは自覚してるけどね。

置いておいたスポーツドリンクの入った水筒を開け、一口飲む。

「仲間を信じ、仲間を助けよ」

「え？」

「前に読んだライトノベルの台詞でね」

中々面白い内容だったから印象に残ってたんだよね。武偵格好いいし。

かつての世界で高校時代の愛読書だったなあ。

「シャルロットはもう僕たちの友達だ。だから何があっても助けるよ。大切、だからね」

「……」

「何も返されないと流石に恥ずかしいんだけど……」

沈黙したシャルロットに視線を向けると、目が合った。

その瞳からは涙が流れていた。

「シャルロット？」

「ごめん……何だか、嬉しくて……睦月？」

はにかみながらそう言うシャルロットの頭を撫でる。

安心させるようにゆつくりと。

「大丈夫だよ」

「うん……ねえ睦月。少し、こうさせて……」

撫でていた手を握ってシャルロットが僕に寄りかかってきた。

「わわっ、シャルロット、今の僕汗臭いよ!?!」

「シャル」

「え?」

「僕の愛称、そう呼んで?」

至近距離から上目遣いでそう言われ心臓の鼓動が早くなる。

握られた手が熱く、これが現実だと思い知らされる。

「……シャル」

「うん……睦月」

噛み締めるようにゆつくりと僕の名を呼んだシャルロット……シャルは満面の笑みを浮かべ、それを見た僕の心臓の鼓動はさらに早さを増す。

「え、と……その「カシャツ」……カシャツ?」

「え?……あ」

不意に鳴ったシャッター音、その方向に顔を向けると……

「いやあ、第一試合終了インタビューしようとか来たけど、思わぬベストショットが撮れちゃったよ」

カメラ片手に超爽やかな笑顔をした薫 薫子先輩がピット入り口のドアに立っていた。

今の状況……端から見れば男同士が抱き合っているような状態。あ、これヤバイね。

「……………」

「……………じゃ、まだ写真撮る系の仕事があるのでこれで!」

「一夏の寝顔写真!!」

ダツシユでピットから去ろうとした黛先輩を叫んで止める。この『ネタ』、彼女が止まらない筈がない……………!

「……………」

「……………」

振り向いた先輩と睨み合うこと数秒、先輩がにこやかな笑顔とともに親指を立てた。

「オーケー、この事は秘密にしよう!」

「データは後で送ります……………」

「毎度ありいゝ、じゃ!」

陸上選手もかくやと言わんばかりのスピードで黛先輩は駆けていった……………ごめん、一夏。君の犠牲は忘れない。

「なんだか変な感じになっちゃったね?」

「また汗が出ちゃったよ……………冷や汗が」

試合とはまた違った疲労感から思いきり溜め息を吐く。

こんな調子で大丈夫だろうか、今回のトーナメント……………。

「ところで、シャル」

「何?」

「まだ離れないのかな?」

「ごめんもうちよつと」

後日、寝顔写真集が秘密裏に売買されている事に気付いた一夏の悲鳴が学園に響き渡るが、それはまた別の話。

……………購入者には黒いスーツの教師が居たとか居なかったとか。

#13 デュノア

「圧倒的だね、ボーデヴィツヒさん」

「二対一の近接戦じゃかなり強いよねアレ」

一回戦、第三試合。ジャージに着替えた僕と簪は観客席に座ってジューズ片手に観戦していた。選手であるシャルとボーデヴィツヒさんのペアは開始から一分足らずで相手ペアを圧倒していた。

「ラウラの機体はドイツに居たときも凄かったからな。近接戦じゃ負けなしだ」

第二試合を終え、僕達と合流した一夏がスポーツドリンクを飲んでそう言う。

一夏ペアの結果は言わずもがな、勝利だ。それも一分弱というハイスピードで。

「A. I. C. か・・・厄介だね」

「ともすれば近接戦は封印しなければならぬですわね」

オルコットさんの言葉に頷きつつ、ジューズを飲んで息を吐く。

A. I. C.・・・アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略称で、対象とした存在の動きを止めてしまうという反則じみた効果を持つている。

ボーデヴィツヒさんの駆る第三世代IS、シユヴァルツエア・レーゲンにはその試作品が搭載されている。

見た感じ、掌から放射状に一メートル位に展開できるみたいだ。

オルコットさんの言う通り、接近戦は下手に仕掛けられないな・・・、良く見ると、実弾による攻撃も止められてるし。

「デュノアさんの操縦技術も侮れない」

「だな・・・付かず離れず、相手にとってやりにくい距離で削つていつてる」

シャルの機体、第二世代ISラファール・リヴァイヴ カスタムII。

スペックを見た限り、中距離高機動戦を得意とするラファール・リヴァイヴの性能をアップグレードしたもののようだ。

以前、シャル本人に教えて貰ったけど、元々量産機であるラファール

ルの初期武装を全て外す事で、拡張領域の容量を増やしているらしい。

「厳しい戦いになるね・・・」

手数が多しシャル、近接殺しのボーデヴィツヒさん。真っ向から戦いたくないペアだなあ・・・。

そう思いつつジュースを飲み干すと、試合終了のサイレンが鳴った。

【勝者 デュノア・ボーデヴィツヒ ペア】

IS学園でトーナメントが行われていたその頃、フランス、とつくに就業時間を過ぎたデュノア社の社長室とオフィスは普段では考えられない程慌ただしかった。

「社長、先程の件の裏付けが取れました」

「そうか、わかった。後でデータを纏めておいてくれ」

「わかりました」

急ぎ足で社長室から出ていった部下を見送って、デュノア社社長、アレックス・デュノアはデスクに両肘をついて息を吐いた。

「・・・社長から話を聞いたときは半信半疑でしたが、ここまで来ると信じざるおえませんね」

「私とて半信半疑だったさ。だが、こうもリークされた情報の尽くに裏付けが取れてしまうとな・・・」

秘書から渡されたコーヒーを一口飲み込んで、アレックスは苦笑いを浮かべた。

ここ最近の疲労感からか、白髪が増えてきた頭を撫で付ける。

社長夫人、フィーネ・デュノアの裏情報がアレックスへと伝えられたのは、ほんの二日前、防音壁に囲まれた自室での出来事だった。

社内の人間でも限られた人間しか知らない秘匿内線を使って、娘で

あるシャルロットの友人を名乗る者は、合成音声によって加工された声でこう言った。

『貴方の奥様、どうにもきな臭いですよ?』

そして伝えられる裏情報に次ぐ裏情報。ISの開発費横領、それを使つての豪遊、浮気、女性権利団体への金銭寄付・・・アレックスですら把握していなかった情報を『友人』はつらつらと話していった。

『君は・・・何が望みだ』

『シャルロットさんの平穩ですよ。下らない人間の下らない目的に利用されることが無く学園生活を送れること。それが望みです』

即答だった。

アレックスのいくつもの意味を持つ問いに、『友人』は一切の迷い無くそう答えた。

『・・・』

成程、とアレックスは沈黙の中そう思った。

『友人』が教えた情報、それを使つてフィーネを業界から消せと、言外にそう言ったのだろう。

もしそうしなければ『友人』自らが動くのだろう。衰退しかかつているとは言え、大企業の秘匿回線に割り込み、アレックスですら知らない婦人の情報を持った存在だ。

ともすれば、デユノア社を消し去ることも可能なのかもしれない。

『ああ、そうだ。一つ質問が』

『・・・何かね?』

この後に及んで何を問うと言うのか。

恐怖と苛立ち混じりに返した言葉に、『友人』は先程までの軽い口調を止めて、声を発した。

『・・・貴方は、シャルロットを愛していますか?』

『っー!・当たり前だ!!』

その懐疑の籠った声に激昂し、紅茶の入ったカップが割れるのも構わず高級木で出来たテーブルに叩きつける。

『愛しているさ、愛しているとも!私の最愛の女性が産んでくれた子なんだぞ!』

『最愛の女性・・・ですか』

『ああそうとも。私はあの女とは結婚などしたく無かった・・・家柄に縛られ、欲に溺れたあんな女に情愛など捧げるものか・・・』

前社長からの命令による、政略結婚。

拒否もした、反抗もした。だがそれらは空しく押さえられ、最愛の女性と切り離されてしまった。

それでも隠れながらに逢瀬を続け、生活の支援もした。

『前社長が死に、暫く経って離婚も考えた・・・だが無理だったんだ』
『女性権利団体、ですね』

『ああ、そうだ。あの女は裏で手を回してたんだ。何かあれば連中が動く。今の世の中だ、どうなるかなんて分かりきっていただろう・・・』
いざとなれば、女性権利団体を動かして、デユノア社の全てを奪う魂胆だったのだろう。それ故に離婚は出来なかった。

『今でもそうだ。私が今いる部屋以外は常に監視の目がある。連中さえ、居なければ・・・！』

『わかりました』

『・・・何?』

怒りに拳を震わせるアレックスの耳に、『友人』の声が届いた。

『ようは、その邪魔な連中が居なければ貴方は好きなように動けると。そう言った解釈で宜しいですね?』

『ああそうだ。女性権利団体さえ動かなければあの女を降ろすことが出来る。だがそんな事は・・・』

『では、こちらで女性権利団体の動きを暫く止めましょう』

『・・・は?』

『そうですね・・・期間にして四日ほどなら止められます。その間に貴方はやるべきことを成せばいい』

事も無げに、あっさりと。まるで明日の予定を決めるかのような気軽さで『友人』はそう言ったのけた。

その声音は不思議と、アレックスを納得させた。この『友人』ならば、出来てしまうのだろうと。

『君は・・・何者なんだ』

始まりと同じ問いをアレックスは投げ掛ける。

その問いに『友人』は合成音声ではない、素の声でこう答えた。
『ーーただの、学生ですよ』

#14 VS 鈴&箒

大会二日目、昨日の予選では専用機組は全員見事勝利を勝ち取った。

そして今日の準々決勝第一試合は・・・

「こうして戦うのは初めてね、睦月」

「よろしく頼む」

僕、簪ペア対箒さん、凰さんペアである。

初っぱなから専用機持ちとですか・・・昨日の試合じゃ龍砲の面制圧と箒さんの剣技によって相手に手を出させずに勝っていた。

手を抜いて相手をする事なんて出来ないな、ここからは。

「お手柔らかに頼むよ、凰さん」

「鈴でいいわよ。呼びにくいでしょ？」

「じゃあ、鈴さん」

「なんか他人行儀っぽいけど、まあ良いわ。悪いけど、全力で行くからね！」

ビシツと甲龍を展開した指をこちらに向けて、鈴さんは不敵に笑った。

それとは対照的に箒さんは口を真一文字に結んで、真剣そのものだ。

『箒さん』

『なんだ？』

『例の件は気にせず、楽しもう』

プライベートチャネルで箒さんにそう話し掛ける。何か緊張してみたいだしね。

『・・・そうだな。わかった』

一つ頷いて箒さんは肩の力を抜いて打鉄の刀を構えた。

敵に塩を送るみたいだけど、ほっとけないのは性分だから仕方ないよね。

「簪、今回から連携やるよ」

「了解、睦月となら出来る」

「心強いね」

「パートナーですから」

ニヤリと笑いあつて、僕は両手のビームライフルを、簪は夢現を構える。

さあ、準備万端。始めようか。

【battle start】

「のっけからハイスピードだな・・・」

「相変わらずふそつちの機体は見た目によらず速いね」

試合開始直後からシールドブースターの面目躍如と言わんばかりの超高速戦を繰り広げるヘイズルを、一夏達専用機組と合流した布仏は観客席から見ている。

見ていた、と言つても目で追うのがやっとである。

「鈴さんも対処しにくいでしょうね」

「狙おうが狙うまいが攻撃が当たらないのではな」

「あの機動は相手にしたくないなあ・・・」

セシリアの言葉に、冷や汗を流しながらラウラとシャルロットが試合から目を逸らさず思っていることを口にする。

「ん、更識が動いたぞ」

「箒さんもですわね・・・」

正に嵐の如きヘイズルの攻撃の最中に二機の打鉄が突入、互いの刃をぶつけ合う。

銃声と剣戟の音が鳴り響き、四機のISのシールドエネルギーを減らす。

そして簪対箒、睦月対鈴音の構図になると、一夏達の誰もが思ったその時、

「はっ」

「何が起きたの・・・!?」

簪が鈴音に、睦月が箒へと攻撃を加えていたのだ。

一瞬の出来事にラウラが目を見開いて驚愕を口にする。

「あの一瞬で互いの立ち位置を変えたのか・・・!」

「ありえんのかよ、そんなの・・・」

睦月と簪との距離は目測で凡そ二十メートルは離れていたのだ。シールドブースターを起動しているヘイズルはまさしく、打鉄式式が戦闘機動を行いながら一瞬で移動するのは難しい筈だ。

「まさか、瞬時加速ですか?」

「予備動作も無しにか?出来るのかそんなの」

瞬時加速は機体外部に溜め込んだエネルギーを爆発させ、一気に加速するという、ISを使う上での高等技能とされる。

エネルギーのチャージ、進行方向へのスラストの微調整、減速にかけるエネルギーの演算等々をコンマ数秒の世界で行わなければならない。

それらを一切感付かせることなくやる等、恐らく三年生でも出来るのは数人だけだろう。

「鈴さんと箒さん、押されてるね・・・」

「戦う相手が急に替わったんだ、無理もない」

「二人ともああいった捌め手は苦手そうだからね」

そう言い合っている傍から、鈴音と箒はヘイズルと打鉄式式による攻撃によって完全に包囲されてしまっていた。

「何なのよ今の!?!」

「やりにくいな、流石に」

背中合わせに立つ鈴さんと箒さんの相対しながら、ビームライフルのカートリッジを交換する。

立ち位置の高速切り換え、何とか上手く決まってよかったよ。

「貴女達は完全に包囲されている、大人しく出てきなさい」
「もう出てるわ!!」

簪のボケに律儀に鈴さんがツツコミを入れる。
どうにかこっちに有利な状況に持ってこれたけど、流石にもう油断も無いか。

「扶桑、さっきの入れ替わり・・・」

「僕と簪が考えた作戦だよ」

箒さんの問いに油断なく銃口を向けながら答える。

位置替えの度に簪が瞬時加速を使わないと行けないし気づかれな
いようにしないといけないから、多用は出来ないけどね。

左手のビームライフルをブルパップマシンガンに切り換える。

【残りシールドエネルギー 568 パートナー、残りシールドエネルギー 429】

簪のシールドエネルギーがそろそろ心許ないか・・・鈴さんと箒さんがアイコンタクトしてるし、油断は出来ないか。

『簪』

『わかってる。無茶しないでね』

『二人がどう動くか分からないから、確約しかねるかな』

プライベートチャネルで簪にそう言っつて、動き始めた二人へと加速しながら弾をばら蒔く。

「ちい!!しつっこい!!」

「謙虚じゃ居られないからね!!」

ブルパップマシンガンの弾幕が簪へと向かおうとする甲龍のシールドエネルギーを削る。

ビームライフルで箒さんの動きを牽制しつつ、注意を此方に向け、二人の動きを制限する。

「くっ・・・衝撃砲は、やっぱりキツイなあ・・・!」

お返しとばかりに弾幕を掻い潜って放たれる龍砲の攻撃がヘイズルのシールドエネルギーを削っていく。

箒さんも順応してきたのか距離を詰め始めている。

よし、二人の注意が僕に集中している。これなら・・・!

「睦月!!」

「了解!」

簀の掛け声に呼応してシールドブースターを下向きに起動、瞬時加速ばりのスピードで急上昇を行う。

そしてそれと入れ替わるように上空から数多のミサイルが降り注いだ。

「全弾、着弾を確認。．．どっちかを仕留め損ねた」

ヘイズルのセンサーにも、反応が一つ検出されている。さて、どっちが来る．．．?

油断なく爆煙を見ていると、銀色の何かが煙の中を切り裂いて打鉄式式の非固定武装に突き刺さった。

「くう!?!」

「打鉄の．．．刀?」

ヘイズルのカメラアイがその姿を捉える。

紛れもなく、先程まで箒さんが握っていた打鉄の刀だ。

簡単に箒さんが武器を投げるとは思わない。だとしたら残ったのは．．．!

「鈴さんか!」

「ご名答!!」

背後から降り下ろされた二本の青龍刀を振り向きながら右腕のシールドブースターで何とか受け止める。

それなり以上の重量を持つ刃に、シールドの装甲が音を立ててひしゃげる。

『睦月、ごめん! バランサーがイカれた．．戦闘機動できそうにない』

『了解．．．!』

シールドブースターから火花が見えたので直ぐ様パージして後退するが、鈴さんがそれを薙ぎ払って爆発の余波を使って肉薄してくる。

そう簡単に距離を開けられないか．．．!

「こちとら負けられない理由があるのよ!」

「それは僕も同じだ!」

抜き放ったビームサーベルと青龍刀が幾度もぶつかり合う。

【残りシールドエネルギー 314】

近接戦闘の得手不得手の差か、気付けばかなり削られてしまった。横薙ぎに振るわれた青龍刀を左腕のシールドブースターで弾いて無理矢理に距離を開ける。

ビームサーベルを格納し、ロングブレードライフルを展開。ヒートサーベルモードで起動させる。

「ご自慢の射撃はやらないのかしら？」

「最後はそっちの得意距離でやろうかなってね」

距離を離れたと言ってもほんの少した。鈴さんならこちらがビームライフルを構える前に踏み込んでこれるだろう。

ロングヒートサーベルを肩に担ぐように構える。

それに答えるように鈴さんも青龍刀を連結して構える。

「いざ!!」

掛け声とともに背中中のシールドブースターを出力全開で起動、一気に距離を詰め、渾身の力を持って刃を叩きつけるー!!

斬!!

「く、うう!!」

超高熱の刃は受け止めようとした青龍刀の刃ごと、甲龍のシールドバリアを溶断した。

鈴さんが溜め息まじりに声を出す。

「私たちの負けかあ・・・」

【battle end】

試合終了の合図と同時に盛大な拍手がアリーナに響き渡った。

#15 白騎士と黒兎・前編

「だっはあー！負けた負けた！」

一年生の専用機組が集まる観客席にどかりと鈴音が腰を降ろす。その隣に疲れた様子の箒がタオルで顔を拭いながら座った。

「お疲れさま、鈴さん」

「すごかったよ〜」

「ありがと、只で負ける気なんてさらさら無いわ」

布仏からスポーツドリンクを受け取りながら八重歯を見せて鈴音は笑った。その表情からは悔しさは感じられず、楽しかったという感情が読み取れる。

準々決勝を終え、十二時近く。準決勝の対戦カードにアリーナの熱気が高まっていた。

「さっきよりも人が増えてるね・・・」

「男性操縦者同士、初の公式戦での試合だからな、こうもなるだろう」シャルロットが回りを見渡しながらそう言うのと、箒がそれに答えた。

そう、準決勝は睦月ペア対一夏ペアという、注目すべきカードなのだ。

この試合で勝った方が、シード権を獲得し一気に決勝戦まで駒を進めたシャルロットペアと戦う事となる。

「にしてもシャルル達はシード権で試合数少ないわよね」

「予選で二試合戦っただけだからな。データの収集にはいささか不十分だ」

「決勝戦ではそうは言ってもらえないわよ」

布仏から貰ったポップコーンを食べるラウラに苦笑いしつつ鈴音はそう言った。

片や恐らく一年生ではトップクラスの實力を誇る睦月ペア。

片や遠近特化機体を操る、爆発力の高い一夏ペア。

どちらにしても余裕を持った試合など出来ないだろう。油断すれば一瞬で負ける相手である。

「だとしても、勝ってみせるさ」

「お、ヤル気満々ね」

「シャルと私は無敵だからな！」

腕を組んでフフンと笑うラウラ。それを見てその場に居た全員がこう思った。

((か、かわいい・・・))

「よう、睦月」

「やあ、一夏」

試合開始二分钟前、アリーナの中央で僕たちは相對した。

・・・相手は遠距離特化のブルー・ティアーズと近接特化の白式。下手をすればあっさり負けるだろう。

「さっきの試合、凄かったじゃねえか」

「ありがとう。でも準々決勝であれだけやったんだ。この準決勝はもつと凄くしないとね」

「だな。・・・あっさり落ちるなよ？」

「そっちこそ」

言い合ってお互いに武器を構える。一夏は雪片式型、僕はマシンガン。

「セシリア、勝つぞ」

「当たり前ですわ！」

「簪、派手に行こう」

「うん。絶対に勝つ」

呼び掛けあつて士気を高める。さあ、戦いの前準備は終わった。

あとは、全力でぶつかるのみ!!

【battle start】

「おおっ!!」

「そう来ると思ったよ!!」

試合開始の合図が鳴った瞬間、一夏が僕へと急加速する。相変わらず馬鹿げた加速力だなあ。

そう思いながら左手の改良型シールドブースターを構え、拡散粒子砲を発射。

しかし、

「んなもん、効かねえ!」

「うそお!」

あろうことか一夏は当たりそうな弾だけ零落白夜を『瞬間的に発動』して無効化しながら突き進んできた。

驚きながらも右手のマシンガンで牽制弾を撃ちながら後退しつつ、左手に実弾型のライフルを展開。

そのまま一夏の影に隠れたオルコットさんへとトリガーを引く。

「くっ、そう簡単には行きませんか!」

「当然!」

「私を忘れない方が良い」

「ちっ、更識か!」

追い縋ってきた一夏を止めるように空中から簪が

荷電粒子砲「春雷」を放ちながら夢現を構えて突撃する。

シールドブースターを起動、白式を簪に任せ、オルコットさんへと突撃を仕掛ける。

「今回こそ、その装甲を撃ち抜いて見せますわ!」

「出来るものなら・・・」

スターライトmkⅢの照準が此方をロックオンするよりも速くサイドブースターを吹かし、射線から離れながらライフルの銃身に取り付けられたグレネードを発射する。

「やってみて!!」

「っっ!?!」

着弾、爆発音。

確実に直撃はしたけど、これで終わると思わない。現に、

「・・・まさか、短期間でここまで正確な操作になるなんて」

「人もISも、常に進化し続けるものですよ」

『ビットによって撃ち抜かれた』マシンガンを誘爆する前に投げ捨てる。

グレネードが着弾した瞬間、ビットを一基だけ動かして、被弾しているにも拘わらず武器を撃ち抜くなんて・・・

「ニュータイプみたいだな、全く」

「次は機体に当ててみせますわ!」

薄くなつた煙から残りのビットが全基射出され、僕を取り囲もうと動き出す。

当然、直撃する気は無い。

【全シールドブラスター、瞬時加速スタンバイ】

今まで見せなかったこの技、ここで使うのでしょうか。

・・・東さんの研究所で訓練の時は常に使ってたなあ・・・

あ、やばい思い出したら泣けてきた。

【右腕 ロングブレードライフル 展開。カートリッジ内、全エネルギーチャージ】

確かな重量感とともに顕現したロングブレードライフルを、さながら突撃槍のように腰だめに構える。

ビットの攻撃を幾つか掠りながらも避け続け機を待つ。

「ちよこまかと・・・!」

「行くよ、オルコットさん」

【スタンバイオーケー。ロングブレードライフル、チャージ完了】

視界にメッセージが表れたと同時に、僕は叫んだ。

「オーファランクス!!」

「……………織斑先生、今の見えました？」

「……………ギリギリな」

アリーナにあるオペレーションルームで試合を観ていた山田真耶と織斑千冬は目の前で起こった事を処理しきれないでいた。

ヘイズルが一瞬ブレたと思ったなら、ブルーティアーズの装甲にロングブレードライフルを突き刺してそのまま零距离射撃をやっていたのだ。

「瞬時加速だろうな……………」

「ですが、あのスピードは」

「ああ。普通じゃない」

何せヘイズルがブルーティアーズに銃身を突き立てて漸く遅れて瞬時加速発動時特有の音が鳴ったのだ。その音ですら通常よりも大きかったが。

つまりはあの一瞬、ヘイズルは『音』を超えていたのだ。

ロングブレードライフルが引き抜かれ、非固定武装を破壊されたブルーティアーズが、高度を落とし始める。

搭乗者であるセシリアは驚愕の表情を浮かべていた。

「あれで『第三代扱い』だと？笑わせる、どう取り繕ってもその域ではないだろうが」

一部の教師だけに教えられたヘイズルのカタログスペック。千冬はそれを知る一人である。

『試作第四世代型IS』、ヘイズル〔改〕。

その性能は競技用に付けられたリミッターが有っても十分オーバースペックだった。

出力系統は軒並み現行機を遥かに上回り、特有の武装の数々は、リミッターを解除すれば第二世代機までは一撃で戦闘不能に出来ると言う。

この情報を見たとき、千冬ですら「バカじゃないか？」と思わず溢した程だ。

それに加えて製作者は『親友』の篠ノ之束だと知り最早溜め息も出

なかった。

「オルコットさん、大丈夫でしょうか？」

「何、アイツだって成長している。只ではやられんだろうさ。・・・動くぞ」

ふらつきながらもバランスを整えたブルーティアーズ、セシリアの目をモニター越しに見て千冬はニヤリと笑った。

「この試合、中々に面白くなるな・・・」

#16 白騎士と黒兎・後編

「セシリア!？」

「行かせない．．．!」

「更識．．．!」

春雷を放つて、睦月の攻撃によってダメージを受けたブルーティーズの援護に向かおうとする織斑君を止める。

今、睦月の元に行かせるわけにはいかない。

織斑君のペアを相手する際厄介なのは、ブルーティーズによる援護というのは睦月が言っていた。

オルコットさんの射撃精度は日に日に増しているし、ビットの操作技術も精密さに磨きがかかっている。下手に放置したらビットによつて動きを制限されて、白式の零落白夜によつて落とされかねない。

だからこそ。

「セシリアを先に狙ったのか．．．!」

「ご名答っ」

夢現と雪片式型をぶつけ合う。薙刀である夢現でリーチには勝るけど、出力の差か押されてしまう。

この操作技術の上がりよう．．．本当に初心者なの．．．？

夢現を手繰り、雪片を弾いて距離を開きながら春雷を続けて打ち込む。

「距離は．．．」

二発の荷電粒子砲を避けて、白式が力を溜め込む動作を見せる。

．．．マズイ!

「開かせねえ!!」

瞬時加速によつて開かれた距離を文字どおり一瞬で詰めた白式が零落白夜の蒼いエネルギー刃を振り降ろす。

夢現による防御はさっきの攻撃で無理だと解った。

．．．一か八か、やってみるしかない!

刹那、私は夢現を手放し、白式の腕の側面に向かつて右腕を伸ば

す。

睦月に貰ったこの武器（ちから）、今こそ使う！

「パルマ・フィオキーナ!!」

「なっ!？」

蒼白の閃光がシールドエネルギーに威力を減衰されながらも白式の装甲を焼く。

その衝撃によって零落白夜の軌道がずれ、左肩の非固定武装を切り裂いた。

「かすただけでこの威力・・・一撃必殺は、ウソじゃない、か」

【残りシールドエネルギー 204】

一瞬前まで500はあったシールドエネルギーがごっそりと無くなっていく。

使えなくなった非固定武装をパージ、残った右の非固定武装を背中に移動して何とかバランスを保つ。

これで山嵐は使えなくなった。それにスラスタの数も減ったから機動力も落ちた。

でも、

【白式、残りエネルギーシールド 196】

後がないのは織斑君も同じだ。戦闘機動しながら零落白夜を使えるのは後一度が限度の筈。

「つつ・・・掌からビームって、とんでもない武器だな」

「睦月が造ってくれた、大切な武器だから」

「アイツ、IS用の武器まで造れんのかよ・・・ハイスペック過ぎだろ」

「織斑君には言われたくないと思う」

入学早々、代表候補生に模擬戦で勝利して、クラス代表トーナメントでは謎のISを撃破しているだけで十分過ぎる。

むしろそれで平凡だと言うならこの学園の大半のIS操縦者は凡人以下になってしまう。

『簪、瞬時加速行けそう?』

『一回なら。やっぱり白式と戦いたい?』

『男の子だからね』

ブルーティアーズの相手をしていた睦月からプライベートチャネルで通信が入る。

私としても、このままパルマだけで白式と戦うのはキツイ。

幸い、ブルーティアーズは私と同じく非固定武装の一つを破壊されている。

『了解、タイミングは睦月に任せる』

『・・・ありがとう』

了承の意を伝え、私は織斑君に気づかれないうちに瞬時加速の準備に入る。

バれてしまえば作戦は破綻するし、対応されてともすれば私達が負けてしまう。よく睦月はこれを実戦で使おうと思ったなあ。

『カウント。アイン』

睦月がカウントダウンを始める。

瞬時加速は準備を完了し、ヘイズルとの相対距離も確認した。

『ツヴァイ』

後はー、

『ドライ!!』

突っ込むのみ!!

【瞬時加速 起動】

「なっ、睦月!？」

「さっきぶり、一夏」

ほんの一瞬の間隙を突いて簪との位置を換え、一夏の前に立つ。

一夏からはいきなり僕が現れたように見えるだろうね。

「簪達との試合で使ったヤツか・・・」

「簪命名、『取り替え子（チェンジリング）』だよ」

ヨーロッパの伝承にある、妖精の逸話から取ったらしいけど、成る程ピツタリな名前だと思つたよ。

さて、と。

「悪いけど、倒させてもらうよ。一夏」

「はっ」

ロングブレードライフル、ブレードモード起動。

灼熱のその切っ先を向けると、一夏も鼻で一つ笑って雪片を構えた。

「残念だが、倒れるのはそっちだぜ」

一秒にも満たない沈黙。

そして、

「勝つのは僕（俺）だ!!」

急加速を持って互いの武器をぶつけ合う。

白式の残りエネルギーを見ても、零落白夜はここぞと言うとき以外は使えないだろう。だからこそこうやって何の懸念もなく刃を交わすことが出来る。

「お前との真剣勝負、そういやこれが初めてか、つと！」

「何だかんだ、そうかもっ、ね!!」

攻守を入れ換えながら火花を散らす。

やはり近接特化なだけあって此方のダメージが大きくなってしまふ。

でも、白式のシールドエネルギーも確かに削っている。勝てなくはないだろうけど、油断は出来ない。

「また近接戦上達したんじゃないか、睦月」

「毎度の訓練で一夏と戦ってないからね」

数にして三十合打ち合つて、鏑迫り合いに持ち込む。

その時、視界にメッセージが表れた。

『打鉄式 撃破』

ブルーティアーズ 撃破』

・・・相討ちに持ち込んだのか、簪。

ハイパーセンサーで確認すると、僕に向かって簪がサムズアップしていた。

『睦月、頑張つて』

プライベートチャネルで、そう伝えられる。

ああ、この勝負。絶対に負けられないな。

【ロングブレードライフル ジェネレーター出力上昇】

【全力全開!!】

「白式!!」

灼熱の刃が更に赤く染まり上がったのを見て一夏が弾かれるように後退した。

感付かれたか……。零落白夜を展開していない雪片式型は言つてしまえば少し頑丈なただの刀なのだ。だから無理矢理溶断しようと思つただけだ。

「恐ろしい事考えてたろ、今」

「何の事やら。それより一夏、気づいてる?」

【ロングブレードライフル 冷却開始 エネルギーカート

リッジ リロード】

「何をだ・・・っ!?!」

【左腕 シールドブースター起動】

ヘイズルから矢継ぎ早に情報が送られてくるなか、一夏が自分と僕との距離に気付いたが、もう遅い!

【シールドブースター ロック解除】

「飛べえ!!」

殴り付ける様に左腕から起動したシールドブースターを射出する。

直ぐ様ロングブレードライフルの照準をシールドブースターに合わせ、シールドが一夏の直近に至った瞬間、トリガーを引いた。

「しまっー」

放たれたビームによりシールドブースターが爆発。あの距離だ、確実に爆発に巻き込めた。

【白式 残りシールドエネルギー 47】

でも、ここで諦める一夏じゃない。

爆炎の尾を引きながら雪片を構えた白式が真つ直ぐに突っ込んでくる。

「おおおおおおおお!!」

「これで・・・!!」

即座にロングブレードライフルを投げ、右腕のシールドブースターを点火。殴り付けるのと同時に『瞬時に展開された零落白夜』の刃が振り上げられた。

「終わりだ!!」

轟ッ!!

装甲を潰す音と切り裂く音が響き、アリーナが静まり返る。

【ヘイズル 残りシールドエネルギー 7】

【白式 残りシールドエネルギー 0】

「僕の、勝ちだよ」

「ああ、悔しいな・・・」

力尽きたのか、凭れかかってきた一夏を受け止める。

左肩には、その機能を停止した雪片が突き刺さっていた。

観客達に見えるように右腕を天高く突き上げる。

【battle end】

その瞬間、沸き起こる歓声のアリーナを揺らした。

こうして、公式戦初の男性IS操縦者同士の対決は幕を閉じた。

#17 黒兎と白兎

準決勝が無事終わり、お昼休み。

皆と軽く食堂で昼食を食べた後、僕は校舎裏に一人移動して、ある人に電話をかけた。

「もっしー、束さんだよー!!君はー!」

「もっしー、睦月だよー!って何言わせるんですか!？」

「いやあ、むつくんなら私のポケに乗ってくれると信じてたよ!」

「もう・・・」

そのある人とは、天災科学者 篠ノ之 束さんである。

何故、束さんに電話したかというシャルロットの件で現状気になる点があるからだ。

「気になってるのはデュノア社の事だね?」

「はい・・・『動いて』ますか?」

「ちよっち待ってね」

カタカタと、携帯のスピーカーからキーボードを叩く音が少し聞こえた後、束さんが何処かニヤついた声を上げた。

「動いてる動いてる。今デュノア社の監視カメラと情報ハッキングしたんだけど、かなり楽しい事になってるよ。只の凡人だと思ってたけど、中々に面白いじゃないか」

束さんがこういう声で話す時は決まってえげつない事が起きている。つまり、デュノア社社長、アレックス・デュノアさんは相当な事をしているんだろう。

「一体、どうしてるんですか?」

「今IIS学園(そっち)にいる塵・・・社長夫人、だっけ?ソイツの裏情報あったじゃん。あれの証拠かき集めて、裁判起こそうとしてる」
ん?その話だと特に普通だと思っただけど・・・

疑問に思っていると、束さんが続きを話してくれた。

「それで私が面白いと思ったのがここからなんだけど。その社長夫人、別の国に新型の開発データを売ってたって情報、あったでしょ?デュノア社は衰退仕掛かっているとはいえフランスIIS企業の顔みた

いなモノ。それに泥を塗ったとして国に直訴。元からそうしようって考えてたのか、あつさりと通ってね」

「つまり？」

「社長夫人の国籍、裁判の結果がどうあれ無くなる」

「……うわあ……うわあ。えげつない。」

結果がどう転んだって社長夫人に未来は無いと決まってるとか。

「所得財産も社長が全部引き取って、違法なモノは国に返すんだってさ。社長夫人が空港に着くのと同時に畳み掛けるつもりみたいだね。ふふ、この社長楽しませてくれるじゃないか」

東さんがクツクツと笑う。

電話で会話した時は穏和そうな人だと思っただけど、だいぶ苛烈な事をするんだな……いや、それだけ鬱憤が溜まってるのか。

「良いものを見せて貰ったお礼にちよつとだけ手伝っちゃおうかなあ」

「はい。」

なんかサラリとヤバイことを東さんが言った気がする。手伝う、って……

「いやさ、このまま見ても良いんだけど。でもこのまま行くと女性権利団体とか言うアホな連中に絡まれるじゃん？今は私が偽の情報流しとめてるけどさ」

「もしかしなくても、フランスの女性権利団体を」

「社会的に消えてもらおうかと♪そうすればデュノア社は自由に動き回れるからね」

「……」

突拍子すぎて言葉が出ない。確かに東さんの言う通り、フランスの女性権利団体が無くなればデュノア社は大手を振って夫人を排斥する為に行動することが出来る。

でもその場合、ともすれば東さんが裏で動いているのがバレ易くなってしまう。

「なあんてね、消すのはウソだよ」

「え？」

「あんまり動き過ぎるのは良くないしね。精々が諸々の処理が終わ

るまで今みたいに動きを制限する程度だよ。飽くまでデユノア社の問題だし、そこまででしゃばる気は無いよ」

僕の内心を読んだかのように束さんがそう言った。

よかった・・・もしも実行して束さんの存在がバレてしまったら大問題になってしまう。デユノア社どころじゃなくなるのは確実だ。

僕のがままで束さんにそんな迷惑はかけたくない。

「むっくんは優しいねえ」

「そんなんじや・・・」

「いんや、優しいよ。十分過ぎる程に。こんな私にも心配してくれてるんだしね」

「心配するのは当たり前です。・・・大事な人ですから」

「・・・ふあ!？」

唐突に束さんが素っ頓狂な声を上げた。急にどうしたんだろう？

「束さん？」

「ああ、いやうん、えとそのああありがとうございます!？」

「ど、どういたしました?」

「あー、えーと、くーちゃんに変わるね!」

「へ、え?」

言うだけいって束さんは携帯をくーちゃん・・・クロエに渡したのががそこそと音が鳴る。

暫くそんな物音がしたあと、クロエの声がスピーカーから聞こえた。

「もしもし。お久しぶりですね、お兄様」

「久しぶり、クロエ。束さんどうしたの?」

「ちよつとエラーが発生してるみたいです。暫くしたら治まると思います」

「そ、そう」

エラーて・・・何だか毒舌になってるなあ。

困みにお兄様っていうのはクロエからそう呼んできて、それが定着しただけであって、僕が呼ばせてる訳じゃない。断じて無い。

というかクロエとは実際同年なんだけど、どうしてかそう呼びた

いらしい。

「そつちは元気だった？」

「はい。相変わらず束様は研究詰めです」

「はは、あんまり根詰め過ぎないように言っておいてね」

「わかってます。．．．そういえばお兄様、義足のメンテナンスはちゃんとしていますか？」

「．．．．．あ」

クロエの一言に身体がぴしりと固まる。

僕の両足はこの世界に来る前にあった交通事故によって無くなっ
てしまっている。今こうして歩いているのは束さんが造ってくれた
義足のおかげだ。今つかっているのは二代目で、人口皮膚を使ってい
るから、第三者からみれば普通の人間の足に見えるだろう。現にバレ
てないし。

．．．確か、最後にメンテナンスしたのって入学前日だったよう
な．．．．．

「はあ．．．お兄様は妙なところで天然、というか抜けていますから、
そんな事だろうと思っていました」

「あ、あはは．．．面目ない」

兄として恥ずかしい限りだ。

面と向かって話している訳じゃないのに、思わず頭を下げてしま
う。

「そうですね．．．え？その日は．．．わかりました」

「どうかした？」

「いえ、お兄様は確か五月に臨海学校がありましたよね？」

「うん、確かにあるね」

「束様がその時にメンテナンスしたいと言っているのですが」

「ん、わかったよ」

「ではそのように．．．くれぐれもメンテナンスの時までは無茶な行
動は控えてくださいね？」

「うん。善処するよ」

善処するとは言ったけど、臨海学校までそう期間は無いんだし、無

茶をする事なんてそうは無いと思うけど。

「ここは妹の言葉を素直に受け取っておこう。」

「それではそろそろ切りますね。・・・決勝戦、頑張ってください。応援しています」

「・・・ありがとう、またね」

携帯の通話終了のアイコンを押して、ジャージのポケットにしま
う。

クロエからの応援・・・次の決勝は何がなんでも負けられないな。

「よしっ」

決意新たに校舎裏を出る。そろそろ準備をする時間だ。

最後なんだ、派手に決めたいね。

決勝戦の相手はボーデヴィツヒさんとシヤル。

かつてボーデヴィツヒさんに言われた通り、全力で戦おう。

#18 風に駆ける黒兎

「待っていたぞ、扶桑」

「お待たせ、ボーデヴィツヒさん、シャル」

決勝戦。

アリーナの中央で先に待っていたボーデヴィツヒさん、シャルと相対する。

二人の機体情報は頭に叩き込んであるし、ヘイズルのデータベースにも入っている。

「にしても、午前中の試合から様変わりしたな。その機体」

「追加武装ありったけ載せたからね。今までの方法じゃ、対処出来ないよ。」

まじまじとヘイズルを見るボーデヴィツヒさんにおどけてそう答える。

胸部及び腹部に増加装甲であるフルアーマーユニットを。

腰部前面にサブアームユニット、左側面にワイヤーアンカー、右側面にビームサーベルをマウント。

両腕にはマウントラッチを増設、シールドブースターを計四基装備。背中には強化シールドブースターを装備。

極めつけに試作型ロングブレードライフルを両手に装備と、普段のヘイズルからかけ離れたシルエツトになっている。

といっても、ロングブレードライフルを除けば、研究所に居た頃の何時もの装備何だけど。

過剰火力？細かいことは気にしない。

「睦月は一人軍隊（ワンマンアーミー）でも目指してるの・・・？」

「いや、こうでもしないと研究所（あそこ）じゃ直ぐ倒されちゃったから」

「どんな生活環境なのそれって・・・」

「360度、全方向から鉛弾が飛んでくるような訓練ばっかだったよ」「うわぁ・・・」

シャルとボーデヴィツヒさんが揃ってげんなりとした顔をする。

うん、誰だっつてそんな反応になるよね。

同じ立ち位置だったら僕もそうなる。

さて、と。

ハイパーセンサーを使ってアリーナの観客席、そこから隔離された一角を見る。

貴賓席、十人居る中、右から三番目に目的の人物が居た。

・・・見つけたぞ。

化粧の濃い、見てからに自己顕示欲が強そうな顔をしている女性。デユノア夫人だ。

都合が良い。我欲で自分が調べようとした人間がどれ程のモノか、しっかりとその目に焼き付けてもらおう。

「睦月、大丈夫？」

「問題ないよ。・・・ああそうだ簪」

「何？」

「今回はプランBで行こう」

【試合開始10秒前】

僕の言葉を聞いて、隣に立つ簪がニヤリと笑いながら夢現をクルリと回して構える。

「オーケー、了解」

「プランB？」

「なんだそれは？」

シャルとボーデヴィツヒさんの問いにロングブレードライフルを構えて応える。

バックブースト準備開始。ロングブレードライフル、エネルギーカートリッジ、供給開始。

「ああ」

【試合開始】

「無いよそんなモノ!!」

合図と同時に後退。簪が前衛としてボーデヴィツヒさんへと向かう。

そして僕は連射（バースト）モードのロングブレードライフルの引

き金を飛翔しかけたシャルへと引いた。

「くっ……ホントに馬鹿げた火力だね！」

「初弾きつちり避けてるのによく言うよ！」

互いに円を描くように上昇しながら撃ち続ける。

シャルの駆るラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡは元となったラファール・リヴァイヴ同様、機動性が高い。何より特徴的なのはその携行火器の多様性にある。

他の量産機よりも大きいリヴァイヴの拡張領域を初期装備（プリセット）を外すことで更に拡張、武装量を増やす事で、継戦能力を高め、戦術への対応力も強化されている。

搭乗者であるシャルの技量も合わせればとても第二世代とは思えないポテンシャルがある。

【左腕残弾 6 。リロード開始】

【シールドエネルギー 残り685】

やっぱり手数は向こうの方が上か。

マシンガンを使っていたと思ったらライフルが飛んできたりと目まぐるしく武器が変わる。

高速切替（ラピッドスイッチ）。文字通り手持ちの武器を拡張領域内の武器と高速で持ち替える技術の事だ。

思考による制御が殆どのIS操作の最たるモノと言える。

拡張領域内の武器の呼び出しには二通りある。

一つは、口頭による呼び出し。武器の間違えなどがそうは起こらず、確実性が高い。しかし、相手に武器の切替を知らせる事になり、対応されやすい。

二つ目は、イメージによる呼び出し。上手くいかないと武器が呼び出せなかったり、戦闘機動しながら武器をイメージするといった、難易度が高いやり方だ。

でも、相手に手の内を読ませにくいし、何より今のシャルのように相手の意表を突きやすいといったメリットがある。

この二つ目を極限まで突き詰めたのが高速切替だ。

イメージによる武器切替を文字通り目にも見えない早さで行うこ

とで、戦闘に於いて相手に隙を見せることなく攻撃を仕掛け続ける事が出来る。

何より、

「やりにくいっ!!」

グレネードランチャーとアサルトライフルから発射された、榴弾とKE弾をロングブレードライフルで焼き払う。

やられる相手にとってはやりにくい事この上無いのだ。何せ矢継ぎ早に入れ替わる武器に対応しなければならぬからだ。

かといって防ぎに回れば圧倒的な物量でシールドエネルギーを根こそぎ削られかねない。

「掠っただけでこの威力・・・ホントに第三世代!？」

【ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ 残りシールドエネルギー 624】

「さあ、どうだろうね!」

実は第四世代ですだなんて言えるわけない。

マシンガンから絶えず放たれる弾幕をスラストスターを駆使して避けながらロングブレードライフルを撃ち放つ。

出力調整は上手くいつてるみたいだ。流星に使い始めた頃のままだと戦いにくいからね。

「全く・・・それだけ大きいのに直撃しないなんてね!」

「そう簡単にはー」

【全シールドブースター 起動】

「当てられると思わないでね!!」

「速っ・・・!？」

計五基のシールドブースターが同時に点火。スピードメーターが瞬時加速に匹敵する速度を叩き出す。

さあ、行こうかヘイズル!

【サブアームユニット アーム起動 ブルパップマシンガン、
ビームライフル展開】

フロントスカートに装備された、無骨な増加装甲にも見えるサブアームユニットが展開、先端にあるマニピュレーターが展開した武器

を掴む。

【制御シーケンス α (アルファ)、自動制御開始】

「ランページー！」

【命令受理。トリガー】

ロングブレードライフル、ブルバツブマシンガン、ビームライフルが一齐に火を吹く。

集弾性の悪いマシンガンによって動きを制限され、何発かがリヴァイヴに直撃する。

「まさか、隠し腕が有るなんてね・・・まるでビックリ箱みたいだ」

【ラファール・リヴァイヴ・カスタムII 残りシールドエネルギー 421】

シールドで幾らか威力を減衰されたか・・・でも半分近くまでは削れた。

こつちもカウンターで幾らか貰ったけど、まだ何とかなる。

【残りシールドエネルギー 642】

シールドブースターを細かく動かし制御しながら、ハイパーセンサーで簷側の戦闘をチェックする。

やっぱり厄介なのはA・I・C。か・・・。

実質、山嵐は使いにくくなってしまっているか。

ボーデヴィツヒさんの機体、シュヴァルツエア・レーゲンの武装はブレードワイヤーとレーザー手刀、右肩のレールカノンと中、近距離戦向きだ。

A・I・C。もあり、同じ中距離戦機体の打鉄式式は相性が少し悪い。

でも簷の事だ、上手くやるだろう。

「こつちはこつちで、頑張らないとね!!」

「往くよ、睦月！」

互いに武器を携え、勝利の為に動き出す。

――試合はまだ始まったばかり。

#19 黒い雨

様々な色の閃光が、さながらイルミネーションのように戦場を彩る。

観客席がその光景を見て沸き立つが、果たしてその中にどれだけの人がこの光景が、常人を一瞬と経たずに消し去れる『死』の舞踏だと気付いているだろうか。

「貴様の相方は、馬鹿げた機動力だな」

「それがウリみたいだから」

放ったブレードワイヤーの悉くを弾かれ、ラウラは舌を巻く。

更識 簪。日本に来る前に見たデータではあまり良いと言える戦績では無かった。それ故に他の代表候補よりもマークが薄れていた。

（己の未熟さが腹立たしい・・・！教官の言う通り、データなど当てにした所で意味などなかった！）

内心、己自身に苛立ちを覚えながらも冷静に打鉄式から撃たれる荷電粒子砲の閃光を回避する。

同じ中距離戦を重きに置いた機体同士、A・I・C・が有る分ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンの方が有利に思える。

だが、相手にとっては同じ中距離戦機体だからこそ近づく必要もないのだ。A・I・C・の有効射程は全開出力で精々2メートル弱。ならばその範囲外から攻撃を加えれば良いだけの話なのだ。

現に試合開始から簪は一切接近戦を仕掛ける事なく、A・I・C・の有効射程にギリギリ触れない距離から攻撃している。

（しかし、奴の切り札であるミサイルは封殺できるのが救いか）

A・I・C・は実体を持ったものなら如何なる物も停止させる。それ故、簪は山嵐を撃つことが出来ない筈だ。撃つところで停止されては意味がない。

そう思いつつもラウラは不安感を捨てきれないでいた。

（まだ奴には何か有る・・・確実に）

簪の挙動に注視しながらラウラは非固定武装に搭載されたレールカノンを起動させる。

相手が中距離戦を望むなら、その誘いに乗ってやる。
不安を払拭するためにそう意気込んでラウラは笑った。

『……チカラガ、ホシイカ?』

戦いの騒音の中、そんな声が小さく聞こえた気がした。

「山嵐が使えないのはやっぱりツライな……」

襲い来る6本のブレードワイヤーを夢現で弾きながらそう呟く。

第三世代兵器A・I・C……厄介なことの上無い。山嵐のマルチロックを使っても、弾頭を止められてしまっただけは容易に突破されてしまうだろう。

かと言ってこのまま春雷だけで戦おうにも相手の方が手数が上。削られきってお仕舞いだ。

【残りシールドエネルギー 573】

【シュヴァルツエア・レーゲン 残りシールドエネルギー 614】

こんな時、睦月ならどうするだろうか。

ハイパーセンサーで睦月の戦いを確認すると、鈍重そうな見た目からは想像できないスピードでデュノア君を圧倒していた。

「余所見をしている隙があるか!」

「ちっ!」

ブレードワイヤーの間隙を縫って放たれたレールカノン「ブリッツ」の一撃をサイドロールで回避する。危ない……ボーデヴィツヒさんの言う通り、余所見している隙はない。

でもどうする? 遠距離武装の山嵐はA・I・Cで対処されるだ

ろうし。かといつてこのまま中距離戦をしてもジリ貧だ。

『ならいつそ、突っ込んでみれば?』

「え・・・?」

唐突に聞こえた睦月の声には私は目を見開いた。

ハイパーセンサー越しにヘイズルが武器を携えた片手を上げた。

・・・そうか、いつの間にか安全策に逃げてたんだ、私。

『睦月!』

『うん』

『私、暴れるからよろしく!』

【瞬時加速、エネルギーチャージ。山嵐マルチロツク。春雷稼働用エネルギー、各種用にブースターに転換】

何かもう、色々吹っ切ろう。

・・・守つてたら負ける、攻めろ!

『オーケー、二人で大暴れだ!』

「ニグニツション!!」

瞬時加速によつて一気に距離を詰めながら山嵐を全弾頭を一斉発射。

「バカなっ!」

ボーデヴィツヒさんの声が聞こえるのと同タイミングで計48発のミサイルが着弾、土煙を巻き上げる。

そこに躊躇なく突入し、側面を取つて夢現をブーメランのように投げつけた。

投げたその先にデユノア君が落下し、夢現の追撃が入る。

更に上空から煙を晴らすかのような弾幕が降り注ぎ、二人のシールドエネルギーを削りながらヘイズルが下降。

【ブースターエネルギー、春雷に一部転換 バレル展開

瞬時加速チャージ開始】

「睦月!!」

「受け取って!」

使用制限を解除されたロングブレードライフルをすれ違い様に受け取つて両手で槍のように構える。

その間にも春雷を連射して二人を追い込む。

ハイパーセンサーで睦月の位置を確認。ちょうど二人を挟み込む位置に立ったみたいだ。

「エネルギーチャージ ジェネレーター出力安定」

睦月みたいに来るかわからないけど・・・やってみせる！

「フアランクス!!」

瞬時加速のスピードに乗せてロングブレードライフルがシユヴァルツエア・レーゲンのシールドエネルギーに突き立てる。

そして、

「シユートオ!!」

トリガーを引いた。

「く、そお・・・!!」

「ラウラー！」

【残りシールドエネルギー 103】

エマージェンシーのアラートが視界を埋め尽くす。

シャルロットの声すら届かず、ラウラーは呆然としていた。

一瞬。正に一瞬でグリーンゾーンにあったエネルギーがレッドゾーンに突入し、最早ゼロになろうとしていた。

脳裏に浮かぶのは敗北の二文字。諦観しきった心がそれを受け入れようとする。

「まだだよ!!」

「っ！」

しかし、寸での処でシャルロットの声に弱りきった目が光を取り戻す。

「そうだ、まだだ。試合はまだ『終わっていない』……！」

【レールカノン〔ブリッツ〕使用不可能　ブレードワイヤー　四基破損　A.I.C. 出力不安定　レーザー手刀　使用可能】

【限界使用回数　2回】

「ああ、そうだー」

肘から手先にかけてレーザーによって構築された刃が具現する。

突き刺さった刃を気にもせず、ブースターを起動させ、距離を詰める！

「私はまだ、戦える!!」

「くっ……!!」

桃色の光刃が打鉄式式の装甲を焼き斬り、シールドエネルギーを削る。

続けて使えるブレードワイヤー全てを放ち、打鉄式式の非固定武装に突き立て、動きを固定する。

「逃がす……ものか……!!」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ」

レーザー手刀を突き立てんと腕を伸ばし、同時に簪が開いた右手を伸ばしたその瞬間。

『オマエニ、チカラヲ、クレテヤロウ』

『タタカイニ、シヨウリスル、チカラヲ』

「……………え？」

【Valkyrie Trace System standby】

ラウラの視界は暗闇に染まった。

#20 騙るモノ

「逃ゲ・・・ロ・・・!」

突如動きを止め、呻き声のようにそう言ったボーデヴィツヒさんを見て、身体中に悪寒が走る。

マズイ・・・あれはマズイ!!

「シャル、簪！防御態勢!!」

「っ!!」

そう叫んでロングブレードライフルを投げ捨てシャルを抱き寄せ、簪もロングブレードライフルを盾代わりに構えた。

そして、

「ーア、アアアアアアアアアアアアアアアア!!」

強大な閃光と衝撃が、僕たちを襲った。!!

予想以上の強さに、機体が押し流されそうになるが、シールドブスターを壁代わりに地面に突き立てて耐える。

「睦月!」

「ぐ、うう・・・!」

【残りシールドエネルギー 247】

耐えろ耐えろ耐えろ・・・!

この衝撃だ、直近にいた簪が危ない。絶対防御があるとしても、不安は拭えない。

シャルの身体を強く引き寄せ、衝撃が収まるのを待つ。

それから数秒だろうか、数分だろうか。閃光が収まり、どうなったのか確認する。

その爆心地に居たのは。

「—————」

「な・・・」

真っ黒な、『ISのようなもの』だった。

黒いと言っても、ヘイズルやレーゲンのような黒さではなく、まるでスライムか何かのように妙な水つぽさを感じる。

それにあの形・・・何かに似ている。

鎧のような外装に刀：打鉄に似ているけど、意匠が少し違う。．．．まさか。

「簪い!!」

その正体に思い至った瞬間、ブースターを使って弾けるように加速、簪の前に回り込んでビームサーベルを引き抜いた。

バチイツ!!

降り下ろされた刃とビームサーベルがぶつかり、火花を散らす。

「簪、無事?」

「う．．．うん」

「ならよし、だ!」

強く押し込んで『ISモドキ』を弾き飛ばす。その隙に簪も抱えて後退する。

流星にあのままだと危険すぎる。何でか知らないけど、追ってこないのが幸いだ。

二人を下ろして、ISモドキの動きを見る。

衝撃の爆心地から、あのスライムじみた装甲の中にボーデヴィツヒさんが居る、というより取り込まれているのだろう。

「睦月、ありがとう」

「どういたしまして．．．と言いたいけど、その言葉はこれが終わった後に聞きたいかな」

シャルの言葉に軽口で返すけど、さつきから冷や汗が止まらない。

黒いスライムのようなゲル状の外装．．．手持ちの刀．．．そして

さつきの斬り筋．．．

「まさか、ね」

だとしたら大層ふざけた真似をしてくれる。『あんなもの』をレーゲンに積むなんて．．．!」

「ボーデヴィツヒさん、一体どうなって．．．」

「VTシステム」

「え?」

「聞いたことはあるでしょ?」

そう聞いた途端、二人は驚愕に目を見開いて、眉根を吊り上げた。

V Tシステム・・・正式名称 Valkyrie Trace System。過去のモンドグロッソ優勝者の戦闘データを搭載機体及び搭乗者に投影させ、優勝者と同様の動きを取らせるといったものだ。

これだけ言えば単なる優秀なシステムにも思えるだろう。モンドグロッソ優勝者の動きをそのまま再現できるのだ。ともすれば公式試合の殆どで勝ちを飾る事が出来るだろう。

だが、これにはデメリットが存在する。

モンドグロッソ優勝者・・・つまりブリュンヒルデ、或いはヴァルキリーとなったその人の動きを『完全』に再現する。それは、当人の身体に多大な負荷を掛ける事になる。

・・・当然だ。他人の動きを真似るのではなく、武器も機体の制御の仕方何もかも再現するのだから。

つまりは脳を含めた身体、そして機体が追い付かなくなってしまったのだ。それが最強の称号であるブリュンヒルデ、ヴァルキリーなら尚のこと。

ともすればシステムによって脳を焼かれ、身体はボロボロに成り果て・・・最後は。

「何てもの積んだんだドイツは・・・！」

ハイズルのフルフェイスの中、血が出るほどに唇を噛み締める。

そのあまりにも危険性故に開発及び搭載が禁止されているモノをよりにもよって最新鋭機のレーゲンに積むなんて、正気じゃない。

「だとしたら、早く助けないと！」

シャルが立ち上がり、そう叫ぶ。

確かに早く助けないと、取り込まれてしまったボーデヴィツヒさんの命が危ない。

でもどうする・・・確かV Tシステム起動中の機体は絶対防御が発動しない、いわば丸裸の状態だ。下手な攻撃は中にいるボーデヴィツヒさんを傷つけかねない。

「睦月ごめん、私は動けそうにない・・・」

【打鉄式式 残りシールドエネルギー 3】

簪を見ると、最早ISを展開し続けることすら危うい状態だった。あの衝撃の威力、シールドエネルギーが残っているだけ幸運だったレベルだ。

そんな簪がなけなしのエネルギーで打鉄本来の武装である近接刀〔葵〕を差し出した。

「薄皮一枚、睦月なら切れるでしょ?」

「やってやるさ!」

微笑む簪から葵を受け取り軽く振り回してから構える。

狙うはあのISモドキ・・・いや、『暮桜』のニセモノ。

VTシステムが投影したのはモンドグロツソニ大会連続優勝の機体、暮桜。打鉄と似てると思ったけど、それもその筈、あの機体は打鉄のハイエンドタイプとも呼べる存在だ。

搭載武装を極限まで削り、単一仕様能力『零落白夜』とブースター系統にエネルギーを回した短期決戦機。

一夏の白式の祖でもある機体だ。

『睦月!聞こえるか!?』

『聞こえてるよ』

プライベートチャンネルで届いた一夏の声に、暮桜モドキの動きを注視しながら返す。

連絡してくると思って回線開いておいて正解だったな。

『一夏達は大丈夫だった?』

『ああ、何とかな・・・それより、そのISは』

『暮桜、でしょ。全くとんでもないのを再現してくれたよ』

『やっぱり、か・・・理屈はわかんねえけど、あの中にラウラが居るのか』

『確実に・・・急がないと命も危ない』

時間との勝負だけど、単なるプログラムとさえも相手はブリュンヒルデ。簡単にやれるかと言われればNOと答えるしかないだろう。

『なあ、睦月』

『・・・何?』

『アイツは・・・ラウラは、千冬姉の事ホントに尊敬してるんだ。今日

の試合だって、千冬姉に自分の強さを見てもらうんだって、言ったんだ」

『うん』

『だから・・・だから頼む、ラウラを助けてくれ・・・！』

一夏のその言葉に空いた左手を横に突き出し、親指を立てて答える。

『了解！』

親友から頼まれたんだ。絶対に助け出して見せる！

「シャル、シールドエネルギー残量は？」

「残り60と少し。だから、僕もこれを渡すよ」

そう言っって左手に手渡されたのは一本のロングダガー。

ヘイズルの武装解析が視界に映し出される。

【近接ブレード「ブレットスライサー」】

「シャル・・・ありがとう」

「お願い、ラウラを助けて。僕の大切な『パートナー』だから」

「当然」

受け取ったブレットスライサーの感覚を掴むために何度か手繰っ

てから逆手に構え、暮桜モードキを睨み付ける。

「わざわざ準備が整うまで待っててくれてありがとう」

【シールドブースター及び全外部装備パージ】

フルアーマーユニットやサブアームユニットが炸薬によってパ

ージされ、地面に重い音を立てて落ちる。

「……………」

土煙と炸薬の上げる白煙によって視界が塞がれるがハイパーセン

サーによってそれらを見捨てる。

「今、助けるよ」

【ブースター起動】

「……………」

さあ、行こう。

煙を葵の一閃で切り払って僕は『最強を騙るモノ』へと一直線に

突っ込んでいった。

#21 雨を晴らす者

『ーチカラヲ』

『マケルコトノナイ、チカラヲ』

『サイキヨウノ、チカラ』

『モトメルハ、ツヨサ』

声が聞こえる。

起きているのか眠っているのか解らない、曖昧とした意識の中、ラウラの頭に男とも、女ともとれる声が幾度も響く。

『ノゾメ、ツヨサヲ』

『スベテニ、ウチカツ』

『ツルギヲ』

『銃ヲ』

『爪を』

『牙ヲ』

『翼を』

『欲すルがイイ』

『望むガいい』

(やめろ・・・)

泥のような闇の中、まるで呪いのように聞こえ続ける声に、ラウラは表情を歪め、耳を塞いで蹲る。

それすら意に介さないのか、塞いだ耳から滑り込むように声は続いた。

『求めテいるのだらウ?』

『最強たる力を』

「違う・・・違う！私はそんなモノ望んでなどいない！私の強さは私だけのモノなんだ！お前たちに借り受ける強さなんてゴメンだ!!」

目が痛くなるほどにきつく閉じて叫ぶラウラに声は嘲笑した。

まるで弱者をいたぶるような。

『ならば何故、私を直グに消さない?』

「何を・・・言って」

『お前ノ意思一つで消えルと言うのに何故消さない?』

「私、は・・・」

恐怖心と不安感、そして虚脱感がラウラの身体を苛み、蝕む。

歯は小刻みに震えカチカチと音を鳴らし、耳を塞いでいる手はいつの間にか血が滲むほどに握りしめられていた。

『そうだ、お前は心の奥底で望んでいたんだ。・・・力を』

「う、あ・・・」

『さあ・・・望め、欲せ、求めろ!あらゆるモノを飲み込むチカラを!!』

「あ、あああ・・・」

ラウラの心が崩れかけ、システムに飲み込まれそうになった、その時。

「――『ラウラ』!」

ラウラの視界に一筋の光が見えた。

「ちい!!」

「――!」

凡そ刃と刃がぶつかり合うような音ではない轟音を打ち鳴らしながら暮桜モドキと剣を交える。

システムの起動によつてリミッターが外れているのか、有り得ないくらいの馬鹿力のせいでヘイズルの損傷は増すばかりだ。

「疾ッ――!」

「――!?!」

葵を相手の刀ごと振り上げて隙を作り、ブレットスライサーで斬りつけるも、そのゲル状の装甲を深く斬ることは無かった。

逆に返しの一手を貰ってしまい、右肩の装甲が弾けとんでしまった。

だからと言って動きを止める気は無い。
弾かれた勢いをそのまま使って回転しながら再度葵を振るう。

「――！」

「ちっ・・・！」

プログラムと言えどモンドグロツソ優勝者、簡単には行かないか――！

剣圧によって地面を抉り飛ばしながら何度も打ち合う。

相手の隙を探せ、癖を見抜け、チャンスを見出だせ・・・！！

【残りシールドエネルギー 72】

ガンツ！

まるで鈍器がぶつかり合うような音を立てて鏝迫り合いに持ち込む。

暮桜モドキの何も映さない、形だけの目と目が合う。

「待ってて・・・今、助けるよ！」

覚悟を決めろ、躊躇するな！

心にそう言い聞かせて刃を弾く。そして大きく葵を振りかぶり左薙ぎを放つ・・・！

「――！！！」

だがそんな大振りな攻撃は当然のように避けられ、致命的な隙を生み出す。

そんな隙を見逃す筈もなく、暮桜モドキがトドメと言わんばかりの大上段からの降り下ろしを放つ。

「――！！！」

タイミングは・・・ここだ！！

降り下ろされるタイミングに合わせ、振り切った葵を地面に突き立てる。それを支柱に身体を回転させ降り下ろしを回避。行き場の無くなった刃は地面に勢い良く抉り込む。

そして再び暮桜モドキの正面に戻った瞬間、

「潰れる！！！」

地面に半ば埋もれた暮桜モドキの刀を思い切り左足で踏みつける。引き抜こうと暮桜モドキが力を込めるが、もう遅い。

「これでえ!!」

強く右足を踏み込み、右手に持ち替えたブレットスライサーを振り上げる――!

腹部から頭頂部まで一直線に入った切れ目に迷わず空いた左手を突っ込む。

掴まえた、人の感触!

「――『ラウラ』!」

名を呼びながら彼女を引っ張り出し、しっかりと抱き止める。

良かった・・・目立った外傷は無いみたいだ。

宿主を失った暮桜モドキが、ドロドロと溶けだし、形を失っていく。

「・・・ふ、そう?」

「うん、そうだよ」

少し意識が目覚めたのか、ボーデヴィツヒさんの目が僕を見る。

眼帯が付けられていた左目は、金色で、まるで宝石のようだった。

「あり・・・がとう」

そう言っただけボーデヴィツヒさんは再び瞼を閉じた。

その表情は柔らかく、穏やかだった。

良かった・・・ちゃんと、助けられた。

暫くしてISを展開した教師の人々に連れられ、僕たちは保健室に担ぎ込まれる事になる。

こうして、大波乱の決勝戦は終わりを告げた。

「・・・ハハハ」

「目が覚めたようだな、ボーデヴィツヒ」

夕日によつてオレンジに染まった保健室のベッドの上で、ラウラは目を覚ました。

聞こえた声の方向に首を向けると、壁に背を預けた千冬が立っていた。

「教官……?」

「今は先生と……まあ、良いか」

言い直そうとして止めた千冬が腕を組み直す。

ドイツに居たとき一度しか見ていない、穏やかな表情で微笑む千冬を見て、ラウラは顔が熱くなるのを感じた。

「お前が無事と聞いて、安心したよ。……全く、扶桑の奴も無茶をする」

「彼は……私を助けてくれたのですね」

「ああ。累積したダメージによつて倒れたと言うのに、目が覚めた途端さつさと保健室（ここ）を出ていったよ」

「そう、ですか」

「後で礼を言っておけ、アイツが困るほどにな」

「それはどうなんですか……?」

「冗談だ」

いたずらっ子のような千冬の笑みに、思わずラウラも笑つてしまう。

一頻り笑った後、笑顔のままラウラは染み一つ天井を見た。

「……名前を」

「ん?」

「名前を、呼ばれたんです。システムに飲まれて、暗闇に沈んだ私の名を」

「扶桑がか?」

「はい……。彼があの時呼んでくれなかったら、私は」

「そうか……」

ラウラの言葉に一言呟いて返すと、千冬は壁から離れ、ラウラに背を向けた。

「だったら、恩返しでもするんだな」

「え・・・？」

「そうだな、命を救われたんだ。相応の恩を返してやらないとな？」

「え、それって・・・？」

「さあな、お前の想像に任せよう。では、私は仕事に戻る。ちゃんと休めよ、小娘」

言うだけ言って千冬は保健室を出ていく。

その顔は普段からは想像もつかないニヤケた笑みを浮かべていた。

そして、一人取り残されたラウラはというと。

「命を救われた恩返し・・・一体何を返せば良いのだ？ シュヴァルツェアシリーズの一機？ いや扶桑にはハイズルがある・・・武器？ そもそもISがある時点で意味がないだろう！ あー、もうわからん!!」

ベッドの上で悶々と自問自答していた・・・病人なのに元気である。

#22 一難去つて

「おはよう、睦月」

「ん、んー・・・おはよう、簪」

あの決勝戦から一日経ち、日曜日。

朝日が差し込む寮の部屋で二人一緒に目覚ましの携帯アラームの音が覚める。

欠伸混じりに身体を伸ばすとポキポキと小気味良く背骨が鳴った。

「ふあ・・・うう、眠い」

「昨日、がんばったから仕方ないよ。・・・何だったらもう少し寝てる？」

「大丈夫・・・簪と朝御飯食べる」

ああ、視界がまだボヤける・・・昨日の疲れが全然抜けてないなあ。

そんな事を思いながら、目を擦っていると簪に抱きつかれた。

・・・抱きつかれた!?

「か、かかかかかか簪!?!」

「睦月は、本当に可愛いね」

そう言つて簪は僕を抱き締めたまま頭を撫で始めた。

いきなりの事にすっかり目が覚めてしまった。全ては背中に当たる柔らかな感触のせいだ、そうに違いない!

「あ、あの簪?背中当たってるんだけど・・・?」

「・・・こういう場合、『当たてんのよ』って言うのが相場だっけ」

「言わなくていいから!?!もう目が覚めたから離して欲しいんだけど」

「却下。もう少しこのまま」

「そんな御無体な・・・」

為す術なく、きっかり十分ぬいぐるみ状態にされました。

日曜日という事もあつて、学園内は閑散としている。こういった休

日の場合、殆どの生徒が外出してしまうからだ。

朝御飯を食べてから、打鉄式式の調整を行うと言った簪と別れ、僕は学園内を散歩していた。

入学してからこつち、ゆっくり学園内を見る機会が無かったのを思い出したからだ。

「何だかんだ忙しかったからなあ」

入学して最初にクラス代表決定戦。さらに翌週には代表対抗戦での乱入者撃破、そして今回のシャルの問題とVTシステム。

改めて考えてみると、本当にまだ四月かと言いたくなるような密度の濃さだなあ。

今までの出来事を思い出しながら歩いていると、綺麗な花畑を見つけた。

「こんな所あったんだ」

丁度、第二アリーナと学園を囲む柵との日当たりの良い場所に、それはあった。

春というのもあつてか、色とりどりの花が咲き誇り、濃密な花の臭いが少し離れた位置からでも感じられる。

足を運んでみるかな。

「綺麗・・・」

敷いてある通路を歩きながら視界に広がる花々を眺める。

この世界に来てから、こんな光景をみたのは多分初めてだと思う。研究所はまるでジャングルみたいだったし。

「はあ・・・落ち着く」

休憩スペースに置いてあるベンチの一つに座り、深呼吸する。花の香りと澄んだ空気が心を落ち着かせてくれる。

空を仰げば見事な青空。本当にここは学園の中なのだろうか？

「あら、先客がいたのね」

「え？」

不意に聞こえた声に顔を下ろすと、一人の女子生徒が居た。

水色の髪に、緑色のリボンタイ。そして『驚嘆』と達筆で書かれた扇子。

この人は……

「更識生徒会長、ですか」

「その通り。入学式の挨拶以来ね、扶桑 睦月君？」

IS学園生徒会長、更識 楯無。

……そう、簪の姉である。何時かはこうして話す機会があるとは思ってたけど、こんなに早いとはね。

楯無会長は僕の隣に座ると悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「会長は、どうしてここに？今は大会の後処理で忙しいと思うんですけど」

生徒会は、学園の意向もあって今回のような行事の際は会場の整理や来賓への招待状など、本来学園側がやるべき仕事を行っている。

そういうわけで、決定戦のゴタゴタもあつたからあんまり暇は無いとは思ってたんだけど。

「実はサボ……息抜きよ」

「言い直したのに誤魔化しきれてませんよ、生徒会長」

冷や汗を一筋流しながら言う楯無会長にツツコミを入れてしまう。

まあ、そんな事だろうと思っただけだね。

「ま、まあそれは置いといて。睦月君に聞きたいことがあるのよ」

「聞きたいこと？」

「ええ、色々……ね？」

妖しげに微笑んだ楯無会長を見て逃げられそうに無いのを理解する。

仕方がない、こつちも聞きたいことあつたし、お誘いに乗ろう。

「それで、僕に何を聞こうって言うんです？生憎ですが、僕は一夏ほど話題性には富んでないですよ」

「篠ノ之 東博士の関係者、というだけでも十分じゃないかしら」

「……それもそうですね」

研究所に居た頃は漠然と凄い人とか思ってたけど、学園に来て色々知るとどれだけの影響力を持った人なのか解った。

……そんな人を写真数枚で動かした僕も大概だな。

「そうね……まず第一に、貴方の専用機『ヘイズル』に関してだけ……」

二年ほど前に同型の機体がドイツで確認されたけれど、何か知ってる？」

「ああ、それは束さんが作った今のヘイズルの前身ですね。僕とは違う、別の人が搭乗してたみたいですよ」

「それは女性？」

「さあ？そこまでは」

似たような質問を何回もされてるから返答にも慣れてしまった。

楯無会長は「そう・・・」と呟いて深く聞いてくることは無かった。

「それじゃ次の質問ね。今までの貴方の戦い方を見たんだけど、本当に初心者？」

「初心者ですよ」

二年間位、経験のある。

続く言葉を伏せてあつさりど答える。

というかその質問は一夏にこそするべきじゃ無いだろうか。

ISに乗って二回目で代表候補生のオルコットさんを倒すとか、初心者の特じゃないでしょ。

「ふうん・・・ま、そういう事にしておいてあげるわ」

「ありがとうございます」

・・・この人、薄々気付いてるな。僕がある程度の経験者だって事を。

まあ、まだ確証は掴めてないみたいだし、大丈夫かな。

「もう一つ・・・これが一番重要ね」

そう言つて、楯無会長は飄々とした態度から一変して真剣な目付きになった。

重要な話題ばかり抱えてるから何を聞かれるのか解らない・・・一体何を聞くのか。

「簪ちゃんとは、一体どんな関係なのかしら・・・!？」

「・・・はい？」

質問の意図が掴めず素っ頓狂な声が出てしまう。

僕が啞然としている間にも会長の言葉は続く。

「ええ、貴方は中々可愛い顔立ちしてるし、これまでの調査によれば性格も良好、戦績も目覚ましいものがあるし、とても優良と言えるわね。

だが し か し！

それとこれとは話が別よ？もしも簪ちゃんに下心を持って近付いているのなら生きてまます『ピー』で『ピー』して『ピーピー』をした後に東京湾でスイミングさせるわよ！私の可愛い可愛い簪ちゃんが変な男の毒牙にかからないか本当に心配なのよ！ヘイズルとかの情報なんて今はどうでもいいの、重要な事じゃないわ！それで!!」

「ひっ」

先程からは考えられない剣幕で肩を捕まれ、恐怖心が沸き上がる。

やばい滅茶苦茶怖い！下手な回答すれば間違いなく東京湾でスイミングやらせる気だよこの人!?

「貴方は簪ちゃんとどういう関係なのかしら!？」

「し、親友です!」

「それ絶対カップルになるパターンじゃない！私より先に結婚式を上げるのね〜!」

「話が飛躍しすぎだあ!!」

結局、楯無会長が落ち着かせるのに二十分近くかかってしまった。

「こほん・・・ごめんなさい、少し取り乱したわ」

「あれを少しと言って良いのか・・・?」

半ば狂乱してましたよね?

お互いに深呼吸して落ち着いてから、僕から話を切り出した。

「簪とはルームメイトで、良きパートナーですよ」

「それなら良かったわ」

「というかそう言うのは姉妹の間で話したり・・・すいません、変な事

聞きました」

急に涙を浮かべはじめた楯無会長に言葉を切って謝る。

しまった、まさかタブワードだったとは。

とりあえずと、ポケットに入れていたハンカチを使って目元を軽く拭う。

「あ、ありがとう・・・年下の子にこんなところ見られるなんて不覚だわ」
「今ので何となく想像はつききましたが、大丈夫ですか？」

「そうね・・・簪ちゃん仲間が良い、貴方には話しても大丈夫かしらね」
そう言つて、楯無会長はベンチから立ち上がる。場所を移動する、
と言うことだろう。

歩き出した会長を追うべく立ち上がり、その背中を追う。

妹思いのこの人に、何があつたのだろうか？

#23 再転入と嫁宣言!!

「ここなら良いでしょう」

そういつて楯無会長が座ったのは、花畑からそう離れていない、校舎近くの休憩所だった。

屋根とテーブルが付いているし、長話には丁度良い場所だ。

僕がテーブルを挟んで座ったのを確認して、会長は話し始めた。

「扶桑君は、私達の家について何か知ってる?」

「・・・更識家是对暗部用の暗部と言われ、その範囲は日本全てに及ぶとされる。いわば裏社会における『安全装置』とも称されている・・・この位ですかね」

「十分よ。伊達にあの天才の下には居ないと言うわけね・・・そこまで解るなら、私が何を言おうとしているのか、解るかしら?」

「・・・家柄、ですか」

「流石ね、その通りよ」

褒めてくれてはいるけど、会長の表情は暗いままだった。

「これは僕の予想ですけど」、そう前置きして会長に自分の推察を話した。

「楯無会長は、簪にその裏社会に深く関係して欲しくないから何か、キツイ物言いをしてしまつて、それ以来避けられてる・・・つて感じですかね?で、簪の方は会長の真意には気付いていないと言つた所でしょうか」

「・・・貴方、エスパーなの?」

驚いた顔の会長を見て、慣れないウイंकをして誤魔化する。

「さあ、どうでしょう?何にせよその反応だと、当りみたいですね」

「正解よ、ドンピシャど真ん中ストライク・・・私の言い方が悪かったのよねえ。はあ、当時を思い出したら憂鬱になってきたわ」

言いながら会長の肩がガクリと下がり、重い溜め息を溢す。相当だな、これは・・・。

「因みにそれを言つたのつていつ頃です?」

「去年の冬・・・若干、喧嘩腰で言つちやつたのよね・・・ああ、もう

ダメ。私が東京湾にダイブしてくるわ。いえこの場合DIEBして
くるわ」

「落ち着いてください、潜水するにはまだ早いですよ!?海水冷たすぎ
るし、せめて海開きまで待って下さい!」

「そこ普通ダイブするのを止めるところよね!?夏になったらオーケー
出しちゃうの!?!」

「・・・いやあ、つい」

「つい、で自殺許可出しちゃう人始めてみたわよ!?!」

「でも会長の事だから死ななそう」

「私は宇宙人か!?!」

「え?」

「え?」

ほんの少し見つめ合った後、どちらからでもなく笑いだす。

意外と面白い人だな楯無会長は。このノリに着いてこれるなんて。

扇子に『大爆笑』の文字を浮かべて、まだ笑いが収まらないのか口
元を歪めている。

「貴方は不思議ね。真面目な話してたのに、すっかり気が抜けちゃっ
たわ」

「真面目な空気って苦手なんですよ、僕は」

皆して真面目な顔して、笑えない空気感というのが、この世界に来
てから嫌いになった。

・・・これも束さんの影響かな。あの人の何でもありな考え方に毒
されたのかもしれない。

「それに、会長みたいな綺麗な人は、笑顔が一番似合いますから」
「・・・」

あれ?急に楯無会長が固まってしまった。扇子を握り締めた手だ
けがワナワナ震えている。

はて、何か気に障ることを言ってしまっただろうか・・・

「な、なななな何をいきなり言うのかしら!?!じ、冗談も程々にした方
が良いと思うんだけど!?!」

「・・・え?冗談も何も、会長は綺麗じゃないですか」

「くっ!?」

おお、会長の顔が真っ赤になってしまった。

声にならない声を上げたかと思うと、会長はバツと立ち上がり、

「き、今日はこの辺で勘弁してあげるわ!じゃあ大会の後処理系の仕事があるので!!」

と言って駆け出し・・・って早っ。もう見えなくなっちゃったよ。て言うか、

「シャルとボーデヴィツヒさんの事、訊きそびれた・・・」

まあ、明日になれば解るか。

楽観的にそう考え、僕は残った時間を学園の探索に費やした。

そして翌日、月曜日。

朝のHRを行っていた教室は耳鳴りが聞こえるほど静かになっていた。

教壇の上に立つ山田先生の横に、ボーデヴィツヒさんと『女子の制服を着た』シャルが立っていたからだ。

「ーと、言うことでデュノア君は実はデュノア『さん』でした」
「二二な、なんだってえくく!?!」

山田先生の一声にクラス一同が驚きの声を上げる。このクラスはホントに変なところで団結力あるなあ。

「事情は私が説明しよう」、そう言って教室の入り口付近に立っていた織斑先生が一步前に入る。

「デュノアには織斑と扶桑、二人のボーディーガードを依頼していたんだ」

「ボーディーガード、ですか?」

オルコットさんの疑問に織斑先生が頷く。

・・・なるほど、そういう事か。

『男性IS操縦者のどちらかを誘拐する』等と、ふざけた脅迫状が届いてな。それをデュノア社長に話した処、デュノアを男装させて転入させた、というわけだ」

「男装する事で、お二人の近くに居られるようにした、という事ですか」

「そういう事だ。大会中、学園の外に犯人が見つかり警察に明け渡し、諸々の問題が済んだのでデュノアには女子として再転入してもらった、というわけだ」

少々、危ういけど一応筋は通ってる・・・かな。

「この事は内密に頼む。もし世間にバレた場合、私達に危険が及ぶ可能性があるからな」

「絶対には言いません！」

鬼気迫る表情でクラス一同が断言する。ともすれば血判でも押しかねない勢いだ。

オルコットさんは何か思うことがあるのか顎に指を当てて考えてる。

まあ後で専用機持ち皆にはシャルに許可を貰ってから事の真相を伝えよう。

「デュノア君もとい、デュノアさんについては分かりましたけど、ボーデヴィッツヒさんは何故そこに？」

「ああ、それはだな・・・ボーデヴィッツヒ」

「はい」

一人の生徒の疑問に、織斑先生はボーデヴィッツヒさんの背中をトンと押す。

皆の前に立ったボーデヴィッツヒさんは深呼吸をした後、深く頭を下げた。

「今回のトーナメントで、皆には迷惑をかけた・・・だから、ごめんなさい」

その一言に、クラス全員が彼女が立っていた理由を理解する。

VTシステムの件は学園中に知れ渡っている。当然、箝口令は敷かれているが。

この件に関しては、ボーデヴィツヒさんは寧ろ被害者と言えるだろうというのがクラス全員の意見だ。

なので、

「「許す！」」

異口同音にそう言い放つとボーデヴィツヒさんが逆に面食らった顔をした。

「・・・怖く、ないのか？」

「皆、何か聞こえた？」

「聞こえないな」

「何か言いましたの？」

「「私達のログには何もないわ」」

ボーデヴィツヒさんの疑問に対し僕から始まりクラスの見事な連携で返す。

半ば布仏さんと同じマスコットキャラとしてクラスに馴染んでるのに今更怖がる理由もないしね。

「みんな・・・ありがとう」

花が咲くような笑顔でそういったボーデヴィツヒさんにクラス中がホッコリする。

「あー、妹に欲しい」

「布仏さんのパジャマ似合いそうよね」

「いや、ここはセクスイーな格好を」

「そして何よりベッドに」

「おいそこの変態共、聞こえてるぞ」

教室の一角に座るクラスメイト数人に織斑先生が溜め息混じりに注意する。

危険人物多いなこのクラス。

「そ、それでだな」

落ち着きを取り戻したところでボーデヴィツヒさんが口を開いた。

「ふ、扶桑。こっちに来てくれ」

「え、僕？」

自分自身を指差すとコクコクと頷かれた。はて、何だろうか？

椅子から立って、ボーデヴィツヒさんの前に立つ。うわ、視線が凄
い刺さる。

「その、私を助けてくれて、感謝している。だから・・・」
瞬間、唇に柔らかい感触があった。

目の前にはボーデヴィツヒさんの顔。

・・・え？

「ーーーー!?!」

「これは、私なりの恩返しだ」

「へ?え?」

「つまりだな・・・その、私がお前の嫁になる!!」

混乱するクラスの中、堂々とボーデヴィツヒさんが宣言した。

「な」

「「「「なにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」」」」

「宜しく頼むぞ、『睦月』?」

阿鼻叫喚の地獄絵図と化した教室で、ニコニコと彼女は笑った。

「は、ははは・・・」

うん、もう笑うしかないね、これ。

#24 裏話

「・・・もしもし?」

「久しぶりだな、『シャルロット』」

「うん、久しぶりお父さん」

ゴールデンウィークを目前に控えたある日の放課後、人気の無い校舎裏でシャルロットは父であるアレックス・デユノアと電話をしていた。

「諸々の処理が済んでな、漸く電話が出来る程度には落ち着いた」

「そうだったんだ・・・よかった」

シャルロットはアレックスの事をそれほど嫌悪していない。寧ろ好いている方だ。かつては自分を見捨てたと思いついていたが、睦月に本当の事を教えられその考えを改めた。

近況について話すアレックスの言葉は軽快で、人柄の良さが滲み出ている。

彼自身、コミュニケーションを取れなかった時間を少しでも埋めたいのだろう。

「そう、扶桑睦月君、だったか?彼とは仲良くしているかね?」

「え、まあ・・・うん。クラスに上手く馴染めるよう、手伝ってもらってる」

「そうかそうか、それは良かった。恐らく、彼のおかげで我が社は生き残れたのだからな」

どうやら、あの時・・・シャルロットが睦月に助けを求めた時の電話一つで色々察したらしい。

確かにあれだけの裏情報を何のてらいもなくデユノア社に送りつけ、女性権利団体を止められるのは天才、篠ノ之束くらいなものだろう。そして現状その天才に近しく、動かせるのは睦月しか居ない。

「今度、内密にだが、礼を言わなければな」

「本当に、感謝してもしきれないよ」

社長婦人は帰国後何の準備も出来ぬまま裁判に挑み敗北。そのまま情報漏洩の罪に問われ国籍を剥奪。最低限の金品だけ持たせて国

外追放され、今頃はどこか辺境の地で生きている事だろう。

女性権利団体もその活動の苛烈さを問題視され、政府の命により解体を余儀なくされたらしい。

つくづく『都合が良い』流れと言える。

何よりもアレックスが喜んでるのは、

「お前とこうしてゆっくり話せる事が、一番幸せなんだ」

「・・・僕もだよ」

これまでは夫人の存在が邪魔をして、会話という会話が出来なかつた二人にとつて、他愛の無い話が出来るとするのは、これ以上無い幸せであった。

「そうだ、シャルロットにも伝えておかねばな」

「何を？」

「第三世代機、開発の目処が漸く立った」

「え？」

唐突にアレックスが告げたのは社会的にも大きな衝撃を与えるものだった。

あまりの事にシャルロットの思考が一瞬止まる。

「お父さん、それ本当!?!」

「ああ、もとよりファイネが居なければちゃんとした開発に着手出来る段階まで進めていたからな」

「すごい、すごいよ!」

はしやぐシャルロットに電話越しにアレックスは笑みを浮かべる。

「そちらが夏休みに入ったら一度戻ってきて欲しい。お前にも見せてやりたいからな」

「うん・・・うん!」

年頃の少女らしい笑顔で、シャルロットはそれからも父と日が沈むまで話続けた・・・。

けたたましいアラームが鳴り響く。

異常事態を知らせる赤いランプが至るところで明滅する最中、白衣を着た人々が慌ただしく廊下を駆け回る。

時はタッグマッチトーナメントを終え、日本では月曜日。

ドイツのある山奥での出来事である。

「バカな・・・なんで研究所（ここ）がバレた!?最新の隠蔽処置を施したはずだろう!」

アラームと人が走る不協和音の最中、一人の研究者が使いなれたデスクを殴り付ける。

彼はここの責任者であり、同時に『VTシステム』の生みの親でもある。

・・・そう、彼こそがラウラのIS『シユヴァルツエア・レーゲン』にシステムを取り付けた張本人である。

「ありえないありえないありえない!こんな処で終わるだと?冗談じゃない!」

キーボードをガチャガチャと叩きながら嘆きの声を上げる。

見つかることなど、あるはずが無いと思いついていた。

名を騙り、戸籍を偽り、ありとあらゆる手を尽くしてドイツ軍に忍び込み、最新鋭機であるレーゲンにシステムを組み込んだ。

そしてトーナメントの時、搭乗者の危機を察知して、システムによつて敵を破壊。システムの優秀さを世に知らしめる・・・筈だった。「捕まってたまるか・・・私の作り上げたシステムこそ至高なんだ!こんな・・・こんな処で終わってたまるか!」

冷静になつて考えれば、そんな計画が成功するわけが無いと考えが至つただろう。

しかし、今の彼にはそんな冷静さなど微塵も無い。あるのは小さなプライドと自己顕示欲だけだ。

一心不乱にモニターに向かう彼の耳に、雑踏とアラームに混じった、本来こんな場所で聞こえるはずの無い音が聞こえた。

「そんな・・・もう、軍が着たのか？」

爆発音だ。

それは何度も何度も彼の耳を叩きながら段々と近付いてくる。

紛れもない『死』の存在に、指が止まる。目は焦点が合わず、歯は噛み合わず音を鳴らす。呼吸の間隔は短くなり、頭痛がいやに増す。そして。

「あ、ああ・・・！」

『ミツケタ』

鉄の軋む音を立てて扉がひしゃげながら開かれ、彼にとっての『死神』が姿を現した。

気付けばアラームの音も、雑踏も、悲鳴も消えていた。

非常灯だけが薄暗く照らす部屋の中、『死神』は研究者の前に立った。

『VTシステムの開発者、アラン・クラディウス。貴方には、ここで果てていただきます。理由はおわかりですね？』

少女の声で冷酷に、死神は宣告する。

それはISだった。純白の全身装甲の手足は細く、その右手には杖とも、剣とも、銃とも、楯にも見える不可思議な武器が握られていた。

丸みをおびた頭部にある『ツインアイ』が研究者を冷たく見据える。

「い、いやだ！私はまだ・・・」

『残念ですが、貴方に選択肢はありませんし、拒否権なんてものはありません』

嘆く研究者に死神が右手の複合兵装を躊躇なく向ける。

恐怖心が最高潮に達した研究者は頭をかきむしりながら失禁する。

「いやだ、いやだいやだいやだあああ!!」

『さようなら。哀れなジーニアス』

あくまで淡々と、死神は引き金を引いた。

視界が光に染まる最中、研究者が最後に見たのは、『白い兎』のエンブレムと、『TR-6』の文字だった。

この日、一つの研究所が歴史から消え失せた。
死者を一人も出さずに。

黄金週間！

#01 ゴールデンウィーク！

ピピピピ・・・

「ん、んう・・・」

携帯でセットしていたアラームがけたたましく朝を告げる。

感覚で手を動かして携帯を黙らせる。折角の休みなんだ。もう少し寝ていたい。

それに、普段とは違って妙に寝心地が良いんだ。なんと言うか人肌のような暖かさがあって、僕を夢の世界へと誘おうとする。

・・・よし、もう一眠りしよう。

そう決めて寝返りを打って暖かな抱き枕を抱き締める。

「んっ・・・意外と大胆だな、睦月は」

・・・何故か抱き枕から声が聞こえた気がする。とうか僕は抱き枕なんて何時買った？しかも妙に柔らかいし。

眠気に抗いつつ瞼を開けると・・・

「おはよう、睦月」

『全裸』のラウラが居た。

「アイエエエエエエエエ!?」

早朝の寮に、僕の叫び声が響いた。

ゴールデンウィーク初日、学生の身としては大変喜ばしい連休である。働いてる方々にはお疲れ様ですと言いたい。

「・・・で、本当にナニもしてないのっ?」

「ハイ、シテオリマセン」

現実逃避は止めよう・・・虚しくなるだけだ。

ええ、ただいま簪に説教されています。ラウラと二人揃って。
いやまあルームメイトが裸の女子と抱き合ってたらそうもなるよね。

「というか何でラウラは裸なの？バカなの？変態なの？」

「流石に制服で寝るわけにはいかんだろう」

「せめて下着は着たらどうなの？」

「したぎ？」

「・・・まさか、下着持ってないの？というか私服は？」

「無いな」

「えっ」

「私の持つてる服は制服とISスーツだけだ」

ベッドシートにくるまったラウラが何故か自慢気に服がない事を言った。

うん、自慢気に言うことじゃないよね。ほら簪も呆れ顔になっちゃってるし。

「睦月」

「はい、何でしょう？」

「今日の予定、変更。シャルロットも連れてラウラの服を買いに行く」
溜め息混じりに額を押さえて簪が言う。元々今日は簪とトーナメントの時の約束の為に掛ける予定だったんだけど、良いのだろうか？

視線を向けると簪は、

「流石にこの状況は見過ごせない・・・後、睦月もう立っていいよ。上目遣いは私に効く」

そう言ってもう一度溜め息を吐く。

よかった正座意外と辛かったんだよね。・・・というか上目遣い？

「私は別に服は・・・」

「ラウラ自身が良くても、まわりが良くない。ともすれば寮長である織斑先生にも迷惑が」

「行くぞ、今すぐ行くぞ、さあ行くぞー！」

簪の言葉を遮ってラウラが立ち上がったので即座に視線を逸らす。

見えてない、何も見えてない。セーフセーフ。

「睦月、ギリギリアウト」

「そんなバカな」

ちらっと見てしまったけども。

と、いうワケで時刻は10時ちょっと過ぎ。IS学園からモノレールに乗って直ぐ近く。複合ショッピングモール『レゾナンス』にやってきましたー。

って、

「何で僕は女装しなくちゃなんないのさ!？」

ええ、無理やり着替えさせられましたよ。モノレールのトイレでね・・・ワケがわからないよ。

上は半袖のTシャツに薄い黄色のパーカー、下は・・・チエツク柄のミニスカート。

「うう・・・何でよりもよってミニスカートなのさ」

「その方がかわいいから」

「うむ、似合ってるぞ睦月」

ああ、足がスースーする。よく女の人はこの履けるな・・・履いてる僕が言えたタチじゃなかった。

スカートの裾を押さえて少しでも風が通らないようにする。誰だ無駄な抵抗って言った人は。

「男性IS操縦者って事で、顔バレしちやってるからね」

「変装して少しでも周囲の目をごまかさないと」
シャルと簪の言葉も確かだ。下手に見つかれば追いかけて回されるのは目に見えている。

折角のゴールデンウィークをそんな事に費やしたくはない。

「はあ、わかったよ・・・このまま行こう」

仕方ない、甘んじてこの恥を受けよう。

ポニーテールにされた髪を撫でて溜め息を吐くと、ワンピースとサマーカーディガンを着た簪が僕の手を握った。

「それじゃ、ラウラの私服&私達の水着を購入しに、出発！」

「おー！」

「お〜」

やけにノリいいなシャルとラウラ。

そんなこんなで、僕たちは人でごった返すレゾナンスへと入っていった。

「見たまえ、人がゴミのようだ！」

「入って早々何言ってるの・・・」

「いや、言わなきゃいけない気がしてな」

どこのラピ〇タ王なんだラウラは。というかよく知ってるなあ。

入り口に置いてあったパンフレットで店の場所を見ていたシャルが声を上げる。

オレンジのシャツに、薄手のジャケット。下はロングスカートと端から見ればモデルな格好だ。

「お店の配置から見て、三階にある水着専門店の方から下に降りてきた方が良いかもね」

「水着かあ」

何故水着を買うのかというと、ゴールデンウィーク明けに臨海学校があるからだ。

海での自由時間用に彼女達は欲しいみたいだ。

「ところでラウラは水着は・・・」

「学校指定の水着で充分じゃないか？」

因みにIS学園の水着は『旧』スク水である。提案した人は何時の時代の人なんだ・・・。

というかラウラの体型でスク水着たら色々と危うい気がする。

「うん、シャルと簪にちゃんと選んでもらった方が良いよ」

「睦月がそういうなら、仕方ないな！見てろ、絶対に『のーさつ』？してみせるからな！」

ビシィツ、と指を突きつけて制服姿のラウラは高らかに宣言した。

何だろう、物凄く和む。

「睦月、ラウラ？もう行くよ〜」

「今いくよ」

先に歩きだした二人を追って歩き出す。

この時点で気付くべきだった。今はゴールデンウィーク真っ只中なのだと・・・

#02 何気ない幸せ

という訳でやってまいりましたレゾナンス三階、水着専門店『アクエリアス』。某ガンダムを思い出してしまったよ。

やっぱりというか、女性用水着がスペースの大半を占めている。男性用は・・・狭っ!?

「じゃあ水着選ぼつか？睦月はどうするの？」

「僕も自分の・・・を」

簪に答えながら自分の下半身を見る。そういえばスカート履いてるんだった・・・いや、店員さんなら気付いてくれる筈・・・でも解られたら解られたで変態のレッテル貼られる!?

「ふおおおお・・・」

「急に唸りだしてどうしたんだ？」

「多分、今の格好についてじゃないかなあ」

「睦月は女性用水着も似合いそう」

「似合うかあ!!」

ツツコミを入れて溜め息を吐く。

仕方がない、買わなきゃどうしようも無いんだし、変態のレッテルは甘んじて受けよう・・・。

「そうだ、睦月」

「何？シヤル」

「僕達の水着選ぶの手伝ってくれない？」

「!?!」

「手伝うって、どうするの？」

生憎、僕には服飾のセンスなんてまるで皆無だし、手伝うような事はあるのだろうか？

そして何故ラウラと簪は雷に打たれたように固まってるんだろう。

「何着か自分で選んでくるから、睦月が良いなあって思った物を教えてくれればいいよ」

「僕に選ばせて良いの？」

「睦月だから良いんだよ」

「あう」

シャルはたまにストレートに言ってくるから何というか気恥ずかしくなってしまう。

やばい、顔が熱い。

「わ、わかったよ。僕の良いと思った物を言えば良いんだね?」

「うん、ありがとう! そうと決まれば二人とも、何時まで固まってるの? さ、行くよ! 睦月はここで待っててね」

「ああ、うん」

二人を引きずるようにしてシャルは店の奥へと入っていった。

さて、女性の買い物は長いと言うし、どうやって時間を潰そうか。

「つと、すみません!」

携帯を取り出したところで背中に衝撃を感じた。誰かがぶつかったみたいだ。

「いえ、こちらこそ、こんな処で突っ立ってて申し訳ありません・・・」

振り向いて謝りながら相手の顔を見ると・・・一夏だった。その後ろには箒さんの姿が。

・・・な、なんですとお!?

「余所見をしているからだぞ、一夏」

「面目ない・・・大丈夫ですか? 怪我は?」

「あ、いえお気になさらず」

あれ?もしかして僕だと気づいてない?

いやいや、まさかまさか。ほぼ毎日学園で顔を合わせてるんだ、そう簡単に間違えるわけが・・・僕女装してるんだったああ!! (メイク済)

「んー・・・」

「な、何でしょう?」

「いえ、知り合いに似ている気がして・・・」

それは暗に僕が女顔だって言いたいのか・・・?

ほう、成程、ゴールデンウィーク明けの特訓が楽しみなあ? リミッター外したロングブレードドライブに何時まで持つかな?

「あはは、気のせいじゃありませんか?」

「それもそうですね、すみません」

「いえいえ、それよりも早く『彼女さん』とデートの続きをしてあげたらどうですか?」

「か、かの・・・っ!?」

二人揃って顔を真っ赤に染め上げてあたふたしだす。

「か、からかわないで欲しい!いい、行くぞ一夏!!」

「あ、おい引っ張るな箒!ぶつかってすみませんでしたあく・・・」

「お気になさらず」

気恥ずかしさに我慢できなくなったのか箒さんが一夏を引っ張って行ってしまった。

前途多難だなあ一夏も。視界の端にツインテールと金髪が見えた気がしたけど気にしないようにしましょう。

「おまたせー、ってどうしたの?」

「いや、今の僕ってまわりからどう見えてるんだろうなって」

「どうみても女の子」

「Oh...」

認めたくないものだな、自身の女顔というものを・・・。

はあ、一夏みたく格好良くなりたくないな・・・身長大きいし、身体ガツチリしてるし、何よりイケメンだし。

「選んできたから、見てみてよ。あと睦月の水着も幾つか持ってきたから」

「そうなの?ありがとう」

「取り敢えず、試着室前まで行こう」

シャルに手を引かれて試着室まで来る。

シャルと簪の手には何着もの水着がハンガーごと持たれていた。

ラウラは・・・一着だけ?

「ラウラはそれ一つなの?」

「か、簪に薦められてな、仕方なくだ!決して私が選んだんじゃないぞ!」

「そ、そう・・・?」

顔を上気させて必死に語るラウラ。水着が握り締められてクシャ

クシヤになりそうだ。

「それじゃ僕達は着替えるから少し待つて？あ、これ睦月の水着ね。僕と簪のチョイスだから、合わなかったらごめんね？」

「ありがとう、見させてもらおうよ」

「ラウラはこっち」

「待て簪、私はシャルの方が・・・うわあ！」

ラウラ、没シユート〜！

・・・さて、聞こえ始めた衣擦れの音をシャットアウトするためにも水着を選ぼうかな。

「ふふふ、デッドエンドくすぐり・・・」

「やめる簪！そこは弱・・・ひゃあ!」

何も聞こえない、僕は何も聞いてない。

「買い物も済んだし、そろそろお昼にしよつか？」

あれから二時間ほど経ち、一階へと戻ってきた僕ら一行は、シャルの提案で昼食をとることにした。

「負けた・・・軍人である私が簪に負けた・・・」

フードコートに向かう最中、ラウラが肩を落として落ち込んでいた。

水着専門店で水着を買ったあとに、ラウラの服を買いにいったんだけど、服の試着に抵抗。しかし簪が目にも止まらぬ早さでラウラを確保、試着室に再度一緒に入って着せ替え人形状態にしてしまったのだ。

前を歩く当の本人はつやつやしてらっしやる。

「む、睦月・・・今の私は、変じゃないか？」

「変なわけないじゃない。似合ってるよラウラ」

上は白のブラウスに、下は黒のフレアスカートを纏ったラウラは一見すると良家のお嬢様に見える。普段の、というか制服姿の時とはまた違った印象を受ける。

「そ、そうか・・・良かった」

そう言うてはにかむラウラ。・・・何この可愛い生き物。

簪が振り向いてサムズアップ（親指を立てる）をしてきたので同じくサムズアップで返す。グツジョブ！

「お昼食べたあとどうする？」

「・・・ウインドウショッピングかな。いや、この際睦月の服を」

「それは男性用の服であって女性用じゃないよね？そうだよね!!」

「今の睦月は女装なのだから、女性用の服を買うのだろう？」

「ラウラまで!?!」

わいわい騒ぎながら皆で楽しむ・・・うん、何だかんだで幸せだ。

「じゃあ下着とかも女性用に」

「それはアウトでしょ簪い!!」

・・・前言撤回、少し幸せだ。

#03 恋愛相談!?

「睦月、居る?」

「ゴールデンウィーク二日目、昨日の疲れ(主に女装による精神疲労)を癒す為に部屋でゲーム『スパロボ無双』をしていたところ、ドアをノックする音が聞こえた。あと少しまいでライジンオーのアンロックなんだけどな……」

「はい、ちよつと待ってー」

返事をしてゲームを一時停止、席を立ってドアを開ける。

「鈴さんに、オルコットさん?それに箒さんまで、一体どうしたの?」

廊下に立っていたのは『一夏ラヴァーズ』(僕命名)の三人だった。……また一夏がキングオブ唐変木の名の下に何かしかしたのだろうか。

先頭に立つ鈴さんが申し訳なきように口を開いた。

「えつとね……ちよつと相談が」

「……一夏絡み?」

「うん。あ、用事があるのかなら無理には言わないわよ!」

「ビンゴだったよ……まあ簪も出掛けちゃって暇してたし、ちよつどいいか。」

部屋に入れるように身体を避ける。

「別に良いよ、今日は暇なんだ」

「……ありがとう」

礼を言う三人を部屋に入れてドアを閉める。さてはて、どんな相談なのやら。

「それで、一夏について何を相談したいのかな?」

三人を適当な所に座らせて、お茶を出し、ゲームの電源を切ったところで話を切り出した。

皆を代表してか、箒さんが声を上げた。

「単刀直入に言うのだな。どうすれば一夏を振り向かせることが出来るか、という事なんだが……」

「あのニブさだもんね……」

「そう言うことだ」

残る二人が箒さんの言葉にウンウン頷いた。確かに、あのニブさは強敵だ。聞けば、中学時代ストレートに告白した女子生徒の尽くを勘違いで撃沈させてきたらしい。

振るよりもキツイ仕打ちじゃないかとは思う。

「そう、あのニブさをどうにかしないことには始まらないのよ！」

「三人よれば文殊の知恵、とは言ったものですが限界があります……」

「同盟を組んだ方がいいが、早速壁に当たってしまったてな……」

成程ね……でも、あのニブさを解消、或いは好意に気付けさせるのつてネオグランゾンに裸で挑んで勝って言うてるようなモノだよね。

……ぶっちゃけ無理。出来るのつて衝撃のアルベルトか東方不敗位じゃないか。

まあとやかく言っても始まらない。相談された以上は応えないとね。

「取り敢えず、今まで三人がしてきた事を教えてくれるかな？」

「二つしてきた事？」

「そ、どんな風に誘惑だとか、それと言った好意の気付け方とか。今まで講じてきた事」

まずは履歴を洗おう。そこから何か掴めるかもしれない。

冷えた麦茶をグイと飲んで、話を聞く体勢をとる。

「では、私から話そう……」

話の内容が纏まったのか、箒さんが最初に話始めた。

さあ、長くなるぞ。

三人の話を聞いた結果、僕が思ったことはただ一つ。

「難攻不落の城か．．．！」

一夏の鈍感さが最早化け物クラスだったという事だ。

GNドライブにIフィールドとVPS装甲取り付けたダブルオークアンタ・フルセイバーのような、相對するのもバカらしいレベルだ。腕に抱き付き、二人きりでデート、半ばストレートに告白しても好意に気付かないなんて鈍感通り越してる。

「どう思います、睦月さん？」

「んー．．．」

オルコットさんの問いに顎に指を当てて考える。

さつきも上げた通り、半ばストレートに告白しても反応が無かったのは確かなんだけど、だからと言って一方的に一夏が悪い訳でもないのだ。

「多分三人の場合、心象の問題もあるんじゃないかな？」

「心象？」

「そう．．．ちょっと辛辣な事を言うかもしれないけど、良いかな？」

確認の為に三人の顔を見ると、頷き返された。

覚悟はある．．．訪ねるのも無粋だったか。

「じゃあ、言うけど。三人はちょっと暴力的な面があるんじゃない？」

「「うぐっ」」

「自覚はあるんだね．．．学園に入る前の事は良く分からないけど。兎に角そういったのが好意の邪魔をしちゃってるんじゃないかな」

麦茶を飲み干して喉を潤してから、話の続きを語る。

「まあ演習中に山田先生の．．．その、胸を揉んじやったとか、そういったT o l o v e るもとトラブルのとき。オルコットさんなんか鬼の形相だったし」

「うっ．．．」

あの時は殺意の波動にでも目覚めたのかと思ったよ。生身じゃ相手にしたくないね、絶対死ぬ。

「他にも色々やっってるでしょ？」

「わ、私は・・・」

「聞いたよ、入学して最初の日の事。照れ隠しで木刀は無いでしょ木刀は」

「ぐはあ・・・っ」

箒さんが胸を押さえて轟沈。

「鈴さんは酢豚の件で全力ビンタ。気付かない一夏も一夏だけど、ビ
ンタしたらそりや喧嘩になるよ。というか遠回し過ぎる」

「うぐっ！」

鈴さんも撃沈。

「オルコットさんは入学当初よりかはマシになってるけど、事あるごと
に嫉妬して辛辣に当たるのは良くないよ。演習中の時だって、僕が
止めなきや一夏がミンチより酷い状況になってたし。イギリスの淑
女としてどうなのさ」

「ぐっ・・・！」

オルコットさん、沈没。

気付けば死屍累々の有り様である。一夏のニブさの遠因ってこう
いうのかもしれないな。

女尊男卑の風潮の影響もあるんだろうし。

「そういうワケで、ちよつとずつで良いからそういう所を改善してみ
たらどうか」

「一夏のニブさはどうすれば良いのだ？」

「あれはもう一種の病気だよ。というか仮に一夏が鈍感じやなくなっ
たとしても、現状の三人じゃ好意に気付かれないと思う」

「「デスヨネー」」

強く言い過ぎちゃったかな・・・三人とも目から光が消えてる。い
や、でも仕方ないよね。こうでも言わなきや三人揃って一夏に玉砕し
かねないし。

「兎に角、今を変えたいならまずは自分から！焦りは禁物だからね」

「自分から・・・」

「変わる・・・か」

「そう、ですね。私達は一夏さんにばかり変わることを強要してしまっていたのですわね」

得心がいったのか、オルコットさんが悟ったような顔で頷く。

「オルコットさんは答えを見つけたみたいだね」

「私もだ。睦月、感謝するぞ。自分がどうするべきか、わかった気がする」

「ありがとね睦月、私もやることがわかったわ！」

「感謝しますわ、睦月さん」

三人揃って立ち上がり、頭を下げられる。

「い、いや、気付いたのは三人であって僕は説教じみた事しただけだし！」

「「ありがとうございます(ございますわ)！」」

「うう・・・」

何かむず痒い・・・。

何にせよ、これで相談事は終わり。

それから簪が帰ってくるまでの間、四人でスパロボ無双をやって、ゴールデンウィークの一日は過ぎていった。

#04 白兔の相談事

カタカタと、薄暗い部屋に音が響く。

微かに見える部屋の様子は、一言で言えばガラクタの山だった。その山をどこからか現れたロボットアームが回収しては隅の方へと音も立てずに整理していく。

「ふむ．．．白式のデータはこんなモノか。後はつと〜」

そんな中、機械のウサミミを揺らして篠ノ之束は鼻唄混じりにキーボードを叩く。

彼女の目線の先にあるモニターには、ISの設計図が映し出されていた。

それを見て束は口端を吊り上げた。

「完成すれば正式『第四世代型IS』一号機かあ。胸が熱くなるね！あ、むつくんにも伝えないと。箒ちゃんには．．．サプライズでいいか！」

言いながら束は端末を取り出すと、日本に居る睦月へと電話をかけた。

「遂に出来たよ、正式第四世代型IS一号機！」

電話に出て開口一番、束さんから言われたのはそんな一言だった。

第四世代型ねえ．．．。

ちらつと右腕のシルバークラッシュレットを見る。

「あれ？意外と驚かない？」

「まあ、ヘイズルも試作とは言え第四世代型ですし．．．今回は何作っただんですか？TRシリーズ」

「うんにゃ、今回はTRじゃないんだよね〜」

「じゃあ通常の I S ですか」

通常、とは見た目の話だ。性能面なんて普通じゃないのは分かってきつてる。この人が凡庸な機体を造るわけがない。

「今、失礼な事考えなかつた？」

「いえ、何も」

「・・・ま、いつか。それでね、名前も決めてあるんだ！名付けて『紅椿』！」

「紅椿、ですか」

和風な名前だ。打鉄みたいな武士じみた外装なんだろうか。

刀に鎧！みたいな感じで。

「あ、今パソコンつけてる？」

「はい、電源入ってますよ」

寮の部屋で艦これやってみました。

ブラウザを閉じてデスクトップに戻ると、メールが送られてきた。

ウイルススチエックの後、メールを開くと・・・

「オーバースペック過ぎる・・・」

メールに添付されたファイルには紅椿の設計図入っていたんだけど。

エネルギーゲインや各駆動系に始まり、ありとあらゆる性能が現行機をぶっちぎっている。

機動力ならリミット無し、シールドブラスター全搭載のヘイズルでギリギリ対等になれそうだけど・・・。

「これ、どうするつもりなんです？」

「箒ちゃんにプレゼント！」

「・・・はい？」

今なんと仰ったんだろうかこの天災は。聞き間違いじゃなきゃ箒さんにプレゼントとか宣ったような気がするんだけど。

「だーかーらー、箒ちゃんにプレゼントしようかなっ、てさあ」

「はあああ!?!」

聞き間違いじゃなかったよ・・・。

あまりの事に声を荒げてしまい、驚いた簪がこつちを見る。

ジェスチャーで何でもないことを伝えると簪は首を傾げながらもテレビに視線を戻してくれた。

「プレゼントでIS渡すような人がどこに居るんですか」

「ここにいるぞ！」

「解る人がいるか分かりにくいネタは良いですから。・・・はあ、また何でそんな事を？」

三國志でもマイナーなネタを言う束さんに若干呆れつつも話を促す。

プレゼントにしてはあまりにも大きすぎるし、重すぎる。

「箒ちゃん誕生日がそろそろだね。臨海学校の時って学園の束縛が緩むから、その時にでも渡そうかなって・・・」

「それで仲直りしたい、って感じですか」

「・・・うん」

成程なあ。

束さんがISを用いて十年近く前に『白騎士事件』を引き起こしてから、篠ノ之家は日本の要人保護プログラムによって一家離散。束さんは世界に追われ、家族とも離れ離れになった箒さんはずっと一人で生きてきたらしい。

だからか、箒さんは束さんに対して嫌悪に近い感情を持ってしまっている。

僕が束さんの事を箒さんと話すことでその感情をある程度緩和出来ているかも知れないけど、嫌悪感を払拭するにはまだ遠い。

・・・今回の件、下手をすれば束さんも箒さんも傷付く展開になってしまうかもしれない。

紅椿を渡すのは最早決定事項だろう。束さんがそうそう止まるとは思えないし。

一応、確認はしてみよう。

「紅椿を渡すのは決定事項なんですか？」

「うん！・・・でも、タイミングは多少ずれるかも。むつくんに報告してたら緊張がヤヴァい」

「だったら、渡すのは別の日とかにすればどうでしょうか」

「え？」

「何も出来たからって直ぐに渡さなくても良いじゃないですか。それに、いきなりIS渡されても箒さん困っちゃいますよ?」

困るどころか大喧嘩に発展する未来しか見えない。

そしてそれを止めに織斑先生が入って最終戦争が始まりかねない。

「なので、紅椿が出来たことだけ伝えて、プレゼントは何か別のものにして見たらどうです?」

「うーん・・・別の物って言っても研究所(ここ)で出せるものなんて限られてるよお」

「オーケー、まずは外に出ると言う考えを持ちましょう」

なに引きニートみたいな事言ってるんだこの人は。

「クロエ連れてアメリカなり何処かの国でプレゼント買えば良いじゃないですか。クロエならセンスあるから間違えませんし」

「私にセンスが無いって言いたいのかなむつくん!」

「IS以外は、壊滅的に」

「がーん!」

見た目はホントに美人なのに服装がちぐはぐなコスプレにしか見えないし。

一人ふしぎの国のアリスとか、どう考えれば思い付くんだそんなの。

「兎に角、変装なりなんなりしてプレゼントを買って渡した方が良いと、僕は思いますよ」

「うー・・・わかったあ、クーちゃんに相談してみる・・・それじゃ、またねえ」

「そうしてください。それでは」

通話を終えて、ため息を吐く。

クロエがいるなら突拍子もない物を買う心配もないだろうし、これで大丈夫だろう。

「睦月、誰から?」

「束さんから」

紅椿の設計図が表示されたファイルを閉じて、簪に答える。

「そう・・・あ、そうだ。睦月、このマップ手伝って」

「何?・・・うげ、ネオグランゾン四体倒すやつか・・・難易度は?」

「最高難度(ジエノサイド)」

「Oh...」

せめてマトモなプレゼントをクロエが選ぶと信じつつ、僕は簪と一緒にスパロボ無双をやり始めた。

・・・ホントに大丈夫だよね?

Advanced

#01 臨海学校

「『海だー!!』」

「ん・・・」

そんな叫び声が聞こえ、目を覚ます。

視線を横にずらすと窓の向こう、確かに海が見えた。

ゴールデンウィークが過ぎ、一週間。

僕ら一年一組は今、臨海学校に向かうバスに乗っていた。

「あ、目が覚めた?」

「ごめんシャル、寝ちゃってた」

「気にしないで、可愛い寝顔が見れてよかったし」

「ふあ!」

寝起きから何を言うのかシャルは。男の寝顔を可愛いといいますか。

「睦月はどちらかと言うと女顔だよ?」

「さらりと人の心を読まないで欲しいな」

「顔に出てたよ」

ふ、不覚・・・!

ざわつくバスのなか頭を抱える。そんなに分かりやすいかな、僕。

と、とにかく話題を変えよう、このままだとシャルにからかわれ兼ねない。

「海綺麗だねえ」

「そうだね、天気も良いし絶好の海水浴日和だね」

「やきそばとか売ってないかな・・・」

「流石に無いと思うよ・・・」

海の家で食べる妙に高くてゴムみたいな食感、久しぶりに食べたかったんだけどな。残念。

臨海学校一日目は丸々自由時間らしいから、まったり砂浜で過ごす
としようかな。

「ふそつちは泳ぐの〜?」

不意に頭に重さを感じた。この声、布仏さんか。

「まあ、その予定。疲れすぎない程度には泳ぐよ」

「そつかく、時間が空いたら私たちとビーチバレーやろうよ〜かんちやん呼んでさ〜」

頭に乗せられた腕から延びる制服の袖がプラプラと目の前で揺れる。

まあ、少し位ならいつか。

「いいよ。でも僕球技苦手だからね?」

神なるノーコンとは僕の事だ。あらぬ方向へ球を飛ばす自信がある。

バレー? ネットの向こうに入れば奇跡だよ。

それから皆と談笑しつつ二十分。僕達はお世話になる旅館へ到着した。

したのだが。

「一夏、僕はこの部屋割りに異議を申し立てたい」

「安心しろ睦月、俺もだ」

しおりの部屋割りに僕と一夏の名前が無いと思ったら、一夏は織斑先生と、僕は山田先生と同室になっていた。

何故、

「何故、ここまで来て女性と相部屋なんだ・・・!」

「ほう、私達では不足というか、お前ら」

直後、頭出席簿が落とされる。

「ふおお・・・!」

痛い、物凄く痛い!これホントに出席簿!? どう考えても鈍器でしょ!!

「仮にお前達二人で部屋を使ったとして、迫り来る女子生徒(猛獣)ど

もの相手が出来るのか？」

「うっ、それは・・・」

織斑先生の尤もな理由に、何も返せず言葉に詰まる。

一クラス処か一学年全体が部屋に押し掛ける・・・ああ、うん無理。「そういった意味でもこういう部屋割りなんです。ごめんなさい、他の生徒へバレるのを防ぐためとはいえ、今まで黙って・・・」

「ああ、いえ気にしないでください山田先生！こちらこそ下手な事いってごめんなさい！」

頭を下げる山田先生に慌てて謝る。

山田先生に申し訳なきそうな顔をされると罪悪感が臨界に達しそうになる。

謝っては謝り返す僕と山田先生を見て織斑先生が溜め息を吐いた。

「とにかく、お前達の部屋は私達と同じだ。わかったらさっさと行くぞ。自由時間を無駄にはしたくないだろう？」

「h a i！」

「いきなり元気になったな・・・」

織斑先生に連れられて、僕達は職員が泊まる部屋へと向かった。

そして、部屋に荷物を置き、更衣室で水着に着替えて・・・

「うーみーだー」

「何で棒読みなんだよ・・・」

旅館近くの海水浴場にやって来ました。

IS学園の貸し切りということで見事に女性しかいない。

因みに一夏は赤い半ズボンのような水着です。あ、興味ないですか
そうですか。

「しっかし暑いな。睦月はパーカー脱がないのか？」

「日焼け痛くて・・・あんまり肌を出さないようにしたいし」

俺の体が真っ赤に染まる！肌を焦がせと轟き叫ぶう！

なんて事になったら今日確実に風呂に入れない。絶対痛みで泣く。「あとで日焼け止め塗ってやろうか？」

「お願い。流石にここまで来て泳がないのは損だし」

さて、何時までも更衣室前で話しているのもあれだし、行くとしようか。

取り敢えず、空いてるパラソルの下に向かおうと、砂浜に足を踏み入れた。

ザツ・・・シュー・・・

「あつつい!!というか痛い！」

「ははは、サンダルも無しに行こうとするからってサンダルに砂があああ！あちいい！」

勢い良く踏み出したくせにこの体たらくである。

仕方がないじゃん、熱いんだもの。

日に焼けた砂を甘くみてたよ・・・熱した鉄板みたいじゃないか・・・

「む、睦月・・・大丈夫か？」

「一夏・・・空いてるパラソルまで連れてって、お願い」

「ああ、任せろ」

ここは安全策として一夏におぶっててもらおう。このまま素足で行ったらパラソルに着く前にジオングのようになってしまう。

足は飾りじゃないですよ。偉い人だってそう思ってる筈。

「よっ、と。睦月は軽いなあ、ちゃんと食ってんのか？」

「失敬な。バランス考えてちゃんと食べてるよ」

きつちり朝昼晩三食摂ってますよ。

毎朝ジョギングとかして運動もしてるしね。

とそこで不意に体が浮いたと思ったら一夏の顔が目の前にあった。

「ごっちの方が睦月は運びやすいな」

「な、ちよ、何を・・・!?!」

どう考えてもお姫様抱っこです、本当にありがとうございました。ってそうじゃなくて、うわ視線が刺さる！痛いほど刺さる！

「い、一夏！皆見てるって！」

「そうか？気のせいだろ」

こんな所で鈍感発動するなあああ!!

僕の心の叫びを余所にまわりからヒソヒソと声が聞こえてくる。

「お姫様抱っこ・・・だど?」

「扶桑君、男の娘だから合ってるわね」

「拂る・・・拂るぞ・・・!夏の決戦のネタが拂るぞ!」

「ああ、照れ顔の扶桑君・・・食べたい」

「一夏お願いだからおんぶに変えて!何か身の危険を感じるから!」

主に貞操面がヤバイ。戦場でガンダムにあつたジオン兵の気分だ。

ああ、もう恥ずかしい・・・

「変えるものにも、もう着いたぞつと」

「え?」

気付けばパラソルの下にある椅子に座らされていた。

「いやあ、サンダル履いてもやっぱ熱いなあ。あ、日焼け止め塗るか

?

「え、ああ・・・もう少し落ち着いてからかな」

「?」

首を傾げる一夏から視線をついと逸らすと、さながら猛獣のような目線をした女子生徒達がかなりの数居た。

・・・うん、泳ぐのは皆の注意が逸れた時にしよう。

「はあ・・・」

天高く昇った日に照らされた砂浜に、ため息が陽炎と共に消え去った。

#02 オン・ザ・ビーチ!

「さつてと、そろそろ海入るか?」

「うーん、そうだね。日焼け止めお願いしていい?」

「おう、任せろ」

まわりの興味が此方から逸れたタイミングを見計らって、一夏に日焼け止めのオイルを渡す。

つと、パーカー脱がないと。

「よいしょつと」

「何か年寄り臭いぞむつ・・・き」

「どうかした?一夏」

僕を見たまま急に一夏が固まった。え、何?僕の体に何か着いてるのかな?

パーカーの下は本当にただの水着だ。ゴールデンウィーク中に、シヤル達と出掛けたときに色々と選んでもらって買った物。

近くに居た店員さん曰く、この夏のトレンドらしい白い『上下』の水着だ。いやあ、男性の水着にも上下つてあるんだねえ。ヘソ出しタンクトップなんて初めて聞いたよ。下はホットパンツつて言うのかな?何か不思議な感覚。

つて、良くみるとまわりの女子生徒らも固まってるし、皆一様に顔赤いし。

「ホントにどうしたの?」

「説明しよう」

「うわあ!?!」

突然聞こえた後ろからの声に驚き飛び上がる。振り向くとそこにはグレーにドット柄の入ったタンキニ付きの水着を着た簪が立っていた。

何故かジヨジヨ立ちで。バア〜ン!とか効果音入りそうな感じだ。

「その水着には秘密がある」

「秘密?」

「そう、それは・・・」

「――女性用水着だったのさ!」

「……………mjdd?」

「うん、マジで」

「Nooooooooooooooooo!!」

頭を抱え、天を仰ぎ慟哭する。何て事だ……何て事だ!!

通りであるの時簪がやけに近場から水着を取ってきたワケだよ! 反対の男性用水着売り場に行かないで!

……はっ、そういえばあの時の僕は女装してたじゃないかあ
ああああああ!!

「おお、ふそつちエロくい」

「布仏さんまで!」

いつの間にか近くに来ていたピカチ○ウみたいな着ぐるみ型水着を着た布仏さんがニマニマ笑いながら言ってくる。というかエロ
いって何!?

「いやいや、ホントに男の娘だよね。下手なモデルよりエロい感
じがする」

「何おじさん臭いこと言ってるのというか何故手をワキワキさせなが
ら近づいてくるの!?! ちよ、簪まで乗らなくて良いから、というかさ
んなキャラじゃないよね!?!」

「善いではないか、善いではないか」

「いゝやああああ……………」

目線で一夏に助けを求めるも思いむなしく、いつの間にか奪われて
いた日焼け止めオイルを二人に塗られまくった。

「もう・・・お婿に行けない」

「災難だったね、睦月・・・」

「大丈夫か？婿になら私が貰うぞ？」

それからだいたい十分後、波打ち際で文字通り打ちひしがれていた僕にシャルとラウラが話しかけてきてくれた。

「大丈夫に見える・・・？まだ足腰が震えるよ」

脇とか胸元とか人の弱いところばかり触りまくってくれたお陰で腰が抜けてしまった。

一夏は鈴さんやオルコットさんとイチャコラしに行っちゃったしで、自力でここまで逃げてきましたよ。

「まあ・・・すごい声だったよ」

「あれだな、声に艶というやつが入っていた」

「言わないで・・・余計辛くなる」

もういつそ、ヒイロみたいに自爆してしまいたい。任務完了してもいいよね・・・？

マイナス方向に覚悟を決めそうになっているとシャルが海を背に、僕の前で屈んだ。

今のシャルはオレンジに黒い模様が入ったビキニ。・・・つまり、その、魔性の谷間が見えるわけで。

「あ、あのう、シャル？」

「そう何時までも落ち込んでないで、楽しもう？」

ね？と言いながら笑顔で首を傾げるシャルに、鬱屈とした気持ちが消える。

「そうだぞ、私だってこの水着を着るのは若干ほんの少し僅かばかり恥ずかしいが、楽しんでるんだ。睦月も楽しめ」

黒いフリルの付いたビキニのラウラが腰に片手を当てピシッと指差してくる。

「はあ、ここまで言われちゃ、何時までも沈んでられないな。」

「・・・そうだね。よし、吹っ切れた」

「言いながら立ち上がり伸びをする。」

もうこの格好は仕方ないと諦めよう。周囲の視線なんか知るもん

か。

「泳ごう！シャル、ラウラ」

「ふっ、ドイツ軍でも水泳の訓練はしている・・・負けんぞ！」

「いや、勝負じゃないからねラウラ？」

二人の手を引いて海へと駆け込む。

さあて、楽しもうか・・・！

それからというもの、少し離れた離島に三人で競争したり、一夏達も交えて布仏さん主催のビーチバレーをしたりと、とにかく目一杯遊んだ。

・・・で、現在。お昼一寸前。

「むがー！むぐー！」

「あつ、扶桑君・・・あまり動かないでください・・・息が・・・」
不肖この睦月、窒息死しそうです。女性の胸で。

現在の状況？山田先生と織斑先生がビーチバレーに乱入、ボールをトスしようとしたら味方である山田先生と衝突、僕下敷き。はい、以上。

・・・冷静に考えてるけど何かもう色々ヤバイからね？顔に当たる感触とか焼けた砂の痛さとか。天国と地獄って同時に味わえるんだね。

「ちよ・・・山田先生はやく退いてください！睦月が窒息してます！」
「は、はわっ!?!?!ごめんない!!」

シャルの一声で、猛烈に謝りながら山田先生が僕の上から退く。

真っ暗だった視界が開け、青空が見える。

「睦月、気分はどうだ？」

「酸素って、こんなに美味しいんだね・・・」

いやまあ、軟らかかったけども。それよりも身体に酸素が行き渡る感覚が何とも言えない。

一夏に返答して体を起こすと、シャルが背中や腕に付いた砂を落としてくれた。

「ありがとう、シャル」

「どういたしまして。．．．睦月って肌すべすべだねえ」

「そうかな？」

自分ではあまり実感沸かないけど。そうなのだろうか？

「うん、やわらかくて、すべすべだよ．．．布仏さん達があなるのも領ける」

ん．．．？何かシャルの手つきが変わって．．．!?

不意に脇の下あたりに指を触れられた。

「ひゃあ!?!シャル、何を．．．」

「布仏さん、簪さん」

「何かようかな？」

「睦月をいじってもいいかな？」

「おk」

二人同時にサムズアップ。

オイイ!?!何勝手に決めちゃってるワケ!?

「ち、ちよつと僕の意味はああ!!」

「諦めろんく。そして私もびんじょー」

「待って急に触らないで、どきくきに紛れてラウラまで入って来なくて良いから、というか何で山田先生まで入ってるの!?!助けて一夏あ!」

「睦月は犠牲となったのだ：海の高圧テンション、その犠牲にな：」

「この人でなしイイイイ!!」

灼熱の砂浜に僕の叫びが響いた。

結局、見かねた織斑先生が止めるまでたつぷり身体中弄られ、満身創痍になり、一夏に旅館まで運ばれましたとき。．．．はあ。

#03 悪夢

臨海学校一日目、夜。

夕食と入浴も済んで、後少ししたら就寝となった空き時間を、僕は割り当てられた部屋でノートパソコンを使って潰していた。

山田先生は明日の予定の打ち合わせに行って今はいない。

「うーん、ビグウイグとか使ってみたいなあ」

開いたノートパソコンの画面にはヘイズルの所持武装の一覧が映されている。と言っても、未だ八割近くは『??』で埋め尽くされているが。

ヘイズルの武装は少し、いやかなり特殊だ。

Eパック方式のビームライフルなんて現行機で持っているのなんて存在しない。大抵のレーザー系兵器はIS本体のジェネレーターか、それ専用のエネルギーラインから出力して使用している。

この場合、出力調整等に処理能力を大きく割かれる為、レーザー系兵器を使用するISに実弾兵器はあまり搭載されない。出来ても一つか二つが限度だ。

ブルーティアーズが最たる例だろう。

「だからこそ、異端なんだよね・・・」

オルコットさん曰く、ヘイズルの武装、その殆どが『第三世代じゃありえない』そうだ。

それもその筈、第三世代機ですら問題となるレーザー兵器の処理を、実弾兵器と同じカートリッジ式にすることで回避するなんて考え付かないだろう。エネルギーは本体から供給するのが当たり前という考えが定着してしまっているから尚更だ。

サブアームユニットやフルアーマーユニットだってそうだ。

どちらかと言えば第一世代等に分類される武装を堂々と使っているのだから。

「まあ、でもそろそろパッケージ系が欲しいかな・・・」

パッケージというのは、言ってしまうえばガンダムSEED系の換装みたいなもので、その機体の戦術をガラリと変える事が出来る。

防御力の高い打鉄にさらにシールドを足してみたり、ラファール・リヴァイヴに機動性を犠牲に大経口ガトリングを積んだりと、種類は多岐に渡る。

ヘイズルの場合、シールドブラスターフル装備の強襲形態はあくまで武装を積み込みまくっただけで、パッケージとは呼べないだろう。

ああ、せめてプリムローズとか使えればなあ。

でもあれって脱出ポッドみたいなものだし、ISの武装としてはどうなるんだろ。

「ウインチュニットのみてっていうのも味気ない感じだし・・・うーん」
「ただいま戻りましたあ」

武装についてアレコレ考えていると、浴衣姿の山田先生が打ち合わせから戻ってきた。

「お帰りなさい、山田先生」

「・・・」

「・・・?どうかしました?」

きよとんとした表情を浮かべた山田先生は、僕の言葉に慌てたように笑った。

「ああ、いえ。誰かにお帰りなさいって言われるの久しぶりでして・・・何をしてるんですか?」

「ヘイズルの武装確認ですよ。戦術の組み立てに必要ですから」

ノートパソコンの画面を山田先生に向けると、驚いた顔をされた。
「いいんですか?最高機密のデータですよ!?!」

「別に構いませんよ」

見られて困るようなデータじゃないし。少々ビームライフルとかの出力が他とはダンチな位だしね。

山田先生は食い入るように武装データを見ていく。記載されているのは総弾数、出力、威力、射程距離程度なので、ここからメカニズムなどを知るのには難しいだろう。

「話には聞いていましたが、凄いですね・・・織斑先生が馬鹿げた機体というのも分かります」

「馬鹿げた機体って・・・」

いやまあ使ってる僕からしても色々とブツ飛んだ性能だとは思っ
けどさ……

「見た目が第一世代のような全身装甲なのに、現行機と同等、或いはそ
れ以上の機動性を持っていればそうも言われますよ」

「ですよー」

『全体のアップグレードしたよ！』とか言っただけで渡してきたけどアップ
グレードし過ぎな感じは否めない。

このまま雑談するのもいいけど、そろそろ消灯時間だ。

「布団そろそろ敷きましょうか？」

「そうですねえ、もう良い時間ですし」

ノートパソコンの電源を落とし、二人で押入から布団を取り出して
適当な間隔で敷く。

流石にびったり付けるとかしたら後が怖い。主に織斑先生が。

「それじゃあ電気消しますか」

「はい、お願いしますね」

布団を敷き終わると丁度良い時間になったので、そのまま寝ること
にした。

明日はISを使った実習だ。早めに休むに越したことはない。

電気を消して、布団に入る。

「おやすみなさい、扶桑君」

「また明日、山田先生」

お互いに言い合っただけで瞼を閉じる。

昼間の疲れからか、意識は直ぐに宵闇に落ちていった。

唐突だが、僕は部分的な記憶喪失だ。

だからだろうか。目の前で起こっている事象に違和感しか覚えな
いのは。

かつて居た世界。中学校。放課後の赤く染まった空。薄暗い、校舎
裏。

『つぐう……』

『おいおい、毎日毎日鍛えてやってんのに、相変わらず倒れんの早えな
オイ!』

何人もの生徒に囲まれて、殴打や蹴りを浴びているのは、僕だった。
でもこれは本当に僕の記憶なのだろうか。

僕は、小学校高学年から高校入学前までの記憶が欠落している。

いや、『結果』だけは覚えていた。ようは虐められていたのだ。

その内容は思い出せないけれど。……今見えている光景がそうだ
としたら、確かに忘れたくもなる。

『つつまんねえ、お前よ……雑巾以下の価値も無いんじゃないか、よっ
!』

『ツ……!ハッ……オエ……』

『うお、きつたね。危うく汚れるところだったじゃねえかよ、この塵
が!』

後頭部を足で踏みつけられ、地面にぶちまけられた吐瀉物に顔を押し
付けられる。

その様子を俯瞰して、顔をしかめる。頭を踏みつけている、彼は誰
なのだろう。顔も何もかもぼやけてはつきりしない。

目を凝らしても見えるのは僕が曖昧な彼らに痛め付けられる景色
だけ。

何度も何度も、何度も何度も、何度も何度も何度も何度も何
度も。

場所を変え、時間を変え、人数を変え、それでも何かの焼き増し
のように振るわれる暴力。モップにバット、パイプ椅子にライター、メ
リケンサックに鉄板の入った安全靴。

何度も何度も、何度も何度も、何度も何度も何度も何度も何
度も何度も何度も何度も何度も。

痛いと言つても、やめてと叫んでも、ごめんなさいと謝つても、暴力は止まらない。罵詈雑言は止まない。

果たして、夢の中の僕の目に光は映らなくなった。

明確な理由も何もない、ただのストレスの捌け口として振るわれる暴力に、夢中の僕は死を選ぼうとした。

でも……

『やあやあ、そんな行く根暗な少年！』

唐突に掛けられたその言葉に、その選択を取り止める。

振り替えれば、そこには。

『何か悩みなら聞こうじゃないか。解決は出来ないだろうけどね！』

『ワンツ』

黒い子犬を連れた、ブレザーを着た黒髪の少女が立っていた。

ああ、そうだ。

僕は、彼女に………救われたんだ。

『■■■■ー』

彼女の名前を呼び、手を伸ばす。
しかし。

『お前に居場所なんて無いんだよ』

ーーー世界は、黒く染まった。

#04 天災君臨

「……っ!?!」

まるで何かに引つ張られるように、意識が覚醒する。
心臓が早鐘を打ち、呼吸は乱れていた。

「何、が……」

頭が痛い。

何か夢を見ていた気がするけど、肝心の内容が思い出せない。

でもこれだけ乱れるような夢だったんだ。多分、碌なモノじゃなかったんだろう。

何度か深呼吸して落ち着きを取り戻すと、何か柔らかいものに包まれている感触がした。

「……?」

それに暖かいような気がする。人肌のような。

目の前が真っ暗なのでまわりの確認が出来ない。

「……」

「んっ……えへへえへ」

不意に頭上から声が聞こえたかと思うと、ぐいと引つ張られると共に柔らかな感触が増した。

今この部屋には僕と山田先生しか居ない……つまり。

山田先生に、抱き枕にされてる……!?!

い、いやいやまさかまさか。布団の距離だってそれなりに離れたし……だめだ、理由としては弱すぎる。

どうにか離れようと身動きして、何とか顔を上げる。

「……近っ」

目の前に山田先生の顔があった。ここから導き出される答えは……!

山田先生の胸に顔を挟まれてる。そして腕で完全ロックされた状態。

……この状況、だれかに見つかった場合確実に死ぬ。

特に織斑先生はダメだ。魂すら消え失せる、確実に。

脳内に『天』の一文字を背負った織斑先生が映る。・・・ヤバいどうしよう。

覚醒した頭をフル回転させ、この状況を脱する方法を考えろ・・・考えるんだ睦月！08小隊の隊長だって色々考えて窮地を脱出したじゃないか！

そして、僕が取った行動は。

「山田先生く、起きてくださーい・・・」

普通に起こすことだった。いやラノベ宜しくここでジタバタする程僕は無謀じゃないですよ？そんな事出来るのは一夏くらいなものですよ。というか動けないし。

「山田先生く、朝ですよー」

「んっ・・・んふ・・・」

ダメだ起きない。部屋に差し込む朝日が段々と強さを増している。もうすぐ教師陣は起床時間だろう。このまま起きないで様子を見に来たのが織斑先生だったら辞世の句すら残せず天に召されるだろう。

生憎僕はまだ父ジオンの下には行きたくないの、必死で山田先生に呼び掛ける。

「やーまーだーせーんーせー」

「なまえでえ・・・呼んでくだふあい・・・」

寝言か？寝言なのか？今のは。・・・寝言だろうな。なんとも幸せそうな寝顔がそう思わせる。

・・・名前で呼べば起きるだろうか。いやいや、寝ているとは言え相手は教師。そんな事は・・・

「ぎゅー・・・」

「わぷっ」

思いきり抱き寄せられ、更に身体が密着する。

・・・僕の理性のためだ、仕方ないと割り切ろう。

意を決し、頭を動かして山田先生に顔を近付けー

「真耶さん、起きてくださいー」

言ってしまった。

「ふえ・・・え？あれ？扶桑、君？」

寝ぼけ眼の山田先生が僕を視認して目を見開く。

良かった、起きてくれた。

「おはようございます、山田先生」

「お、おはようございます」

「.....」

お互い見つめ合うこと数秒。顔を真っ赤にした山田先生がバツと一瞬で壁まで後退する。

「ええと、あの.....ごめんない!？」

「そこまで下がらなくても・・・後、浴衣崩れてるんで早く直してください」

「え？はわあ！」

視線を逸らして明後日の方を向きながら忠告すると、驚きの声と共に衣擦れの音が鳴る。

ええ、何も見てないですよ？決して見てないですよ？.....ごめんなさいはつきり見えてました。何がとは言わないけど。

そんな朝からハプニングがあったけれど、臨海学校二日目、スタートだ。

「それでは、ISを使った実習に入る。.....山田先生、熱でもあるのか」

「ひゃわい!?だ、大丈夫れす!!」

「どうみても大丈夫には見えないんだが.....」

朝食と準備を終え、僕達専用機組は岩に囲まれた海岸に集まっていた。

専用機持ちじゃない、普通の生徒は昨日の砂浜で実習を行うよう
だ。

いざ実習を始めるというとき、山田先生の顔は真っ赤だった。朝か
らずつとこんな調子である。

そんなにチラチラと僕を見られると何かあったとまわりに知らし
めるようなものですよ……

「扶桑、何かあったのか？」

「ああいえあの……」

織斑先生の眼光に思わずたじろぐ。僕の顔を見て何か悟ったのか、
ため息を吐いて織斑先生は話を切り上げた。

「まあいい。詮索は時間の無駄だ、さっさと始めるぞ。各自、ISを展
開しろ……それと扶桑は後で私の所に来い」

はい死んだー。今確実に死が決定したよ僕ー！

先の未来に絶望しつつも指示に従い、ヘイズルを展開する。シール
ドブースターも何も装備していない、素面の状態だ。

他の皆も展開し終えたところで、遠くから聞こえる異音をハイパー
センサーが拾った。

「……なんだろ、この音」

「どうかしたか？扶桑」

「いえ、妙な音を拾いました」

ジェット音のような音を再度ヘイズルが拾う。

まわりを見れば皆もこの妙な音に気付いたようだ。

というか段々近づいてきてない？この音……

「あ、あれは何ですか!?!」

音の正体を捉えたのか、オルコットさんが驚きの声を上げる。

彼女が見る方向に目を向け、ズームするとそこには。

「イイイイイイイヤッホオオオオオオオオオオ!!」

MA形態のファイバーの上に仁王立ちする東さんが映っていた。

「織斑先生」

「何だ」

「撃墜していいですか?」

「・・・一応私の友人でもある、止めてくれ」

なんて織斑先生と言いつ合っているうちにファイバーから輸送ポッドらしき物と東さん引つ搦んだISSが放たれた。

ファイバーはTR-5ファイバーを元としたISSをISSによって高速で運搬、自機も交えて作戦を展開する事を主目的として開発された機体だ。しかももとなつたMSと違い、ファイバーユニットを拡張領域へと格納することが出来るため、作戦の幅を大きく広げている。

そしてもう一機。あのシルエットは間違いない。可愛らしい見た目からは想像もつかないが、TRシリーズでもトップクラスの性能を誇る『將軍（モンスターマシン）』。

「TR-6 ウーンドウォート・・・！」

純白のそれは重力を感じさせない柔らかな着地を見せ、岩肌へと降り立った。

「篠ノ之束、只今推参！」

そして、ポーズを取つて『天災』が君臨した。

・・・東さん、ペガサス流星拳のポーズは今時の人はわからないよ。

何ともシニールな登場にまわりが唾然とするなか、僕は溜め息を吐いた。

#05 TRシリーズ

「やあやあ、むっくん&ちーちゃん！愛しの束さんだよって米神がああああ!!」

「久しぶりだな、『天災（おおばかもん）』」

降りたって早々に織斑先生の容赦のないアイアンクローが束さんに炸裂する。

うわあ・・・骨の軋む音がこつちにまで聞こえるよ・・・

「あ痛たた・・・ちーちゃんの愛が痛いよ」

「急に『今から箒ちゃんのプレゼントもって行くからよろー♪』、何て言われて急遽予定を弄らされたこつちの身にもなれ。・・・それで、お前が乗ってきたIS、それは何だ?」

「んー、むっくんが説明した方が早いんじゃないかな?」

束さんが視線をこつちに向けてきた為、ヘイズルを一旦解除して岩場に立つ。

さつき視認した時データは送られてきたから一通りの説明をしようか。

っと、その前に。

「ファイバー、降りてきて」

僕が上空を旋回する機体と呼ぶと、急降下してきた。

そして、ファイバーユニットを量子化し、『人型に変形して』着地した。

その様子を見て織斑先生含め、束さんと僕を除くその場に居た全員が目を見開いた。

「馬鹿な・・・これもISだとも言うのか?」

「はい。無人制御IS　ギャプランTR-5　フライラーです。先程までつけていたのはファイバーと言います」

「」「無人制御お!」「」

そんなに驚くことだろうか?研究所じゃ日がな一日一緒だったから当たり前だと思っただけだ。

「言いたいことは多々あるが、話を進めよう・・・ではその白いIS

は何だ？まさかそれも無人制御じゃあるまいな」

目頭を押さえて訊ねてくる織斑先生。安心させるためにも事実を伝えよう。

「この機体は有人制御ですよ。ね、『クロエ』？」

「ええ、その通りです『お兄様』」

義妹の名を呼ぶとウインドウオートが量子化を始め、空に光の粒子が昇る。

その中から現れたのはシャツにサマーカーディガン、ロングスカートに纏い目を瞑ったラウラとそっくりの女の子。

「お初に御目にかかります、睦月お兄様の『義妹』のクロエ・クロニクルと申します。以後、皆様お見知りおきを」

そう言つてクロエはロングスカートを摘まんで一礼した。

その瞬間、

「「「義妹おおおおお!!」」」

再び岩場に叫び声が木霊した。

事情を所々ぼかしながら説明し、皆を落ち着かせること早十分。

目頭どころか米神を押し始めた織斑先生が口を開いた。

「事情は把握した。・・・数年前の事件は束（バカ）が原因だったか」

「嫌だなあちーちゃん、私はて・ん・さ・いって捻れるうっ!？」

「それで扶桑。そのウインドウオートとやらスペックはどの程度だ？」

流れるような動作で束さんにコブラツイストをかける織斑先生にそう問われて僕は唸る。素直に答えていいものだろうか。

クロエに他の皆が注目しているし、まあ言ってもいいか。

「……………恐らく、現行機でまともに勝つことは『不可能』です」「何だど？」

「ウインドウオートのス펙は…………束さんが開発した第四世代、そ

の中でも群を抜いています」

「具体的には？」

「リミット解除状態なら四時間程あれば日本を滅ぼせると言ったら分かりますか？」

「……」

「あつれー？心なしか掛かる力が増したようなあばばばば！死ぬっ死んじやう〜！ブラクラグロ画像になっちゃうう！」

「はっはっは、この程度では死なんだろう？なあ？」

「h a i！ごめんなさい謝ります！まだ命ロストしたくないです許してくださいあい！」

身体が捻切れそうなところで束さんが息も絶え絶えに謝ったところで解放され、四つん這いになってゼーハーと荒く呼吸する。

「や、やばかった……花畑どころか閻魔つぼいのもで見た……」
「アホか？アホなのか？或いはバカなのか？世界に喧嘩でも売るつもりか」

「H, H A H A H A …… M A ☆ S A ☆ K A ! いやマジごめんなさい冗談ですアルゼンチンバックブリーカーは死ぬう!!」

「一度死んで蘇ってもう一度死ぬがいい」

うん、まあそうなるのも領ける。スペックを見た僕ですらそう思うんだし。

というかいつの間になり上げていたんだ。

「く、くーちゃんの自衛手段として用意したんだよ……」

「束さん」

「む、むつくんなら分かってくれるよね……？」

「そういうことなら仕方ないですよね！」

「ダメだろうがド阿呆ども」

直後頭部に殺人的な衝撃を感じる。バカな……いつの間に?!、いったー……

「扶桑は割かしまともだと思っていたが考えを改めるべきだな」

「お、織斑先生だつて一夏には結構あまいの……」

「何力言ツタカ？」

「ごめんなさい何でもありません」

修羅でも閻魔でもない・・・何かもうデモンベインっぽいのが背後に見えたよ今。

頭をガシガシと搔いて溜め息を吐く織斑先生。

「まあ良い。いや良くはないが今は置いておく。・・・でだ、さつきからそこに鎮座しているポッド、それは何だ。それもISか、いやISだな」

「はい、せいはい！ってちーちゃんの目から光が消えてる!？」

遂に織斑先生はあまりの出来事の連続で無表情かつ光の無い目になっちゃった。

そりゃ無人制御機体に、国一つ単機で滅ぼせる機体と続けざまに言われちゃそうなるよね・・・。

「こっちはマイナーチェンジ機でね？ 箒ちゃんにも見せたかったんだけど・・・」

「今、裏道からこっちに來ている。そろそろだろう」

織斑先生が疲れた顔でそう答える。

マイナーチェンジ機・・・ああ紅椿か。確かに箒さん居ないとダメだな。

ポッドの中身に当たりをつけていると、クロエがラウラを連れてこっちに來た。

「お兄様、お兄様」

「どうしたのクロエ？」

「この子妹に欲しいです！いや、しましうー！」

「なんですと!？」

これまた突然だなあ。いやまあその気持ちは解らんでもないけど。

現に目の前でもじもじしているラウラには庇護欲を刺激される。

「お・・・お兄ちゃん・・・」

「ぐっはあ・・・!？」

唐突にラウラから放たれたその一言は僕の胸を貫いた。

視線を上げると赤面したラウラの向こうから一夏達がサムズアツプしていた。

一夏・・・グツジョブ!!

「……………何起きてるんだ？」

そんなシュールな光景を見て遅れてやってきた箒さんが呆れ顔で
そう言った。

#06 紅椿

「お、来たね箒ちゃん!!」

「・・・お久しぶりですって何をしてるんですか」

「うん、流石にプロレス技を連続でかけられると身体が痛いね」

「はあ?」

五体倒置の状態で元氣よく声を掛ける束さんに箒さんがげんなりとした表情を浮かべる。

久々に会って最初の状態がこれじゃそうなるのも仕方ないけど。

「それで、お望み通り篠ノ之を呼んだぞ。ポッドの中身を見せてみる」

「OK、ちよつち待ってねえ・・・腰が痛い」

若干投げやり気味になつてきた織斑先生の言葉に這いつくばりながら束さんがポッドを操作し、ロックを解除する。

圧縮された空気が抜ける音と共にポッドが開く。

全員が見守るなか、現れたのは。

「綺麗・・・」

「これは・・・凄いな」

真紅に染まり上がった武者鎧の如きISだった。

「これぞ制式第四世代型IS一号機、『紅椿』だよ!」

鎮座する紅椿を指し、堂々と束さんが言い放つた。相変わらず這つたまま。

「束さん、締まらないですよ」

「そこは氣力で立つて紹介してください」

「ワオ、辛辣う!!」

皆が紅椿を見つめるなか僕とクロエは束さんに突っ込みを入れる。寝そべりながらドヤ顔されても対処に困る。

しかしそれにもめげず、束さんは紅椿について説明する。

「この機体(こ)はね、白式とヘイズルのデータを参考に作り上げた機体なんだあ。つまりいつくんとむつくんとこの合の子だね!」

「ホモ臭い話しは止めると言っているウサギ!」

「むつくん束さん結構満身創痕だからヘイズルフィンガーは止めて

！」

部分展開したヘイズルの腕を解除する。全くもう、マトモに紹介する気あるのだろうか？

「白式とヘイズルのデータと言ったが、具体的には？」

「命の危機を感じたぜい・・・ああそれはね、まず紅椿の装甲は白式の雪片式型と同じ展開装甲にしてあるんだ。これを使う為に動力系は軒並みトップクラスになってるね。ウインドウォートに近いかな？まあ流石に扱いやすくはしたけどねん」

展開装甲・・・機体の一部装甲を展開し、攻撃、防御、機動に対応した機能へと切り替えることで機体の汎用性を極限まで高めた機構だ。

ただ高度なプログラミングと装甲構築が必要だから、恐らく現状この機構を作るのは束さんだけだろう。

「次いでヘイズルからは主にシステム面を引き継いだんだよ。むっくんの戦闘データを活かして火器管制や動力管制を効率化したシステムを搭載してあるしね。もう一つヘイズルのデータを参考にした機能を搭載したんだけど、これはまだ発現してないから何とも言えないね」

「その機能とは何だ？」

「無段階移行（シームレス・シフト）って言えば伝わるかな？」

束さんの一言に織斑先生が絶句する。他の皆は首を傾げるばかりだ。

無段階移行。ISに搭載された形態移行システムを更に進化させたもので、蓄積された経験値によって武装の進化や性能強化などを随時行うというシステムだ。

例えば強力な攻撃を一度受けたとする。それを紅椿が学習する事によってそれ以降、同様の攻撃を一切受けなくしてしまう事だって可能だ。

でも、そんな感じのシステムはヘイズルには無かったような・・・。

「束さん、ヘイズルにそんなシステムありましたっけ？」

「あれ？言ってなかったっけ？ヘイズルには武装精練（ウェポンビル

ド) システムを組み込んであるんだけど」

「武装精練？」

聞き覚えの無い言葉に首を傾げると、束さんは身体を起こしてピツと人差し指を立てた。

「武装精練システムっていうのはさっき言った無段階移行のプロトタイプ、武装限定版だね。ヘイズルが蓄積した経験値と稼働率を二元に、搭乗者であるむっくんのニーズに沿った武装を量子空間内で精製するシステムなんだ」

「でもそんな感じは・・・あ」

そこでふと気付く。ヘイズルの武装の大半は???という表記だったことを。つまりあれは武装の精製中だったか稼働率や経験値の問題で精製出来ていなかった物だったんだろう。

「ヘイズルを渡すとき色々と積み込んだって言ったけど、それは全部精製に必要な鉄とかレアメタルとか隕鉄とかありったけぶちこんだってだけなんだよね」

「じゃあロングブレードライフルとかも・・・？」

「うん、ヘイズルが君のために作ったんだろうね」

その言葉を聞いて胸が熱くなる。ヘイズルが僕の為に・・・。

ああ、ダメだ。にやけるのを抑えられない。

「束さん」

「うん？」

「ヘイズルにこの機能を着けてくれてありがとう」

機体が僕に応えてくれる。なんて嬉しいことだろうか。

今の僕はさぞ満面の笑みを浮かべているだろう。

「もうむっくんは可愛いなあ！」

身体の痛みなんて無かったように束さんに抱き着かれ頬擦りされる。

その状態で束さんは爆弾発言した。

「それでね？そんな紅椿を箒ちゃんにプレゼントしようと思うのさ」

「・・・」

訪れる沈黙に僕とクロエは即座に耳を塞ぐ。流石にシヤル達が転

入してきた時よりかは人数も少ないし耳の被害は少な．．．

「「「はあああああ!」」」」

そんな事は無かったね、めっちゃくちや痛い。というか織斑先生の
大声出すところ初めてみたよ。

ってフライル―は耳塞ぐような仕草しないでもいいじゃん。

「し、正気ですか姉さん!?!私なんかに!」

「ああ嫌なら良いんだよ?むつくんに言われて無理矢理渡すのはアレ
だと思っただし。ぶっちゃけ紅椿は本命じゃないし」

相変わらず僕に抱きついたままの束さんがさらりと言う。紅椿が
本命じゃないってことはちゃんと別の物買ったんだね。

クロエを見ると小さく親指を立ててくれた。

「これ以上、何があると言うんだ．．．」

「いやいや、ちーちゃんが思ってるような物じゃないよ。箒ちゃん、
ちよつとこつちきてー」

「．．．何ですか?」

織斑先生に苦笑い気味に言っつて、束さんは箒さん呼び寄せた。

「束さん、頑張つて」

「．．．うん」

小声でエールを送って軽く背を叩くと束さんは僕から離れて箒さ
んと対面した。

そして束さんはポケットから細長い箱を取り出す。

「えーつと、だね。ああダメだ色々言うべきことがあるのにうまく言
えない」

「?」

「つまりだね、私はバカなんだと言うことだよ」

「はい?」

「うん、まあ受け取ってもらえるかな?」

「はあ．．．」

訳がわからないといった体の箒さんが細長い箱を受け取る。

それを確認して束さんは、

「兎に角言いたいことはその中に入ってるので後で見てね!と言うわ

「けで東さんはCOOLに去るぜ！」

とか言つて海に飛び込んでいった。いや全くCOOLじゃないよね。フライル―が慌てた様子で追つていったから大丈夫だと思うけど。

「一体何をしに来たんだアイツは・・・」

唾然とした空気の中で織斑先生が深く、とても深く溜め息を吐いた。

「お兄様・・・」

「うん、どうしようねこの空気」

僕とクロエも同じく溜め息を吐く。紅椿まで置いてっちゃって・・・どうしろって言うのさ・・・

「・・・」

そんな中、微動だにせず箒さんはじつと手渡された箱を見つめていた・・・。

#07 戦いの予兆

「……ハワイ沿岸部……」

「主任！ダメです止まりません！」

「内線からの介入すら受け付けんだと……！」

本来なら穏やかな波が打つハワイの蒼海。その中に浮かぶ一隻の巨大な船、その船内は度を越える喧騒に包まれていた。

かの船に課せられた使命は新型のISの試験監察であった。

しかし、

「何故急に暴走した……！」

突如として試験対象のISが暴走、一切のアクセスを受け付けなくなってしまうのだ。

焦りながらも船長である男は受話器を取ると『本土』へと連絡を取った。

アメリカとイスラエル共同開発の『軍用IS』。それが力を振るえばどうなるかなど、想像に難くなかった。

「聞こえるか！テスト中の機体が暴走し逃走。行き先は……」

「……日本。」

「いい慌てっぷりじゃねえか」

太平洋上空、暴走したISを『従えた』赤髪の男がほくそ笑む。

彼の耳にはハワイ沿岸に浮かぶ船の内部の様子が聞こえていた。

『ヴラド』

「あん？」

そんな喧騒を遮って通信が割り込む。低い、女の声だった。

聞き覚えのあるその声にヴラドは片眉を上げる。

「ハンニバルか。何の用だ」

『釘を刺しに来た、とでも言っておこうか』

「ちっ・・・上の差し金か」

『そういう事だ。よかつたな心配されてるぞ?』

皮肉混じりのハンニバルの答えにヴラドは舌を打つ。

一度出会ってからのというもののハンニバルという女はどうにも人をバカにしたい人間らしい。

『お前が開発したその機体、現状お前以外は扱えんからな。大切に扱えよ』

「それも上からの命令か?」

『私がお前の心配をするとでも?』

「テメエにそんな期待なんざするかよ、クソ女」

毒を吐きつつ後方に飛翔する暴走したとされるISを見やる。

暴走、と船長は言っていたが、厳密には違う。ステルスを張った状態でISのシステムにアクセスし、敵性体及びIS学園の生徒のみを狙うようにハッキングしたのだ。

『その機体にはまだ『システム』を積んでいない。無理は禁物だぞ』

「んなもん理解してる。上も一々煩えな」

いつそ殺してしまおうか。

そんな言葉が出掛かったがどうか抑える。今ここで言った処で詮無い事だ。

『・・・まあいいさ、精々暴れてくれ。上も二、三人は殺して構わないといっている』

「上等だ。スコールなんかよりも解ってるじゃねえかよ」

獰猛な笑みを浮かべ、ヴラドは目を細くする。

その様子はまさに血を求める獣だった。

『お前が確かめたいことが何なのかは知らんが、データ取りだけは怠るなよ。バートリーの機嫌を取るのには面倒なんだ』

「ハッ、了解だ・・・」

血のような赤色をした全身装甲のISが加速する。

その額には 小さく『Superior』の文字が刻まれていた。

「全員、作業を一旦止める。緊急事態だ」

東さんが去って数十分、唐突に織斑先生がそう言った。

新たに届いたパッケージの換装や武装の確認を行っていた僕達は
その言葉に顔を上げた。

「緊急事態、何かあったんですか？」

「詳細は後で説明するが・・・簡単に言おう。暴走した最新鋭のISが
こちらに向かってきている」

一瞬で場の空気が変わる。

暴走状態の最新鋭ISが此方に来るか・・・どうにもヤバそうだね
これは。

「ここに居る全専用機持ちは現時点より一時的に軍事作戦に入る。
パッケージの換装等を終え次第ブリーフィングを行う・・・急げよ」
そう言い残して織斑先生は山田先生を連れて足早に旅館へと戻っ
ていった。

残された僕達はどうと、換装途中の人は全速力で換装に取り組
み、武装確認だけの僕と一夏は紅椿を片したクロエを連れてすぐさま
ISを解除して旅館へと足を向けた。箒さんはどうやら先に行つて
しまったみたいだ。

「なあ、睦月。これって結構ヤバイよな・・・ドイツ軍に居たときに感
じた感覚に近いんだが」

「その見解で概ねOKだよ。普段の試合じゃない・・・戦いになるよ」
「そうか・・・」

ある程度の安全が確保されたアリーナでの試合ではなく、命が掛
かった戦いとなる。

幾らISに絶対防御があると云っても、エネルギーが切れれば丸裸も同然だ。そうなればあるのは『死』だ。

まして相手は暴走したIS、待ったなんて効かないし、シールドエネルギーが切れた時点で都合よく止まるはずもない。

「不安？」

「ああ、不安だな。睦月は？」

「僕も不安かな」

只の学生だった人間に戦場に赴く覚悟なんてそう簡単に出きるものじゃない。

多分、ラウラ以外の皆も覚悟しているとは言えきつと不安を持っている。

でも、

「やらなきゃね」

「睦月……」

見えない敵を睨むようにして、僕は旅館へ進む足を速めた。

「では、これよりブリーフィングを始める」

大広間に機材という機材を押し込んで作られた即席の作戦室で、巨大なモニターを前に織斑先生はそう言った。

僕達専用機持ちはそれぞれ座って先生の話を聞く体勢を取る。

「今から一時間ほど前、ハワイ沖にてテスト飛行中だったアメリカ・イスラエル共同開発の軍用IS『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が暴走。停止させようとしたアメリカ軍のISを振り切つて逃走、現在こちらへと真っ直ぐ向かってきている。アメリカ、日本両政府より要請があり、我々はこれを迎撃、搭乗者であるナターシャ・ファイルスを保護する」

そこで一度言葉を区切り、横に移動するとモニターに福音のスペツ

クが表示された。

特徴的な頭部に白式とはまた違った純白の全身装甲。機体性能は正に最新鋭といった性能。しかも搭載武装がかなり特殊だ。

「複合兵装『銀の鐘（シルバーベル）』、中々に厄介ですわね・・・」
「機動力は一夏の白式と同等に近く、火力も充分。骨が折れそうね」
「折れるだけで済めば良いがな。リミッターが外れているかもしれないだ、ともすれば・・・な」

オルコットさんの言葉に鈴さんとラウラが嘆息する。

銀の鐘、大型スラスターにエネルギー弾を放つことが出来る広域射撃武器を内蔵した第三世代の武装。その砲門の数は36もあり、実質的に死角が無い。

更にスラスターをスタビレーター代わりにも使用でき、瞬時加速に匹敵するスピードでの急加速を安定して行える。

広域殲滅という文字をそのまま形にしたかのような機体だね、全く・・・。

「スペックは確認できたな？では作戦を説明する」

画面が切り替わり、作戦領域の地図が映し出される。

「作戦領域はここから150kmほど離れた海上となる。このまま馬鹿正直に突っ込んでくれば後二時間ほどでこの場所にヤツは現れる。専用機部隊はこれを袋叩きにしろ・・・と言いたいが、出撃時間も考えるとスピードに優れた機体で一撃を与え、後続の部隊で福音の機能を停止に追いやるのがベストだろう」

画面の中央で福音を表した赤い矢印と僕達を表した青い矢印がぶつかり合う。

スピードに優れた機体・・・となると。

「第一陣は僕と一夏になりますね」

「・・・そうなるな。純粋なスピードとなるとお前たち二人が最優だ」
「俺が・・・第一陣」

強襲形態のヘイズルなら並のISよりもスピードは出せるし、元より高速戦向きの白式なら福音に接敵するのは容易だ。

でも白式は零落白夜のせいで継戦能力は高くない。

「白式の機体特性上、やるなら一撃で仕留めなくてはいけない。扶桑はその援護となる」

それを解っているからか、織斑先生はそう作戦を提案した。まあ確かにそれしか方法は無いだろう。

だが、

「呼ばれて飛び出て束さーん！って痛い！」

このタイミングでこの人が出ないはずが無かった。

そして先生にアイアンクローされるのもまあ解ってた。

「何しに来た束。今は作戦会議中だ・・・下手なことを言ったら千切るぞ」

「いやいや、ちよつと御手伝いをね？真面目だからね？だから離してくれると大変嬉しいんだけど」

「手伝いだと？」

「そう。高速戦を行える『足』が欲しいんですよ？ならさ」

そこで言葉を切って束さんはニヤリと笑う。

「ooooooooファイバー、貸そうか？」

#08 銀の福音

『・・・作戦開始十分前。ミッション内容を再確認するぞ』
通信を通して織斑先生の声が耳に入る。

いよいよか・・・。
真上へと登った太陽が照らす砂浜にヘイズルを展開して僕は立っていた。

僕の右には一夏が。左には簪とオルコットさんが立っている。

『今回、篠ノ之東博士の協力により僚機としてTR-5 ファイバーが織斑とオルコットを作戦領域まで運搬、戦闘に参加する』

上空にMA形態で待機するファイバーが答えるようになってくるりと回転する。

『また、最終防衛ラインとしてTR-6 ウィンドウォートも作戦に参加することとなった。だが、この機体が動くということは最早大勢が決した状況だ。・・・詰めを誤るなよ』

『皆様、よろしくお願い致します』

旅館上空に静かに佇むウィンドウォートが一礼する。

織斑先生曰く、ファイバーはまだしもウィンドウォートが世界に認知されるのは不味いらしい。まあオーバースペックの塊だし仕方ないか。

『作戦内容だが、福音に対し織斑が懐に入り込み零落白夜による一撃必殺とする。扶桑、更識、オルコット、ファイバーは福音を包围、織斑の援護に回れ』

『了解』

『では織斑とオルコットはファイバーに乗り込め。扶桑、更識は高速戦の用意をしておけ。・・・頼んだぞ』

『はいっ！』

織斑先生の言葉に応え、一夏とオルコットさんは飛翔し、ファイバーユニットの懸架スペースに入り込む。

「簪、大丈夫？」

「大丈夫だ、問題ない」

「その回答は若干不安になるなあ」

隣に立つ簪を見ると何ともキリッとした表情で返され逆に不安になる。

展開された打鉄式式の非固定武装は今までと違い、大きな青い翼に変わっている。

高速戦闘用追加パッケージ『運命の風(ゲイルオブデスティニー)』。倉持技研で開発された武装を僕と簪、そして布仏さんで(魔)改造した大型スラストターだ。

名前の通り見た目はデスティニーガンダムの背中の翼、それを青く塗ったモノで、機能もほぼ同じだ。

翼を展開し、虹翼を発動させればISのハイパーセンサーを瞬間的に欺瞞出来る残像を作り出すことが出来る。

ただし、打鉄式式の持ち味である山嵐、春雷が使えなくなってしまうのが欠点だ。

なので今回打鉄式式の装備は専ら手持ち武器と腰に増設されたウエポンラッチに懸架された小型のガトリングとなっている。

「ねえ、睦月」

「ん？」

「必ず・・・勝とうね」

「当然、簪となら勝てるさ」

不安げな簪の言葉にサムズアップして答えると、簪は「うん、そうだね」と微笑んだ。

さて、そろそろかな・・・。

飛翔して、ファイバーと高度を合わせる。

『第二防衛ライン、配置完了。皆、頑張りなさいよ!』

『こちら、ボーデヴィツヒ・・・勝ってこい、それだけだ』

『同じくデユノア。ミッション、成功させようね!』

旅館から離れた位置に展開した鈴さん達からエールが送られる。

これは、本当に・・・失敗できないな。

『作戦領域の人払いは済ませてある。・・・命令は一つだ。必ず生還しろ。いいな?』

「了解（ヤー）！」「」

【シールドブースター 最大出力準備完了】

【強襲形態に移行 スラスタークントロール、オールグリーン】

【エネルギーシールド 巡航モード 展開】

ブースターに熱が入る。機体を傾け襟元のフォアグリップを握りしめる。

さあ、行こう。

『ミッション開始』

織斑先生の宣言と同時に僕達は音の壁を越えた。

超高速飛行を開始して数分後、作戦領域に到達すると同時に遠方に白い影を捉えた。

ハイパーセンサーで前方をズーム。・・・間違いない、ターゲットだ。

「目標確認。一夏、準備を」

「了解だ」

「ファイバー、目標の有効射程侵入と同時に敵の足止めを」

「ー！」

「オルコットさんは展開したら周辺状況を確認しながら一夏の援護を。僕と簪で左右を抑えます」

「了解ですわ」

指示をそれぞれに飛ばすと、高機動パッケージ『ストライクガンナー』を装備したブルーティアーズが視界の隅で構えるのが見えた。

白い機影、ハッキリとその姿を見た瞬間僕は叫んだ。

「有効射程、各機行動開始！」

「了解！」

「ー！！」

僕と簪が左右に別れ、福音を挟むように動きだし、ファイバーが変形しながら一夏達を射出。すぐさま拡散粒子砲とロングブレードライフルを撃つ。

「raa♪」

唄うような音を出しながら急停止した福音は銀の鐘から数多のエネルギー弾を発射し迎撃に移る。

奴の足が止まった・・・今！

『一夏！』

『ぶった斬る！』

弾幕の真上から飛来した白式が福音へと肉薄し零落白夜を展開した雪片を降り下ろす！！

「ちっ・・・！」

「ra, r a r a♪」

しかし福音は小さな挙動で一撃を避けると、反撃を加えようと銀の鐘を動かす。

「睦月！」

「わかってる!!」

一夏の声に応え、ロングバレルに換装した両手のビームライフルの引き金を引いて、動きを阻害する。反対側からも、簪がアサルトライフルを撃ち始める。

その隙に乗じて零落白夜を停止した一夏がバックブーストで一度離脱する。

暴走してるとはいえ、あの奇襲を避ける機動性、どうにか抑えないと・・・！！

「動きを牽制します、フライルーさん手伝ってくださいまし！」
「!!」

全長2メートル超のロングライフル『星屑の射手（スターダストシューター）』を構えたオルコットさんがファイバーユニットを格納したフライルーと共に福音へと攻撃を開始する。

「a, a a a a!!」

高密度の十字砲火に流石の福音も回避出来ず、シールドエネルギーを減らし、装甲を黒く煤けさせる。

行けるか・・・!?

「一夏あ!!」

「oooooooo疾!!」

スターダストシューターの一撃を受け、福音が大きく姿勢を崩した瞬間、瞬時加速の踏み込みをもつてして一夏が懐に飛び込み、会心の一撃を放とうとした。

その時。

「何だ!?!」

「上空2時の方向に敵影!?!何時の間に!」

突如飛来した青白い閃光に場が凍り付く。

閃光が放たれた方向。そこには、ヘイズルと同じ、『本来居る筈のない』機体が浮かんでいた。

赤と黒の塗装で印象こそ違うものの。

スカートアーマーの無い脚部装甲、巨大な肩アーマー、そして何処かスポーツカーを思わせるインテーク・フィンがついた特徴的な頭部。

「S（スペリオル）ガンダム・・・!?!」

最優と称されたガンダムが、その蒼い双眼を光らせた。

#09 tharn

『こちら作戦司令室！いきなりISの反応が増えたぞ、どうなっている!?!』

「現在その所属不明ISと交戦中！馬鹿げた火力ですわ!!」

通信に対して叫ぶオルコットさんの声を危機ながらも福音へとビームライフルを放つ。

突然、まるで何も無い空間から出てきたかのように現れた機体と福音によって戦いは一気に乱戦になってしまった。

「Sガンダム・・・どうしてこの世界に・・・!?!」

S（スペリオル）ガンダム。豊富な内蔵火器と高い機動性を持った、『最優』の名を冠する機体。

その性能はUC・0080年代でもトップクラスを誇る。

でもあの機体は本来、ハイズルやファイバーと同じ、ガンダムという作品自体が無いこの世界では本来その姿を知る人は居ない筈。しかもMSVというマイナーなジャンルの機体だ。そんなものを偶然で造れるはずもない。

だとすれば、あの機体を造ったのは・・・

「僕と同じ転移者か、あるいは転生者か」

血のような赤を基調としたその機体を睨むと、『目が合った』。

「……っ!?!」

背筋が凍る感覚。

何だ・・・今のは。まるで頭から氷水を掛けられたかのような冷えた感覚が身体中を伝った。

あの機体は・・・僕を知っている？

「睦月っ!」

「っ!くう・・・!!」

簪の声に引き戻され、何とか飛来したエネルギー弾を防ぐ。

しまった、今は戦闘中だ。考え事をしている余裕は無いだろう!!

「大丈夫!?!」

「何とか。ごめん・・・集中、しないとね」

物思いに耽るのは後だ、今はこの二機をどうにかしないと。

『一夏とオルコットさん、それとフライルは福音を攻撃！所属不明機は僕と簪で対応する！』

『了解（ヤー）！』

作戦を指示して機体を加速させる。兎にも角にも二機の内どちらかを戦闘不能にしないと。白式のシールドエネルギー残量のこともある。焦らず、でも迅速に動かなければ。

白式を狙うSガンダムに照準を絞り、ビームライフルを乱射する。しかし、まるで僕が撃つてくるのが解っていたかのように回避されてしまう。

その動きはまるで、血に飢えた獣のようだった。

Sガンダムのツインアイが此方を捉え、右手に持った長大な銃『ビームスマートガン』を構えた。

「っ!!」

スラストを吹かして横に避けた直後、蒼白の閃光がシールドブラスターを焦がした。

完全に避けたはずなのに・・・僕の動きに合わせて照準を動かしたのか・・・!

「油断ならないな！」

「援護に回る！」

簪が腰の両サイドに装備したガトリングを発射するのに合わせ、左手でビームライフルを撃ちながら右手にロングブレードユニットを展開、ライフルに装着、即座にトリガー。

しかしこれも避けられてしまう。

「何？あの加速力・・・ヘイズルと同等か、それ以上じゃない？」

「束さんに匹敵する開発者か・・・想像したくないね」

簪と言い合いながらも動きは止めず、弾幕を張りながらSガンダムを囲むように機体を動かす。

これだけ撃っているというのに一つも掠らないなんて、機体性能もさることながら搭乗者の技術も凄まじい。

絶えることなく降り注ぐ弾幕に痺れを切らしたのかSガンダムが

動き出す。

ビームスマートガンを格納したと思ったら次の瞬間には簪の目の前まで迫っていた。

「くっ!!」

「簪!!」

抜刀されたビームサーベルを咄嗟に展開した近接ブレード『葵』で防ぐ簪。

しかし無理な体勢で構えたからか、すぐに弾かれてしまう。

「させないー!」

追撃をさせないために簪とSガンダムの間へとロングブレードライフルを撃ち放ち、Sガンダムの勢いを削ぐ。

その間に簪は何とか体勢を整えたようだ。

戦いの中に出来た僅な間隙。僕はSガンダムへと問いを投げ掛けた。

「貴方は、何者ですか。何が目的でこんな事を……」

「……ハハッ」

そんな僕の問いに小さく、ヤツは笑った。

やがて肩を揺らし天を仰ぎ笑い始めた。

「ハハハハハハハハハハッ!!」

一頻り笑ったSガンダムが、僕を捉える。

その機械の目を見た瞬間、ロングブレードライフルをヒートブレードモードで構えた。

「ぐう……!?!」

直後、衝撃が走る。

Sガンダムが彼我の距離を一瞬で詰め、ビームサーベルを振るってきたのだ。

火花が散り、Z系列に似たフェイスが眼前に迫る。

押すことも引くことも出来ない膠着状態。

その状態で、まるで歓喜するかのような声が聞こえた。

「久し振りだなあ……扶桑?」

「え……?」

その声を聞いた途端、視界にノイズが走った。

『……脆い……せっか……鍛えて』

『……汚え……のゴミ』

「う……あ……」

僅かに聞こえる声と激しい頭痛が突然襲いかかってくる。

……ダメだ、思い出すな。

……忘れたままでいろ。

……壊れてしまう。

頭の中にチラチラと映る見覚えのある光景に、本能が止めろと告げる。

でも。

「おいおい、まさか忘れた訳じゃあねえよなあ?ふ・そ・う君?」

夕暮れの校舎裏、吐き出す程の暴力、止まない罵詈雑言……目の前で壊された大事なモノ。

唐突に開かれたSガンダムフェイス。隠されていたその顔を見た瞬間、全てを思い出した。

「ああああああああ!!」

「睦月!」

ヘイズルと似たような、赤黒い全身装甲のISと接触した途端、睦月が聞いたこともないような、悲痛な叫び声を上げた。

「おいおい、まさかマジで忘れてたっつてのわ？ 悲しいねえ……なあ塵屑君！」

「がっ……あ……」
「っ貴様あ!!」

嘲笑と共に睦月を蹴り飛ばしたヤツに怒りを覚え、アサルトライフル『瞬乱』の引き金を引く。

しかし先程からみせる異常な機動力によって悉く避けられる。だが、ヤツを睦月から剥がすことには成功した。

直ぐさまヘイズルの前まで式式を動かし、睦月を守る位置に立つ。

「睦月、睦月！」

「……嫌だ……怖い……痛いよ……」

呼び掛けてもまるで何かに怯えるように睦月は震えていた。

ヤツと睦月が鏝迫り合ったあの一瞬、ヤツが何かしたのだろう。

普段からは想像もつかないほど、今の私は酷い顔をしているだろう。でも抑えようがないし、抑える気もない。

睨み付ける私を見て、ヤツは肩を竦めた。

「おお、おお、コワイじゃねえか。なかなか良い顔だ……でもな」

そこまで言って、ヤツは言葉を切った。

「今の目当てはお前じゃねえんだよ、雑魚」

直後、視界が激しく揺さぶられた。

「ぐっあ……!」

自分が蹴られたと認識したのはヤツが睦月に近付いた時だった。

【脚部スラスター異常発生 サブエネルギーライン起動】

【残りシールドエネルギー 250】

たった一撃の蹴り。それだけでまだ600近くあった式式のシールドエネルギーが、ここまで消し飛んだ。

あまりの事に呆然としそうになるが、そんな感情は無理矢理に押し込める。

助けなきや。

そう思っつて睦月と本音が一緒に作つてくれた『運命の風』を展開する。

動け、動け・・・!

翼が開き、機体が加速する。

でも、遅かった。

「壊れたまま死ね」

ヘイズルの胴を、蒼白の閃光が貫いた。

墜ちる、大切な人が。

その現実を見た瞬間、私は絶叫した。

「睦月iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!」

#10 纏われし紅

天辺から少し傾いた太陽が照らす大海原の最中、赤黒い全身装甲のISと純白のISが佇んでいた。

全身装甲のIS・・・Sガンダムを纏ったヴラドが苛立たしげに肩を揺らす。

「ハンニバル・・・テメエなんで止めた」

『そう怒るな、醜い顔が更に醜くなるぞ?』

「ああ?」

通信先のハンニバルに対し、ヴラドの殺意が膨張するが、ハンニバルはどこ吹く風とばかりに笑うだけだった。

扶桑睦月はヴラドが撃墜。織斑一夏の白式も福音の全方位攻撃をゼロ距離でくらい、大破した状況でハンニバルが待ったをかけたのだ。

おかげで隙についてファイバーが二人を回収、撤退させてしまった。

『確かに、あのまま追撃すれば連中は瓦解、IS学園の保有する戦力を大幅に削れただろう。だが・・・イヴァンの奴がな』

「あの拷問魔か・・・余計な口出しをしやがって」

『イヴァン』と言う名前を聞いた途端、ヴラドは顔をしかめ、嫌悪感を露にする。

それを肯定するようにハンニバルも溜め息を吐いた。

『彼女の事だ、どうせもつといたぶりたいだとか言ったのだろう。それに上が応えてしまったな』

「それで?俺はここで待機か」

『・・・いや、三十分後にIS学園側でいう、第二防衛ラインとやらに侵攻して構わないぞ』

『こういう風の吹き回しだ。待てと言ったり行けと言ったり』

『私にも判らんよ。亡国企業とて、一枚岩では無い』

ヴラドの問いにハンニバルは嘆息混じりに答える。

彼女の答えにヴラドも同じように息を吐く。

「まあ良い。面倒だが、従ってやるさ」
降り注ぐ陽光は尚強さを増していた。

「扶桑君、織斑君のバイタル、共に正常値まで回復しました」

「そうか・・・」

旅館、花月荘の大広間に設けられた急ごしらえの作戦司令室で、教師の一人から報告を受けた千冬は安堵の息を吐いた。

突如現れた謎のIS。睦月の唐突な戦意喪失、白式の大破。

「あれは一体なんだ・・・？」

赤黒い全身装甲IS。何処と無くヘイズルと似たような外見の機体、千冬はその存在に疑問を覚えた。

暴走している筈の福音を従えていたのもそうだが、千冬がファイバーの持ち帰った戦闘記録を見て疑問に思ったのは搭乗者の動きだ。(近接戦でのあの身体捌き、どうみても女のそれでは無かった・・・まさか、男だともいうのか?)

だとすれば厄介な事に福音を暴走『させた』敵は三人目の男性操縦者を保有していることになる。

思っていた以上の大事の臭いに千冬は眉をしかめた。

(いや、それを考えるのは後だ。今は目先の事案をどうにかせねば・・・)

第一防衛ラインは瓦解。福音だけならまだしも、専用機持ちの中でもトップクラスの実力を持つ睦月を撃墜した謎のISを同時に相手にして、第二防衛ラインで対応仕切れるのか・・・。

TR-6 ウィンドウォートは最後の切り札だ。あれほどのオーバースペック機が表に立つのはまだ早い。たとえ事態の收拾が果たしてもその後の世界に影響を及ぼしかねないだろう。

それ故に現状保有する戦力でどうにかするしかない。

「どうしたものか・・・」

「何かお悩みかな、ちーちゃん」

「束か。扶桑のところには居なくていいのか?」

「今はくーちゃんが付いているから」

突然天井から飛び降りてきた束に驚くこともなく千冬はモニターを睨み付けながら会話する。

状況は刻一刻と変化する。今動いていないあの二機も、いつ動くか解ったものではない。

「・・・束、あの赤黒いISをどう思う」

少しの沈黙の後にポツリと溢した千冬の問題に、束はハッキリと答えた。

「認めたくないけど、あれを開発したのは私に匹敵する人間だよ。あの性能、普通じゃない」

「お前がそういうとはな・・・成程、名実ともにイレギュラーという事か」

厄介だな。言つて千冬は呆れの混じった笑みを浮かべる。

あの天災がそう言うのだ、その性能は折り紙つきという事だろう。

「ブルーティアーズ、打鉄式式の機体状況は?」

「損害は少ないので、後十分程で修復完了だそうです。また、ファイバーの方は・・・」

「ファイバーユニットは撤退の時の被弾で使えないけど、フライルー自体に問題は無いよ」

「搭乗者の方は?」

「負傷も無く、体調も良好です。本人らも出撃したいと」

「そうか・・・」

迎撃する以上、戦力が大いに越したことはない。休息を取らせたいがそうも言っていないし、本人達もそれを望まないだろう。

なら。

「オルコット、更識ならびにフライルーは機体整備が完了次第出撃、第二防衛ラインのメンバーと合流、共に迎撃に向かうよう指示を」
「了解しました」

命を受け取った山田真耶が急ぎ足で作戦司令室から出ていく音を聞いて、千冬は小さく肩を落とした。

「不甲斐ないものだな・・・こういう時に動けないというのは」

「ちーちゃん・・・」

その辛そうな背中を見て、束も目を伏せる。

重い沈黙が漂いかけたその時だった。

「失礼しますー!」

まるでそんな空気を払拭するかのように箒が司令室の戸を勢いよく開いた。

「束博士・・・いや、姉さんは居ますか!」

「・・・何のようだ篠ノ之、お前は部屋で待機だと言ったはずだが」

僅な威圧感を滲ませて振り返らずに言う千冬に箒は小さくたじろぐが、それでも足に力を込めて踏み止まった。

「姉さんに話があつてきました」

「はあ・・・だそうだぞ、束」

目元を押さえて何時の間やら天井に張り付いていた束を呼ぶと、見事な着地をして束は箒を見た。

「やあやあ、箒ちゃん。どしたの?」

努めて普段通りのふざけた口調でそう訊ねると、箒は決意のこもった瞳を真っ直ぐに向け、答えた。

その答えに千冬はついに天を仰ぎ、束はニヤリと笑った。

「紅椿を・・・使わせて下さい」

紅椿。

篠ノ之束が開発した、箒専用にかスタマイズされた制式第四世代型 I S 一号機。

その性能は間違いなく最高峰と呼べるもので、束自身、対抗できるのは白式、ヘイズル、ウインドウォートの三機しか居ないと言うほどである。

武器の殆どが複合兵装であり、高出力、高火力の代物だ。

白式の持つ雪片のノウハウを活かした制式型『展開装甲』により、攻撃力、機動力、防御力の三点を高水準に引き上げたこの機体は見る人が見る人なら卒倒する程である。

その名の通り、鮮やかな紅に染め上げられたそれを纏い、箒は砂浜にて瞑想していた。

「全く・・・織斑先生にあんな啖呵を切る人だとは思ってませんでしたわ」

「確かに、あの時の篠ノ之さんは凄かった」

そんな箒を見て、同じく自らの I S を纏ったセシリアと箒は呆れ顔で言い合った。その横では同意するようにウンウン頷くフライルがいた。

真耶から指示を受けた二人が詳細を聞くために作戦司令室に入った時の事だ。自室待機と言われたはずの箒が何故か千冬を相手に食って掛かっていたので。

近くに居た教師の話しによれば、何でも束に紅椿とやらを使わせてほしいと言い、束がこれを了承。しかし千冬が出撃を却下したのと。

「お願いです、私にも出撃させて下さい！」

「却下だと言っているだろう。量産機しか使ったことがないお前が、専用機を使ったところで奴らに落とされるだけだ」

「そんな事は解っています」

「何・・・？」

「専用機を持ったところで、一夏達を倒した奴らに勝てるとは思いま

せん。．．．ですが、足止めにはなりません」

「．．．正気か？」

千冬が箒を睨みながら問う。足止め．．．彼女は一夏達が『起きる』まであのIS二機を相手に最後まで耐えるつもりだと言うことを理解したからだ。

その問いに対し、箒は真っ直ぐに千冬を見返しながら答えた。

「正気です。足手まといにはならないよう動きます。それに何よりも．．．」

「？」

「惚れた男の為に動けずして女は語れませんので」

ハッキリと、自身の胸に手を当てそう言った箒に束以外のその場の全員が驚きに口を開いた。

唯一、束だけがニンマリと笑いながらVサインを箒に送っていた。

「結局、篠ノ之博士も箒さんに味方して織斑先生が折れるとは思いませんでしたわ」

「ああ言われたら、ね．．．」

二人に同調するようにフライルが肩を竦める。

「何が篠ノ之さんをああ動かしたかは後で訊くとして」

「今は作戦を成功させることに専念しなければなりませんわね．．．箒さん！」

「ああ。大丈夫だ、行ける」

セシリアの呼び掛けに、瞼を開いた箒が拳を握る。フォーマツト及びフィッティングは既に終わっている。後は、戦いの中で知るのみだ。

「私達は第二防衛ラインのメンバーと協同して福音と不明ISを迎撃、福音のパイロットの救助に当たりますわ」

「了解」

「わかった」

「ですがあくまで防衛、無闇な突撃や突出した行動は避けるよう、お願いしますわ。もしもそうなってしまった場合、私とフライルさんで可能な限りフォロー致します」

「了解」

作戦確認を終え、ブースターを起動させる。

向かう先は間違いなく激戦となりうる戦場だ。

「鈴さん達にはすでに作戦は伝えてあります。．．．負けられませんわよ」

「ああ、負けられないな」

「睦月の分も、頑張る」

決意と覚悟を持って、三人と一機が空へと昇る。

そして、

「「行きますー!」」

白い軌跡を残しながら四機のISが飛翔した。

空には、夕暮れが近付いていた．．．

#11 記憶、その先

夢を、見ていた。

・・・いや、この場合夢じゃなくて自分の過去か。

思い出したくなかった自分の過去を、まるで古い映画でも見るように色褪せたフィルムター越しに見ていた。

嘗ての僕、扶桑睦月は今みたいな性格じゃなくて、引っ込み思案で自己主張の無い、クラスでも影の薄い人間だった。

そんな僕が『彼』に出会ったのは小学校6年生の時だ。

『彼』は俗に言う天才だった。それも飛びきりの。

何をしても一位、最優秀を飾り、家柄もとある財閥の御曹司、ルツクスも数多の女子が群がるほどという正に完璧な人物だった。

表立っては。

そんな彼が何故、僕と関わりを持ったかと言えば至極簡単だ。

ストレス発散の道具が欲しかったんだ。

彼に話しかけられて以来、僕の人生は一転した。

朝に殴られ、昼に蹴られ、夕には集団暴行。我ながらよく死ななかつたと思う。

降り注ぐ暴力に怯え、耐えて。気づけば中学三年。

小中一貫の学校であり、彼から脅されていたこともあって僕は逃げることを諦めて只管に耐えていた。

教師ですら、僕を見放していた。

僕の家は母子家庭で、父親が居なかった。女手一つで育ててきてくれた母に迷惑を掛けたくなってずっと一人で耐えていた、そんな時。

母が死んだ。交通事故だった。

心が砕けたような感覚が、胸に去来した。

僕は施設に預けられることになった。正直、その頃の僕は現実感という物が欠如していた。

だからか、施設に預けられる事になった時も特に何も感じなかったし、感じられなかった。

「もう嫌だ」「耐えられない」「辛い」「痛い」

そんな感情が渦巻いて、遂には死を選択しかけた。

僕が彼女に出会ったのは、そんな時だった。

「やあやあ、そんな行く根暗な少年！」

黒いセミロングの髪に黒いフレームのメガネに黒いブレザー。

「何か悩みがあるなら聞こうじゃないか！解決できるか分かんないけどね！」

「ワン！」

真っ黒な仔犬を連れて真っ黒なその子は人懐っこい笑顔を浮かべていた。

同じ施設に住む、一歳上の女子。

柳 雪穂（やなぎ ゆきほ）。それが彼女の名前だ。

そして、彼女のおかげで僕は出会えたんだ。

『ガンダム』という存在に。

「君は無趣味だねえ・・・そうだ、私とコレをみようじゃないか！」

「ガンダム・・・？」

「あれ、まさか知らない？」

「初めて聞いた・・・」

「名前すら知らんと来たか・・・まあとりあえず見てみようか。男の子はやっぱり格好いいロボットだよね！」

そう言った雪穂に初心者向けだと見せられたのは機動武闘伝Gガンダムだった。

それを見終わったら別の作品、また別の作品と、僕は『ガンダム』を知っていった。

途中、エルガイムとかも見たけど。

楽しかった、本当に。

雪穂と真っ黒な仔犬・・・ノエルと一緒に居る間は日頃の暴力の痛みを忘れられた。

時間は過ぎて、秋。

雪穂が僕にある物を渡してきた。

それは、A・O・Zのムック本全巻だった。

「・・・これは？」

「睦月が好きそうな作品かなと思つてね。それを進呈しよう！」

「いいの？」

「遠慮せずに受け取ってくれたまえ」

「あ、ありがとう・・・」

それからと言うもの、僕はA・O・Zの世界に没入していった。

ヘイズル、キハール、ダンディライアン、フライルー・・・どの機体も僕の琴線に触れ、沸き立たせてくれる。

雪穂とノエルと遊んでいる時や、ムツク本を施設で読んでいる時は辛い事を忘れられたし、何よりも楽しかった。

『でも、現実是非情だ』。

ーある日、僕の目の前でノエルが殺された。

他でもない、彼の手によって。

セピアの景色は其処で消えた・・・。

「ーっ」

意識が覚醒する。目の前には青空が広がり、草の匂いが鼻を擽る。

夢の内容は・・・ハッキリと覚えている。

「何で、忘れてたんだろう・・・」

僕が記憶を忘れた切欠、何かがあつたような気がする・・・でもその記憶が漠然としていて上手く思い出せない。

片手で少し痛む頭を押さえながら身体を起こすと、そこは穏やかな丘陵地帯だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

見渡す限りの青空に鮮やかな緑の草や背の低い木々、記憶に無い処か始めてみる風景に思考が追いつかない。

まず間違いなく臨海学校でつかわせた貰っている花月荘ではないだろう。潮の臭いなんてしないし、どこを向いても海なんて見えない

し。

「ここは、何処なんだろう？」

「ウォーターシップダウン、だよ」

「え？」

誰も答えてくれないと思った問いは、唐突に聞こえた声によって答えを貰った。

聞こえた方に顔を向けると、そこには何時の間にか現れていた真っ白なテーブルに黒いドレスを纏った女の子と・・・

「雪、穂・・・？」

「睦月、おっひさ〜！」

さつきまで夢で話していた雪穂が座っていた。

「つまり・・・どうゆうこと？」

謎の少女と雪穂の対面に座り、僕が発した第一声がそれだった。

誰だって目を開けたら見知らぬ場所に居て、あまつさえ出会うことが無いと思っていた人と再会すれば混乱するだろう。

「ウォーターシップダウンって確か・・・」

「そ、ヘイズルの名の由来となった物語、その舞台だよ。まあここはその『再現』なんだけどね」

「再現？」

「貴方と私とが出会うために用意した、特別な空間。そう解釈して頂ければ」

黒いドレスを纏った女の子は静かに瞑目したまま丁寧な口調で答えてくれた。

赤みがかった茶髪に整った顔立ち。身長はラウラに近い。

何故だろうか・・・この子と初めて会った筈なのに、まるで旧知の

仲のような妙な安心感がある。

「……で、何で雪穂はここに?」

「おう!?このままはぐらかそうと思ったのに先手を打たれた!」

ジト目で雪穂を見るとわざとらしく驚かれた。

『ありえない』のだ。彼女がここに居るのは。

……いや、『彼』という存在がいる以上、雪穂も何らかの方法でこの世界に来たということだろうか。

というかそもそもこれは現実なんだろうか。まさかSガンダムに撃ち抜かれてそのまま死んでしまったとか……?実はここは黄泉の国とか……?

「やばい……遺書とか書いてないよ僕……」

一夏にハードディスクのデータを消しておいてって言うっておくべきだった……!

「あく、たぶん睦月が考えているような状況じゃ無いから安心していいよ」

「え?じゃあここは一体……」

「人の無意識、その最奥。『Es』領域とでも言いましょうか。主には深い夢、とでも解釈しておいて頂ければよいでしょう」

Es領域……何だかよく分からないけれどこの子が言う通り、夢だと解釈しよう。

僕が頷くと、雪穂がピツと人差し指を立てて「きて」と言った。

「さっきの睦月の問いに答えようか。私が何でここに居るのか。それはねー」

ー君の背中を押すためだよ。

そう言って雪穂は柔らかく微笑んだ。

#12 ヒーロー

「僕の背中を押すため・・・?」

「そう、私はその為にここに来たんだよ」

僕の問い返しに雪穂はポニーテールにまとめた自分の髪を弄りながらそう答えた。

一体、どういう事だろうか?この謎空間・・・夢に来てからと言うもの疑問が絶えず生まれてくる。

「現実での睦月が今どういう状況かわかるかい?」

「確か・・・Sガンダムに撃ち抜かれて、そのまま」

「撃墜されたね。まあ、ヘイズルが頑張って睦月を守ったから、命に別状はないよ。今は布団の上でぐっすりさ」

土手っ腹に思いきりビーム貫通したと思うんだけど。IS・・・いやヘイズルの防御力に脱帽するべきなんだろうか。

布団の上、ということとは旅館まで運んで貰ったんだろう。

「と、ここまでが君の現状だ。次は君以外の現状を・・・」

「私が説明させていただきます」

雪穂の言葉を遮ってドレスの少女が手を挙げると、テーブルの真ん中に映像が映し出される。

これは・・・もしかして。

「御察しの通り、福音及びSガンダムと主と織斑様以外の全専用機持ちとの戦闘、現在の映像です。コアネットワークを通し、フライルールの視点からの映像となりますが」

映像の中では、激しい戦闘が繰り広げられていた。見たところフライルが遊撃に回り、簪、シャル、ラウラがSガンダムの足止め。紅椿を装着した箒さん、鈴さん、オルコットさんが福音へと攻撃を仕掛けている。

一見押しているように見えるけど、多分Sガンダムが本格的に動けば戦況は容易く覆ってしまうだろう。

『彼』はそういう人間だ。

「急いで戻らないと・・・!」

微々たる力かも知れないけど加勢しなければ。いつ僕と同様に撃墜される人が現れるかわからない。簪達をバカにするわけじゃない。『彼』が桁違いなんだ……。

椅子から立ち上がるようにする僕をしかし手が止める。

雪穂の手が僕の腕を掴んでいた。

「ストツプだよ、睦月」

「雪穂……」

「まあ座りたまえよ。言っただろう？君の背中を押すつてさ」

気軽そうにウインクした雪穂の言葉に、どうにか逸る気持ちを押さえて椅子に座り直す。

腕から手を離し咳払いを一つして、雪穂は話始めた。

「今の君では、福音はまだしもSガンダムとは戦えないだろう。それは君自身がよく理解している筈だ」

「っ……」

凶星だった。

そう、僕はSガンダム……いや、『彼』とマトモにやりあえない。

ここに来て思い出した記憶が恐怖心を掻き立てて、彼の前に立つと思うと足が震える。

「ねえ、睦月」

「……何？」

不意に、雪穂が僕の顔を見てこう訊ねてきた。

「君にとってガンダムってなんだい？」

僕にとってのガンダム……その突拍子もなく掛けられた問いに、僕は考える。

身も心もボロボロだったあの頃、出会ったガンダム。それを見て、

僕は……。

「僕にとって、ガンダムは……」

「……」

「ヒーロー、かな」

そう、英雄（ヒーロー）だ。たとえそれらの全てが他の誰からも否定されたとしても、僕にとっては紛れもないヒーローだったんだ。

壊されても、揶揄されても、それでも戦う。

ああ、深いテーマなんてものはどうでもいい。

憧れたんだ。ガンダムの戦いに、そのパイロットの生きざまに。

斯くありたいと思った。たとえ弱くとも足掻き続ける。そんな強さに憧れた。

上手く言葉に出来ない感情を突っかかりながらも吐き出し終わると、雪穂は満足げに頷いた。

「なんだ、分かっているじゃないか睦月は。ねえ、君もそう思うでしょう？」

「ええ、答えは出ているようです」

「え？」

妙に納得顔で頷き合う二人に困惑していると、ズビシッ！つと効果音が付きそうな勢いで指を指してきた。

「君にとってガンダムがヒーローだと言うなら、君は今、ヒーローだと言うことだよ！」

「ごめんよくわからない」

「君はヘイズルのパイロットだ。そう、ガンダムを駆るパイロットだ。睦月の言う、ヒーローなんだよ」

ああ、成程そう言うことか。

雪穂の言いたいことを理解して、なんと言うか引つ掛かっていた物が取れた気がした。

そうだ、気付かない内に僕は、憧れていたヒーローになっていたんだ。

「確かに、あのSガンダムのパイロットは怖いかも知れない、強いかもしれない。でも」

「それでも、ヒーローって言うのは立ち向かっていく者だ。でしょ？」
「漸く納得いったかい？なら後は簡単だ。現実に戻ってあの調子乗ってる憎いあんにやるーに一発お見舞いしてくればいいのさ」

拳を突き出して笑う彼女にちよつと呆れながらも笑ってしまふ。

さつきまであった、『彼』への恐怖心はすっかりなりを潜めていた。

・・・これなら、やれる。

「さつて、君の背中をしつかり押せたワケだし、後は君に力を渡すだけだね」

「力？」

「彼に立ち向かう為の力さ」

そういうと雪穂は拳を下げて、ニシシと笑った。

そんな彼女と入れ替わるように、ドレスの少女が立ち上がり、手を差し出す。

「手を私と同じようにしていただけますか？」

「ごう？」

「はい、ありがとうございます」

そう言うと彼女の掌から柔らかな光が流れ出し、僕の差し出した右手へと収まった。

まるで、何かを継承するかのよう。

「今はまだ、『進化の途中』。ですがそれだけでも主なら十二分に戦えるでしょう」

「・・・ありがとうございます」

仄かに輝きを残す右手を握り締め、ドレスの少女に礼を言う。

・・・さあ、夢の時間はそろそろ終わりだ。

後ろを振り向けば、真っ白な扉がその口を開けて待っていた。

「雪穂、また・・・会えるかな？」

「大丈夫、近い内にまた会えるさ」

顔を見なくてもわかる。きつと今の彼女は満面の笑みを浮かべていることだろう。

雪穂がそう言うんだ、信じよう。

「行ってきなよ、『ヒーロー』。目指すは大団円(ハッピーエンド)だ！」

「うん！」

トン、と背中を押され扉の中へと飛び込むと視界が真白に染まっていく。

意識が消えていく最中、僕は笑った。

「今度は現実で会おうね、『ヘイズル』」

ドレスの少女にそう言って、僕の意識は光に呑まれた。

「気付いていましたか・・・」

「睦月は変な所で勘がいいからねえ」

睦月が扉の中に消え、見渡す限りの丘陵が段々と色無くすなか、雪穂とヘイズルと呼ばれた少女は互いに肩を竦める。

「貴女は、これからどうするおつもりですか」

「睦月に近い内に会うって言っちゃったし、まあ色々準備する感じかな」

「そうですか。なら今度はマトモな方法で主に会ってください。ISの深層領域に浸入するなんて事はしないでください」

「あはは、善処するよ。っと、それじゃお先に！」

何とも煮え切らない答えを残して雪穂の姿が消える。

完全に純白となった空間で、ヘイズルは天を仰ぐ。

「主・・・私は貴方と共にあります」

小さなその眩きは輝きの最中へ吸い込まれていった・・・。

#13 黒き神槍、白き絶刀

「っ……あ……」

意識が覚醒し、瞼を開く。

昨日の夜に見た木目の天井があった。

二、三度瞬きをして布団から身体を起こし、コキリと首を鳴らす。

窓の外を見れば、茜色に染まりかかった空が見えた。どうやら気を失ってから大分時間が経ってしまったらしい。

「ふう……」

「よう、目が覚めたか睦月」

「一夏……」

何時からそこに居たのか、ISスーツの上に浴衣を着た一夏が部屋の入り口に立っていた。

「一夏、身体は大丈夫なの？」

「ああ問題ない。寧ろ前よりスッキリしてる位だ。睦月は？」

「僕もかな。何か、色々突っかかりが取れた感じ」

「そいつはよかった」

話しながら一夏は部屋に入ってきて、未だに座っている僕に手を差し出して笑った。

もうそれだけで一夏が何を言いたいのか理解して、その手を掴んで立ち上がる。

確かに、のんびりなんてしてられないね。

「んじゃ、行くか」

「そうだね、派手に行こうか」

握った手を離してハイタッチ。

窓を勢いよく開けてベランダに出ると、部屋の扉が壊れんばかりの威力で開けられた。

織斑先生と山田先生だ。

普段ならおとなしく言うことを聞くだろうけど、今の僕たちは生憎と止まる気はない。

「貴様ら、何処へ行くつもりだ！」

「ちよつと野暮用です」

「バカか!？」

「千冬姉、俺はバカだ。ああ確かにバカだ。だからこそ、此処で寝てる訳にはいかねえんだ」

「そういう事です。織斑先生、山田先生、大丈夫です。ちゃんと帰ってきますから」

「待っ—」

「行つてきます!」

織斑先生の制止の声を無視して僕達はベランダから飛び降りた。

さあ、飛ぶよ!

「ヘイズル!」

「白式!」

直下にある林の木に当たる寸前にISを展開、飛翔する。

【システム戦闘モード起動】

「一夏!」

「応!」

一夏の腕を掴み、ヘイズルのスピードを上げる。

向かうは第二防衛ライン。・・・待っててね、

「皆・・・!」

「くっ・・・流石に一発一発のダメージが大きい・・・!」

様々な色の閃光が彩る戦場の中、更識簪（わたし）は僅かな隙を活かして体勢を立て直す。

接敵からもう二時間以上経つ。最初の方こそ此方がどうにか押していたが体力の減少や機体に蓄積したダメージがここに来て響き始めた。

何より、

「福音の二次移行（セカンドシフト）が起こるなんて、流石に予想外・・・っ！」

眩きながらも襲ってくる長大なライフルの一撃を無理矢理回避する。

福音の二次移行：・篠ノ之さんが一撃を与えた途端にそれは起こった。

マルチスラスターユニットが消え去り、そのかわりに巨大なエネルギー翼が生え、正に天使と呼べる姿になったのだ。

何より恐ろしいのが、その翼が専用武装である『銀の鐘』によって形成された攻防一体のトンデモ兵器であるということだ。

どうにかオルコットさんやフライルが攪乱しているけど、あまり芳しくない。

直ぐにでも援護に行きたいところだけど・・・

「余所見してる余裕があるとは関心だなあ、オイ！」

「っ・・・うるさい」

「簪さん！」

小馬鹿にしたような科白と共に放たれた腰のビームガンを『運命の翼』による推進力で回避するけど、二発の内の一発がシールドエネルギーを削る。

シャルロットの援護のおかげで追撃は免れたけど、機体にガタが来はじめている。

『シャルロット、ラウラ、機体状況はどう？こっちはもう色々危ない』

『こちらシャルロット。僕も似たようなモノだよ・・・武器もそろそろ全部撃ちきりそう』

『こっちもだ。ブリッツも撃てて後五発、残るは近接戦のみだ・・・だがシールドエネルギーが心許ない』

どうやら二人も同じような状況らしい。防御用のパッケージに換装しているシャルロットはまだしも、完全に砲撃戦特化のパッケージであるラウラはやはりダメージの蓄積が著しい。

かく言う私も、使える武装は今手に持っている夢現とサブマシンガ

ン『秋雨』しかない。腰のガトリングは早々に撃ち尽くしたのでパージした。

シールドエネルギーも残り少ない。

万事休す、だなんて諦めの言葉を使いたくないけど、色々難しい状況なのは確かだ。

「おいおい、手の内はもう終いか？もつと楽しませろよ・・・それとも何か？三人揃っていたぶられるのがお好きなタイプか？」

「・・・」

相も変わらずバカにしてくる奴の言葉に耳を貸さず、現状の打開策を探す。

・・・ダメだ、手が見つからない・・・！

「まあいい、そろそろ面倒だしな。終わらせるか」

「簪！避けて！」

「え・・・？」

瞬時加速を使ったのだろう、一瞬で奴に間を詰められた私の眼前に銃口が突き付けられる。

「テメエは睦月と親しそうだからなあ・・・殺したら睦月の奴もさぞ悲しむだろうなあ」

「この・・・外道が！」

「ありがとう、最高の誉め言葉だ・・・なんてなあ！」

銃口のその向こうに居る奴を睨むが、何ともイラつく声音で笑ってくれた。

パルマは・・・ダメだ、出力が足りない。弾こうにもこの距離じゃすぐに撃たれる。

「出来れば睦月の奴の前で殺したかったが・・・ま、いいか。じゃあな雑魚」

逃げようにも逃げられず、死を受け入れかけたその時。

「どおとおおけえええええええ!!」

蒼と桜色の巨大な閃光が、私の視界を埋め尽くした。

「簪！大丈夫!？」

「う、うん・・・大丈夫」

余りの出来事に呆然としてみると、シャルロットに肩を叩かれたので慌ててそう返す。

閃光が収まり、反対側に居る奴を見ると、右腕の装甲が半ば溶けかかっていた。

「一体、誰が・・・」

『簪、シャル！9時の方向を見ろ！』

慌てたラウラの声に言われた方角を見ると、私は目を見開いた。かっつてないほどに。

漆黒の全身装甲。背中にはまるで飛行機の翼のようなウイングユニット。さらにその後ろには柱の如き巨大なブースター。腰には長大な銃剣を加えた二つのクロー。

両手にも槍と見間違えう銃剣を二本構えたその機体の頭部には額から顔の上半分を覆うような白いパーツが付いていた。

純白の部分装甲。その背中には鉄(くろがね)で作られた白い翼、左手から肘までを包むガントレット。そのガントレットには『鞘』に収まった刀が懸架されていた。

知っている。姿こそ大きく変われど、私はあの機体を知っている。

あの機体はー

「ヘイズル・・・！白式・・・！」

『こちら扶桑睦月』

『同じく織斑一夏』

『『これより戦線に復帰します！』』

黄昏の空に漆黒の槍と純白の剣が降り立った。

#14 返礼の一撃

【作戦領域到達。ギャプランブースター、パージ】

「一夏、福音は任せるよ」

「了解だ。睦月もあの妙なヤツ、思いつきりぶっ飛ばしてこい！」
「当然！」

第二防衛ラインに到着した僕達は、ギャプランブースターのパージと同時にそれぞれの目標へと向かう。

行ける。今の僕とヘイズルなら。

こつちを呆然と見る簪とシャルの隣に機体を止めると、付近の孤島にいたラウラも飛んできた。

「お待たせ、皆」

「その声、睦月なの？」

「真正正銘、扶桑睦月だよ。シャル」

まあ、機体の見た目もかなり変わってるから仕方ないか。

『ヘイズル・ラー・フルアーマー形態』。それが今のヘイズルの正式名称だ。マルチ・コネクター・ポッドに変更された背面ユニットに支援ユニット「フルドド」から分離した、台形の板のような形をしたスラストター・ウイング・ユニットを二基装備し、腰の両サイドにはロングブレードユニットをくわえたクロウ・アーム・ユニットを装備。

頭部にはバイザー型複合センサーユニット、脚底部に姿勢制御用スラストターユニットを追加したアドバンス仕様となっている為、その姿はヘイズルの面影が辛うじて見える程度になっている。遠目からみたら丸つきり別の機体だと思われるでも不思議じゃない。

・・・さて、挨拶も程ほどにして。

「三人は下がって。後は、僕がやる」

「え、ちょ・・・睦月!?!」

「単機でやり合う気か!?!」

シャルとラウラの制止の声も聞かず、『彼』の前まで進む。

その時、プライベートチャネルから簪の声が届いた。

『大暴れしてきて』

全く、大層な応援だ。まあ・・・言われなくても暴れるけどね。

今までの『お礼』はきつちり耳揃えて返してあげなきゃね・・・

「やあ、さつきぶりSガンダムのパイロットさん」

「テメエ、その機体まさか二次移行（セカンドシフト）か」

「君がそう思うのならそうなんだろうね・・・君の中ではさ」

皮肉を交えて笑い混じりにそう返す。

実際、二次移行したと思われても仕方ない外見ではあるけど、実際に二次移行した訳じゃない。

ただ単に単一仕様能力がアンロックされただけの話だ。

「ふざけてんのか？まあいい、態々もう一度やられに来たんだ精々楽しませろよ・・・っと！」

「・・・君は勘違いをしている」

Sガンダムの腰部から二本のビームが放たれる。

それをクロー・アーム・ユニットの口から放たれたビームが相殺する。

さあ、大暴れの時間（ランページ・タイム）だ。

「やられるのは、君だよ『櫟 秋人（くぬぎ あきと）』」

「何っ!？」

『彼』の本名を呼び、軽くブースターを吹かして『側面を取る』。秋人の驚く声が聞こえるけど、そんな雑音を無視してロング・ブレード・ライフルの引き金を引く。

フルドドに搭載された制式型のロングブレードユニットの威力は今までのものより格段に上昇している。並みのISなら一撃で展開解除まで持つていけるだろう。

桜色の『柱』と称すべき極太のビーム二本を秋人がぎりぎり回避するが、掠った左足の装甲が膨大な熱量によって融解を引き起こす。しかし、ブースターまで熱が到達する前にパイプラインをカットしたのか誘爆することはなかった。

「何だ、この威力は・・・!？」

「何って、ただのライフルの威力だよ」

「クロー・アーム　ロングブレードユニット、格納。左右ロングブレードライフル、カートリッジロード」

クローアームから銃剣を量子化してクリアランスを広げ、カートリッジをリロード。

これくらいで音を上げて貰っては困る。

僕とハイズルはまだ『フルドドしか』使っていないのだから。

「調子・・・乗ってんじゃねえぞ！睦月い!!」

「その言葉、そっくりそのまま返すよ!」

Sガンダムの背部ビームカノンが咆哮を上げ、蒼白の閃光を放つ。

たかが『その程度』の攻撃、当たるわけがない。

否、当たってやる義理もない。

「鬱陶しい!」

連射されるその尽くをロングブレードライフルとクローアームで相殺していく。

・・・叩き潰す、完膚なきまでに。

「何だ・・・」

一手を放つならその手の行く先を消し去ろう。

「何なんだよ・・・」

前に進むと言うならその道を阻もう。

「お前は」

避けると言うならその回避先すら弾幕で埋め尽くしてやろう。

「お前は一体何なんだよお!!」

一挙一動、あらゆる行動を踏み潰し、叩き潰し、圧壊してみせよう。足掻くという行為すら無駄だと、締観し頭を垂れる未来すら想像出来なくなる程に。

君が今まで行ってきた事、その全て。熨斗をつけて返してやる。

「僕が誰かって? 簡単だよ」

Sガンダムから放たれるビームの数々、その全てを打ち消しながら僕は笑う。

「僕は御都合主義の風上に立つ存在（ヒーロー）、扶桑睦月だ!」

【ビートブレード展開。クローアーム、ビームサーベルモード起動】
計四本の刃を振りかざし、一気に肉薄する。

その間もビームは撃たれ、何発かが背部ウイングユニットを直撃するが、フルドドのダメージコントロールシステムにより即座に破損部位をまるごとパージ。ダメージの拡散を防ぐ。

そして、

「叩き・・・斬るー！」

Sガンダムのエネルギーシールドに全ての刃を突き立て、そのままこじ開けるように切り裂く。

姿勢を大きく崩したSガンダムを蹴り飛ばすと、僕はヘイズルの単一仕様能力を発動させた。

「パッケージ、ギガンティックアーム！」

【BUNNYS（ヴァニス）システム 起動。パッケージ換装】

僕の声に応え、ヘイズルがその姿を変える。

頭部バイザーは解除され、通常のガンダムタイプに戻る。

胴体は原作通りの脱出ポッドではなく、追加エネルギージェネレーターとなった「プリムローズ」に変わり、それに合わせて両肩の装甲がウエポンラッチを備えた小型のモノへと再展開される。

腰部フロントスカートは「フルドド」の追加パーツからサブアームユニットに切り替わる。

そして、背部マルチコネクタポッドに「フルドドII」のドラムフレームを展開、そこからヘイズルの全長と同等かそれ以上の巨大な腕が更に展開され、『変身』を終える。

その間0.5秒。

「ギガンティックアーム形態、展開完了」

【プリムローズ、エネルギージェネレーター起動。シールドエネルギー、ブルーゾーンまで回復。残りシールドエネルギー800】

BUNNYS（ヴァニス）システム。それがヘイズルの単一仕様能力だ。その能力は、『パッケージの高速切替』。

戦略すら塗り替えるヘイズルの力だ。

【瞬時加速、発動】

「なっ!?!」

ブースターの白い軌跡を残しながら、体勢が整っていない秋人の眼前へと再び迫る。

腕の動きに呼応して、ギガンティックアームが振り絞られる。

「君がどうしてこの世界に居るのかだとか、そんな事はもうどうでもいい」

「待つ……」

「今までのお礼だ」

そしてそのまま拳を叩き込むー!!

「ぶっ……飛べええええええええええ!!!」

ーバゴンツ!!

ギガンティックアームの巨大な拳がSガンダムを捉え、装甲をスクラップ寸前まで凹ませて吹き飛ばす。

きっかり10メートル飛んだ辺りで秋人が姿勢制御を行うが、機体の外見は最早戦える状態には見えない。何せ機体前面の殆どがまるで正面衝突した車のように醜く潰れているからだ。

「がっ……あ……む、つきいい!!」

「来なよ、秋人。その醜悪な思想共々、ここで潰して上げるから」
人指し指を曲げて挑発する。

ー黄昏は、終わりに近づいていた。

#15　そして日は沈む

「何だあれは……」

「強い、強すぎる……」

圧倒的、まさにそう呼ぶに相応しいワンサイドゲームだった。

先程まで猛威を振るっていた赤黒いISが、良いように遊ばれている。否、蹂躪されている。

私たち三人で手も足も出なかった敵を、睦月は一方的に攻め続けている。

現に敵ISの装甲は大きくひしゃげ、所々融解、焦げ付いた跡が見えるのに対して、ヘイズルは全くの無傷だ。

にしても、あの変身とも言える武装切替……いや、パッケージだろうか。あれは、まさか……。

「単一仕様能力……?」

「簪?」

だとすればあの一瞬で姿が変わったのも頷ける。

そして、それがどれだけ『強すぎる』能力なのかも。

機体状況の問題から近くの孤島に降りた私たちは、ハイパーセンサーを用いて戦場を見ていた。オルコットさん達の援護に回りたいけど、はつきり言つて今の私達じゃ足手まといも良いところだ。

というか織斑君が化け物じみた機動で福音相手に無双してるから行く必要を感じない。何あの機動、真ゲッターか何か?

見ることしか出来ない歯痒さはある。けれど、俯瞰することで様々な情報が見えてくる。

確かな事はただ一つ。

――今の睦月に『敗北はありえない』。

巨大な腕、その指先からビームを。両手にもったビームライフルと肩の小型ミサイルポッド、腰のサブアームユニットのビームライフル、背中のアーム付近から伸びた開口式ビームキャノン、持てる武装の全てを撃ち放つその姿は、見ている私たちですら震える程だった。「く、そがああああ!」

為す術なくエネルギーシールドごと装甲を削られるSガンダム（睦月からのデータリンクで名前を知った）、その搭乗者の激昂がハイパーセンサーを通じて私の耳に入ってくる。

「そろそろ、決着にしようか。秋人」

睦月が砲撃を止め、パッケージを量子化してビームサーベルを構える。

ヘイズルの姿は再び変わり、背中に二枚のシールドブラスターを備えた姿となっていた。

対してSガンダムも機体の各所から小さく火花を散らしながら膝裏からビームサーベルを抜きはなった。

「認めねえ……テメエは、大人しく這いつくばっていれば良いんだよオ!!」

「いいことを教えてあげる」

一息に距離をゼロにしたSガンダムに睦月は冷静にビームサーベルを振りかぶり。

「その手の台詞を吐くのは悪役の負けフラグなんだよ!」

Sガンダムの胸を薙いだ。

カウンターの一撃が見事に入り、Sガンダムの胸に真一文字の亀裂が走る。

装甲が赤熱し、切り裂かれた破片が宙を舞う。

ダメージを軽減するためか、Sガンダムがバックブーストで距離を空ける。

睦月は無理に追撃をせずビームサーベルを構えたままだ。

腰のビームガンや背中のビームカノンと幾つもの火器を積んだ機体だ、警戒するに越したことは無い。

「確かに」

「ああ?」

「確かに君は天才なんだろう。その機体だっておそらくは君が造ったんでしょ……でもね、それだけだ」

「何だと……」

「その機体は君みたいなのが乗っていいものじゃないんだよ」

ビームサーベルを量子化し、ロングブレードライフルを展開しながら睦月が言う。銃口から桜色の粒子が漏れだし、空気を揺らがせる。「這いつくばっていいばい。そう言ったよね。その台詞、そっくりそのまま返すよ・・・。這いつくばるのは、君だ」

「あゝあゝ!?!やってみろよお!」

激昂の叫びと共にSガンダムが斬りかかる。

ボロボロの機体を引き摺った、無謀な突撃。それを冷静に見据えて睦月は構え・・・

「ー終わりだ」

槍の如くその銃口を突き刺した。

砲音。

左腕が跡形もなく消え去ったSガンダムのブースターから光が消え、一瞬の停滞の後に落下を始める。

「認めねえ・・・」

その最中、Sガンダムから発せられる声を、私は聞いた。

「認めねえぞ、睦月・・・お前は、俺のー」

バシヤリ、と小さな水柱を上げてSガンダムは海中に没した。

睦月の因縁の相手との戦いは、そんな静かな終わりだった。

「・・・僕は、もうあの頃の僕じゃないんだよ、秋人」

彼が没した水面を見つめて僕は呟いた。そこは小さな波紋すら波に吞まれて消えていた。

宿怨を断つ。その終わりは思っていた以上にあっけのないもの

だった。

でも、これで良いのだと思う。彼と僕との鎖の絶ち方は。

一頻り水面を見てから、僕は一夏たちが戦っている空域に向いた。

「援護は・・・要らないみたいだね」

「睦月！」

疲労感からか、揺らぐ身体を慌てて来た簪に支えられながらハイパーセンサー越しに捉えた光景を見て、僕は笑みを浮かべる。

そこには天を舞う白き機神の姿があつた。

『一夏、こっちは終わったよ・・・ちよつと援護には行けそうにない』
「気持ちだけで十分だ！」

睦月からの申し出に一夏は余裕を持って答える。

戦いは一夏の独壇場と化していた。福音の攻撃の悉くを切り払い、避けて一方的に攻撃を加える様は本当に数刻前と同一人物かと思わせる。

セシリア達は直接的な攻撃はせず、福音が離脱しないよう散発的な射撃に徹していた。

「aaaaa!!」

「ツーーラアッ！」

福音の光翼から放たれる最早砲撃と称すべきエネルギー弾を納刀していた雪片を抜き放って弾く。

『白式・雪羅』。それが進化した白式の名だ。

かつての白式の面影を残しながらも、機体の各所に変化が現れている。

非固定武装である大型のスラスタ―は小型のスラスタ―を増設した、翼のような形状となった。

脚部にも開閉式の小型スラスタ―を増設し、機動力は大幅に強化された。

武装面においては雪片式型のエネルギー効率の上昇、それによる刀身形成の最高速化。そして左手に付けられた新武装、『雪羅』と雪片専用の鞘『氷桜（ひおう）』。

雪羅は展開装甲の機能を備えたガントレット型の複合兵装であり、荷電粒子砲、零落白夜を纏ったエネルギークロ―、同じく零落白夜の効果を持つエネルギーシールドと、万能性の高い武装となっている。

氷桜は、居合いを好んで使う一夏のために白式が開発した純白の鞘であり、零落白夜発動用の小型サブジェネレータを鯉口に搭載している。基本的には雪羅に懸架されているが、腰に掃くことも、手に持つこともできる。

これにより、零落白夜発動にかかる機体エネルギーの消耗を抑えることが出来、経戦能力が僅かながらも上昇した。

氷桜から零落白夜を発動させた雪片が鞘走り、福音のエネルギー弾を霧散させていく。

流石の福音も度重なる乱射によってエネルギーが減ってきたのか、動きが悪くなっている。

【残りシールドエネルギー 540】

（そろそろ決めないとマズいな・・・ならー！）

エネルギー残量を見て、一夏は思い切り息を吸い込むと福音を睨んだ。

雪片が氷桜に納刀され、零落白夜のエネルギーが装填される。

全身にあるスラスタ―の全てを解放、蒼白い粒子が白式のまわりを舞い始める。

さながら天使の翼のような形となった非固定武装のスラスタ―がエネルギーを溜め込み始める。

危険を察知したのか、福音の攻撃が激しさを増すが、一夏はまるで未来でも見えているかのように弾幕を避け続ける。

そして、時は満ちた。

【零落白夜 エネルギー装填完了。 完全解放、限定解除（リミットオーバー）】

【二重加速 エネルギーチャージ完了】

「今、助けるぜ・・・福音！」

【二重加速 発動】

瞬間、白式は『音を置き去りにした』。

「a, a a a a a a a a a a a a a a a a!!」

白式が止まるのと同時に、破裂音と共に福音の光翼が微塵に切り裂かれ空に消える。すれ違い様に一夏が放った『完全解放（オーバーバースト）』の一撃が福音の武装ごと、シールドエネルギーを限界まで削ったのだ。

そしてー

「これで・・・」

白式が振り返り射撃形態となった雪羅を福音の背中に突き付け、

「終わりだ!!」

トリガーを引いた。

爆音を鳴らしながら砲口から光が溢れ、福音の残り僅なシールドエネルギーを削りきる。

「Thank You」

眩くように言葉を残し福音はビクリと一度だけ大きく体を震わせ、その動きを停止した。

落下しかかったその身体を左手で抱き止め、一夏は高らかに雪片を掲げた。

「福音の機能停止、作戦・・・成功だ！」

太陽が水平線に沈み、星々が輝き始める中、戦いは終わりを迎えた。

#16 夜空

「ああ・・・つつかれた～」

「覚悟してたとはいえ、流石に効くぜ・・・」

旅館のロビーで浴衣姿の僕と一夏は揃って天井を仰いでいた。

無事に帰って来た僕達二人を待っていたのは労いの言葉と説教だった。比率的には2:8位。他の皆はとぼちちりを受けたくなかったのか、そそくさと撤退してしまっただからさあ大変。援護無しで織斑先生の説教を二時間に渡って聞くはめになってしまった。

で、説教が終わって今に至る。

「心配してくれてたのは解るんだけど、二時間って長すぎね？」

「まあ、命令違反したのは事実だし・・・勝利の代償ってところかな」

「キツイ代償もあったもんだ」

相も変わらず背もたれに頭を寄せながら会話する。

正直、戦闘よりも疲労感が強い。

・・・そういえば、お風呂入ってないな。

「ん？どうしたんだ睦月」

「汗流そうと思ってるね。一夏はどうする？」

「あー・・・もうちよい休んでから行くわ。足がまだ痺れてら」

「了解、それじゃ行ってくるよ」

「おう、ごゆっくり」

そんな会話をしてから、僕は着替えを取りに部屋に戻ってから温泉へと向かった。

「ああー、やっぱり貸し切りだと広く感じるなあ・・・」

温泉に着いてしつかりと身体を洗ってから、お湯に浸かる。

じんわりとした熱のおかげか、疲れが滲み出るような感覚だ。

「はあ～」

思わず気の抜けるような声を上げてしまう。年寄り臭い？構うも

んか。

露天風呂だから、見上げれば満天の星空が広がり、心を落ち着かせてくれる。

「終わったのか・・・」

小さく呟いたその声は立ち上る湯気と一緒に夜空へと溶ける。

櫂 秋人。僕の人生に悪い意味で多大な影響を及ぼした『狂人（てんさい）』。

世界を跨いでまで続くとは思わなかった宿怨の相手。その彼を彼の機体、Sガンダムのシールドエネルギーごと左腕を消滅させ、水没させた。

でも、こうして改めて落ち着いて考えてみると、

「本当に終わったのかな・・・」

簡単に彼が死んだとは思えない。そんな確信めいた感覚が僕の中にはあった。

もしかしたら、また僕の眼前に現れるかもしれない。

いや確実に現れるだろう。あの狂ったような笑みを張り付けて。

かつての僕なら、その姿を思い浮かべるだけで震え上がっただろう。

でも今は震え上がるどころか酷く落ち着いている。

「あの頃から、成長・・・したしね」

左手を夜空に翳す。手首にさがった待機形態のヘイズルが、キラリと一つ輝いたような気がした。

ああ、大丈夫だ。僕は『ヘイズル（この子）』と一緒になら何も恐れることはない。

喩え秋人が再び害意を持って現れても、必ず退けてみせる。

その為にもまず今は身体を休めるとしよう。

「はぁ・・・にしても気持ちいい・・・」

両腕を上げながら身体を伸ばしてリラックスしていると、ガラガラと更衣室と温泉を仕切る戸が開く音がした。

一夏も入りに来たのだろうか。

「遅かったね、いち・・・か？」

「……睦月？」

振り替えて見ると、そこに一夏は居らず……裸体にタオルを巻いた姿の簪が立っていた。

「……どうということ？」

カコンツ、と小気味良い音を鹿威しが鳴らす。

夜空には星々が煌めき、その壮大きさを惜し気もなく見せている。

そんな中、僕と簪は背中合わせでお湯に浸かっていた。

「……OK、どうしてこうなった。どうしてこうなった!？」

「……」

き、気まずい……何か話題はないだろうか。ああ普段ならスラスタと話したい事が出てくるのに何でこういう時に出てこないのさあ！

悶々とした、何とも言えない状態になっていると、簪の方から話しかけてきてくれた。

「えと……この時間って混浴になるのって、知ってた？」

「……え、そうなの？」

なにそれ聞いてない。というか貸し切りで、尚且つ男が居るのに混浴の時間を設定するか普通。いや確認しなかった僕も僕だけだよ。

「その様子じゃ、パンフレットあんまり見てなかったのかな」

「見落としてたよ……」

「隅っこに小さく書いてあっただけだしね」

「悪意すら感じるよ、それ……」

「でもまあ、来たのが簪でよかったよ」

「えっ?」

「他のクラスメイトだったら即行で逃げてた」

絶対に何かしら悪戯をしてくる可能性が高い。特に布仏さんとか。

簪も昨日の事で多少警戒したけど、こういう所ではやらないだろうし、何より、気心が知れてるしね。

その事を話すと、簪は小さく「気心の知れた仲・・・」と呟いた。再び沈黙が訪れる。けれどさっきまでの気まずさは殆ど無くなっている、逆に落ち着ける静かさだった。

「ねえ、睦月」

「ん？」

「・・・お疲れ様」

不意に掛けられたその言葉に思わず簪の方に顔だけ振り向くと、簪と目が合った。

お湯に濡れた肌が妙に艶かしく見えて、同年代とは思えない雰囲気が出ていた。

「それと、ありがとう」

「・・・うん」

何かを言おうとして、上手く言葉が見つからなくて、小さく頷くことしか出来なかった。

簪が視線を戻して僕の背中に寄りかかる。対して僕は星空を眺めた。

「最初、睦月が墜ちた時・・・凄く怖かった。もう会えないかもって、思っちゃって」

「うん」

「本当は、倒れた睦月のそばを離れたくなかった。でも、それは違うって思っ、戦ったんだ」

「簪・・・」

「だから・・・睦月が駆けつけて来てくれた時は嬉しかった。少し、どうして無茶をするんだとも思っただけ。嬉しかったんだ」

「独白のように呟く簪の声が耳に届く。その声音には暖かさがあった。」

「私は・・・睦月の隣に立っていたい。だから」

「一緒に、強くなろうね」

「っ！」

簪の言葉を遮ってそう言うと、背中から温もりが消えて、水音が鳴った。

上を向いてるから分からないけど、多分驚いた顔をしてるんだろうな。

何も言わずそのままで居ると、濡れた髪の感触が背中に伝わった。

「・・・ズルい」

ーそう言った彼女の声音は、少し嬉しそうだった。

#17 蠢く影

「あー、やっぱり色々ガタが来てるね」

「昨日の戦闘が原因・・・ですかね」

「十中八九そうだろうねー、あんだけ無茶したなら当然だけど」

福音鎮圧の翌日、割り当てられた部屋で僕は東さんに義足のメンテナンスをしてもらっていた。さつきまで自分の身体に付いてた物がその中身（機械）をさらけ出しているというのは中々、妙な感じを覚える。

というわけで現在僕は布団の上でダラっとしている。両足ないしね。

視線をあげるとクロエがニコニコしていた。ぶっちゃけ膝枕である。

どうしてもしたいと言うのでやって貰ったんだけど、柔らかいやら恥ずかしいやらでどう反応すればいいか分からない。

「クロエ、楽しい?」

「はい、とても。お兄様のお顔を見ているだけで楽しいです」

「そ、そう・・・」

「まったく、くーちゃんばつかズルいよ。私だってむつくんとイチヤコラしっぽりしたいのに」

「今不穏なセリフが聞こえた気がするんだけど!?!」

東さんがドライバー片手に聞き捨てならないワードをしれっとう。

しっぽりって何だ、しっぽりって。

そんな風に駄弁りながらメンテナンスが終わるのをまっっていると、部屋のドアが開いた。山田先生だ。

因みに山田先生や織斑先生には義足の事は伝えてある。

「只今もどりました〜」

「出たな妖怪スイカおっぱい」

「ふえ!?!」

「クロエ」

「了解（ヤー）」

「あだだだだだだ!!メンテ、メンテしてるから!アイアンクローはやめてえ!」

東さんが山田先生に対して失礼極まりない事を言ったのでクロエに頼んで『いつもの』をお願いした。

全く、山田先生に何の恨みがあるっていうのさ。

「いやだってあの胸元の凶器でむっくんを誘惑しているかと思うとさあ……」

「ゆ、誘惑……」

アイアンクローから解放されて、米神を揉みながら言った東さんの一言に山田先生が顔を赤くする。

思い出されるのは昨日の朝の事。……いやいや、あれ誘惑じゃないから、ちよつとしたハプニングだから。

そんな沈黙をする僕と山田先生の様子を東さんが見逃す筈もなく。

「何かあったんだねむっくん!?さあ何をされたんだい!」

「何もないですよ!ていうかメンテナンスは!」

「もう終わらせた!そして接続完了!」

「速っ!そして何時の間にも!」

「そんな事はどうでも良いんだ、重要な事じゃない。その巨大な双子山にナニをされたんだい!?『ユニヴァアス!』か、それとも『トウ!ヘアアア!』されたのかい!場合によっては私も混ぜて欲しかった!」

「ちよ、怖いですよ東さんって何でクロエは僕を固定してるの!?待って、ズボンに手を掛けないでどうするつもりですか!」

「ナニって……ねえ?」

ニヤリと笑う東さんを見て確信した。

「ーあ、これ(逃げるの)無理。」

「いいいいいいやああああああ……」

昼間の旅館に、僕の悲鳴が響き渡った。

「睦月、生きてる?」

「な、何とか・・・織斑先生が駆けつけてくれなかったら死んでたよ。貞操が」

現在、午後2時。臨海学校を終え、学園へと戻るバスの中。私(簪)の隣の座席で睦月が真っ白に燃え尽きていた。グレン○ガンの力○ナみたいだ。いや、この場合あしたの○ヨー?

とにかく、疲労困憊していた。

「部屋に行ったら東博士とクロエちゃん、山田先生まで怒られてたから何事かと思った」

「途中で先生も参加しかけてたからねえ・・・下着に手を伸ばしてきた時は終わったと思ったよ。いや、ホントに」

「睦月は襲われやすい体質」

「水着の僕に再三いたずらした人の言葉は信憑性が違うなあ」

「ごめんなさい」

そこを突かれるとぐうの音も出ない。というかやけに色気が強い睦月が悪い。

なので私は悪くない・・・流石に無理がある。

「冗談だよ。ちよつとからかいたくなっただけ」

「睦月のイジワル」

「簪はからかうと反応が可愛いから」

「・・・バカ」

「酷っ」

さざらりと殺し文句を言ってくる睦月には、こうも言いたくなる。普段、織斑君に鈍感とかニブチンとか言ってるけど睦月も大概だと思

う。

そんな事を思いつつ喋っていると、睦月が欠伸をした。

「眠いの？」

「まだ疲れが抜けてないみたい、少し寝ても良いかな？」

「少しと言わず、幾らでも」

「ごめんね・・・おやすみ」

「おやすみなさい」

二言三言交わして睦月は瞼を閉じて眠ってしまった。バスでも最前列に程近いので、後部座席の喧騒が小さく感じる。

暫く揺られていると、不意に肩に重みを感じたので見てみると、睦月が私の肩に頭を乗せていた。しかも袖を少し握って。

「・・・・・・・・ん」

「!？」

どうしよう、可愛い。写真に収めたい程に。しかし携帯は今睦月が頭を乗せている体の左側・・・下手に動かすべきではない。

仕方がない、目に焼き付けておこう。

そう思い睦月の寝顔を見るのも束の間、私も眠ってしまった。

何というか、もったいない。

でも、幸せだ。

ここは『地図に亡き場所（エアポケット）』。衛星軌道に無数に散ら

ばる観測衛星の一切に映し出されず、只人が見つけれられ得ぬ秘匿区域。

その中では薄暗い部屋に存在する円卓を囲んで声が幾度も響いていた。

「・・・それで、ヴラドの容態はどうだ？カリギユラ」

「はい、ネロ様。現在ヴラド様の容態はあまり芳しくはありません。左腕を消失。全身打撲に加え右足を複雑骨折。あばら骨も何本かは折れています。・・・正直、生きてるのが不思議な程です」

「そうか。ハンニバルがもう少し遅れていたら、危なかつたな」

「全く、冷や汗モノだった。イヴァン、貴様が要らない真似をするからだぞ」

ネロの独白に答えて、ハンニバルは自らの対面に座るイヴァンを睨んだ。しかし、当の本人は愉悦と言わんばかりに笑うだけだ。

「あら？でも中々楽しめたでしょう？『一番』と『二番』、どちらも新しい力を手に入れたのだし」

「性悪拷問魔が・・・」

「他人の眼球にしか恋が出来ない処女には言われたくないわね」

「貴様・・・」

「そこまでだ。これ以上やるというなら『外』でやれ」

ネロが諫めるように眩くと、ハンニバルとイヴァンは不満そうにだが口をつぐんだ。

「ヴラドの治療にはどれ程かかる」

「医療班曰く、『義体化』すれば一月ほどで復帰出来ると」

「そこは、本人の意思を尊重するよう、伝えておいてくれ」

「承りました」

カリギユラは一礼すると円卓から立ち去る。

一拍の沈黙を置いて、ネロが再び口を開いた。

「バートリーだが・・・無事に取り込めたようだ」

「へえ、あの狂ったレズ女がねえ」

「口を慎めよ、スパルタクス。あのお方を侮辱するのは私が赦さん」

「へいへい、わかったよジル・ド・レエ（マゾ野郎）。それで、バート

リーは何時から出るんだ？」

「夏期休暇が終わってからと言っていたからな、恐らく秋だろう」

「んじや、俺らもそれに合わせて動く感じか」

「そうなるな。何、あと少しだ・・・計画は、順調に進んでいる。では諸君、解散だ」

ネロの一声によって一瞬で円卓を囲んでいた気配が軒並み消える。

「さて・・・老人共はどう動くかな？」

――暗闇の中、ネロは一人ほくそ笑んだ。

#11 臨海学校編・機体紹介

アドバンスド・ヘイズル

元々ヘイズル改に搭載されていた『武装精練（ウエポンビルド）システム』を単一仕様能力『BUNNYS（ヴァニス）システム』へと昇華させたヘイズル改の基本形態。

主な変更点として頭部に光学センサー・ユニット、フロントスカートにサブアーム・ユニット、脚底部に補助スラスタ・ユニットを装備。背面の可動式ブースター・ポッドもマルチコネクター・ポッドへと変更されている。

大幅な換装の為、もはや別の機体に見える外見となった。

性能面に関しては索敵範囲の広範囲化、サブアームユニットによる対応力の上昇、エネルギーの効率化、マルチコネクターポッドによる拡張性の拡大と、二次移行したと言われるのも納得する程の性能向上が見られる。

基本武装はヘイズル改と変わりはないが、背面のマルチコネクターポッドにシールドブースターを二枚同時に装備出来、エネルギー効率も上昇しているため加速力に関してはヘイズル改の強襲形態と同等かそれ以上となっている。

『BUNNYSシステム』

ヘイズル改が覚醒した単一仕様能力。

その能力は『システムによるパッケージの高速切替』。ヘイズルの持つ莫大な量子空間から戦況と搭乗者である睦月の意思に合わせて各種パッケージを展開、装備するシステムである。展開にかかる時間は余程の大きさでなければ0.5秒程で完了する。

当然ながら展開にはエネルギーを使用なので、換装出来るのは戦闘内容によりけりだが、凡そ6回が限度である。

ヘイズル・ラー フルアーマー形態

アドバンスド・ヘイズルに支援ユニット〔フルドド〕を装備した状態。

クローウイングユニットとスラストウイングユニットをマルチコネクターポッドに装備したことにより機動性の更なる向上、クローアームによる遠近対応力が向上している。

なお、本編中に登場したのはフルドドを二機装備した第二形態、ギャプランブスターを装着したクルーザー形態である。

こと、この形態のヘイズルは直線機動に於いて白式に匹敵する加速性能を持つ。しかし、フルドドの大きさ故に狭い空間での戦闘には向かず、運用は専ら広大な空間でのみとなっている。

クルーザー形態で使用されるギャプランブスターは超遠距離からの突撃用のもので、リミッターを外した状態では最速20分で地球を一周出来るという加速度を誇る。

使い捨てのジェネレータを内蔵しており、ブスター使用の際はここからエネルギーを供給する。

尚、このブスターは、第二世代以降のISであれば如何なる機体にも接続、使用が可能である。

ヘイズル・アウストラ

アドバンスド・ヘイズルの胴体を支援ユニット〔プリムローズ〕に、両肩をウエポンラッチを兼ねた小型の物に換装したパッケージ。

プリムローズの能力は原典となるA・O・Zとは異なり、シールドエネルギー用のサブジェネレータとなっている。

発動時に機体のエネルギーをグリーンゾーンまで回復させ、その後は10分置きにエネルギーを100回復する。

これを聞いた千冬は当然ながら試合での使用を禁じた。両肩のウエポンラッチにはミサイル複合チャフユニット、ウインチキャノンを選択して装備可能。

敵への攻撃よりも生存力を高めたパッケージと言える。

ギガンティックアーム形態

ヘイズル・アウスラのマルチコネクターポッドに、「フルドドⅡ」（本編未登場）のドラムフレームを中継してサイコガンダムの腕を移植した砲撃戦パッケージ。

「フルドドⅡ」のサブアームにウインチキャノン2基、両肩にミサイルポッドを装備したその火力は言わずもがなである。

尚、サイコガンダムの腕はあくまで指先のビーム砲使用の為にあるのであり、決して相手を殴るためのものではない。

両手と、腰のサブアームユニットに火器を持たせることにより、計16もの射撃兵器を持つ。

サイコガンダムmkⅡの腕を移植した形態も存在するらしいが、詳細は定かではない。

白式・雪羅

織斑一夏に応え、白式が二次移行した姿。

非固定武装のスラスターユニットは更に大型化、展開すると、内部から金色のフィンが露出し、さながら竜の翼のようになる。

また、機体各所に小型のスラスターを持つことにより、最大加速時には、現行機で追い付ける機体が存在しない程のスピードを出すことが可能となった。

雪片式型・改

白式の二次移行に合わせ改良された雪片。主に零落白夜の刀身形成にかかる時間の短縮、エネルギーの効率化が見られる。

形には変更がない為、改良されたと気付かれにくい。

雪羅

白式が新たに生み出した武装の一つ。左腕に装備されたガントレット型複合兵装。

性能は原作とは変わらないが、手首付近に後述の「氷桜」を懸架するためのアタッチメントが存在する。

氷桜（ひおう）

本作オリジナルの武装。

白に幾つもの青いラインが入った雪片式型・改専用の鞘。

抜刀術を好んで使う一夏に合わせて白式が作り上げた物で、鯉口に持ち手を併用した零落白夜用の小型ジェネレーターを内蔵し、雪片へとそのエネルギーを送り込むことで白式本体のエネルギーを使用せずに零落白夜を発動することが可能。

『完全解放（オーバー・バースト）』

機体リミッターを一時的に強制解放し、必殺の一撃を放つ大技。

発動までにかかる時間は長く、そして発動時間はたったの2秒とかなり状況を選ぶ技。

零落白夜の出力も爆発的に上昇するので、並みのISなら展開解除を通り越して搭乗者すら斬りかねない危険性を持つので、一般試合での使用は千冬によって禁じられることとなった。

発動準備の際、余剰エネルギーの視覚化によって機体周辺に青い粒子が舞うのが特徴。

粒子をみた場合、即座に白式を落とすか、戦域を離脱しない限り、命はない。

S（スペリオル）ガンダム

亡国企業に所属する、ヴラドこと襟 秋人（くぬぎ あきと）が使用するIS。

とある国から奪取した第三世代の試作機を秋人自らが改造し、この機体となった。

ISを男性が扱う場合、コアのデータを改竄しなければならないが秋人は自身の手でそれを行った。

機体色は血のような赤とくすんだ黒。

武装各種は原典である作品、ガンダムセンチネルから特に変更はないが、ALICE（アリス）システムは未搭載である。

元々第三世代ということもあり、そのポテンシャルは高く、睦月達を苦しめた。

しかし、BUNNYSに覚醒したヘイズルと睦月により大破、海中に没した。

サマーバケーション

#01 ナターシャ・ファイルス

唐突だが、皆さんは寝起きドツキリなるものをご存知だろうか？

そう、一昔前に流行ったあれだ。寝ている有名人の寝室に入つてバズーカ（煙が出るやつ）撃つたり、クワガタを鼻に挟んだりする、あれだ。

寝起きの心臓には負担が大きそうだね。

つまり、僕が何を言いたいかというだね。

「・・・睦月い」

「んふふ・・・」

寝起きで美少女二人にホールドされていると、心臓に悪いということだよ。

「・・・どゆこと?」

簪とラウラに両サイドを固められながら、僕は眩いた。

「で、何で二人揃って僕に抱きついて寝てたのかな?」

臨海学校から一月経ち、夏休みに入り少しガランとしたIS学園の食堂で簪、シャル、ラウラと朝食を取りながら二人に聞いてみた。

「え、二人ともそんなことしてたの!?!」

「私は夜中に寝惚けて」

「私は何となく忍び込んでだな」

「何それ羨ま・・・じゃなくてラウラはまた忍び込んだの!」

「い、いやついなー」

ラウラが吐いた言葉にシャルが軽く怒る。その様子は同じ年の筈なのに姉妹を彷彿とさせ、微笑ましく見えてしまう。

「シャル、その位にして。ご飯食べよう？」

「睦月が言うなら」

「助かった、もうダメかと思ったぞ」

「ラウラも忍び込むのは程々にね？」

「そこでダメと言わないあたり、睦月は甘い」

簪の言葉にぐうの音も出ない。

いやまあ、悪い気はしないし・・・前みたく全裸じゃないから良いかなって。

苦笑いを浮かべて隣に座る簪のジト目を誤魔化していると、食堂に備えられたスピーカーから声が聞こえた。

『織斑一夏、扶桑睦月は至急職員室に来い。以上だ』

今のは織斑先生の声か。

にしてもこんな朝早くから何なのだろうか？今日は別にアリーナを使う予定もなかった筈だし。

そう思っていると再びスピーカーから織斑先生の声が。

『あと二分以内に来なかった場合、課題を追加する。急げよ』

「横暴だああああ!」

僕は急いで鯖味噌定食を掻き込んで、シャル達へ挨拶も程々に職員室へと全力疾走した。

「間に合ったか!？」

「アウトだ」

「なん・・・だと・・・」

ノックもせずに入ってきた一夏の叫びに、織斑先生は冷静に死刑宣告を下した。

一夏の表情は某オサレなマンガの一コマみたく愕然としている。

哀れ一夏は課題追加、南無。

あと5秒遅かったら僕もあぁなっていただろう・・・ああ、消化不良で胃が痛い。

「それで・・・はあ、苦しい・・・どういった用件で呼んだん、ですか？」

「ああ、それはだな・・・入ってきて良いぞ」

胃の痛みで中々整わない呼吸で織斑先生に訊ねると、先生は教師用の備品室の扉に向かって声をかけた。

扉が開き、中から現れたのはスーツを着た金髪美人だった。

「ハアイ♪」

「・・・」

うん、つい一月前に見たね、確実に。データでだけど。

一夏と顔を見合わせる。どうやら同じ答えに至ったようだ。

せーの、

「ナターシャ・ファイルスさん!？」

「イエス、私がナターシャ・ファイルスよ。よろしくね？」

かの『福音』のパイロットが悪戯っぽくウインクしてにこやかに笑った。

なんでここに凍結された福音の関係者が・・・。織斑先生をみると心底疲れた声で答えてくれた。

「訳あって夏休み明けから、彼女はここの教師になる。今日はその視察に来た、というわけだ」

「あー、つまり僕達が呼ばれた理由って」

「まあ要するに学園内の案内だな。私もこれから国際IS委員会の方に向かわなければならなくてな」

「そういう事ですか」

「ああ。真耶が昼前には戻っている筈だから、一通り案内したら引き渡しておけ。適当に幾つか見れば満足するだろう」

「まるで子供みたいに扱うなんて酷くないかしら?」

「予定より一週間近く早めに来て他人の予定を狂いに狂わせた奴が何を言うか」

不機嫌さを隠しもせず腕を組んで織斑先生がファイルスさん？先生？…今はさん付けで良いか。ファイルスさんを睨み付けるが、当の本人は気にした様子もない。

「だって仕方ないじゃない、楽しみだったんだし」

「だったらせめて事前に連絡を寄越せ…予定を組み直すのも楽じゃないんだぞ」

「以後気を付けるわ」

「はあ…む、時間か。すまないが後を頼む」

「わかったよ千冬ね。っ…!!」

「織斑先生だ、うつけ」

書類の入ったケースの角が額に突き刺さり、一夏が沈む。

あれは痛い。ていうかめり込んでたよね今。

軽くため息を吐いて織斑先生は職員室の扉へと歩いていく。

そのまま出ていこうかと言うところで一度こつちを振り返りつた。

「ああ、そうだ。言い忘れていたが」

「なんです？」

「幾ら男二人だからと言って襲おうとするなよ。もしやったら…生き地獄というヤツを見せてやる」

そう言い残して織斑先生は扉を開けて出ていった。

…あの人思いつきり殺気当ててつたよ。マジで震えてきた。

一夏に至ってはケースの直撃と重なってダメージが極まったのか真っ白になってる。

つと、頼まれた事はちゃんとしないと。

「えと、それじゃナターシャさん。学園内を案内しますね？」

「ええ、よろしくね可愛い兔さん」

「か、かわつ?!急に何を言うんですか!?!」

「いや、初見ならその感想は抱くだろ」

「一夏まで!?!」

ナターシャさんと復活した一夏が揃いも揃って言うてくる。

いやいや、別に嬉しくないからね?男なら格好いいって言われた方

が嬉しいからね？（個人差あり）

「つて、何で抱きついてるんですか!？」

「だって丁度良いサイズなんだもの。さ、そんなことより早く行きましょ？案内お願いね、織斑弟君？」

「そんじゃ、行きますか」

「そんな事扱いなの!?!つて僕は抱きつかれたままなの!?!はーなーしーてー!！」

抵抗虚しく、僕はナターシャさんに抱き着かれたまま職員室を後にした。

ああ、どうしてこうなるの・・・

#02 学園案内

「大抵の施設は他の学校と変わり無いんで、学園特有の施設から案内しますね」

「ええ、それで構わないわ」

「あの一、僕は何時までこの状態なんでしょうか？」

夏休みで殆んど生徒が居ない、閑散とした中庭に面した渡り廊下を歩く僕、一夏、ナターシャさん。

未だに僕はナターシャさんにぬいぐるみのように抱き着かれたままだった。

・・・うん、頭に当たってる柔らかい感触については無心を心掛けよう。

そんな心構えで大丈夫か？

大丈夫だ、問題ない。

「何時までって・・・私が満足するまでかしら」

「それまでこの状態ですか・・・」

「貴方なんだかとても抱き心地が良くって。家に持ち帰りたい位よ」

「それは勘弁してください、いやホントに」

持ち帰られてテイベアと同じ扱いとかごめん被りたい。

ていうか暑い。

そう思っていると先導していた一夏が足を止めた。

「さて、そうこうしてる内に着きましたよ」

「ここは？」

「整備棟って場所です。実際、俺は全然入らないんですけどね。睦月の方が長いんじゃないか？」

「まあ入学から結構使ってるからねえ」

そういえば、簪と初めて会ったのもここだけ。

まだ入学してちょっとしか経ってない筈なのに、改めて思い出すと懐かしく感じる。

「名前の通り、ISの整備をおこなう場所です。IS以外にも備品の修理とかするのに使われますね」

「かなり大きいのね」

「まあISの整備用機材はどれも巨大ですから・・・三階は資材置き場で、二階はプログラミングルーム兼シミュレータールーム。ここ一階と地下一階がIS専用ドックとなっております。因みに屋上にはテラスがありますよ」

一夏に代わりここの説明をする。休日とか空いた日は専らここで簪や布仏さんと過ごしてるから色々知っている。

屋上のテラスなんかは晴れた日には休憩場所としてうってつけだ。

「どれも最新設備なのね・・・流石IS学園と言った処かしら」

「各国から最新鋭の専用機やテスト機が来ますから、設備は都度新しい物に変えていつてるんです。各階の廊下突き当たり大きい扉があるのは、それらの搬入用ですね」

因みにこの扉、一見ただの鉄製の扉に見えるが実際はアリーナの緊急時シャッターと同様の材質で出来ているので早々壊れることはない。

IS用のグレネードでも最低10発は撃ち込まないと破壊できないという優れたものだ。

「本当ならハンガールームも見せたいんですが、今日はどこも使用中なので、御見せすることは出来ません」

「構わないわ、秋になったら改めて見に来るわ」

「是非ともそうしてください。さて、整備棟は大体こんなところですね」

一通り全体を回って入り口に戻ってきた所で説明を終える。

次はどこに行くのだろう？そう思つて一夏を見る。

当の本人は僕の視線に気付き、次の場所を提案する。

「次はアリーナに行きましょう。学園じゃ、一番目立つ所ですし」

「良いわね、本場のアリーナがどんなものか、興味あったのよ！」

「それは良いんですけど。ナターシャさん、そろそろ離れてもらつていいですか?」

「うん、無理」

「にべもない!?!」

結局、相変わらずナターシャさんに抱き着かれたままアリーナまでの道を歩く事になった・・・
誰にも見つかりませんように。

そう思っていた時期が僕にもありました。

「一夏、それに睦月じゃない。って何で睦月は美人に抱きつかれてんの?」

「どういう状況ですか?」

まふまふと見つかりましたよコンチクショウ!

第三アリーナの入り口についてたと同時に中から鈴さんとオルコツトさんにばったり会ってしまった。

あれか? さっきの台詞がフラグだったのか!?

「ああ、この人はナターシャ・ファイルスさん。二人も見たことあるだろ? 秋からここの教員になるってんで俺達が案内してるんだ」

「へえ〜・・・何ですって!」

臨海学校を思い出したのか二人揃って驚愕の声を上げた。

まあ驚くよね。僕も驚いた。

二人はサツと僕達に背を向けて何かこそそと話している。

断片的に聞こえる「ライバル」とか「対策」だとか言うワードで一夏についての事だというのは理解した。苦勞するなあ、二人とも。

「二人ともどうしたんだ?」

「女性の秘密話の内容は、聞かないほうがいいよ一夏」

「?」

僕の言葉に首を傾げる一夏と未だに離れないナターシャさん連れられてアリーナの中へと入る。

鈴さんとオルコツトさんは・・・暫くしたら元に戻るでしょ。

通路を少し歩いて観客席の出入り口からアリーナ全体を見渡せる位置で足を止めると、ナターシャさんは感心したように頷いた。

「フィールドもそうだけど、観客席も広いわね」

「結構な生徒数居ますし、来賓席もありますから、これだけ大きいんです」

「これだけのアリーナが複数同じ場所にあるなんて、本国（むこう）じゃ考えられないわね」

アリーナというのは建設するのに多額のお金当然だが、IS競技用となると更に莫大な金が必要になる。

アリーナ全体を守る不可視のシールドに、観客席を守るエネルギーシールド、ISの臨時メンテナンス用の各種機材、観測機器等、挙げれば切りがないほど機材が必要なのだ。

そしてそれらは常に最新のバージョンに変わっていないければいけない。故にこのアリーナ然り、IS関連施設の殆んどには天文学的數字のお金が動いている。

その為、他のどの国においてもアリーナというのはあっても国内に一つか二つなのだ。

「ここで試合をしたりするのよね？」

「ええ、秋には学年別のキャノンボール・ファストも予定されていますよ。ね、一夏」

「確か夏休み終わって直ぐだったな。クラスの皆が騒いでた」

「へえ、それは楽しみね？」

キャノンボール・ファスト。有り体に言ってしまうえばISによる障害物競争のようなものだ。

搭乗者の操縦技術が最も問われる競技と言われ、毎年学園では行われている。

・・・ギャプランブスター使っちゃいけないかなあ。

「睦月、あれは流石にチートだ。やめとけ」

「だよねえ・・・さて、アリーナはこんなところですね。流石に教員しか入れない制限区域は入れませんし」

「大丈夫よ、ありがとうね睦月ちゃん」

「ちゃん付けで呼ばないで下さい！」

「いいじゃない、減るものじゃ無いんだし」

「減りますよ！主に僕の精神が」

男なのにちゃん付けて僕を女だと思ってるんじゃないだろうか。

結構恥ずかしいんだけど。一夏にガン見されるし、さつきだって鈴さんたちにマジマジと見られてその実恥ずかしかった。

「とにかく、他の場所に行きますよ！一夏」

「はいはい、んじゃ付いてきて下さい」

「はいい♪」

結局このまま案内が終わるまで僕はナターシャさんにぬいぐるみにされたまま学園内を歩く事になった。

頭の中でガオガイガーの主題歌を流してテンションを保ってなかったら（恥ずかしさで）死んでいたと思う。

おおまかな学園案内を終え、僕達はスタート地点である職員室で山田先生にナターシャさんを明け渡した（誤字にあらず）。

いや、うん。精神磨り減ると色々どうでもよくなるね。

「織斑君に扶桑君、本当にありがとうございました」

「いえ、俺は大丈夫ですけど睦月が・・・」

「は、あはは、この程度、想定範囲内だよ！」

「何があっただんです!？」

山田先生が痛ましそうな目で見てくるけどどうしたんだろう？

もうすぐ時の流れが見えそうなんだ・・・そんな視線を向けないで欲しい。

「あー、何とかしときますんで気にしないで下さい。それじゃ、俺達はこれで」

「あ、ちよっと待って二人とも」

一夏に猫のようにつままれて職員室を出たところ、ナターシャさんに呼び止められる。

何事かと思い、振り替えると。

二人ともキスされました。頬に。

「な、なななななななななあ!？」

「え、ちよ……はあ!？」

「福音（あのこ）と私を助けてくれてありがとう。秋からよろしくね？」

言うだけ言つて、ナターシャさんは扉を閉めてしまった。

あー……うん。すっごい顔熱い。

「一夏、顔赤いよ」

「その言葉、熨斗つけて返してやるよ」

「……戻ろうか」

顔の熱さを誤魔化すように揃って溜め息を吐いて、僕は一夏にぶら下げられたまま寮へと戻った。

「おお、睦月。丁度良いところに
「ん？」

一夏と別れて自室へ向かう廊下を歩いているとラウラと遭遇した。
「どうかしたの？」

「ああ、シャルが睦月に話があるようだな。携帯に電話したが出ないから、歩いて探していたんだ」

「あー、ごめんちよつと先生からの頼み事してて反応できなかったんだ」

携帯を見ると確かに着信が入っていた。

「丁度ナターシャさんを案内し始めた時間だ。

マナーモードのバイブレーションって、動いてると気付きにくいよね。

「そういえば呼び出されていたな。何だったんだ？」

「来客の学園案内だよ。ラウラも一度は見たことある人かな」

「むう？・・・まあそれは後で聞こう。シャルが待っている。一緒に行くぞ」

「ん、わかったよ。それじゃ行こっか」

「あ、頭を撫でるなあ！」

ラウラを伴ってシャルが居るであろう部屋へと向かう。

さて、話ってなんだろうか？

#03 睦月、フランスへ行く

「あー、耳が変な感じする・・・」

「睦月はこういうの初めてなの?」

「まあねえ。大抵は船かメカ人参で移動だったし」

「メカ人参!」

ドーモ。皆〓サン、扶桑睦月デス。

って、誰にアイサツしてるんだ、僕は。

今僕はシャル、ラウラと共に飛行機の中に居る。絶賛飛行中だ。

向かう先はシャルの母国、フランスだ。

何故僕が二人と一緒にフランスに行くことになったのか。

話は四日ほど前に遡るー。

一夏と共に、ナターシャさんの学園案内を終えた僕は寮でラウラからシャルが僕を探していることを聞き、二人が使っている部屋へと足を運んだ。

「シャル?」

「あ、睦月! ラウラ見つけてくれたんだ、ありがとう」

「ふふん、この程度造作もない」

(ドヤ顔かわいい)

シャルに案内されて、部屋に備え付けられた簡易テーブルに座る。

僕はシャルの対面に、ラウラはベッドに座った。

「そういえば用事は終わったの?」

「うん、後はもう自由かな」

危うく魂をもってかれそうになったよ。テレビ版カミーユよろしく廃人になるところだった。

・・・今から秋が怖い。

「それで、僕を探してたって聞いたけど?」

「ああ、うん。ちよつと聞きたいことがあつてね」

聞きたいこと・・・一体なんだろうか？シャルは基本的に大抵のこととは独力で出来てしまうから、こういう風に聞いてくるのは珍しい事態だ。

「来週つて予定入ってる？」

「予定？うーん、特にないかな。来週はアリーナも三年生がローテーションで使うし、皆と遊ぶつて事もないかな」

シャルの質問に、携帯のスケジュールアプリを見ながら答える。

課題も配られたその日から始めて、既に終わつてしまっているのだから暇なのだ。一夏も来週は家に戻るみたいだし、簪や布仏さんも一度実家に戻るつて言つてた。

「え、ええと、それじゃあさ」

「ん？」

「僕も来週フランスに戻るんだけど・・・一緒に来ない？」

「なんですと？」

突拍子もない提案に問い直すと、シャルが事情を話始めた。

なんでも、デユノア婦人の一件について社長自らがお礼を言いたいらしい。

そして良ければ自社が新たに作り上げたISを見せたいという。

諸々の費用はデユノア社が負担してくれるというのだ。

「どうかな？僕も睦月と一緒に良いなあ、つて思ってるんだけど」

両手の指先を合わせてシャルが上目遣いで見詰めてくる。

うぐ、女子のこういう視線はホントに効くなあ・・・まあ実際暇な訳だし、新型を見せてくれるというなら是非とも見たい。

「わかったよ。フランスに行こう」

「ホント!?ありがとう睦月!」

「わつ、ちょシャル!」

急にシャルに抱きつかれ頬擦りされる。

なんか今日は良く抱き付かれる日だなホント。

妙な運勢に呆れていると、ラウラが立ち上がった。

「なあ、シャル」

「ん？どうしたの、ラウラ」

「その、だな・・・大変言いにくいのだが、私も着いていつてはダメだろうか？」

制服の裾を掴んで上目遣いでそう言ってくるラウラ。

なんだろう、もの凄く庇護欲を刺激される。

「何か理由が？」

といつてもどうして着いてきたいのか、その理由を聞かなきゃ始まらない。

行き先はデユノア社なのだから、シャルもおいそれと機密だらけの場所には連れていきたくないだろうし。

事情を知らない人からすればスパイの疑いを掛けられかねない。

そう思い訊ねてみると、ラウラは更に小さくなりながらも答えた。

「その・・・私は本国に戻る予定が無くてだな？他の皆はそれぞれ学園の外に行ってしまった・・・その・・・さ、寂しくなる、から・・・」

「シャル」

「任せて。話は無理矢理にでも通す」

シャルを見ると即行で携帯を取り出して電話をかけ始めていた。

うん、こんなラウラを見てしまったら行動せずには居られない。何

このかわいい生き物。

スパイ疑惑がどうかともうどうでもいいね。ラウラなら心配ないだろうし。

もしISを通して情報を盗もうものなら、ちよつとドイツ軍と『オハナシ』しなければならぬけどね。

「い、いいのか？」

「当然」

「ありがとう！」

（かわいい）

ああ、かわいいなもう！

と、そんなこんなで僕のフランス行きが決定した。

そして現在に至る。

デユノア社専用ジェット機の座席は豪華の一言で、一般庶民の僕には些か居心地の悪さを感じる。

私服で来て良いとは言われたけど、何と云うか浮いてる感じがする。

「うーん、ねえシヤル？僕の格好、変じゃないかな？」

「その質問、もう10回も聞いたよ？」

「いや、だつてさあ・・・」

水色のカッターシャツに模様の入ったTシャツ、下はジーンズとかなりラフな格好だ。チョイスはシヤル。

いや、シヤルのチョイスを疑うわけじゃないんだ。問題は僕が服に着られているように見えてないかなんだ。

「安心しろ、睦月」

「ラウラ？」

「私も若干浮いてないか心配だ・・・！」

振り向いてラウラを見ると腕を組んで堂々としているものの、その表情はカチカチに固まっていた。

なんだろう、凄く落ち着いた。

『お嬢様、並びにお客様方。まもなく空港に到着いたしますので、シートベルトのご着用をよろしく願いいたします』

機長と思われる渋い声のアナウンスに従い、シートベルトを着用する。

窓の外を見れば、日本とはまた違った街並みをもつ都市が自ら輝きを放っていた。

「着いたら僕の自宅で休もう。流星に深夜に行くのは失礼だしね」

「そうだねえ。時差ボケは嫌だし」

フランスと日本の時差は7時間。日本を出立したのが朝の7時半

だから、今フランスは夜中の0時。動くにはあまりにも遅い時間だ。全ては明日、もとい今日の朝からかな。

人生始めてのフランスに少しワクワクしつつ、僕はもう一度窓の外を見た。

そして飛行機は無事にシャルル・ド・ゴール空港に到着。

「着いたー！」

僕は、フランスの大地に立った。

「さ、ついたよ」

「おおー」

「すごく・・・大きいです」

「ラウラ、それは何か違う」

フランスの工業地帯、その一角にあるデュノア社のIS研究施設を見て僕とラウラは感嘆の声を上げる。

空港からシャルの自宅（正に豪邸、社長がプレゼントしたらしい）にて仮眠をとり、お昼前にここに到着した。

しっかし、本当に大きいな・・・建物もそうだけど、敷地も広い。まわりの工場より二倍近く広さが違う。流石、欧州最大手。

おのぼりさんよろしくキョロキョロしていると、正面のゲートから一人の男性が現れた。

「ようこそ、デュノア社へ。ムツキ・フソウ君、ラウラ・ヴォーデヴィツヒさん。そして・・・おかえり、シャル」

「ただいま、父さん！」

「今日は宜しくお願ひします、デュノア社長」

「そう畏まらないでくれ。君は私の恩人なのだから」

シャルに抱きつかれながらもそう答えるこの男性こそ、デュノア社長、アレックス・デュノアである。

今まで雑誌なんかで顔くらいは見たことあるけど、何と言うか、出来る人オーラが滲み出てる。

「恩人、と言われましても・・・実際に行動したのは僕の保護者ですから」

「切っ掛けを作ってくれたのは君さ。本当にありがとう」

「・・・お言葉、ありがたく頂戴します」

あまり謙遜しても嫌みに聞こえるだろうから、感謝の言葉を受け取る。

アレックス社長は僕から視線をずらすと、隣に立つラウラを見た。

「君が、シャルの友人だね？いつも仲良くしてくれてありがとう」

「いえ、こちらこそ。シャルのおかげで、色々助かっているので……」
「そうか、それは良かった。さ、中に入ろう。私が内部を案内しよう」
そう言い、歩き始めた社長の背に続き、僕達は工場内へと入っていった。

工場見学、スタートだ。

「フソウ君。ISの開発において最も重要視されるものは何だと思う？」

先進的な造りの、ガラス張りの廊下の左右から見える、忙しく動くロボットアームと人の姿を見ていると、社長が唐突にそう聞いてきた。

「ISの開発において、ですか……」

ISの性能、であれば火力だとか機動力だとかが答えになるんだろうけど。開発時点で重要視されるべきことか。

……ああ、なるほど。

「情報を漏らさない、機密性ですね」

「正解だ」

「今日のごことは、口外しないと確約しましょう。ええ、只の『工場見学』です」

そう答えると、社長は満足げに頷いた。

今日の予定には、デュノア社念願の第三世代ISの見学もある。

ようは、ちゃんとしたお披露目をするまでバラすなど言いたいんだろう。

まあ、こっちに来る前に幾らか情報操作と隠匿を束さんを買収してやって措いたし、大丈夫だとは思う。

「ボーデヴィツヒ嬢も、宜しいかな？」

「もとよりそのつもりです。私はただ、付き添いできただけですから」
しかし、そうまで秘匿させてまで見せたい機体って何なんだろう
か。

ISのマニピュレータの組み立て行程を歩きながら見ていると社
長が説明を始めた。

「我が社の代表的な機体は知っているね？」

「ええ。ラファール・リヴァイヴ、ですね」

「そう、しかし代表的と言っても結局は量産機。諸外国の専用機と比
べられてしまえば見劣りしてしまう。それ故に新型の開発に躍起に
なっていたんだが、まあ君も知っての通りだ」

社長夫人の横暴か。

東さんに詳細を教えて貰ったときは、人はここまで腐るものかと
思った程だった。

会社資金の横領、豪遊、浮気その他諸々、夫人のそれらの行動と女
性権利団体によってデュノア社は窮地に立たされた。

そしてシャルのIS学園への転入。後から東さんから聞いた話だ
と、シャルを転入させたのは厄介払いも兼ねていたらしい。今更、そ
れについて詳しく調べる気もないけれど。

「しかし、それも過去の話だ。今回、無事に第三世代機を開発出来たの
も君のおかげだ。改めて、ありがとう」

「いえ……」

「さて、その新型についてだが……我々はδ計画（デルタ・プラン）
と称して、既に三機の建造に成功した」

「δ計画、ですか」

「うむ。といっても最初の一機は凡そ戦闘に向いたモノでは無くて
ね。今から見てもらうのは2号機と3号機となる」

社長が一つの扉の前で止まる。地下7階、その最奥にある分厚く、
威圧感を放つその横にある端末を操作し、ロックが解除される。

「さあ、お披露目だ。特とご覧あれ」

空気の抜ける音と共に扉が左右に開いて行く。

暗い部屋が明かりに照らされ、その中に鎮座する機体をあらわにす

る。

「わぁ……！」

「これは……凄いな」

明るくなった部屋に入りながら二人が感嘆の声を上げる中、僕は動けなかった。

方や白と明紫に彩られた機体。方や黒と灰色に染め上げられた機体。どちらも全身装甲である鋼の躯体を堂々と見せている。

……僕は、この機体を知っている。

「δ計画2号機、デルタ・プラス。そして、シャル。お前の為に開発したδ計画三号機にして究極。デルタ・カイだ」

機動戦士ガンダムUCの高機動MS、MSN-001A1 デルタ・プラス。

そして、δ系列機体の最終到達点と呼べる機体、MSN-001X デルタ・カイ。

その二機体が今、ISとなって僕の目の前に存在した。

「デルタ・プラスは量産機として開発し、先発として既に四機生産している。デルタ・カイは大元となる機体、デルタとデルタ・プラスの試験、戦闘データをフィードバックして完成した機体で……我が社の現状持てる全てを注ぎ込んだ究極の機体だ」

機体に近付きながらそう言った社長は振り向いてシャルを見る。そして、

「このデルタ・カイをシャル、お前の新たな専用機とする。良いな？」

そうシャルに問い、シャルは頷きを持って答えた。

「はい、必ず使いこなして見せます」

再臨の疾風が、蒼炎の凶鳥へと生まれ変わろうといていた……。

#05 テストフライト

「しかし、良いんですか？僕達まで同席して」

「構わんさ。元々、見せるつもりだったのでね。先行試写と言ったところさ」

デュノア社敷地内にある試験用大型アリーナ。そのピットにて、シャルが搭乗したデルタ・カイを前に僕はアレックス社長に疑問を口にするが、社長は何てこと無いように返した。

ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡからコアデータを移植したデルタ・カイの瞳に光が灯る。

これから行われるのはデルタ・カイの試験運用。

機密中の機密と呼んで良いそれに、僕達は特別に同席している。

強化ガラスの向こうで機動準備が終わったのか、機体背面に存在するブースターに火が灯る。

ピットの発進口（ゲート）が開き、薄暗いピット内に光を射す。

『デルタ・カイ、スタンバイ完了。起動シーケンス、オールクリア』

何処かで機体データを観測しているのだろう。女性のアナウンスが壁にあるスピーカーから響き渡る。

『全機体コントロール権利、パイロットへ委譲。発進タイミングは任意に』

その言葉の後に、デルタ・カイの装甲を光の線が駆け抜ける。

これで名実ともに、デルタ・カイはシャルのISとなった。

・・・見せて貰おうか、デュノア社の新型の性能とやらを。

何処ぞの赤いロリコンもとい彗星の名言を脳内で垂れ流していると、シャルが気合いの入った声を上げた。

「シャルロット・デュノア、デルタ・カイ。行きますー！」

青いブースターの残光を残し、デルタ・カイは空へと飛翔した。

「シャル、機体の調子はどうだ？」

『至って良好、リヴァイヴよりも動かしやすいよ』

「よし。それでは機体の試験運用を開始する」

『了解！』

暫く自由に飛び回ったシャルは、社長の声に答えて静止し武装を展開する。

やはりと言うか、両手に顕現した武装は『原典』と同じだった。

右手にはヘイズルのロングブレードライフル程では無いが、十分に長大なロングメガバスターを握り、左手にはシールドとは名ばかりのウエポンラッチを携える。

シールドの表側にはハイメガキャノンが装備されていた。

「あの形状・・・まさかレーザー兵器ですか!？」

ラウラの驚く声に社長が頷く。

デュノア社の機体、この場合ラファール・リヴァイヴと言えば実弾兵器の使用比率が高く、レーザー兵器にも対応こそ出来るものの、その処理能力、使用効率は高く無かった。

言ってしまうえばミリタリータイプな機体運用を主目的とした機体の開発に傾倒していたのだ。

そのデュノア社がレーザー兵器を開発、実際に運用出来るレベルまで完成させたとなれば驚くのも無理は無い。

原典の機体を知らなかったら僕もラウラと同じ声を上げただろう。

「レーザー、というよりもビームと言った方が正しいかな。公式戦でのフソウ君のヘイズルを見て、ウチの開発班が血眼で造り上げた武装達だよ」

同じ光学兵器だが、レーザーは貫通力に優れ、ビームはその熱量によつて対象を粉碎する。

ただ、ISで運用する場合、レーザーの方がエネルギー効率が高かった為、エネルギー兵器といえばレーザーの方が主力となる。

まあ、ヘイズルみたいなEパツク式にすればビーム兵器もかなり使いやすいんだけどね。

「基本武装はビーム兵器だが、リヴァイヴの持つ実弾兵器等も使用で

きるようにしてある。・・・さて、それではシャル。今からランダムにダミードローンを出現させる。手持ちの武器で全機撃墜してくれ」
『了解』

ピットの壁に嵌められた大型モニターの向こうでデルタ・カイが動き出す。

ダミードローンが次々と射出されるが、それらを難なくロングメガバスターとハイメガキャノンで一掃していく。やはりロングメガバスターは連射出来ないか。

社長もその事は理解しているのか顎に手を当て、思案顔だ。

「やはり、ロングメガバスターの連射性能の低さがネックか」

「その分火力が高いですし、シャルの技術もあれば幾らか緩和出来ますね」

射線軸を上手く合わせてロングメガバスターで五枚抜きをやつてのけるシャルを見ているとホントにそう思える。

デルタ・カイの基本的な動きは持ち前の機動力で相手のペースを崩し、高火力の武装で一掃する、といった感じだろうか。

『背中の武装』が使えるのが少し気にはなるけど。

試験を眺めながらそんな考察をしていると、ラウラが社長へと質問した。

「そういうえば、何故デルタ・カイもプラスも全身装甲なのですか？」

「あ、僕も気になってました。何故なんですか？」

いま空を飛び回っているデルタ・カイも、先程見たデルタ・プラスも現在の主流である部分装甲では無く全身装甲・・・それもハイズルと同じ完全外装タイプなのだ。

ISは僕や一夏という例外こそ存在するが、女性が操るものだ。それ故に、外部パフォーマンスや、ISの無骨さを軽減したりするため部分装甲を取り入れ、第二世代以降の機体は専ら部分装甲となっている。

だからこそ疑問なのだ。何故今時代の『流行り』に反した全身装甲を取り入れたのが。

東さんの趣味で全身装甲のハイズルならいざ知らず、外面も考えれ

ば普通は部分装甲の筈なのに。

「ふむ、良い質問だ。．．．δ計画はただの新機体建造計画ではない。宇宙を目指しているのだよ」

「宇宙!?!」

ISによる宇宙探索、開発。それはISが発表された当初、束さんが提唱したものだ。

しかし当時、いや今に於いてもISは兵器運用としてしか使用されていない。

それに世にISが普及しはじめて締結されたアラスカ条約によってISを使つての宇宙開発等は禁止されて閉まっている筈．．．

僕の視線に気付いた社長が小さな声で呟いた。

「何、やりようは幾らでもあるさ．．．」

黒い、笑顔が黒いよ社長!?

「δシリーズは全身装甲だが、出撃前であれば部分装甲に切り替えられるようにシステムを組み込んである。基本はそっちになるだろうな」

「成程」

何事もなかったように話をすり替える社長にまんまと引つかかるラウラ。

純粹過ぎるでしょ．．．

その後もシャルの駆るデルタ・カイは次々とダミードローンを撃墜していき、順調に試験を進めていった。

「おつかれさま、シャル。はい、タオルとスポーツドリンク」

「睦月、ありがとう」

一通りのテストを終えてピットへと戻ってきたシャルにタオルとスポーツドリンクを手渡す。

待機形態となったデルタ・カイは色こそ白と紫に変わっているけれど以前のリヴァイヴと同じ形でペンダントトップになっている。

「デルタ・カイはどう?」

「良い感じかな。ロングメガバスターとかは、取り回しに慣れがいると思うけど、機体の追従性はかなり上がってる」

「最終的に七枚抜きまでやっておいて慣れてないと申すか」

「いやいや、睦月やラウラも出来るって」

「ムリムリ」

「息ピッタリだね!」

幾らなんでもあんな滑らかにランダム機動するドローンを誘導して撃ち抜くなんて芸当は簡単に出来ない。

オルコットさんならやりかねないけど・・・前なんかダミーバルーンを見ないで撃ち落としてたし。

「シャルは機体の動かしかたが柔らかいからああいった事が出来るんだ。私だったら纏めて吹き飛ばす。ドーラで」

「一区画丸ごと焼け野原になるからやめなさい」

「というか何故あの列車砲を知っている。」

「前に軍の開発班がそれについて話していてな。何でも『ろまん』?とか言うのがあるとか」

「オーケー、開発班の人とはジックリお話した方がよさそうだね」

ラウラに何て事を教えてるんだ、全く・・・。

アニメやら少女漫画ネタを吹き込む副官に男のロマンを語る開発班・・・ドイツは魔窟か!

ドイツ軍の内部に不安をひしひしと感じていると、アレックス社長がにこやかな笑顔を浮かべながら観測室から出てきた。

「お疲れさま、シャル。さて、データも十全に取れたことだ。そろそろ昼食としよう」

「ご一緒して宜しいんですか?」

「構わんさ。愛娘の友人とあれば、誘わない訳がないだろう?」

笑みを崩さずそういう社長にシャルも頷く。

そういうことなら、ご相伴に預かろうかな。

ラウラに視線を向けると一つ頷いて答えてくれた。

「わかりました、っ」一緒にさせていただきます」

「よし、では少し休憩したら向かうとしようか。シャル、汗を流しておきなさい」

「わかった。睦月、覗いちやダメだよ?」

「覗かないよ!?!」

そんな事したら社長に殺されるのは確実・・・

「ははは、まさか。フソウ君がそのような事をするとは思えんがねははは」

笑ってない、目が笑ってないですよアレックス社長お!?

目に殺の一字が見える社長に見られながらも苦笑いで誤魔化す。

してやったり顔なシャルがピットから出ていくのを眺めつつ、僕は小さく溜め息を吐いた・・・。

#06 デート？

ppp, ppp, ppp——。

「ん、ううん・・・」

夏休み真っ只中の朝。私、更識 簪は無機質な携帯のアラーム音によつて目を覚ます。

休み、ということを知りながら頭が理解しているのか、二度寝したい衝動に駆られるが、それを無理やり抑えてモゾモゾと体を起こす。

「おはよう、簪」

横合いから聞こえたその声に顔を上げると、その長い栗色の髪を紐で結んだ睦月と目があった。

「ん・・・おはよう、睦月」

寝ぼけた頭を覚醒させて笑顔でそう返して笑い合う。

これが私と睦月の何時もの朝だ。・・・たまに本音が乱入して来るけど。

「今日はどうする？」

「んー・・・どうしよう」

夏休みで人の少ない食堂で睦月と二人きりで朝食を食べる。

私は実家へと戻っていたし、睦月はシャルとラウラとフランスへと行っていた（理由については秘密と言われてしまった。・・・不満）から久しぶりに一緒に朝を迎えられた。

「じゃあ、レゾナンスでも行く？」

予定を決めかねていると睦月がそう提案した。

レゾナンス・・・確かにあそこなら一日居ても暇はしない。

今はお金にも余裕があるし、行くには打ってつけだろう。

「それに、タッグトーナメントでの約束もまだだったしね」

「・・・覚えてたの？」

お茶を飲んで言った睦月の言葉に思わず驚いてしまう。『タッグトーナメントが終わったら一緒に出かける』。かれこれ二、三ヶ月も前の話で忘れてしまったのかと思った。

私の言いたい事を察したのか睦月は苦笑いを浮かべて、

「簪との約束を忘れるわけないでしょ？」

とそんな嬉しい言葉を言ってくれた。

顔が熱くなり、頭が沸騰しそうになる。それを冷たいお茶を飲んでクールダウンさせようとするけど熱さは収まらなかった。

「まあ、こんなに経ってから言っても説得力ないよね・・・」

「そ、そんな事ない・・・寧ろ、覚えててくれて嬉しいというか・・・」

「・・・」

く、空気が固まってしまった・・・どうしよう。

気恥ずかしくてコップから手を話すことも出来ず沈黙が流れる。

すると、睦月が急に立ち上がった。

「た、食べ終わった事だし、片付けようか」

「う、うん」

無理矢理な感じだけど、そのおかげで多少ぎこちないながらも空気が弛緩した。

私も椅子から立ち上がり、空になった皿が載ったお盆を持ち上げ、返却棚に向かう。

・・・お盆を渡すとき食堂のおばちゃんが生暖かい目で見てた気がするけど、気のせいだ。

三時間も経てば気まずさも消え、普段通りに戻った私達はモノレールを使いレゾナンスへと到着した。

ここに来るのは臨海学校前にラウラの服を買いに来た以来だ。

「いやあ・・・人一杯だね」

「夏休みだし、ここには色んなお店があるから」

睦月の言葉にそう返して回りを見れば人、人、人。家族連れやカップルが休日を満喫していた。

カップル・・・って私は何を考えて・・・！

「どうしたの簪？」

「ひゃわい!？」

不意に覗き込むような角度で睦月の顔が間近に迫り、変な声が出てしまった。

突然の事に固まってしまった私を見て、睦月はクスリと笑ってから手を差し出してきた。

「これだけ人が居るんだ。はぐれないようにしないとね？」

睦月は何でこう・・・女殺しな事をしてくれるのだろうか。

「え、エスコート、宜しく」

「承りました、お嬢様」

「~~~~っ!」

そんな事を思いながら手を繋ぎ、睦月の悪戯っぽい笑顔に湯気が出てないかと思うほどに私は顔を熱くしてしまうのだった。

「どうかな？似合ってる？」

「大丈夫だ、問題ない」

「それ大丈夫じゃないパターンじゃないですかやだー」

早速入った服屋（数少ない男性服専用のお店）で睦月が気に入った服を試着して見せてくれた。

袖のないパーカーに半袖のTシャツにジーンズ。うん、

「良く似合ってる」

睦月はその見た目もあってユニセックスな服装がピタリと合うの

だ。

冬場なんかはモコモコしたセーターでも着せてみようかな……。
いや、いつそ本音の服を借りて着せるという手も……。

「簪、何か不吉な事考えてない?」

「いや全く」

危ない、最近の睦月はやけに勘が良いから気を付けないと。

「その服、どうするの?」

「簪が似合ってるって言ってくれたし、買おうかな」

「……そう。会計、済ませてきちやえば?」

「ん、じゃあちよつと行ってくるよ」

服を着替え直してレジに向かった睦月を見送って店の外に出た私は直ぐに手持ちの小さな鞆から手鏡を取り出して見る。

ーああ、駄目だ。顔真っ赤だ。

手鏡を鞆に戻して深呼吸を繰り返す。

大丈夫、まだ慌てるような時間じゃない。

某有名バスケット漫画の一台詞を思い出しつつ気持ちを落ち着ける。

「ふう……ん?」

何とか落ち着いたところで視界にふと見知った二人の姿を見つけた。

「お待ちせ。……何かあった?」

「ううん。多分、気のせい。次に行こ?」

睦月の手を引いて歩き出す。

……今のは間違いなくシャルとラウラ……見付からない方が吉、かな。

次に入ったのは三階にある女性服専門店『アリア』。

前に本音と来たとき以来、気に入ったお店だ。

落ち着いた色合いの服が多く、値段もリーズナブルだから私には大助かりだ。

ユニ○ロ?し○むら?行つたことがない。

「で、簪。そろそろ出てきたら?」

「いや、まだ覚悟完了してないというか長官からファイナル承認がないというか」

「ここには瞬着するひとも眉毛の濃い金髪マッチョも居ないよ」

「うう、ノリと勢いで着なきやよかつた・・・」

数分前の自分に後悔しつつ試着室のカーテンをあける。

今の私の格好は黒いラインの入った半袖のTシャツに青と黒のチエック柄のミニスカート、そして同じ柄のキャップを頭に被っている。

ミニスカートに至ってはかなり短い。走ったりすれば確実に見えるだろう。

「・・・どう?」

「可愛いよ、似合ってる」

「~~~~!!」

顔どころか全身が熱くなるのを感じた私はカーテンを閉める。

「つてあれ、何で閉めちゃうの!?!」

「き、着替える!やっぱり恥ずかしい」

着替えてる今ですら試着室が暑いと感じるほどなのだ、これであるま睦月に褒められたりしたら私は死にかねない。

「もったいない、似合ってたのに」

「スカートが短過ぎて・・・」

「ああ・・・まあ、それは思わなくもなかったかな」

「あう」

穴があつたら入って生き埋めにされたい・・・

着替えながらつくづく私はそう思った・・・。

#07 約束

あれから一通りレゾナンス内を見て回った私達は、お昼時というのもあり、レゾナンスの近くにあるカフェテリアで昼食を食べていた。このカフェは私が前に来たいと言っていた場所で、睦月はそれを覚えていたらしい。・・・ニクい事をしてくれる。

まあ、でも。

「はあく、ここのパンケーキ美味しいねえ♪」

こどもも幸せそうな顔を見れたので満足。

メインを食べ終わりデザートのパンケーキを頬張る睦月はそれも癒される。

何というか小動物チックというか・・・

小さく盛られたパフェを口に入れながらそんな事を考えていると、睦月の口の端に生クリームが付いているのを見つける。

それを見て私は思わずー

ヒョイパクッ

「へ?」

それを指で取って舐めた。

「・・・クリーム付いてた」

「あ、ああうん・・・ありがとう」

・・・・・・・・・・。

何をやってるんだ私ああああああ!!?

表情にこそ出さないが最早私の脳内は地獄絵図と化していた。

クリーム付いてるよ、とでも教えるだけで良かったのに何て事をしてるんだ無意識の私!でもグツジョブ!

誤魔化すようにアイステイーを飲みつつ、恥ずかしそうにはにかむ睦月のレアな表情を眺める。

「?まだクリーム付いてる?」

「ううん、何でもない」

首を傾げる睦月にそう答えて、私はカップをテーブルに置いた。

「午後はどうする?」

「んー、街中をブラブラ歩いてみよっか。良さげなお店があったら入る感じで」

「賛成」

睦月の提案に異もなく頷く。ぶらつく事で面白いお店などを見つけてられるかもしれない。

・・・模型店とか見つかればいいなあ。

デザートを食べ終えた私達は会計を済ませ、なお熱くなる炎天下の街へと繰り出した。

面白いお店が見つければいいなど確かに思ったけど・・・。

「え？睦月に簪!?!」

「何だどっ!?!」

こうなるとは流石に予想は付かなかったなあ・・・。

驚愕の表情で固まる執事服のシャルとメイド服のラウラを見て私は小さく、本当に小さく溜め息を吐いた。

睦月が興味本位で入ったこのカフェで、まさか二人に遭遇するとは・・・。

時刻はお昼時をとうに過ぎ、時計の針は14時半を指している。

だというのに私達が今いるこのカフェはかなりの人が入っている。それと言うのも、十中八九目の前にいるシャルとラウラが原因だろう。

執事服を着こなすシャルはまさに美少年と言っても過言ではなく、女性客の心を掴んでしまっている。

ラウラは・・・

「水だ」

「オムライスだ」

「パフエだ。・・・注文はこれで全部か？」

メイド服は似合ってるんだけど口調は普段通りだ。

だというのに男性客は・・・

「すみません、罵ってください！」

「小柄Sっ娘メイド・・・ありだ・・・」

「そうだ、この感じだ！私が求めていたのはこれなのだ！」

何か毒されていた。

いや腐っていた。ここにはマゾの男性しか居ないのだろうか。睦

月を除いて。

店内を眺めていた視線を正面に戻すと、これまた幸せそうにミル
フィーユを食べる睦月を捉えた。

「どうしたの簪？」

「いや、繁盛してるなあ、と」

「確かにねえ。まあ凡そ、シャルとラウラの事が口コミで広がったん
じゃない？」

「かもね」

そんな他愛の無い話をしている最中だった。

「全員動くな!!」

「下手な真似をしたら撃つぞ！」

突然、覆面を被った男達が現れそう叫んだ。それぞれの手にはアサ
ルトライフルが握られている。

私と睦月は即座にテーブルの下に身を潜めた。

他の客らは恐怖からか硬直したままだ。

シャルとラウラは・・・よし、視認できる範囲にいる。

「睦月、大丈夫？」

「問題なし。・・・どうやら連中、近くの銀行で強盗した犯行グループっ
ぽいね」

「・・・怖くないの？」

「荒事なら二年前に経験済みさ」

睦月が見せてきた携帯の画面には確かに付近で銀行強盗があった
というニュース速報が映っていた。

にしても家の事情でこう言った事に耐性が出来てる私やシャル達ならいざ知らず、睦月まで冷静でいられるとは驚きだ。

「さって、どうしよっか」

「警察は来てるみたいだけど……このままだと動けないかも」

「ふむ……」

対面式ソファに寄りかかり、小声で話し合う。

耳がカフェの外から聞こえる幾つものサイレンの音を拾う。

けど、通常武装の警官じゃ今の状況はどうしよもないだろう。

「数は……この空間に三人。あとは出入口付近に一人、か」

「ちようど四人、シャルとラウラも混ぜて鎮圧する？」

「簪はやれるの？」

「私だって、慣れてるから」

心配そうな睦月に笑顔で答える。

そう、慣れてるのだ。それに、こういう時の為の更識の格闘術。使

わない手はないだろう。

睦月は未だに不安そうながらも頷いてくれた。

ハンドサインでシャルとラウラに作戦を伝えると二人も賛成のよ

うだ。

「タイミングは？」

「僕がこのナイフを投げたらで」

「了解」

開始の合図を決めて、座席の両端に配置に着く。

店内は混乱による小さな声すら消え、侵入してきた男達の呼吸音

と、外から聞こえるサイレンと雑多な声だけが耳に入る。

睦月と視線を合わす。

「ー」行ける。

睦月がナイフを男達の前に投げつけた瞬間、私達は一気に駆け出し

た。

私と睦月、ラウラでフロア内の連中を。シャルは出入口の奴へと向

かう。

「なっ!？」

「・・・遅い」

三人の内の一人・・・面倒だ、Aと呼ぼう。

Aの懐に入り込んだ私は鳩尾に肘鉄を放つ。

苦痛によりAの身体が『緩んだ』タイミングで片腕を掴んで引き寄せながら顎に掌底を打って頭を揺さぶり、少し離れたところで最後にもう一度鳩尾に蹴りを打ち込む。

「」

「ふう」

ソファ席に座り込むように気を失ったAを確認して一息吐く。

横を見れば――

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

睦月が華麗なカラテジツでリーダー格であろう男をフルボッコにしていた。

何あれ一瞬千撃？私とそう大差無い体軀から放たれているとは思えない重い一撃を連発で加え、睦月はリーダー格を私と同じようにソファに叩き伏せた。

「強盗死すべし、慈悲はない」

そう言ってから睦月はリーダー格から銃を取り上げ、さらに着ていたジャケットを脱がした。

私もAから銃を取り上げながら睦月に訊ねた。

「ジャケットまで脱がせるの？」

「これ見て」

睦月がジャケットを裏返すと、びっしりと導線に繋がった爆弾が取り付けられていた。

最終的に自爆でもするつもりだったんだろうか。

強盗犯らから銃以外の武器（ナイフや火炎瓶）を取り上げていると、シャルとラウラが残りの二人を引き摺って来た。

「そっちは、終わったみたいだね」

「二人とも怪我はない？」

「あの程度、怪我をすることなどない」

「流石だなー、憧れちゃうなー」

「それほどでもない」

そんな会話をしながら手早く強盗犯達を爆弾を取り除いたジャケツトや、ライフルに付いていたベルト等で縛り上げる。

念のために強盗犯の履いていた靴から靴ヒモを取って手足を縛っておく。これで大丈夫だろう。

「よし、それじゃあ逃げよっか」

「「逃げる?」」

「このままだと警察行つて事情聴取とかされて夜になっちゃうし。何より夕方のアニメに間に合わなくなる」

「成程、それは重要だな」

「「ええー・・・」」

明らかに後者のアニメが目的なその台詞にラウラが同調する。

でも睦月の言ってる事情聴取を受けるということも確かなのでささっと準備する。

折角のデ・・・デートをこんな事で終わらせたくないし。

「それじゃ二手に別れて逃げよう。固まってる怪しまれるしね」

そう言つてシャルはラウラの手を引いてフロアの奥へと歩き出す。

一瞬だけ振り替えて、私に向かってウィンクしてきた。・・・貸し1つ、ということなんだろう。

「簪、僕たちも行こう。そろそろ警察が入ってきそうだ」

「う、うん」

睦月に手を引かれ、立ち上がる。

その暖かい掌の温度を感じながら、私達はカフェの外へと駆け出した・・・。

分。あ、ちゃんと代金はテーブルの上に置いてきたから大丈夫・・・多

「ふいふ、逃げた逃げた!」

夕日が沈み始める時間、私と睦月は臨海公園に来ていた。

あれからここまで走ったり歩いたりを繰り返してどうにか事なきを得た。

ベンチに並んで座り、自販機で買ったジュースを飲む。

ああ、染み渡る・・・。

一息ついて落ち着いていると、街灯に明かりが灯り始める。

携帯を取り出してみれば、時刻は18時をとうに過ぎていた。

「睦月、アニメ始まっちゃってる」

「ん?ああ、いいよいいよ」

「?」

アニメ見たいからそそくさと逃げたのではないのだろうか。

そう思い睦月を見ると、彼は私の目を真っ直ぐ見つめながら、

「あれは口実・・・簪と居る方が大事だよ」

「ーっ」

微笑みながらそう言ったのだ。

身体が熱くなる。思考回路がショートしたかのようにまともに働かない。

真っ白どころか真っ赤だ。

心臓の音は早くなり、百メートル走を全力疾走したかのように脈打つ。

「簪?どうかしーわっ!?!」

「・・・バカ」

気付けば私は睦月を抱き締めていた。

・・・今の私の顔を見られたくないから。

「簪?」

「ねえ、睦月」

「？」

「また、一緒に出掛けようね」

「・・・うん！」

太陽が完全に沈み、星が瞬き始める。

また一緒に出掛ける。口約束だけれど、きっとこの約束は叶うと、睦月の体温を感じながら私はそう、思った・・・。

「ところで簪」

「？何」

「胸、当たってる」

「!?」

#08 夏の終わり

「ちよ、そんなコンボありか!？」

「虹ステ有能よね!」

「ところがギツチョン」

「ナイス更識って俺まで巻き込んだ!？」

「私まで巻き込むな!？」

夏休みも終盤に近付いてきた8月20日、僕や簪、一年生専用機持ち全員、一夏の家が集まっていた。

それと言うのも特に示し合わせた訳でもなく、既に住所を教えてもらっていた一夏の家が気になったからだ。

まあ・・・ある三人はそれだけが理由じゃないだろうけど。

ソファに座り、よく冷えた麦茶を飲みながらテレビ画面の中で繰り広げられるバトルを見る。

IS EX T R E M E v s、何処かで聞いたような名前のこのゲームは第一世代から第二世代までのISを使った2on2のバトルゲームで、機体選択の時に武装を好きなように選べるのが特徴だ。

「最後まで立っていた者こそ勝者」

「「これは酷い!」」

今やっているのは一夏、簪ペアvs鈴さん、ラウラペアという珍しい組み合わせだ。

と言っても簪の独走状態何だけれど。

ことゲームに関して簪はかなり上手い。いや、飲み込みが早いとも言える。

このゲームだってプレイするの今日が初めての筈なのに無双してるし。

「織斑君が突っ込んで攪乱してくれるから、大技狙いやすい」

「俺はデコイか何かか!？」

「言িয়েて妙だね」

「否定しろよ!」

一夏のツツコミ冴え渡ってるなあ・・・。

そんな事を思っていると、隣にシャルが座った。

「楽しそうだねえ。僕はあの手のゲーム苦手だから羨ましいよ」

「今から教えようか？簡単な動きならシャルだったらすぐ覚えるよ」

「んー、それはまた今度、かな。今は・・・」

シャルはそこで言葉を切って、僕の腕に抱き付いた。

・・・え、ちよ、何い!?

視線をずらしてシャルを見ると悪戯っぽい笑顔で僕を見ていた。

「こうしてる方が良いかなあ、なんて」

「ー!」

「ひう!？」

シャルの言葉と同時に簪とラウラから謎のオーラが発せられる。

何だあれは・・・殺意の波動だともいうのか・・・。

それと一夏、何『苦労するなあ』的な視線で僕を見てるんだ。あと
箒さん達も『その方法があったか!!』みたいな、天啓を得た顔してな
いで助けてくれませんかねえ？

「「無理」」

「「デスヨネー」」

救援要請が通らないという事実には絶望していると、簪とラウラがおもむろに立ち上がる。

そして、シャルの反対側である右側に簪が僕にくつつくように座り、ラウラは僕の膝の上に座った。

「あの・・・簪？ラウラ？動けないんですが」

「むう」

「いや、むうって何さ、むうって」

「ははは、睦月は鈍感だなあ」

『一夏が言うな』

「おおう」

全く、一夏に言われたくはなかったよ。

箒さん、鈴さん、セシリアさん（名前呼びで良いと言われた）の三人以外にも言い寄られてるのに気付いてないし。

・・・でも一夏に言われるほど僕って鈍感かなあ。

「鈍感だね(だな)」

「三人揃って心を読まないで!?!というカラウラはあんまり動かないで！」

「ん?何故だ、別に重くは無いだろう?」

「いやうんそうなんだけど違ってね」

さつきからお尻が当たって中々にヤバイんですが。しかも両腕にもやわらかい感触がががが・・・

「・・・」

「あれ?睦月大丈夫なの、これ」

「気を失ってますわね・・・」

「お前ら・・・やりすぎだ」

「悪のりが過ぎた」

「あはは、まさかこうなるとは」

「睦月は何故気を失ったんだ?」

「自覚ないんかい!」

「うーむ、気を失うとは」

織斑家のキッチン(かなり広い。全員入っても余裕がある)にて、フライパンで野菜を軽く炒めながら唸っていると、隣でパスタを茹でていた一夏が苦笑いを浮かべた。

「意外とウブなんだな睦月って」

「意外とは何さ。僕の人生の中で女の子と関わったのなんて中学の頃に一人だけだよ」

当然、その一人とは雪穂の事だ。

中学三年生の時だけだったけど、まあ今の僕を形造ったのは間違いない。雪穂だろう。僕をアニメ（特にロボット）オタクの道に引きずり込んだのも彼女だが。

「へえ、付き合ってたのか？」

「「ガタツ」」

「へ？ああ、付き合っては居ないよ。同い年だけど、何て言うんだろう・・・姉さん、みたいな人かな。一夏にとつての織斑先生みたいな感じ」

「「ホツ・・・」」

さつきから後ろが何だか騒がしいな。気になるけど今は調理に集中中。

炒めた野菜を一度皿に移して空いたフライパンに麺を投入する。

ここまでやれば分かるが、今作っているのは塩焼きそばだ。因みに鈴さんのリクエスト。

ホントは素麺にでもしたかったんだけど、たまには食べたいそうで。セシリアさんも気になってたみたいだしで作ることになった。

一夏は軽めが良いと言った箒さんとシャルに合わせてシーフードパスタを作っている。

「まあ、初恋の人でもあるね」

「へえ・・・ってマジか」

「そういう一夏は初恋の人いたの？」

「あー、俺は無いかなあ。小学校の頃も何だかんだ遊んでばっかだったし」

「・・・その遊びの最中に何人落としたのやら」

「？」

「何でもないよ」

確実に何人か落としてるよね、一夏。今でさえイケメンと称して相違ないのだから、幼少期もさぞモテたんだろう。本人にその自覚は無いみたいだけど。全く、ラノベかマンガの主人公かと思うよ。

つと、そろそろいいかな。麺の中に先程の野菜を再投入してよく混

ぜる。そしてそこに塩を少し入れて味を整えて完成だ。

「よしっ、出来た」

「お、美味そうだな」

「摘まみ食いはダメだよ？」

「わかってるっつての」

軽く言い合いながら皿に分けていく。分量は鈴さん達に合わせて軽めによそる。それなりの量は作ったし、足りなかったらおかわりしてもらおう。

「皆、出来たよ、って簪にシャルとラウラはどうしたの？」

皿を持ってリビングに戻ると三人が真っ白になっていた。

テーブルに皿を置きつつ疑問符を浮かべているとセシリアさんが苦笑いしながら答えてくれた。

「少し打ちひしがれていると言いますか、ショックを受けていると言いますか・・・」

「まあ、少ししたら戻ると思う、気にしないで良いぞ」

「箒さんにもそう言われ、気になりながらも三人について聞くことを止める。」

ホント、どうしたんだろ？

「黄色リバーズ」

「黄色ドロー2」

「続けて青のドロー2」

「更に黄色ドロー2」

「バカなッ・・・！」

昼食も食べ終わって暫く。

僕たちは鈴さんが持ってきていたUNOに興じていた。

因みに今ラウラがドロー六枚の犠牲になった。

八人でのプレイだからドローカードのお祭り具合が悲惨になって
いる。

「ちいつ・・・」

「黄の3で」

「黄の3から青の3ですわ」

順番はラウラから時計回りに一夏、セシリアさん、箒さん、シャル、
鈴さん、簪、僕の順番だ。

「赤の3を二枚重ねだ」

「カラーチェンジ、緑の1で」

「うぐ、パスよ」

鈴さんが小さく唸って山札から一枚引き、そのままうなだれる。
さて。次は簪だけれど・・・。

「カラーチェンジ、ドロー4」

なん・・・だと・・・ここに来てドロー4!?

「色は赤・・・」

即座に自分の手札を見る。残り枚数四枚、あつた!

「続けてカラーチェンジ、ドロー4!色は青!」

危ない、取っておいて正解だった・・・さあ、ラウラはどうする?
ドロー4の合計枚数は四枚、内一枚はゲーム開始直後に箒さんが
使った。

そして今、簪と僕が使った事でそれぞれの手札、或いは山札には残
り一枚・・・さあ、どうする!?

「フ・・・悪いな一夏」

「何?・・・まさか!」

ラウラが手札から一枚のカードを場に置く。

その瞬間、一夏の顔がムンクの叫びへと変貌した。

「カラーチェンジ、ドロー4。色は・・・黄色だ」

「Noooooooooooooooooo!!」

ラウラのドヤ顔宣言により、一夏は天を仰いで慟哭の叫びを上げ
る。

元々一夏の手札は7枚。そこに合計十二枚ドロ・・・もはや勝負は決まった。

「くそう、何だよドロ十二枚つて鬼畜すぎんだろ」

結果、一上がりはなんとラウラとなり、ビリは一夏となった。

まあ、リバースとスキップを使いに使って一夏の手番を遅れに遅らせただけだね。

テーブルの上にカードを置いて、息を吐く。

いやあ、楽しかった。

「流石にこの大人数だと、1ゲームの長さも結構するわね」

「初めてこのUNOをやりましたけど、中々に楽しめましたわ」

鈴さんとセシリアさんが麦茶を飲みながら感想を言う。

外を見ればもう夕方だ。

お開きにするには良い時間だろう。

「さて、と僕はそろそろ帰るとしようかな」

「ん？おお、もうこんな時間か」

麦茶を飲み干し椅子から立ち上がると、一夏が時計を見て驚いた。

「じゃあ私も。睦月に送り狼してもらおう」

「じゃあ私（僕）も」

「言葉の意味わかって言ってる!？」

簪の言葉に呼応するようにシャルとラウラが立ち上がる。

うん、シャルは分かって反応したよね確実に。ラウラは・・・よく分かってないみたいだ。

そんな僕らのやり取りを見て箒さんは笑う。

「では責任をもって睦月は皆を送らないとな」

「箒さんまで・・・もう」

「んじゃあ睦月、しっかりエスコートしなさいよ?」

「分かってるよ鈴さん。それじゃあ三人とも荷物纏めて」

「二はい」

やけに揃った返事をしてそれぞれ荷物を纏める。

僕は傍に置いておいた小さな鞆を持ち上げ、中に財布と携帯を投げ込む。

三人の準備が終わったのを確認して口を開く。

「それじゃあ、今日はありがとう。また遊ぼうね」

「おう、またな！」

「道中、お気を付けて。夏休み明けまたお会いしましょう」

「まったねー」

「またな、三人とも」

残る皆からの声に手を振って織斑家を出る。

外に出て空を見れば鮮やかな茜色に染め上がっていた。

「さ、それじゃ帰ろっか」

「送り狼？」

「しないよ！」

三人にからかわれながらも歩み始める。

宵闇が近付き、空に星が瞬く。

――不意に吹いた涼風に、夏の終わりを感じた。

夏休み編 機体紹介

機体名 デルタ・カイ

主武装 ロング・メガ・バスター、シールド型ウェポンラッチ、ハイメガキャノン、爆砕ボルト、ビームサーベル×2、プロト・フィンファンネル×2（本編未使用）、大口径パイルバンカー・バルムンク（本作オリジナル、本編未使用）

デュノア社の開発プラン（δ計画）三号機にしてシャルロット・デュノアの新たな専用機。第三世代IS。

後述のデルタ、デルタ・プラスの運用データとラファールシリーズの戦闘データを元に造り上げられた、アレックス・デュノア曰く『究極』。

デュノア社初の試みとしてビーム兵器の運用をメインとした機体、その三号機でもある。機体色は白を基調として青紫と黄色が各所に存在する。

特殊武装であるプロト・フィンファンネルの開発にはイギリスのブルー・ティアーズ開発チームからの技術提供を受けて開発された。

しかし、完全な脳波制御によるOSの構築には至っておらず、半自動制御での仕様となった。

ラファールシリーズの後継、ということもあり、実弾兵器の使用も問題なく行える。

本作オリジナル武装である大口径パイルバンカー・バルムンクはラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡが保有していたパイルバンカー・グレースケールがデルタ・カイにそのデータを移した際に進化した物。当たれば死ぬ。

シールドとは名ばかりのウェポンラッチの表側に装備される。

元となったグレースケールよりも大型化し、クローアームにより対象を固定、パイルを撃ち込むというものだが、最早杭と言うよりも先の尖った柱と言った方が正しい。

リボルバーシステムを採用してはいるものの、連射する前に相手のシールドエネルギーが枯渇するのであまり意味はない。

単一仕様能力は現在覚醒してはいないが、リヴァイヴよりデータを移譲しているので覚醒は早いと思われる。とは開発チームの言。

全身装甲と部分装甲の切り替えが可能であり、部分装甲の場合、背部ユニットが左右に分離、非固定武装となる。

本体側は顔を覆うマスクが消えV字アンテナのみとなり、上腕部、太股部の装甲が消える。言ってしまうえばMS少女である。

又、本機体は宇宙空間での運用も考えられており、リミッターを外せば超長時間、大気圏外での活動が可能である。

機体名 デルタ

主武装 試作型ビームライフル、試作型ビームサーベル×2、シールド

〔δ計画〕一号機。開発段階においては問題が無かったが、テストフライト中、戦闘速度への加速の際フレームが破損するという致命的な欠陥が見付かったため御蔵入りとなった不運の機体。

開発当初はデュノア社の象徴的機体として位置付けられる予定だったが、その位置をデルタ・カイへと譲った。

機体色は金色に所々黒が入った豪華なもの。

武装面は基本的な武装に押さえられており、そこからデルタ・カイやプラスの武装へのフィードバックが行われた。

現在はデュノア社地下区画に保管されている。

機体名 デルタ・プラス

主武装 ビームライフル、ビームサーベル×2、ビームガン×2、二连装グレネードランチャー、ビームキャノン、シールド

〔δ計画〕二号機にして世界初の第三代量産型IS。

デュノア社がラファール・リヴァイヴに変わる新世代量産機として

開発した機体。

一部フレームを露出させる事で機体の軽量化に成功、機動力を重視した戦闘方法が主となる。機体色は基本グレー。用途に応じて変えられる。(密林迷彩等々)

この機体を語る上で欠かせないのはその初期武装の豊富さである。それら武装も高水準に纏まっており、IS適性の低い人間でも扱えるようチューニングが施されている。

ビームライフルに至ってはビームサーベルを銃口から発動させ、即席の槍に出来、ビームサーベルはシールドに装備時はビームガンとしても扱える優れもの。

また実弾兵器への適性も高く、バズーカ等の大型火器でなければ大抵の実弾兵器を扱うことができる。

アメリカ、フランス、イギリス、オーストラリアに各一機ずつ試験的に配備される予定。

組立には既存のラファール・リヴァイヴのコアを第三世代へとアップグレードするため相応の時間がかかる。

後の評価によってはIS学園にも配備する可能性がある。

最果てに至る者

#01 這い寄る悪意

夏休みも終わりを告げた9月1日。

朝霧が立ち込める中、一人の少女がIS学園の前に立っていた。

「ふうん・・・資料で見てもはいたけど、かなり大きいわね」

ウェーブのかかった赤みの強い長髪を風に遊ばせて少女は一人呟く。

「さて、ネロにはあまり遊ぶなどは言われてるけど、ちよつとくらいは良いわよね？実働部隊はあのお人形と飼い主達なんだし」

誰に言うでもなくニヤニヤと口を歪ませ、少女は嗤う。

深い紫の瞳が細められる。その様子はまるで遊ぶのをさぞ楽しみにしている幼子の様だ。

だが。

「うふふー何人くらいなら『壊し』ちゃっても良いのかしら？ああ、一人くらいは耐え抜いて欲しいかなあ」

その欲望は狂っていた。

今、一人の狂人が学園へと入り込もうとしていた・・・。

「さて、二学期に入ったわけだが・・・ラウラ、扶桑から離れろ」

残暑厳しい夏休み明けの最初の登校日、HRを始めようとした織斑先生が早速溜め息を吐いた。

原因はラウラが僕の膝に座ってるから。何でも一夏の家が集まったときに座って以来ハマっているそうなの。

おかげで最近では義足の強度を上げるのに四苦八苦しています。

「教官先生、それは私に死ねと？」

「大袈裟が過ぎるだろ・・・いいから自分の席に戻れ。次は無い」

「了解（ヤー）！」

織斑先生が出席簿という魔剣を抜いた瞬間ラウラは席に戻った。

「ンンッ！話を戻そう。二学期に入り、文化祭の時期がやってきた。そこで早速だが文化祭の出し物について決めたいと思う。織斑、扶桑、お前達が司会をやれ」

「え、っ」

「何か文句でも？」

「ヨロコンデー!!」

死神の眼光を受けて即座に席を立つ。僕だってまだ死にたくない。

織斑先生が教卓の前から離れ、出入り口付近にいる山田先生の横に移動したところで、話を始める。

アイコンタクトで僕が書記、一夏が進行を務めることにした。

「あー、ってことで文化祭の出し物についてなんだけど。何か案がある人は言ってくれ。幾つか候補を出した後に多数決で決めようと思う」

一夏の言葉に合わせて黒板に『文化祭 出し物候補』とチョークで書き込む。

さて、どんな意見が出るかな？

「織斑君と睦月君のホストバー！」

「断固として却下!!」

早速挙がった意見を速攻で却下する。何を考えたんだ皆木さん……って他数名も残念そうにしているし。

織斑先生、早くも目頭を抑え始めちゃったよ。

「頼む、もうちよいマトモのを」

「え、良い案だと思ったのに」

「じゃあ、メイド喫茶とかは？織斑君には執事服着てもらおう感じで」

「あつれ〜？なんで僕はナチュラルにスルーされてるのかな？」

『いや、扶桑君はメイド服でしょ？』

「何これ酷い」

セシリアさんや箒さんまで「何当たり前な事聞いているの？」みたいな表情浮かべないでほしかったかな!?

「まあ、執事服位ならいいか。睦月はメイド服か、頑張れ」
「受け入れるの早いね、ちよつとは援護してほしかった！」

数の暴力の真価を身に受け、泣く泣く黒板にメイド喫茶と書く。
その後も一夏が他の意見を促して幾つか案が出たところで、いよいよクラスの出し物が決定しようとしていた。

「それじゃ候補も幾つか出たところで、クラスの出し物を決めるぞ。順に言ってくから、やりたいやつに一人一つ、挙手してくれ」

皆が頷いたのを確認して一夏が候補を読み上げる。

「メイド喫茶がいいと思う人は挙手」

バツ、と音が聞こえるくらいの勢いの良さで手が挙がる。2、4、6・・・17人か。過半数の票を一気に持ってたなあ。

「いやあく、ふそつちのメイド服、さぞ可愛らしいことでしょうなあ」

「布仏さん、聞こえてるからね・・・？」

「ギクツ」

ニツコリと良い笑顔を浮かべて振り替えば布仏が肩を跳ね上げた。まったく、男のメイド服姿なんて需要無いでしょうに。

「あー、過半数いったか。取り敢えず、他のも行っとくか。和風喫茶がいい人！」

それから残りの候補である、お化け屋敷、演劇について票をとったが、結果は明らか。

「よし。それじゃあ一年一組の文化祭出し物はメイド喫茶に決定だ！」

『イエーイ!!』

一夏の宣言にクラス中が沸き立つ。

キャノンボールファストもあることだし、楽しみだ。

出し物が決定したので、後は時間まで細かい日程について話し合った。主に女子が。

ええ、男二人の意見なんて有って無いようなモノですよ。

それから時間は過ぎ、放課後。

教室掃除の当番である僕は皆と別れ、一人教室に残ってモップで埃を纏めていた。

「ふう・・・よし。終了っ」

塵取りに纏めた埃をゴミ箱に突っ込んで一息つく。

基本的に用務員さんが床などを磨いてくれているため、僕達生徒にできる掃除はこれ位が限度だ。

時計を見れば16時。今から一夏達の特訓に入ってもそんなにやれないな。

「さてどうしようか・・・ん？」

ちよつとした空き時間をどうするか考えて携帯を開くとメールの着信があった。

差出人は簪。珍しいな、普段は電話か直接伝えてくるのに。

『ごめん、転入生に校内の案内頼まれた。先に行つてて』

文の中にあつた転入生の三文字を見て思い出す。

そういえば転入生がどうのつて噂があつたな・・・まさか簪のクラスだったとは。

取り敢えず了解の意を返して携帯をしまい、モップと塵取りを廊下にある用具入れに戻す。

教室に戻り鞆を取り上げて、何の気無しに教室を見渡していると、

「なあに黄昏てるのかしら、少年？」

「楯無会長」

不意に声が聞こえ、振り向くと教室の出入り口に不敵に笑う楯無会長が立っていた。口元を隠す扇子には『黄昏』の二文字が。

「どうしてここに？」

「ちよつと貴方にお話があつてね」

「簪との仲ですか」

「まあ、それもあるけど・・・本題は別よ」

そう言うのと楯無会長はスツと目を細めた。

・・・どうやら、面倒事らしいね。ていうか僕ただの生徒なんですけど。

「模擬戦とは言え代表候補三人を相手に勝つ人間がただの生徒なワケないでしょ」

「さらつと心を読まないでください」

「兎に角、ここじゃ何だわ。場所を変えたいのだけど」

「既に着いてくことは決定ですか」

溜息一つ、僕は会長のいる出入り口に近付く。

再び開かれた会長の扇子には『会長特権』と達筆で書かれていた。

「職権濫用は良くないですよ、会長」

「そう言いながらちゃんとしてくれるなんて、ツンデレかしら?」

「からかわないで下さい。で、何処に行くんですか」

「ふふ、それじゃ着いてきて」

またも妖しげに笑って廊下を歩き出す楯無会長に若干不安になりながらも僕は、その背中を追うのだった・・・。

#02 依頼

「……で、何でこうなってるんです?」

「秘密の話をするのに都合が良いからよ」

会長を追って、着いた先は第三アリーナ。そこで僕と楯無会長は互いにISを展開して相対していた。

「確か今日は二年生が使用予定だったと思うんですけど」

「食堂のスイーツ無料券」

「買収!」

汚いな、流星生徒会長汚い。

ヒラヒラと何処からか取り出した無料券を扇子のように扇いぐ会長を見てそう思ってしまった。

「ところで……貴方の機体、またシルエットが変わってるわね。それが単一仕様能力?」

「まあ、そうですね」

会長の言うとおり、今のヘイズルの姿はアドバンスドだが、背中の武装が変わっている。

通常、アドバンスド・ヘイズルの背中にはマルチコネクター・ポッドが装備される。今回はコネクター部分を少し弄り、そこに新たに使用可能となったパッケージを接続している。

支援武装ユニット「シルフレイ」。見た目はそのままガンダムビルドファイターズに登場した「ビルドブースターmkⅡ」だ。

追加ブースターにビームライフル二挺を両腕に装備する代わりに、背面ブースターが使用不可能になってしまうが、ビルドブースター自体の推力でカバーできるから問題無い。

「ちようど試運転をしようと思っていたので、これにしました」
「そう……さて、そろそろ『お話し』を始めましょうか」

クルリとその手に持った水を纏う西洋槍を回してから構え、会長が笑う。

時間が無いのは確かだ。早めにしよう。

両手に構えたビームライフルの照準を合わせる。

「・・・っ！」

先に動いたのは会長の方だった。

手に持った西洋槍の穂先が開き、その中からガトリングガンが現れ、火を吹いた。

当然、当たる気は無い。

脚部スラスターを起動させ、上半身を捻ってホバリングを行いつつ回避する。

地面に銃弾が突き刺さり、焦げた臭いが装甲越しに鼻をついた。

「槍からガトリングって・・・ビックリメカですか！」

「とか言いつつ、しっかり避けているわね。凄いわ」

「そりゃどうも！」

お返しとばかりに両手のビームライフルを撃ち込むが、その尽くが非固定武装の纏う水のヴェールによって無効化される。

一手。交わしただけで解る。

・・・強いー！

回避先を読んでいたかのように放たれる弾丸の雨を全身のスラスターと最小限の身体の動きを駆使して避ける。

【左腕 残弾30% 右腕 残弾0%】

「ちっ！」

威力が高い分、エネルギーの減りも早いか・・・！

背面ユニットアーム接続、シルフレイ本体からのエネルギー供給に切り替え！

【シルフレイ アーム接続完了、エネルギー供給開始】

「それで、お話して何なんですか！まさかただ模擬戦しただけじゃないですよね！」

取り回しを犠牲に弾を回復させ、出力も増したビームライフルで攻撃しつつそう訊ねる。

会長は不敵に笑うとプライベートチャネルによる通信を送ってきた。

『これなら、誰にも聞かれず話しが出来るわね？』

『その為の模擬戦ですか・・・』

ガトリングを格納して距離を詰めた上で放たれる槍の穂先をシル
フレイのビームライフルに付属するシールドでいなしながら左手の
ビームライフルからサーベルを発動させ切り払う。

『ISを使う以上、こういういった大義名分は必要でしょ』

『・・・それで、こうまでして話したい話して何ですか?』

突き出された槍を避け、間を開けて睨み合う。

ビルドブースターのエネルギー残量はまだ余裕がある。攻められ
るか?。

『亡国企業（ファントム・タスク）。聞いたこと無いかしら』

再度振るわれる槍の一閃をビームサーベルを振るって防ぐ。

空いた右手のサーベルで斬りつけるが非固定武装に難なく逸らさ
れてしまう。

『第二次大戦中から存在する秘密組織、ですよね?』

『正解。最近、その連中と動きがやけに活発化してきたのよ。つい先
日、アメリカで試作段階のISが強奪されたわ』

『・・・それ、明らかに機密事項ですよね』

『貴方が口を割らなければ問題ないわ』

口八丁手八丁。そんな言葉が頭を過る。

相も変わらず会長は笑ったままだ。全く、機体の纏う水のように掴
み所がない人だ。

『福音事件の時、貴方が相手にした機体もその所属の可能性が高い
わ』

『ISの強奪なんて出来る組織なんて連中位でしょうしね』

調べた限りでも全容を計り知れない組織。それこそ漫画やアニメ
の世界的な秘密結社の様相を示している。

東さんにも深入りは禁物と言われて以来、あまり調べてはいなかつ
たけれど・・・そんな組織の名前が挙がるってことは学園（ここ）に
も何かあるのだろうか。

『今日、転入生が一年に入ったでしょ』

『確か簪のクラスに・・・』

『そう。どうにもその転入生がキナ臭いのよ』

これがデータよ。

そう言つて転送されてきた転入生のプロフィールデータを動きながら見る。

名前 ファーリス・E・バートリー

性別 女

年齢 15

ここまでは至つて普通のデータだ。

そのまま身長、体重と見ていき、最後に顔写真を見る。

軽くウェーブのかかった赤髪、整った顔立ち。しかし、その目を見た瞬間、ゾワリとした冷たい感覚が僕を襲った。

『この子は・・・何だか妙な感じがします』

『妙な感じ?』

鋭い突きを体を反らして回避しつつ首肯する。

擦った穂先と装甲が小さく火花を散らすのを視界の端に納めながらも自分の意見を伝える。

『少なくとも、普通じゃないです。勘、ですけど』

キナ臭い処じゃない。この目は只人がするような目なんかではない。

強いていうなら三年前、誘拐された一夏を救出するときには相手をした連中、それと似ているような感じた。

『勘、ねえ・・・まあ私も同じ意見だわ。教師含め、殆どどの生徒が彼女を受け入れてるけど。正直、嫌な感じししかないわ』

『それで、僕はバートリーさんを監視すれば良いんですか?』

『ええ、彼女は簪ちゃんと同じクラスだし、貴方はその簪ちゃんと仲が良い。適任なのよ』

振るつたビームサーベルの一撃が水と会長の技量によって勢いを完全に削がれるが、更に踏み込んで左手のサーベルを叩き込む。

『私も本音も、文化祭と別件で碌に動けなくなる。頼めるのは貴方しか居ないのよ』

槍とライフルが絡み合い、膠着状態になる中、会長が悔しそうな声音でそう吐露する。

『監視、というか護衛は構わないんですが……普段は別クラスですし、その所はどうするんです?』

押せど引けど動かない状態で、僕はそう訊ねた。

休日や夕方、夜は基本一緒に行動できるから良いとしても一番の問題は平日の授業の間だ。

最もバートリーさんが簪に近づくタイミングでその場に居ないのはかなりマズイ。

『四組にも私の部下が居るから、大丈夫よ。後で教えるからその子と連携して頂戴』

『成程』

同時に武器を弾きその勢いを使って再度切っ先を結ぶ。

ビームサーベルの先端と槍の穂先が互いの眼前で止まる。

『……了解しました。その話しを受けましょう』

『宜しくね、可愛い子兔さん?』

そう言い合うのと同様、閉館時間前のチャイムが鳴り響いた。

「ーーそれで、ここが第三アリーナ。校舎から少し遠いけど、授業とかでもよく使われる」

「へえ、やっぱり大きいわねえ……」

放課後、今日転入してきたバートリーさんに頼まれて学園の敷地内を案内していた私は最後にこの第三アリーナに来ていた。

本校舎から一番遠いのもあって最後になっていたのだ。

キョロキョロとアリーナの外壁を物珍しそうに眺めるバートリー

さんを他所に携帯の時計を見る。

もう17時か：：今日は何だかんだで睦月に会えたのは朝だけだったな。

「はあ・・・」

「あら？アリーナから誰か出てくるわよ」

小さく溜息を吐くと、バートリーさんが何かに気付いたようだ。

彼女の見る方向に顔を向けるとそこにはー。

「睦月と・・・お姉ちゃん・・・？」

ザワリ。

仲良さげに会話しながら進む二人を見た瞬間、言い様の知れない、今まで感じた事の無い冷たい感覚が胸を突いた。

「・・・どう、して」

その初めての感覚が辛くて、痛くて。

だから、気付けなかった。

「・・・良いものみつけたー」

私のすぐ後ろで悪魔が笑っていることに。

#03 協力者

楯無会長の依頼を受けた翌日の昼休み。

僕は件の協力者と会うため校舎裏に来ていた。

校舎裏って嫌な思い出しが無いから、出来れば別の場所が良かったんだけどなあ。

日の光の射し込まない暗いその場所に着くと、先客が居た。

「ん、来たようね。お嬢・・・会長から話しは聞いているわ、扶桑睦月君」

「というと、貴女が協力者ですか」

「ええ。一年四組所属、笹桐 栞菜（ささきり かな）よ」

若草色の髪をショートカットにした少女が腰に手を当ててそう名乗った。

見るからに強気そうな子だ。

「時間もあまりない事だし、本題に入りましょうか。取り敢えず私が日中、簪お嬢様・・・じゃなかった簪さんとあのバートリーとかいうのを監視する。貴方が朝と夜、場合によっては放課後の監視、ということの良いかしら？」

「うん。頼まれた内容通りだね」

「ならよし、よ・・・しっかし、間近で見るとホントに女子に見えるわね」

「そ、そんなに女顔かな、僕・・・」

「顔もそうだけど全体的に女っぽいわね」

「なん、だと・・・」

バカな。まさか骨格レベルだったのか・・・!?骨格レベルで皆から女っぽいって思われてたのか!?

認めたくない事実到校舎の壁に手をついて愕然としていると、笹桐さんが咳払いを一つした。

「んんっ、脱線したわね・・・。取り敢えず、午前中の二人の様子は至って普通だったわ。仲の良いクラスメイト、と言った所かしら。あ、でも簪さんのテンションが何時もより少し低かったわね」

「簪のテンションが？」

「ええ、心なしかね。朝の内はどうだった？」

「確かに、少し元気が無かったかな……ちよつとボーつとした感じだった」

朝食の時、話しかけてもどこか上の空だったし、何と云うか心此処に在らずといった感じだった。一緒に居た布仏さんも首を傾げていた位だ。

その事を話すと笹桐さんは顎に指をトントンと当てて思案顔になつた。

「そう……昨日の内に何かあったのかしら」

「僕も昨日は朝しか会ってなかったからなあ……」

「日中もそう変わり無かつたから、放課後にあつたのかもね。確かバートリーに校内の案内頼まれてたし」

「ふむ……」

「取り敢えずは分かつたわ。お互い、少し注意して監視に当たりますよう」

そう言ふと笹桐さんは懐から携帯を取り出してこちらに向けた。

連絡先の交換、という事だろうか。

制服のポケットから携帯を取り出して向きを合わせる。

「これから何かあつたら必ず連絡すること、良い？」

「了解だよ」

「裏がちやんと付かない限りは不用意に動かないことは、分かつてるわね」

「当然。つてなんだか笹桐さんてお姉さんみたいだね」

「は、はあ!？」

携帯を操作して番号を交換したあとに言つた言葉に笹桐さんが顔を真っ赤にして大声を上げた。

「私がお姉さん？扶桑君、白昼夢でも見てるんじゃないの？」

「笹桐さんて初対面の僕にも色々言ってくれるしき、何となくそう思つただけだ」

「いや、まあ、その……い、幾ら会長の指名した人でも失敗しないと

は限らないからよ！これ以上の言及は無し！ハイ、終わり！」

照れ隠しなのか少し声量を上げて言い切ると笹桐さんは携帯をしまつて腕を組んだ。

そんな彼女が一夏に対する鈴さんと似たように見えるのは、多分気のせいだろう。

「何よ」

「いや、何でもないよ」

怪訝な眼差しを送ってくる笹桐さんに頭を振って返し、僕は携帯の画面を見た。

そろそろ昼休みも終わりそうだ。

「もう時間か……。扶桑君」

「ん？」

「短い間だと思うけど、これから宜しく」

笹桐さんはそう言って右手を差し出してきた。

それに応え、僕はその手を握った。

「ごちそうさ、宜しく」

「無事に入れたようね」

『案外杜撰なモノね、天下のI S学園も。そう思わない？スコール』

I S学園より離れ本土にある、とあるホテルの一室。

スコールは携帯のスピーカー越しに聴こえる挑発的な声に眉をひそめる。

きつと電話の先に居る『バートリー』はニヤニヤとその端整な顔を歪めている事だろう。

「態々『委員会』に裏通ししてやったんだから入れるのは当然でしょう。．．．それより、誰に『針を刺した』の？」

『あら、ツレないわねえ。針を刺したのは日本の代表候補よ。あの娘だったら可愛くてねえ。まさに、恋する乙女！って感じでホントに堪らないわ．．．壊したくなるくらい』

「日本のって、まさか貴女『更識』に手を出したの!？」

バートリーの巫戯た言葉にスコールは思わず声を荒げる。

更識は危険過ぎる。

それは大規模組織である亡国企業にとっても変わらない評価だ。

対暗部として活動するあの組織によって亡国企業の末端である組織も幾つか潰された程だ。

その更識の当主であり、IS学園の生徒会長である更識楯無．．．彼女の妹に手を出すとは、この性悪女はリスクを考えられないのだろうか。

「貴女ね．．．それで当日何かあったらどうするのよ」

内心で悪態を吐きながら、努めて冷静にスコールは訊ねる。これで何の対策も無しとなれば最早バートリーの上司に直談判も辞さない構えだ。

『まあ、多少は感付かれてるでしょうけど、向こうも動きかねてるみたいだし、ね？大切な妹さんの命はこっちが握ってるようなものだし．．．ふふ』

「ネロが貴女を送った理由が分かった気がしたわ．．．」

こんな組織に身を置いている自分が言えた義理ではないが、バートリーと言う女は性根が腐りきっている。いや、『あの部隊』の連中は誰も彼もが狂っている。

そんな連中の中でも比較的マシとは言え、やはりスコールは釈然としなかった。

『ま、当日は問題なく動けるから大丈夫よ。そっちこそ、お人形を上手に動かさないよ?』

「っ．．．わかってるわよ。それじゃ、切るわ」

『バイバイ♪』

耳障りな声を最後にスコールは苛立たし気に携帯をテーブルに投げる。

その様子を黙ってみていた一人の女が口を開く。

「で、あの気違いは何だつて？まあ大体予想はつくが」

「オータム・・・ええ、まあ案の定、面倒事が増えたわ」

スコールに劣らない美貌をもった女はその言葉に苦笑いを浮かべ、テーブルに置いてある酒瓶に手をつける。

その顔はやっぱりかという感情がありありと浮かんでいた。

「多少、プランに変更が必要ね・・・なるだけ『エム』は出したく無いけれど、この際仕方ないわ」

「アイツを出すってことは、本腰を入れなきゃマズいな」

「ええ。・・・全く、無駄に作戦難易度を上げてくれたものだわ」

溜息混じりにそう言つてスコールは若干痛む頭を押さえる。

とそこでふと気付いた事がありスコールはオータムに訊ねる。

「所でエムは何処に行ったの？」

その問いにオータムはカクンと首を上げ、天井を見る。

「あー・・・多分、いや確実に彼処だろうな」

「何処よ」

「なんて言つたっけ・・・そうだアキバだ。アキバに行くとか言つてたな」

「・・・はい？」

オータムの口から飛び出た素っ頓狂な答えにスコールの頭が嫌な解を導きだす。

アキバⅡ秋葉Ⅱ・・・秋葉原。

「なんでこう、次から次へと問題が起きるのよ・・・」

疲労感が臨界を通り越して天辺すら貫いてしまったスコールは遂に頭を抱えて座り込んでしまった・・・。

#04 違和感

笹桐さんと協力体制を交わして早一週間、IS学園はいよいよ文化祭の準備期間に入った。

今日に至るまで、バートリーさんに変な動きは見え、普段通りだった。

「……………」

「えーと、簪？何でそんなに僕を睨んでるんでしょうか」

「…………睨んでない」

「え……………」

変わった事と言えば、時折こうして簪が目付き鋭く僕を見てくることだ。

バートリーさんが転校して以来だ、簪がこうしてくるのは。

どうしたと訊ねれば今みたく何でもないの一点張り。

かといって何も聞かないでいると悲しそうな顔をするのだからもうどうしたら良いかわからない。

これまでの人生において、こんな事態に遭遇した事がないから対処の仕方が分からないのだ。

「というわけでヘルプミー」

「諦めろ」

「即答!？」

昼休みの屋上で久しぶりに皆で食べているとにべも無く一夏に救援を断られた。

「理由が分からないんじゃないや俺もどうしようもないぞ」

「デスヨネー」

他の皆もどうすれば良いか見当つかないのか、首を横に振った。

当の簪は一向に僕から目を離さない。…………これじゃどつちが監視してるのやら。

若干の居心地の悪さを感じつつ食事を続けていると、校内放送のスピーカーが音を立てた。

『一年一組、織斑一夏君、扶桑睦月君。生徒会室へと来て下さい』

「生徒会室？何で俺と睦月だけなんだ」

「気付かぬ内に何かやらかしたんじゃないの？」

「……………」

鈴さんの言葉に一夏と視線を交わす。うん……心当たりがありません！

殆んど放課後のアリーナでだけど、壁凹ませたり、切り裂いたり、面にクレーター作ったりと僕と一夏で模擬戦をやると大抵アリーナの何処かが損傷する。いや、ちゃんと直してはいるから大丈夫なはず……ないか。

「お二人とも、顔が真っ青に……」

「大方、放課後の模擬戦のことだろう。全く、だからあれほどやり過ぎるなど言ったらろうに」

「なあ、睦月。逃げたらヤバイよなこれ」

「織斑先生と生徒会長から追っかけ回されたいと思う？」

「……………行こうか」

意見を合致させ、そそくさと弁当を片付ける。

覚悟完了。……遺書くらい書いとこうかな。生きて帰るか分からないし。

「睦月、一夏。そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

ラウラの明らかなネタ振りに背中で応えて立ち上がる。

隣を見れば頼もしい戦友（とも）の姿が。イける、イけるぞ。今の僕達なら敗北は無い……！

「じゃあ、逝って来るよ。皆は先に戻ってて……って簪？」

足を踏み出そうとして、しかしYシャツの裾を引っ張られる感覚に行動を止める。

振り向けば簪が僕の制服を掴まんでいた。

顔を俯かせて、指が白くなるほど強く服を引っ張るその姿に、僕は声を直ぐには出せなかった。

周りの皆も簪の様子に困惑していた。

「かん、きゃっっっ」

「ーっ！ご、ごめん、急に・・・私は、その」
「う、うん」

ハツとしたように顔を上げ、簪が離れる。

普段からは考えられないような慌てようで言葉を吐く様子に『違和感』を覚える。

確証の無い、奇妙な感覚。まるで無意識に身体が動いて、それに気付いたかのような言動。

・・・疑いたくはない。けど。

「睦月、さっさと行ってきなさいよ」

「鈴さん」

言及するか否か。そんな内心の葛藤を見抜いたかのように鈴さんが手をヒラヒラと振った。

「このままだと時間無くなるわよ？死にたくないでしょ。『こっちはこっちでやっつくから』、ほら行った行った」

「うわ、やべえ！マジで時間ないぞ!？」

「っ！じゃあゴメン、後は頼むよ！」

「これで貸し借りチャラだかんねえー」

鈴さんの何とも頼もしい言葉を受けて、校舎に入る扉を開けて僕は先に走り出した一夏の背を追った。

果たして、鈴さんは簪から話を聞けるのだろうか。

そして、それによって僕の予感が当たってしまわないか。不安だった。

「さて、と」

睦月達を通った扉がガチャリと金属の重低音と共に閉まり、屋上には鈴音達のみが残った。

その中で所在無さげに座る簪を見て、鈴音は口を開いた。

「これで此処にはアンタの知ってる女子しか居なくなったワケだし。そろそろ聞かせてもらおうじゃない、アンタが『そうだった理由』を、

や」

「そうですね。このままじゃ不安で眠れなさそうですし」

「睦月に借りを返す意味でもここは聞いておきたいからな」

そう言う鈴、セシリア、箒の表情は普段の活発な雰囲気では無く、落ち着いた穏やかなものだった。シャルロットとラウラも同様で、静かに頷いた。

しかし有無を言わせない、強さも併せ持ったその眼差しに、簪は瞳を揺らして声を上げた。

「私はー」

「ようこそ生徒会室へ！歓迎しよう、盛大にな！」

「チヨップ」

「あうち」

生徒会室に入ると、バーン！と効果音が付きそうな両手を広げたポーズをした布仏さんが正面に立っていたのでその頭に手刀を落とす。生憎ここはBIGBOXじゃない。

「うう、地味に痛い」

「入って早々アホな事してるからだよ。それで、どう言ったご用件で？生徒会長」

頭を押さえて横にずれた布仏さんに合わせ一歩進み、部屋の最奥、窓を背に置かれたデスクに肘を立てた生徒会長をに訊ねる。彼女の隣には深緑の髪を項辺りで束ねた女子が立っていた。

「そうね・・・取り敢えず、入学式以来ね織斑一夏君。扶桑君は約一週間ぶりね。改めて自己紹介して置こうかしら」

そう言つて楯無会長は肘をデスクから離すと相も変わらない不敵

な笑みを浮かべた。

「IS学園生徒会長、更識楯無よ。よろしくね、可愛い後輩クン達。隣に立ってるのは副会長の」

「布仏虚です。何時も妹がお世話になっていきます」

名乗った虚副会長が一礼をするのに合わせ僕達も礼を返す。しかし、布仏さんの姉か・・・真面目そうな雰囲気だ。まるつきり正反対の印象だ。

「さて、と。早々に本題に入りましょうか」

楯無会長の顔から笑みが消え、生徒会室の空気がガラリと変わる。耳鳴りが聴こえるほどの沈黙を経て楯無会長はこう言った。

「貴方達、部活動に入りなさい」

#05 敵

「しっかしまあ、部活かあ」

「言われてみれば僕ら以外皆入ってたもんね」

ガンツ！と空中に火花を散らしロングヒートブレードと雪片式型をぶつけ合いながら二人で昼休みの事を思い出す。

生徒会室に呼び出されたその日の放課後、僕と一夏は第三アリーナでISを展開して打ち合っていた。

幾ら文化祭の準備期間とはいえ、こういった特訓は怠れない。現に文化祭で使う第一アリーナを除く他のアリーナも軒並み予約で埋まっている。

因みに僕と一夏以外は皆部活かそれぞれの用事で居ない。

簪がに關しては布仏さん・・・じゃなくて本音（本人にそう呼ぶよう強制された）が着いているし、笹桐さんも事情を聞いて監視にあたってくれている。

「つとー！」

「考え事か、睦月！」

鋭い横一閃を背面飛びの要領でスラスターを吹かして回避する。

危ない、今のは直撃コースだった。

「考えてんのは、部活の事か？」

「いや・・・まあ、それもあるけど」

昼休み、生徒会室に呼び出されて早々に言われたのは部活についてだった。IS学園では全生徒が最低一つは部活に入る決まりらしいのだが、僕と一夏はそんな事を露知らず、どの部活にも属していない。なので暫くの間、学園内の部活を見て回って入りたい部活を決めてきてほしいらしい。といっても今は文化祭の準備期間中、部活動らしい活動を行っているのは少ないだろう。というか行きづらい。

場合によっては何処にも属さない、云わば助っ人的な事をやるかもしれないらしい。

【パッケージ換装 ラー第2形態】

「シュートー！」

「ちっ！」

距離が空いたタイミングを使ってパッケージを換装、アドバンストからラー第2形態に変更し、即座に腰のクロービームキャノンと両手のロングブレードライフルを連射する。

「それもあるけどって事は、更識の事か？」

「・・・正解」

直撃しそうなビームを切り払いながら問われる一夏の言葉に、コクリと頷く。

この場合の更識とは簪の事だ。

どうにも、あの昼休みの行動が気になってしまう。

バチイッ！

距離を詰められ振るわれる雪羅の爪撃を、両腰のクローアームから発生させたビームサーベルを交差させて防ぐ。

発生する膨大な熱量によって火花に混じって視覚化したプラズマが散る。

それに目もくれず左手にビームサーベルを拡張領域から顕現させ逆袈裟に切り上げる。

それをクイツクターンを用いた回転で危なげなく一夏は回避して、今度は氷桜を使った抜刀術を放ってきた。

「やっぱり気になって、ね！」

「ぐ、おー！？」

刃が最高速に乗る瞬間を狙って右手のロングブレードライフルを雪片に叩きつける。

不意を突かれた形になった一夏は大きくその体勢を崩す。

そんなチャンスを逃すわけがない。

【パッケージ換装、ギガンティックアーム】

背部から顕現した巨腕を使い、白式の非固定武装を掴む。更にフロントスカートに増設されたサブアームユニットを展開、両腕を拘束する。

これから僕がどうするのか見当がついたのか、一夏の顔が引きつったものになる。

「おい、ちょっと待て、それはヤバイというかもはや模擬戦のレベルじゃないっつーか命の危険を感じるんだけどお!？」

ロングブレードライフルのユニットをパージ、通常のビームライフルに戻す。

更に左手のビームサーベルを拡張領域に戻し、新たにショットガンを呼び出す。

肩のウェポンラッチに載せたマシンキャノンが起動し銃身を回し始める。

いよいよもって一夏の顔が真っ青になる。

まあ、容赦しないけど。

「じゃ、頑張って耐えてね♪」

「ごんの鬼畜うううううううううううー!!」

轟く銃声の最中、一夏の叫びがアリーナ中に響いた。

「いやあ、今日も動いた動いた」

「死ぬ、マジで死ぬ・・・もう無理」

アリーナを出て、夕日が照らすなか二人で寮への帰り道を歩く。

隣を歩く一夏は何か真っ白になっていた。うん、僕のせいだね。ゼ

口距離フルバーストは流石にやり過ぎたか。

「睦月、あれは絶対他の皆にはやるなよ?トラウマになるからな?」

「流石に女の子相手にやろうとは思わないよ。一夏なら大丈夫かなと思

思ってたんだし」

「俺はモルモットかよ!?!」

「ははは、まさか・・・ん?」

とりとめのない会話をしていると、道の先に人影を見付けた。

「どうした、って誰だ?見ない顔だな」

「・・・バートリーさん。先週、簪のクラスに転入してきた人だよ」

話を続けながらも歩みを止めず、遂にバートリーの目の前まで来た。

彼女は腰に当てていた手をだらりと下げると閉じていた瞼を開く。

「ご機嫌よう、扶桑睦月君に織斑一夏君」

その碧い目を見た瞬間、ゾワリと総毛立った。

同じだ・・・この目は彼と同じだ・・・！

身体が、心が、警鐘を鳴らす。

関わるな、目をそらせ、会話するな。

三つの言葉が矢継ぎ早に繰り返される。確かに逃げたいし怖い。

彼女は秋人と同じ『人を玩具にする人間だ』。

「睦月？」

故に、逃げるわけにはいかない。彼女は簪と既に関わっている。なら寧ろ話すべきだ。

「何でもないよ、一夏。それで、こんな所でどうしたのかな、バートリーさん？」

頭を振って一夏に答えた後、バートリーさんを真っ直ぐ見据えて問う。

小さく目を動かせば、視界の隅に笹桐さんを捉え、直ぐに戻す。

一夏が疑問符を浮かべているが、悪いけど付き合ってもらおう。いざとなったら彼女を拘束しなきゃいけないし、ね。

「あら、ツレないのね。こんな美少女が待っていたっていうのに」「生憎と美少女なら間に合ってるんでね」

戯れた言葉に笑顔でもって返す。実際、この学園には美少女と呼べる人ばかりが居るし。教師も殆んどが美人という有り様だ。

そんな中で半年も過ごせば嫌でも目が慣れるというものだ。今更そんな事言われてもだからなんだとしか返しようがない。

「それで？美少女なバートリーさんは何でここで僕らを待っていたのかな？」

「ふふ、面白いわね。貴方、本当に面白い・・・待っていた理由なんて、どうということは無いわ。世界で『たった二人』の男性IS操縦者に挨拶しておきたくてね」

「・・・そう」

たった二人。そう言った瞬間皮肉げに細められた目に僕は確信する。彼女は・・・

「フィリス・E・バートリー。宜しくね、『福音事件の英雄さん』？」

ー僕達の、敵だ。

#06 機械の兎

『こちらHQ、きつこえるかなあ?』

〔束様（マスター）、ふざけないで下さい〕

雪がさながら嵐のように降り注ぐ空の中、黒く染め上げられた一機のISが航行していた。

否、その背後にはもう一つ機影が存在した。上から見ればまるで涙の滴を表したマークの様にも見える。

『あつはは、ごめんごめん。そろそろ着く頃かなと思ってね』

〔通常航行でしたので多少はズレましたが、誤差範囲です。問題なく作戦を決行できます〕

『ん、よしよし。感情表現プログラムもちやんと機能してるみたいだし、それじゃ派手にやっちゃって!』

〔了解（ヤー）〕

束との通信が切れると、即座にそのISは『変形』した。

機動戦士Zガンダムに登場するギャプランに酷似するその機体はしかし、両肩の大きすぎる四本の棒状のブースター兼IS懸架アーム内蔵ユニットにより余りにも元の機体からかけ離れたシルエツトとなっていた。

〔ギャプランTR-5 ファイバー。作戦行動を開始します。ロゼ姉様、貴女も降りますよ〕

青く光る独眼（モノアイ）を動かし、至って冷静な女性の声で後ろで静止する機体に話しかけると、ロゼと呼ばれた機体から気だるそうな声が返された。

〔えー、私も行くの? フランだけでも十分っしょ〕

〔はあ・・・やはり、貴女ではなく、ザック姉様を連れてくるべきでした〕

機体下部の大型クローをプラプラと揺らしてぐずるロゼにファイバーは肩を竦めた。連動して巨大なブースターが駆動音を鳴らす。

〔いやいや、ザック姉連れてきたら確実に何も残らないから〕

〔ですから『私達』の中で比較的まともな火力を持つ貴女を連れてきた

んですよ。大体ロゼ姉様は何時もー」

「あー、わかった、わかったから。行くよ、行きます」

説教が始まる予感を感じて堪らずロゼもその躯体を変形させる。

機体上部が展開し、人型の上半身を露にし、大型クローがその向きを変え、脚部へと変容する。

マラサイと呼ばれる機体に酷似し、しかしそのシルエットは『異形』と呼ぶに相応しいものである。

「TR-4 ダンディライアン、作戦行動を開始します」

ファイバーと同じ独眼を赤く光らせ、ダンディライアンが機体を降下させる。

「全く・・・なぜ私の姉たちはこうもクセがありすぎるのでしょうか」溜め息でも吐くかのような仕草の後、ファイバーも機体を降下させ始める。

眼下に広がるは一面の雪景色。

北を見れば広大な北極海の一端が見えるような辺境の地。

その海と陸の境界線に建つ、小さな基地へと目標を定め二機のISは加速する。

その最中、ファイバーはダンディライアンへと話しかける。

「一応言っておきますが、くれぐれも人は殺さないで下さい」

「分かってるって。ビームライフルの威力も精々大火傷する程度にはなってるし。あ、ISは潰しちやって良いんだよね？」

「構いませんが・・・やり過ぎないで下さいね。後で泣きを見るのは姉様自身なんですから」

「はいはい。そんじゃ始めよつか！」

威勢の良い声と共に、ダンディライアンが右手に持つ黒く塗り潰されたロングブレードライフルの引き金を引く。

桜色の閃光が一直線に地上へと加速し、基地に待機していた軍用ヘリの一機を撃ち抜く。

光が弾け、爆発を起こす。

異常に気付いたのか、基地内にサイレンが喧しく鳴り渡る。

未だ爆発による炎が残る最中にダンディライアンは降り立つ。

「それじゃフラン、援護よろしくう」

「了解。他のヘリ等、『足』の方はお任せを」

「お願いねえ。・・・さてと」

基地の各所から表れた『凡そ軍人とは思えない格好』の歩兵と数機の量産型ISを眺めてダンディライアンは顔にある排熱ダクトから白煙を吹き出す。

ロングブレードライフルの刀身が熱を帯び、赤く染まる。冷めた空気が蒸発し、煙を上げる。

燃え盛る炎が機体の表面を舐めている事を意に介さず、ダンディライアンは嗤う。

「亡国企業だか何だか知らないけど。取り敢えず潰れて貰おうか」

スカートアーマーに内蔵された数多のブースターが点火し機体を浮かばせる。

それを見た歩兵が恐怖を顔に浮かばせる。

ISの搭乗者すら、その異様に武器を持つ手が強張る。

「上手く避けなよ？でないと・・・」

ブースターの火が更に強まる。

一人の兵士がダンディライアンの肩にあるエンブレムを見付けた。

フライパンに乗った、黒い『兎』のエンブレム。

《ウォーターシップダウン》

この瞬間、兵士達の末路は確定した。

「ブギーマンに食べられちゃうからさあ!!」

蹂躪が、始まった。

「やり過ぎるなど言ったのに、全然聞いてないですねあの姉は」

眼下にて起こっている一方的な破壊劇を独眼を動かしてチラと見て、ファイバーは呆れた声を出す。

その間も手に持ったロングブレードライフルと肩の拡散ビーム砲は容赦なく基地に存在する施設、車輛、ヘリを爆砕していく。

たまらず施設内に居た兵士達が外に出て手に持った銃を撃つが、相

手は遙か空の上。ファイバーの装甲に触れることすらなかった。

「さて・・・束様を余り待たせるのもいけませんし、早々に捜し物を見つけて帰らないと」

一通り逃走手段となり得るものを破壊したファイバーはその大型ユニットを展開解除し、拡張領域へと戻す。

機体を異形足らしめていたユニットが無くなると、コアユニットであるフライルーがその姿を現す。

残留する光の粒子を纏いながらゆっくりと降りて行くその姿は兵士達にとって、死神が死の宣告を告げに来たように見えた。

「抵抗しなければ、悪いようにはしませんが・・・」

途中まで言い掛けたところで兵士達が銃を再度撃ち始める。

「成程・・・それが回答ですか。では」

フライルーの独眼が鋭く光り、兵士達を睨む。

基地の照明に、シールドバインダーに描かれたエンブレムが照らされる。

天を突くかのような槍を持つ、白い兎のエンブレム。

「殉じてください、己の答えに」

銃口が、咆哮を上げた。

「ふむ。こんな所でしようか」

およそ五分後、迎撃に現れた全ての敵を倒した二機のISは、基地内部にあるデータバンクを漁っていた。

メインコンピューターに繋がっていたコードを袖口に収納するとフライルーは屈んでいた体を起こし、外にいるダンディライアンへと通信を繋げた。

「ロゼ姉様、データの回収終了しました。そちらはどうですか？」

「こつちも終わったとこー。暖房効いた部屋に叩き込んだからそう死にはしないっしょ」

「了解しました。帰りはどうします？」

「乗っけてってー」

「・・・承知しました。では戻りましょう」

プツツ、という小さな音を最後に通信を切り、廊下に出たフライルは外で未だに燃え盛るへりや車輛の残骸を見て小さく肩を竦めた。

「これだけ破壊しても末端、その一部でしかないとは・・・亡国企業というのはつくづく巨大ですね」

徐にシールドバインダーの銃口を窓に向けると躊躇なく光弾を発射し、壁ごと粉碎し雪の吹き荒ぶ外へとその機体を投げ出す。

「まあ何であれ束様、クロエ様、何より睦月様の邪魔を言うのであれば、破壊するだけです」

空中でファイバーユニットを再展開し、変形を終えると、懸架アーム部と同じく変形したダンディライアンが滑り込むように収まる。

「きゃっふー！あと宜しくう！」

「太平洋上で落として上げましょうか？」

「ごめんなさい、二度としません」

「はあ・・・」

溜息一つ、ファイバーはダンディライアンの収まる懸架アームの反対側にバランスを取るためのコンテナを展開するとブースターを最大出力で起動する。

「束様、作戦行動終了しました。これより帰投します」

『お疲れ様ー、それじゃ二人が帰ってきたらそのまま日本に行こっか！』

「・・・本当に行くんですか？その・・・『アスワン』で」

『もちろん！ステルス機能もバッチリだしね！』

通信先でえへん、と胸を張っているだろう束の声にファイバーはもはや言葉も出なかった。

諦めたともいえる。

「了解しました。ではアスワンに帰還します」

『はいはい、待ってるよ!』

プツリと通信が切れる。

「いやあ、東様も凄いな。マジで行くんだアレで」

「諦めましょう。もうそれしか無いです。・・・さあ、戻りますよ」

高速で空を駆ける機体に更に火を灯し、漆黒の機体は彼方へと飛び去った。

——次なる行き先は日本。 IS 学園。

#07 怒りの矛先

「……………」

『魔女』との邂逅を果たした翌日。僕は昼休みで賑わう校舎を離れ、一人かっつて見つけた花畑へと来ていた。

ベンチに座って涼やかな風に身を晒す。

思い出されるのは昨日の会話だ。

「福音事件の英雄、か……どこでそれを知ったのかな」

名乗りと共に告げられた、本来彼女が『知らない筈』の情報に眉を潜める。

福音事件については箝口令が敷かれ、一般の生徒は勿論その詳細を知る由もない。

ましてや彼女はつい先週この学園に来たばかりだ。もとより知っている筈がない。

だが現に知った口で語るといふ以上は彼女自身、一般の範疇では無いということだ。

隣に立つ一夏も警戒心を露にして『バートリー』を睨む。

「あら、そんなに警戒されるなんてね……どうして知ってるかなんて、大体予想は付いてるんでしょう？扶桑くん？」

「……亡国企業」

「御名答♪やっぱりあの天才の下に居ただけあって私たちの事も知ってるみたいね」

クスクスと笑ってバートリーは己の胸に手を当てる。

「改めて名乗らせて貰うわ、亡国企業特務部隊、暴虐の輩(Fellio of violence)所属、フィリス・テンフィールド。」

《拷問の魔女(エリザベート・バートリー)》とも呼ばれてるわ」

先程までとは打って変わって、濃厚な殺意をばら蒔くバートリーに

思わず待機形態のヘイズルに手を翳す。

一夏でさえ、構えをとって睨み付けるほど彼女の纏う殺意は強すぎた。

「睦月、亡国企業ってなんだ、コイツは・・・一体」

「うふふ、端的に言えば貴方達の敵ってところかしら？」

「っ・・・！」

バートリーの挑発的な言葉に一夏の闘気が強まる。

一体、彼女は何を考えてこんなことを言った？自分の事を明確に敵と言うなんて。

「といっても今貴方達と事を構えるつもりはないわ。あくまで今日はご挨拶」

言いつつもバートリーは嘲るような笑みを浮かべて止まない。

「まあ貴方達がやりたい、っていうんなら構わないけど。でもその場合、扶桑さんのガールフレンドが壊れちゃうかもよ？」

「っ!!何をした・・・簪に何をした!?!」

「落ち着け睦月!」

バートリーの言葉に詰め寄りそうになる身体を一夏に抑えられるが、それを無理矢理ほどこいて彼女の胸ぐらを掴み上げる。

だと言うのに。彼女は嗤っていた。

「何って、ちよつとばかり『お手伝い』しただけよ？そうね、文化祭当日当たりに結果が出るんじゃないかしら」

「・・・す」

ブチリと線が切れる音がした。

何もできなかつた、しなかつた自分の不甲斐なさと、この女への怒りが限界を超えた。

「お前は、僕が、潰す。何があっても、何をしてでも。絶対に」

「・・・っ!?!」

自分でも信じられないような底冷えする声でそう伝えると手を離す。

そのままバートリーを視線を向けず僕はその横を通り過ぎ、その場を後にした。

「……ということがつい先日的事だ。」

「やっちゃったよ……何であんなこと言っちゃったんだ……」

そもそも自分があんな風に怒る人間だと自分自身驚いている。

いや、それについては後悔は無い。問題はタイミングだ。

どう考えてもあそこでのあの発言はバートリーを悪戯に刺激するだけだ。いや、実際今のところは何のアクションもないけど何時どんなタイミングで仕掛けてくるかわからない。

「はぁ……」

茫然と溜め息を吐く。笹くれ立った内心を宥めるようにそよ風が体を撫でては抜けて行く。

「なあに白けた顔してるの、少年？」

「ちよつとした自己嫌悪ですよ、会長」

不意に後ろから聞こえた声に驚くでもなくそう返してから振り返る。

茂みの裏から現れたのはまるで悪戯がバレた子供のようにおどけた表情を浮かべた楯無会長だった。

会長はクスリと笑うと僕の隣に座り伸びをした。

「んー……っ！それで、何時もなら他の皆と一緒に笹の貴方はなんで此処にいるのかしら」

「ヒットした頭を冷やしてるんですよ」

最近、視界に入るほどに伸びてしまった前髪を掻き上げて、嘆息混じりに答える。

それに対して何か言うでもなく会長は僕の頭をポンポンと軽く叩いた。

「会長？」

「奇遇ね、私も頭冷やしに来たのよ」

「サボりじゃなくて？」

「まあそれもある・・・今はオフレコでお願い」

慌てて取り繕うように人差し指を口元で立てる会長がなんだか可笑しくって思わず口端がつり上がる。

「うん、やっぱり君は笑顔が似合うわね。こう、にぱーっと笑う感じが」

「へ？え？そんな笑い方してるんですか僕」

何処ぞのひぐらしが煩い村に住む不死幼女が頭に思い浮かんでしまふ。そんな笑い方してたのか・・・

「ええ、可愛い笑顔よ。・・・簪が惚れちやうのも納得ね」

「？」

言葉尻の一言の眩きがあまりに小さく、上手く聞き取れず、首を傾げる。

会長は「なんでもないわ」と言うと僕の頭から手を離し、空を見上げた。

つられて頭を上げればいつそ憎たらしい程の青空が広がっていた。

「・・・『簪』を、暫く隔離することにしたわ」

「隔離、ですか」

暫くの沈黙を破って聞かされた言葉に、僕は視線を会長へと向ける。

「昨日の報告の時点であの子の身に何かあったことは明白。これまでの二人の報告を精査した結果、簪の身に何が起きているのか一つの結論に行き着いた」

「それは？」

「睦月くん、『精神毒性（サイコトキシシティ）』って解るかしら」

「な・・・」

会長の放った一言が、僕の背筋を凍らせた。

『精神毒性』。その意味するところは・・・薬物による精神異常。

「簪に・・・ドラッグが使われていた、と？」

背筋が凍る。あの時から感じていた違和感の正体はそれだったのか・・・なら、だとしたら。

「っ！」

自分の不甲斐なさに唇を噛む。皮膚が切れて血が滲むがそれでも痛みは感じない。いや、感じたく無いのかもしれない。

あの時点でこの結論に行き着いていたならもっとマシ結果になった筈なのに。

「・・・簪は午前中から家の都合により暫くこれない、ということにしてあるわ。今は本土の病院で検査してる」

「・・・・・・・・」

「責任は、私にあるわ」

「でも・・・!」

「だから」

振り向いた僕の唇に会長の指が触れる。

「完膚なきまでに叩き潰しましょう」

「へ?」

ニヤリと口端を吊り上げて笑う会長の言葉に間抜けな声が出てしまう。

会長は僕の唇から伝った血を指先で掬い、ペロリと舐めると目を細める。

「今回の件はI S学園の会長としても、一人の姉としても看過出来ないわ。ともすれば学園の権威を地に落としかねない。それになにより・・・私の可愛い可愛い妹に、ドラッグなんて使ってくれちゃったあの小娘が何よりもムカついて仕方ないのよねえ・・・だから、叩き潰すの」

どこまでもサディステイックな笑みを浮かべて語る会長を見て、僕はさつきとは別の意味で背筋が凍る。

「というか何か赤黒いオーラが見えるんだけど。」

「舞台は私が用意するわ・・・ええ、徹底的に、完膚なく、ぶっ壊してやるわよ・・・ふふ、ふふふふふふふふふふ」

訂正。オーラじゃなかった、冥王だった。次元連結システムでも使いそうなレベルだ。

一頻り笑うと会長はベンチから立ち上がる。

「睦月くん」

「は、はい！」

「協力、してくれるかしら？」

「イ、イエスマム……」

最早他の生徒に見せられないほど怖い顔の会長の問いに、僕はただ首を縦に振る他無かった。

事実、僕の内心も正直自分でも驚くほどに黒い感情がある。故に会長の言ったことは寧ろ僕がもっとも望んでいた言葉なのだろう。

あのいけ好かない顔に一発ぶち込まないと気が済まないし。

「改めて、宜しくね睦月くん」

「ええ。お互い、全力を尽くしてー」

願うことはただ一つ。

「絶対にあの女ぶっ潰す!!」

この怒りを叩き込むということだけだ。

楯無会長との新たな協力を築いて三日が経過した。

いよいよ本格的に文化祭の準備も佳境へと突入し始め、学園内は普段とはまた違った雰囲気へと変わりだした。

簪の件についてはだが、昨日の夜に届いた報告、それに書いてあったの容態は会長の予測していた通りの結果だった。

軽度の薬物反応が検出された。それもダウナー系の物だ。

幸いにして早い段階での対応の為、依存度も低く、治療事態は問題ないらしい。

今は本土の病院で治療を受けている最中だろう。

それを聞けただけでも一安心。とはいえ、バートリーがまた何かしらアクションを起こさないとはい限らないので、油断は出来ないが。

「で、なんで僕はまたナターシャ先生に抱き抱えられているんでしょうかねえ？」

「そこに貴方がいたから」

「何処の登山家ですか！」

準備に追われ、俄に騒ぎ立つクラス内で僕はナターシャ先生に背中から抱きつかれていた。

今日は当日着る衣装のチェックを行うべく、フロア担当者全員がそれぞれ着替えて皆に見てもらっているんだけれど。

「僕も燕尾服がよかった・・・」

僕は男にも関わらず、メイド服を着せられていた。

服を渡しに来た衣瀬さんの、いや、クラス全体の雰囲気には圧されてしまい、了承してしまった僕も僕だけでも。

丈の長いスカートだからあんまりスースーすることはないから良いけど、やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしい。

「昂る・・・昂るぞ・・・！」

「主従関係、ふふふ・・・今年の冬はコレだ！」

「見た目的にオネシヨタ、k t k r」

いや恥ずかしいんじゃないな、これは悪寒だ。なんか後ろの方から

危険な発言が聞こえたし。というか今年の冬って夏には出したんかい!!

「お、睦月似合ってるな」

「その燕尾服似合ってるね一夏。破っていい？」

「目がマジだからやめろ」

別のところで着合わせをしていた一夏が燕尾服を見事に着こなして僕のところへきた。

・・・くっ、これがイケメンだけがなせる業か・・・!!

箒さんもセシリアさんも骨抜きにされてるし、どこの酒呑童子だ。

僕なんかご覧のとおり、マスコット扱いだというのに。

「んー♪この抱き心地もいいけど、匂いも良いわね」

『その話、詳しくナターシャ先生!!』

「そこまでだド阿呆ども」

ドスの効いた声とともに目を輝かせた女子生徒らとナターシャ先生に鋭い一撃が落とされた。

この動き・・・トク

「私は病に掛かってもしなければ有情破顔拳もつかえんぞ」

「・・・なんで僕のまわりは読心術使いが多いんだ」

「お前が単純なだけだ。・・・さて、小娘ども。次は無いと思えよ?」

『イエスマム!!』

現れた織斑先生が睨みを効かせるとナターシャ先生も含めた生徒らが一瞬で散開した。一夏まで・・・

なるほど、真の教師は目で従えろと。怖いな。

作業が再開されたのを確認すると織斑先生がこちらに振り向く。

「お前は毎度毎度、よく襲われるな。少しは自衛でもしたらどうだ」

「する隙なくやられるからこうなるんですよ」

一度本気でヘイズルを起動して逃げそうになるくらいにはこのクラス的女子達の動きは鋭い。生身で瞬時加速でも使ってるんじゃないかな?

あと目がヤバイ。例えるならクロスボーンガンダムの後期ザビーネ。ダメじゃないかキンケドウ!

「はあ……ああ、そうだ扶桑」

「はい？」

人払いがすんだのを見計らって織斑先生が声を抑えて話し掛けてきた。

「更識会長（あの狐）が立案した作戦、正式に学園長から許可が降りたぞ」

「……本当ですか？」

「ああ。どうやらあのバートリーとかいう小娘。学園に来る前から色々小細工をしていてな。単純に退学処分、と言うわけにもいかなくなっているな……理由付けが必要なんだよ」

「そうですか……」

「元よりキナ臭いとは思っていたが、こうなるとはな。……当日については任せろ。お前たちが動きやすいようセッティングしておく」

「ありがとうございます、織斑先生」

「本来なら、責められても文句は言えん立ちなんだがな」

素晴らしいながらも織斑先生は口許に笑みを浮かべると組んでいた腕を解くと出席簿を小脇に抱える。

「バートリーの困い込みについても任せておけ。お前と更識会長は奴を倒すことだけを考えていればいい」

「はい」

僕が首肯すると、織斑先生はぽんぽんと軽く頭を叩くと他の用事があるのか足早に教室を去っていった。生徒達への激励を忘れずに。

「敵わないなあ、やっぱり」

そんな大人の背中を見て、僕は溜め息を吐かずには居られなかった。

九月一日

この日誌も夏休みから書き続けて、一月経つ。意外と習慣付く。今日あったこと。

私のクラスに転入生が来た。初転入生（普通はそんな多くあるはず無い）にクラス皆が大いに喜んでた。

かくいう私は鈴さんやシャル、ラウラと、転入生とよく話しているのでそこまでじゃなかった。

名前は、ファイリス・エリザベート・バートリー。

・・・エリザベート・バートリー、たしか、西洋圏の昔の人で、女性を拷問して流れた血を浴びることで不老不死になろうとした狂人。そんな名前の彼女が女子だらけの学園に来る。そうとは限らないし、失礼なんだろうけど、なんだか怖い。

少し話してもみたけど、それは変わらない。

先生からバートリーさんに学園を案内するよう頼まれて、案内していると、アリーナから出てくる睦月と、姉さんを見かけた。

なんだか、寒気がする。

九月二日

昨日からなんだか調子がおかしい。

身体、というよりは心の方が。感情が不安定な感じ。

睦月に、昨日のことを聞こうとして、何故かうまく言葉が出なかった。

その事について鈴さん達に色々聞かれたので、整理をつけるために

も洗いざらい話した。

でも整理はつかないままだ。

こうして睦月が寝ている横で日誌を書いている今でさえ、何だか悲しいようなイライラするような。

・・・ああ、そういえば昼休みに睦月が生徒会室に呼ばれていたんだ。

何故だろう。

イライラする。

九月四日

イライラが昨日より増している気がする。

でも、日中はそこまで不安定になることはない。睦月と話している
と一切それを感じることもない。

感じるのはこうして一人になったとき。誰とも話さないとき。

何だか今日は視線を多く感じた。

九月十日

今朝、唐突に先生から病院に行くよう言われた。

何でも、健康診断の結果から病気が見つかったとか。

自己診断だけど身体は至って健康のはず。急な話だったから、睦月と話すこともできなかつた。

今は病院の一室でこれを書いている。

・・・私が居ない間、睦月はどうしているだろうか。あの日のようにお姉ちゃんと一緒なんだろうか。
・・・それはなんだかゆるせないな。

九月十三日

閉じこめられた。閉じこめられた。

携帯も取り上げられた。

診察をなんかいも受けたのにたいいんさせてくれない。
どうして。

急がないと、睦月が、むつきがお姉ちゃんにとられてしまう。

耳鳴りがうるさい。

睦月に会いたい。

・・・また私から奪うの？

ゆるさない

「ハロー、元気にしてたかしら。スクール？」

『何の用？私も忙しいのだけれど』

「回収班の応援にスパルタクスを呼んでおいたわ」

『・・・貴女正気？』

「残念、すでに狂ってるわ・・・学園側が動き出してるわ。それもこつちに都合のいいように」

『成程ね。保険掛けなんて貴女にしては珍しいじゃない』

「篠ノ之束というイレギュラーを見越してのことよ」

『はあ、了解したわ。こっちで調整する』

「助かるわあ♪それじゃあ、当日に」

『精々、死なないように動きなさい』

p i

「ーとつくの昔に死んでるわよ、私達は」

#09 前夜

『もっしもーし、きつこえるかなあ!』

「相変わらず元気ですね東さん……」

『私もいますよ、お兄様』

文化祭を翌日に控えた日の夕方。

『色々』な下準備を終えて寮に戻ろうとした所で東さんから電話がきた。

文化祭の日には夏休み中に伝えておいたけど、その時は来れるかどうかわからないって言ってたから、何か変わった事でもあったのかな？

『そういうむつくんは何だか気が滅入ってるみたいだねえ?』

「いや、まあ……何でわかったんですか?」

『そりゃ私がむつくん大好きウーマンだからSA!』

「あう……」

電話越しで姿は見えないけど、今絶対ドヤ顔しながら胸張ってるよ……というかそんな臆面も無く言われるとこっちが恥ずかしくなる。

『ん〜照れてるむつくん、ベネ!……それで、なにがあつたの?東さんに話してみなよ』

話してみなよとは言うけど、実際その言葉には有無を言わさない強制力と、心からの心配を感じられた。

……確かに、東さんには話しておいた方が言いかもしれない。

「実は――」

寮に帰る道を歩きながら、僕は今日に至る顛末を全て話した。

話し終わる頃には寮の自室に着いてしまっていた。

簪(彼女)の温みを感じられない……寂寥感さえあるのはきつと、僕の心の問題だ。

『なあるほどねえ……手を出すのはもう少し先かと思ったけど、連中も無駄に頭は回るって事か』

「東さん?」

『ああ、いやいや、こっちの話し〜。ん〜……むつくんはそのカンザシ

？って子の事が心配なんだね』

「……そう、ですね。僕がもう少し早く気付いていれば、こんな事にはならなかった筈ですし……」

思い返してみれば予兆はあったのだ。

だが僕はそれを看過してしまった。その結果がこれだ。

自責の念を感じない何て事は出来ない。

『むっくん、もう事態は動いてる。”IF” を考えても仕方ないよ』

そんな心を見透かすように東さんが諭すようにそう言ってくれた。

『過ぎた結果はどうしようも無い。これは残念ながら私だつて抗えないものだよ……だから、次の結果をハッピーエンドにする方法を考えるべきだ。そして君はもうそれに向けて動いている』

きつと画面越しに微笑んでいるような、穏やかな言葉がゆつくりと浸透する。

『大丈夫、”運命は君の味方”だよ。後は君の心次第だ、主人公（ヒーロー）』

「——っ」

トン、と背中を押された気がした。

「そうですね……そうでした。何時までも、悩んではいられない。ヒーロー目指すなら立ち止まってなんかいられない」

先への不安が溶けて、自然と笑顔になる。

うん、もう大丈夫だ。絶対に……簪を取り戻す。

「ありがとう——東さん」

『あー、改めてそう言われると照れるなあ！……何々くーちゃん？……おっとそうだったそうだった』

「？」

ちよつと大袈裟に笑ってから、東さんは何やらクロエと小声で話した後、『重大発表！』と前置きして……

『明日の文化祭、”私たち” 全員で行くよ！——アスワンで!!』
『です』

「……………はいっ？」

とんでもない事を宣言した。

「これで粗方用意は出来たか……」

「各種機材の搬入も完了。あとは明日ターゲットが網に掛かるかどうかですね」

既に薄暗くなりつつある秋空をアリーナの観客席から眺めて千冬と麻耶は揃って息を吐く。

「掛かるさ。二、三話した程度だがあれはそういう女だ。それに掛からなくとも引き摺りだす」

「せ、生徒会長も参加しますしね……」

獰猛な笑みを見せる千冬に麻耶は苦笑いしながらそう返す。

基本表には見せないが、千冬も今回の件については思う所があるのだろう。

「しかし亡国企業か……明日の警備状況は？」

「例年の1.5倍程度に人員を増やしてあります。学園(ここ)としては最大限の動員数です」

「足りないというのは吝かか……」

眉を潜めて呟く。

明日は文化祭だ。チケットによって人数制限がなされるものの、外部の人間が大量に入るのは確実だ。

既にこちらにはバートリーというイレギュラーを抱えてしまっている以上、文化祭を狙って亡国企業が何も仕掛けてこない等という甘い考えは捨てるべきだ。

「出来うる下準備は完了した。後は結果を御覧じろ、と言ったところか」

「そうですね……」

「……歯痒いな」

「あら？織斑千冬（世界最強）とあろう人が随分弱気ですね？」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべて空を睨むそんな千冬の背に唐突に声が掛かる。

「安い挑発だな、更識」

からかうような言葉に振り返る事なく千冬は斬って捨てる。

言われた当人である楯無は小さく笑って誤魔化する。

手に持った扇子には『驚嘆』の文字が浮いていた。

「いえいえ挑発ではなく、純粹に、貴女のような方でもそうなるのだな、と思ひまして」

「抜かせよ。私は超人でも無ければ仙人でも無い、ただの人間だ。こ
うもなる」

（絶対嘘だ……）

楯無と麻耶の内心がシンクロした。

何を罷り間違えばIS用の刀を生身でぶん回せるような人をただの人間と言えるのか。

もうこの時点で十分超人に片足どころか全身浸かつてるようなものだろう。

「何か失礼な事でも考えてないか？」

「いいえ滅相もございません」

「……はあ、まあいい。それで、お前も下見か？」

追及を諦めて千冬が問うと、楯無は静かに頷いた。

「ええ。こちらでも色々と手を回しましたから、最終確認はしておかないと」

「殊勝な事だ。で、本音は？」

「明日あの毒女を如何様に叩き潰してやろうかと想像しながら歩いて
ました………涙腺擦りきれぬまで泣かしてあげます」

扇子で口元を隠しているものの、あふれ出る怒気が漏れてしまっ
ている。

横目でそれを見て千冬もまた笑う。

「ああそうだな。自分たちが”何”に手を出したのか、丁寧にご理解
いただこうじゃないか」

これは相手からの宣戦布告だ。
ならば丁重に受けた上で完膚なく叩き潰す。
その為の舞台は整った。
『結末』はとうに見えている。

「束さん、一体何を考えてるんだ……？ 私たちって事はクロエと一緒に緒って意味じゃないだろうし……」

プツリと電話が切れた後。

僕は一人不安に暮れていた。さつきとは別の意味で。

束さんとクロエが来る、これは純粹に嬉しい。確実に織斑先生にダメージが加わるけど。

問題は私たちと言うワードと何より『アスワン』だ。

「……まさか」

そこで睦月に電流が走る。(閃き)

「アスワンって、もしかしてあのアスワン……？ だとしたら私たちって……TRシリーズ全機連れてくるって事!？」

こんなこと気づきとうなかつた!!

この予想が当たってるとしたら確実に波乱が起きる！いくら自衛だとしても過剰戦力にも程がある！

束さんの事だから絶対、武装のアップデートしてるだろうし！

「ああ……ヤバい」

思わず頭を抱える。

落ち着け睦月。逆に考えるんだ。

波乱起こされちゃっても良いと考えるんだ………が、無理ツ
!

どうしよう……もういつそ一夏と箒さんに投げてしまおうか。

いや、そうしよう。(確定)

「……よし、これで明日は大丈夫だ」

深呼吸一つ。

よし、落ち着いた。

そこ、諦めたとか言わない。

「織斑先生たちは場所を整えてくれた。後は……僕と楯無会長次第、か」

気持ち切り替え、机に座る。

置かれたノートパソコンを開いてヘイズルの武装を確認しようと電源を入れる。

そこで唐突にノックの音が聞こえた。

「睦月、いる?」

この声は、鈴音さん?

「居ますよ。鍵なら開いてますから、入って大丈夫です」

「お邪魔するわ」

言うが早いか、ドアが開ききる前に鈴音さんはするりと部屋に入ってきた。

「どうしたんですか? また一夏が鈍感発動でも?」

「あ……それは何時ものことよ。今回は別よ」

若干一夏の愚痴を言いかけたように見えたけど、鈴音さんは咳払いすると表情を切り替えた。

「別……?」

「そ。アンタ明日『簪を取り返す』んでしょ? だからその前に伝えておきたくてね——あの時の、簪の気持ち」

#10 四人だけの宴

時間は過ぎて、文化祭当日。

僕は慌ただしく出し物の最終チェックをするクラスを抜けて、第三アリーナへと来ていた。

当然、織斑先生から許可は得ている。

薄暗い通路を抜けて観客席に出ると、そこには楯無会長が居た。

「おはようございます、会長」

「おはよう、睦月君。気分はどう？」

「絶好調……では無いですけど、大丈夫です」

「それならよかった」

ばさつと広げられた扇子には『重畳』の二文字。

毎回思うけど、どんな技術で出来てるんだろ、これ。

「……ねえ、睦月君」

「はい？」

「今日はいいい天気よね」

「そう、ですね。快晴です」

唐突に訊ねてきた会長に空を見て返す。

台風や天気の不安定な時期だと言うのに、今日は一日中晴れだと天気予報に載っていた。

残暑の熱も、さほど強くない風によって緩和されて絶好の文化祭日和と言えるだろう。

「こんな天気の良い日は………敵の涙が見たくなる」
「……は？」

ニヤリと笑う会長に一瞬反応が遅れる。

というのも、一重に会長が頭にした怒気がこれまでよりもさらに強かったからだ。

「耐えてきたわ。我慢に我慢を重ね、念入りに準備してきたし手回しもした。怒りを研いて、武器を磨いた。それが今日、実を結ぶ………ふふ、ふふふふふ」

今の会長、他の生徒には見せられないよ………凄い顔してるもの。

ヒラコータツチの笑顔だよこれ、若干狂気じみてるよ……。

「ふふ……そろそろ時間のようね。行きましようか、睦月君」

「は、はい」

「……絶対に、逃がさないわ」

一瞬で表情を切り替え、踵を返して通路へと向かう会長に再度面食らいながらも僕はその背中を追った。

もうすぐ、もうすぐだ。簪。

君を……取り戻す。

『……で、貴女はまんまと袋の鼠にされたと?』

「わざと罠にかかってあげたのよ。そのほうがそっちも動きやすいでしょう?」

所変わって学生寮。

割り当てられた自室でバートリーは通信先のスコールにおどけてみせた。

「どうせネロだってこうなると予想して態々私を送り込んだんでしよう」

部屋の窓から外を眺めれば専用の制服を着た警備員がちらほらと見えた。

文化祭が始まってしまえば更に私服警備員が増える。

十中八九、警戒対象は自分だとバートリーは結論付ける。

「空中にはドローンが複数に地上は警備員だらけ。しかも私は生徒会長直々にお呼びだし。いたいけな女の子に酷い仕打ちよね」

『自業自得よ……それでもこっちはどうにかなりそうだけど。貴女、勝算は?』

「さあ？やってみなきゃわからないわ」

スコールの問いにあっけらかんと返してバートリーは待機形態の自分のISを空に翳す。

「ま、精々好き勝手やらせて貰うわよ。向こうもそれがお望みみたいだしね？」

『只今から、IS学園文化祭をおお！開・催します!!』

遠くから文化祭の始まりを告げる声と歓声が上がる。

それを漠然と聞きながら僕は会長と共にアリーナのフィールドに立っていた。

目の前には、妖しく嗤うバートリーと、もう一人。

「やっぱり、そうなるよね。簪」

「……………睦月」

久々に会う彼女（パートナー）は目に隈を浮かべ、充血した瞳で僕を見た。

虚ろな眼差しが責めるように僕を貫く。

「まさか本当に病院から抜け出させるとはね……………わざと『手を抜いた』とは言え、どうやったのかしら？」

「あら、手品は簡単にタネを明かしたらつまらないでしょう？」

「つまり力ずくと言うことね。まあ、最初からそのつもりだし、いいけれど。時間もたっぷりあるし」

言って楯無会長は獰猛に笑う。

今、ここはバートリーが入った時点で完全な陸の孤島と化した。

外部への通信は一切遮断され、出入口も最上位セキュリティレベルによって封鎖。アリーナの上空には以前の襲撃事件から更に強固になったバリアが張られている。

「ねえ、睦月……どうしてそこに居るの？」

「……………」

不意に、簪が問うて来る。

それに僕は無言で返す。

会長が本土に居る簪の警備を緩ませ、バートリーに連れてこさせたのには理由がある。

一重に、簪の状態が本土では手に終えなかったからだ。

診察の時点ではダウンナー系ドラッグによる精神不安定だったが、治療を行う内にそれだけではないと判明した。

「どうして、お姉ちゃんの隣なの？ どうして……………」

原因は不明。

ならばいつそ犯人と共に来て貰い、治療法を聞き出してその場で治してしまえばいい。

今の簪はバートリーにとっては体のいい人質だ。

だからこそこうして何らかの方法で連れて来ること予想していた。

「そこは、私の場所なのに!!」

これは僕が産み出した、生み出してしまった事だ。

もっと早くに気づくべきだった。もっと速く、彼女の気持ちを、僕の気持ちを自覚するべきだった。

後悔は尽きない。

でもそれを理由に止まってはいけない。

「僕がどうしてここに居るのか…………それは」
「…………え？」

待機形態のヘイズルを手首ごと握り締める。

思い出すのは昨日の鈴音さんの言葉。

『簪は、アンタの隣にずっと居たいのよ…………この意味、解るでしょ?』

「——君を、僕の隣に取り戻すためだ。絶対に、逃がすもんか」

告げるのは決意。

これ以上言葉はいらない。あとは行動で示すだけだ。

その為の『一手』もある。

「そういうわけよ。それじゃあ、私たちの宴(まつり)を始めましょうか……エリザベート・バートリー」

「上等じゃない、ならせめて愉快に踊りなさいな！ 簪！」

会長がISを起動する。

僕もヘイズルを起動すると、バートリーが指を鳴らす。

それが何かのスイッチなのか簪が打鉄式を起動した。

……やっぱり、薬以外になにかがある。

「貴女たち全員、私の玩具にしてあげるわ……テストAMENT！」

そして、最後にバートリーがISを起動……『テストAMENT』？

一瞬の光の後に現れたのは、紅椿とも、ヴラドのSガンダムとも違う赫の全身装甲。

右腕をすっぽりと覆い隠す複合兵装に、背面の大型スラスタ。

特徴的な前に突き出したブレードアンテナ。

「まさか……」

知っている。僕は、あの機体を知っている……！

「テストAMENTガンダム……！」

「知ってるの？ 扶桑君」

「ええ、まあ……少しだけ」

また厄介な機体が出てきたな……よりによってあのゲテモノMSとは。

「会長、気を付けてください。あの機体は妨害能力が高いです」

「忠告ありがとう。じゃあ私はあの子を抑えるわ。妹の事、お願いね」

会長はウインクをして笑うと得物である槍を携え構えた。

「——了解！」

託された。

その言葉の真意を感じて強く応える。

さあ、行動に移す時だ。扶桑睦月。

遠くで花火が上がる。

それが合図だった。

「さあ私と踊りなさいな、Дети (クソガキ)！」

「こつちの台詞よこのkurva (売女)！」

何の予備動作もなく会長がバートリーへと突っ込み、簪と分断する。

なにか言い合っていたようだけど聞かなかった事にしよう。

今は、僕の戦いをしなくては。

ガキンッ——！

「む……つきい……い……！」

簪の持つ薙刀《夢現》を手にしたロングヒートブレードで受け止める。

面倒な事に今の打鉄式式のパッケージは僕らが造り上げた《運命の風》だ。

それでも『一手』を打ち込むにはまず式式にダメージを与えないといけない。

骨は折れるが、でも。

「やらなきゃ始まらない！」

「くっ」

《夢現》を弾き、即座に脚部スラスターのホバリングで、距離を取りながらロングブレードを外した両手のビームライフルを乱射する。

「パッケージ、アウスラ！」

【パッケージ換装、ハイズル・アウスラ 展開】

更にハイズル・アウスラにパッケージを変更してウインチュニットを展開して発射指示を出す。

スライドした開口部から桜色の閃光が解き放たれ、一直線に簪へと殺到する。

直撃の感触。だが、

「っ!!」

直感的に嫌な予感がして身体を右に反らした直後、青白い閃光が二

発、土煙を貫き身体が元あった場所を通り過ぎてアリーナの壁をへこませた。

「やっぱり、簡単にはいかないか」

「……………逃げさない」

土煙が消え、現れた簪は無傷。

速射とは言えあの威力を防いだ……もしかしてリミッターを外されてるのか？

「だとしても……止める理由にはならないけどね」

正面を見れば、加速動作に入った式式。

そうさ、だから。

「——来なよ、簪。全部受け止めるから」

「ツ睦月い!!」

爆発音が、鳴り響いた。